

サモンナイト 勇者と姫と越響者

玄武Σ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦いを終えたライは、トレイユの町でこれから平和に暮らす……と思われたがそうもいかなかった。

ライはミルリーフと二人で謎の声と光により、フロニヤルドに召喚されてしまう。

これは、越響者と勇者、至竜と姫、そして勇気と希望の物語である。

OP「NEVERLAND（サモンナイト4 主題歌）」

# 目次

## 第1部

第1話	ようこそフロニヤルドへ	Welcome to Fr	1
第2話	百獣王の騎士	The Knight of the	10
第3話	迷子の勇者	I want go home! But,	22
第4話	やさしいお姫様	Hello princess!	31
第5話	暗躍する意思		41
第6話	宣戦布告	We are the G・noise	50
第7話	激闘! ミオン砦		63
第8話	最強の騎士、見参!	Adventure, samurai	71
第9話	それぞれの対決	Heroes Attack	83
第10話	邪悪の降臨	An intruder is Dem	91
第11話	暴虐の悪魔	The Tyrant	102
第12話	悪魔との戦い	Battle of Heroes	112
第13話	決着と一日の終り	Go to the Conce	123
第14話	平和な一日	The Vacation in Bi	123



354	evil	第32話	おてんばリス姫、襲来	Attacked Tiny D
364	braver	第33話	爆誕、飛翔系勇者！	Birth Magical B
373	ebattle	第34話	乱戦！ VSパステイヤージュ	theramb l
384		第35話	決着、勇者歓迎戦	war of finale e
393	ti returnnes	第36話	戦後の休息	Vacation in Biscot
404	inriver	第37話	若様と勇者の夏合宿	summer battle o
419	kappiki	第38話	ガレット獅子団捕物帳	braver with o
428		第39話	魔の刃操りし英雄	monosift on
444	earchenemy	第40話	パステイヤージュ英雄王伝説	Rebirth th
457		第41話	運命を乗り越えし者	The Lowler
467	nnener	第42話	決着、VS魔王カルバドス	Lowler is wi

## 第1部

### 第1話 ようこそフロニヤルドへ Welcome

t o F r o n y a l d

「助けて……」

「ん？」

「誰か、助けて……」

「誰だ、苦しんでいるのは？」

「お願い。このままじゃ、何もかもが壊れてしまう……」

「な、何だ？ この人は何を言っているんだ？」

「誰でもいい、この声が聞こえた誰か……」

「近いうちに、この祝福の輝きに包まれた世界に悲劇が起きようとしていきます……」

「い、いきなり危なっかしいことを言うな……っていうか、リインバウムってそんな呼ばれ方してたっけ？」

「お願い。この世界を、フロニヤルドを救って……」

「フロニヤルド？ なんだそれ？」

「!？」

「……パ。パパ、そろそろ時間だよ」

「ん？」

少年は不思議な夢から目を覚ます。瞼を開いた先にいたのは、少年をパパと呼ぶピンク色の髪の少女だった。

しかし、少女の頭には左右に角が生えており、スカートから尻尾が伸びた、人間とはかけ離れた特徴を持っていた。

「おはよう、パパ」

「おはよう、ミルリーフ」

少年は少女に目覚めの挨拶をする。

彼の名はライ。ここ、帝国領の宿場町トレイユで宿屋兼食堂「忘れ

じの面影亭」を切り盛りしている15歳の少年で、人間と「古き妖精」と呼ばれる特殊な妖精とのハーフ、響界種<sup>アロザイト</sup>ある。

少女の名はミルリーフ。ライが成り行きから育てることになった少女で、実は人間の姿に擬態した至竜と呼ばれる特殊な竜が、彼女の正体である。

この二人の出会いは、今から約半年前に遡る。

ミルリーフの親にあたる至竜は、ラウスブルグ（通称：隠れ里）という集落の守護竜だった。このラウスブルグは、はぐれ召喚獣という召喚されたあと、何らかの理由でラインバウムから帰れなくなった召喚獣達が隠れ住む集落だ。そして同時に、至竜と古き妖精の力を合わせる異世界間を移動可能な船として使えるのである。この秘密を知ったギアンという召喚師の青年がラウスブルグを襲撃し、住んでいた召喚獣達にその秘密をばらして内乱を起こした。

ギアンは幻獣界メイトルパに住む「幽角獣」という幻獣の父と、召喚師の娘との間に生まれた響界種である。その血筋の所為で祖父から虐待を受け、その祖父から召喚された腹いせに父にあたる幽角獣に無理やり産まれさせられた、呪われた子だと教えられた。

やがて成長したギアンは祖父を殺し、父に復讐しようとラウスブルグの力でメイトルパに乗り込もうと企んでいたのだ。

しかし、偶然ラウスブルグを立ち寄ったライの父に介錯されて先代の守護竜は死亡、まだ卵だったミルリーフをトレイユの町に送り、それをライが拾ったことで二人は出会った。

その後は幼馴染をはじめとした仲間や、守護竜に仕える御使い達と共に戦い、ギアンを倒した。ギアンの方も、祖父に教えられた自身の出生が嘘だと知り、家名を捨て、自身が利用しようとしていた、同じ響界種の少女エニシアやライ達と和解、平和が戻ったのだ。

この日、店の方は昼までで、仕込みを終わらせた後は店を手伝っているエニシアや、幼馴染のリシエルとルシアン、その二人の世話係のポムニツトといった面々が任せてくれるというので、好意に甘えてミルリーフと散歩に行っていたのだ。

その後、睡魔が襲ってきたので昼寝をしていたら、あの不思議な夢

を見たのだ。

「どうしたのパパ？ うなされていたみたいだけど」

「イヤ、ちよつと変な夢を見ちまってな」

帰路に就く途中でミルリーフと話していると、異常事態が起こった。

「な、なんだ!？」

突如、ライとミルリーフを不思議な光がつつみこんだ。光の色はピンク、だがミルリーフの髪の色とは違い、どちらかという桜に近い色をしていた。

そして、異常はそれだけではなかった。

「な、なんだアリア!? ミルリーフ、わかるか!？」

「魔法陣みたいだけど、あんなの見たことないよ!？」

二人の足元に魔法陣が出現した。先代の守護竜の記憶と知識を継承しているミルリーフは、膨大な量の知識を有しているのだが、そんなミルリーフでもこの事態については全く分からないのだという。

そうこうしている間に、二人は魔法陣に吸い込まれてしまう。

「うわあああああああああああ!？」

二人の悲鳴が丘に響き渡り、やがては二人を飲み込んだ魔法陣は跡形もなく消えてしまった。

魔法陣をくぐった先は、黒い雲が広がり、時々紅い稲光が光る不気味な空間だった。

だが、その空間はすぐに通り過ぎてしまい、そこを抜けた先には見たこともない光景が広がった。

「な、なんだココは…」

「島が浮いている…」

その先に広がっていた光景は、やや紫がかった空に、いくつもの宙に浮いている島、といったラインバウムでも見られないような光景だった。今なお、二人は桜色の光に包まれながら落下しており、島の一つに向かっていた。



そして、そこで人気がない林に入り、地面に激突！　と思われたが  
…

「あれ？」

「止まった…」

地面スレスレで停止、そのまま二人を包んでいた光ははじけ飛んだ。

「今の光って、召喚術か何かか？」

「たぶん。それも、リインバウムとは別形式みたいだよ」

状況分析をしていると、林の外から歓声のようなものが聞こえた。気になったので覗いてみると…

『は、は、早いー！ー！！　何をされたのかよくわかりませんが、撃墜スコアも続々加算！　これはビスコツティ側の逆転となるか!?!』

いきなり、無駄に大きな声が響いたので思わずライは仰け反った。気を取り直して辺りを見回すと、広大な平野で戦いが起きていた。

メイトルパの亜人のような、動物の耳と尻尾を生やした人間に近い何かが戦争をしていた。

さらに上空には、ロレイラルの技術を髣髴とさせる巨大スクリーンが映っており、そこには別の場所での状況が映されているようだ。そして、大声の主はそこに映っている人物の活躍に驚いているようだ。

その人物は少年で、ライよりも一つか二つほど年下のようである。赤と白を基調とした服に白いファー付のマント、青い鉢巻、そして手には煌びやかに装飾された、武器と思われる棒を持っていた。少年は俊敏な動きと驚異的な跳躍力を駆使して相手の攻撃を避け、迫っていた敵達を次々と倒していた。時折、後頭部や背中をタツチするだけで済ませていることもあったが、それらをされた者達や倒された者達に異変が起こった。

「な、なんだ!?!」

「うわあ、かわいい〜!」

攻撃されたり背中をタッチされたりした敵達が、次々と猫耳と尻尾を生やした球体状の何かに変化するという謎の現象が起きていた。ちなみに、ミルリーフはその何かをぬいぐるみや愛玩動物を見るような眼で眺めていた。

その後、呆然としていたがすぐに復活、その場に留まっけていても仕方がなかったので移動を開始した。

巻きこまれないように人気のない道を選んで進んでいると、ミルリーフが何かに気付いてその方向に指をさす。

「パパ、あそこ見て!!」

「……って、あいつ何やってんだ!?!」

ミルリーフが指差した方向をライが見てみると、大軍勢の進行方向に緑の髪の少女がいたのだ。少女は他の戦士たちの様に犬の耳と尻尾を生やしているが、いわゆる垂れ耳になっているのが特徴だった。

そして、二本の短剣を構えているところから、あの軍勢を一人で迎え撃とうとしているようである。

「こうしちゃいらねえ。行くぞ!」

「うん!」

ライ達は、そのまま少女の居る方に駆け出した。

「姫様の決断とはいえ、別に勇者などいなくても!!」

大軍勢を前にしていた少女は、一人でそんなことを叫びながら双剣を構えていた。しかしその直後、少女の背後に緑の光を放つ巨大な紋章が出現する。

そのまま何かの技を放とうとしたが…

「!?!」

どこかからか矢が飛んできたので、少女はその矢を防ごうとする。

「しまった!?!」

矢を防ぐのには成功したが、少女は持っていた武器を弾き飛ばされ

てしまう。

「今だ！ あの騎士を討ち取れええ!!」

「「「「おとおおおー!!!」」」」」

その隙をついて軍勢は少女に一斉に突撃していく。

(マズイ、このままでは…)

少女が諦めかけたその時……

「え？」

「な!？」

『なんだあ？ 親衛隊長エクレールが討ち取られそうになったと思ったら、謎の少年が出現。そのまま剣で攻撃を防いでしまったぞ』

少女と先頭に立っていた男が同時に声を上げた。

実況している声の主の言う通り、見覚えのない少年がいきなり躍り出て攻撃を防いだのだ。あまりにも突然すぎる出来事であったため、驚くのも無理はないだろう。ちなみに、少女の名はエクレールというらしい。

そして、少年の方は言わずもがなライである。

「……気に入らねえな」

「え？」

「寄って集って一人を大勢で叩きのめす。その腐った根性が気に入らねえ!!」

「うわああー!」

ライは凄まじい怒気を放ちながら、そのまま目の前の男を押し倒す。

「ミルリーフ、いまだ!!」

ライが叫ぶと同時に、目の前の集団を目がけて何かが飛んで行った。

「な、なんだアレ？」

「丸い物体に、顔がある？」

飛んできた物体は球体状で、ペンギンのような顔がある。

そして、頭のとっぺんには導火線が付いており……

「!? アレって、まさか爆弾か!？」

「マジ!? みんな、逃げろー!ー!ー!!」

集団の何人かが飛んできた物体の正体に気付いて、叫ぶと同時に逃げ出そうとする。

飛んできたものの正体だが、正確には爆弾ではなくミルリーフが呼んだ召喚獣、ペンタ君である。

そして、逃げようにも時すでに遅しだった。

——ドッゴーン

着弾と同時にペンタ君は爆発、それによって集団の半分以上が吹き飛ばされ、先程スクリーンに映っていたような謎の生物に変化した。

「残りはオレの手でブツ飛ばしてやる!」

「仲間の敵だ! あいつを討ち取れ!」

ライはそのまま剣を片手に集団の生き残り達に向かって駆け出し、敵の生き残り達もライを迎え撃とうとする。

まず、一人が斬りかかってきたがライはサイドステップで避け、そのまま斬り付ける。続けて近くにいた他の敵達に、的確に一撃ずつ攻撃を加えていく。

(速い。それに、動きに無駄もなく、攻撃の一発一発も重い。私も腕に自信はあるが、こいつは少なくとも私より強い…)

エクレールはライの戦いぶりに思わず見とれてしまう。そうこうしている内にライは敵を全滅させてしまった。

そして、ライが倒した敵達も謎の生物に変化したのだった。

「わああ! やっぱりかわいい!!」

ミルリーフが謎の生物に近寄ったと思うと、一匹を抱き上げてそのままモフモフし始めた。

ライはとりあえずミルリーフの好きにさせて、エクレールに話しかけることにした。

「えーっと、エクレールでいいの? とりあえず、大丈夫か?」

「あ、ああ。助かった、礼を言う。ちなみに、エクレールで合ってるぞ。ところで、お前は何者だ?」

「オレはライ。こう見えて宿屋の店長やってんだ。あと、いきなりだ

けど質問いいか？」

「な、なんだ？」

そしてライは、真っ先にある質問をエクレールにぶつけた。

「この世界の名前って、リインバウムか？ あと、違うなら何て名前なんだ？」

ライは、まずここがリインバウムかどうかの確認を取ることにした。そして、エクレールの答えは……

「リインバウム？ 聞いたことないな。あと、この世界はフロニヤルドという名だ」

「フ、フロニヤルド!? (夢で聞いた名前じゃねえか!)」

ライはエクレールの答えを聞いて驚いた。昼寝の時に見た夢の中で聞いた、悲劇が起きようとしている世界の名前と同じだったのだ。

そのままあの夢がただの夢でないことに気付いたライは、そのことについて考えようとする。だが……

「隙ありいい!!」

突然、煙の中から生き残っていた兵士が飛び出してきて、ライに武器を振るう。

「パパ、危ない!!」

ミルリーフが叫ぶも、ライが振り返ったその時には、すでに兵は間近まで迫っていた。

避けられない、ライがそう思ったとき……

「勇者キーーーーーッック!!」

「ぐぼおあ!!」

何処からともなく現れた少年が、謎の掛け声を上げながらライに襲い掛かって来た兵士に飛び蹴りを放つ。それを喰らった兵士は、先程倒した集団と同様に謎の生物に変化してノビていた。

ライは自分の窮地を救った少年に見覚えがあった。先程、空中スク

リーンに映っていた少年だったのだ。

ライが仰天していると、少年の方から話しかけてきた。

「大丈夫？」

「あ、ああ。助かった」

「ふう、よかった」

少年に声を掛けられたライは、とりあえず礼を言う。すると、少年の方から自己紹介を始めた。

「僕はこのビスコッティに勇者として呼んでもらった、シンク・イズミです」

「シンクか、さっきはありがとうな。オレはライ」

少年はシンクという名らしく、自ら勇者を名乗り出した。

これが、後にフロニヤルドを救うために共に戦うこととなる、超響者ライと勇者シンクのファーストコンタクトだった。

## 第2話 百獣王の騎士 The Knight of the Lion

ライとシンクの、互いの自己紹介を終えた直ぐ後、シンクはライにあることを聞いていた。

「ライさん。さっそくで悪いんだけど、エクレールって人を知らない？」

「ああ、この女の子ことだな」

シンクがエクレールを探していると聞いたライは、当のエクレール本人を指差してシンクに教えてやる。

「え、女の子だったの？」

「私が女だと何かまずいか？」

シンクのリアクションにあからさまに機嫌が悪くなるエクレール。その様子を見たシンクは慌ててフォローする。

「ああ、ゴメン！ 女の子の騎士なんて想像もしてなかっただけで別にダメってわけじゃ…」

シンクはどうかしてエクレールを宥めると、あることを聞いていた。

「で、エクレール。 姫様が君に、必殺技みたいなのを教えてもらうようにって言ってたんだけど」

「必殺技というと、紋章砲か？」

「そうそれ！」

シンクとエクレールの会話に、蚊帳の外になってしまうライとミルリーフ。

「姫様が、エクレールが上手に使えるから適任だった」

「そ、そうか。 姫様がそういうなら教えてやろう」

「あの人、尻尾振っているね」

「その姫様とやらがよっぽど好きなんだな」

エクレールの様子を見ながらこっそりと話すライ達。 見た目どころか生態まで犬寄りのようだ

そうこうしていると新たな敵軍勢が襲来、紋章砲のレクチャーついでにシンクとエクレールで蹴散らすことになった。

「まずは、自分の紋章を発動させる。これでレベル1だ」

「紋章発動、レベル1！」

エクレールの手の甲に淡い緑色の輝きを放つ紋章が出現、シンクも彼女に合わせてオレンジ寄りの赤い光を放つ紋章を出す。

「全身の力と気合を入れて紋章強化。これでレベル2！」

直後、紋章が二人のバックに拡大されて投影される。

「この要領でさらに力を込めて…」

「レベル3!!」

二人が叫ぶと同時に、紋章が細かく配色された見事なものに変化する。横で見えていたライ達にとっても壮観な光景だった。

「最後に、フロニヤ力を輝力に変えて、自分の武器から撃ち放つ！」

「それが、紋章砲！」

先程の軍勢が距離を縮めつつあったが……

「はああああああ!!」

シンク達が叫ぶと同時に武器を振るうと、魔力攻撃とも光学兵器とも違う高密度のエネルギーが一斉に放出され、大軍勢を丸ごと飲み込んだ。

そのまま放出されたエネルギーは混じり合いながら天を貫き、そのまま上空で徐々に霧散していき、やがて消滅した。

「す、すげえ…」

流石に上級とまでは行かないが、召喚獣の攻撃に匹敵する攻撃を生身の人間が使ったため、ライは驚愕するのだった。

「でも、雰囲気ぶちこわしだよね」

「言うな、ミルリーフ」

ミルリーフの言うことは尤もだった。攻撃の跡地には先程の謎の生物（後で説明を聞いたら、けものだまというらしい）が大量に転がっていたので無理もなかった。



「紋章砲は便利だが、甲冑を装備した騎士クラスの戦士には防がれることもある。それに…」

「撃つと、けっこう疲れるね」

補足説明をするエクレールに、自分の感じた感想を伝えるシンク。だが、言ってる割には表情に疲れが見えなかった。

「!?」

「あの、どうしたんですか?」

突然、ライは何者かの気配を感じてビクツとなり、辺りを見回す。

シンクが心配そうに尋ねるのも無視して周囲の様子を探る。

「そこか!」

——ダンツ

「ええ!? 何、なんなの!?!」

気配のする方を判別したかと思うと、ライはどこからともなく銃を取り出して、その方向に向かって発砲した。

シンクが驚くのも無視して、ライは気配のした方に向かって言葉を飛ばす。

「今のは威嚇だったが、次は当てる気で撃つぞ」

「ほう、儂の気配に気付くか。その勇者よりも優秀なようじゃな」

ライの声に応えたのは、ダチョウのような体躯の黒い鳥に乗った女性だった。

抜群のスタイルと銀髪、そして猫耳が特徴的で、青を基調とした服装の上から、腰などの必要最低限の場所の身を守る鎧と黒いマントを身に着け、そして手に弓を持っていた。どうやらこの弓でこちらを狙っていたらしい。

「レオンミシエリ姫」

「姫様? 相手側の…」

エクレールが女性を見てそう呼んだ。どうやら、彼女はシンク達の陣営と敵対している側の親玉らしい。そうと知ったライは再び言葉を飛ばす。

「あんたが大将か。いや、女王陛下の方が良かったか?」

レオンミシエリ（以下レオ）は弓を投げ捨てて斧に持ち替え、左手

の人差し指を口の前に持つてきて、チツチツと舌打ちしながらその指を振る。

そして、ライ達に対して言葉を飛ばしてきた。

「我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ！ ガレット獅子団領国の王にして、百獣王の騎士！」

声高々と名乗りながら紋章を発動するレオ。いきなりレベル3で発動したためシンク達は激しく驚く。

そして再び口を開く。

「大将でも陛下でもない。格調高く……………閣下と呼べ、この無礼者がああ!!」

直後、レオのバックが爆発し、巨大な火柱がいくつも立ち上った。

『来たああ！ レオンミシエリ閣下、戦場に到着!! 愛騎ドーマも相変わらず凜々しい』

「凜々しいか、あれ？」

「うん、わたしも同感」

実況アナウンサーの叫びを聞いたライとミルリーフは思わずツツコミをいれる。

「おぬし等とやり合うのもいいが、儂は先を急がせて貰おう」

そう言つてレオはドーマに乗ったままどこかに移動しようとする。

だが……

「!？」

突然、ドーマの足に連続して衝撃が走り、そのままバランスを崩して倒れこんでしまう。レオが反射的に飛び降り、ある方向を振り向く。

「…気に入らねえな」

レオの視線の先にいたのはライだった。今の攻撃は、彼の持っている銃によるものである。

この銃は帝国軍が開発した最新型で、名もなき世界から召喚されたマジンガンをベースに、ロレイラルの技術を結集して作られたものである。折り畳みが可能で、従来の銃のような単発式と、マジンガンの

ような連射式の二つの機能に切り替えが可能なトンデモない代物である。

前回の戦いの頃は持っていなかったが、かつて赤き手袋の暗殺者の襲撃を切っ掛けにリシエルから護身用と言われて渡された物なのだという。まあ、その時ライは無限回廊にいたため、襲撃に巻き込まれていなかったのだが。

「貴様、何が気に入らん？」

「目の前の敵を力で脅して、あげくにそれで勝ったつもりで逃げる。その態度が気に入らねえ!!」

ライは、レオが勝ち逃げのようなことをしようとしたと感じたらしい。すると、その一言にレオが反応する。

「ほお、貴様はワシが臆病者だと言いたいのか。……気が変わった、勇者共々相手をしてやる!」

「上等だ。ブツ飛ばしてやる!!」

「おい! キサマ、何を勝手に決めてる!!」

結果、ライの発言に対して怒りを露わにしたレオは、ライやシンク達と戦うことを決める。

エクレールはライがこの場を仕切っていることに対して不満だったが……

「ありがとう、ライさん! 一緒に戦いましょう!!」

「おい勇者! 何を言ってる……」

「城を攻められたら負けちゃうんでしょ? だったらこの場であの人を倒さないとマズいよ!」

「……ああ! もう、勝手にしろ!!」

シンクに正論をぶつけられたエクレールは、どうにでもなれといった感じで了承する。

「ミルリーフ、下がってる!」

「うん。パパも気を付けて!」

ライがミルリーフを下がらせて、戦いが始まった。

まずはライが剣を手に駆け出し、レオに突撃、そのまま斬りかかる。しかしレオは凄まじい跳躍力で跳びあがり、そのまま斧を投げつけて

きた。斧は落下の勢いも付いて凄まじいスピードで飛んできたが、ライは咄嗟に後ろへ跳んで回避する。

「そこだああ!!」

レオが着地した瞬間をみて、シンクとエクレールが武器を手に飛び掛かる。

「ドーマー」

レオがドーマを呼んだかと思うと、ドーマは自身の胸当てを嘴で外し、そのまま放り投げた。

「うわああ!」

そのまま投げられた胸当てはエクレールに直撃し、彼女は吹き飛ばされる。エクレールにぶつかったことで勢いを失ったそれをレオはキャッチして、それを使ってシンクの攻撃を防ぐ。この胸当ては、本来はレオの盾だったようで、ドーマに運ばせるついでに防具代わりにしていたようだ。

そしてシンクの攻撃を防いだレオは、そのままシンクの鳩尾に蹴りを入れてきた。

「がああ!」

華奢な体からは想像がつかない程の力で蹴られて、シンクも吹き飛ばされてしまう。

「ふん。勇者もこの程度か」

「どうおりゃああ!!」

レオが斧を回収しながら呟いてると、ライがその隙を目がけて斬りかかってきた。だが、レオはギリギリのところであつてそれを防いでしまう。

レオはそのまま隙が出来たと思い、ライを目がけて斧を振り下ろす。ライは彼女と違って盾を持っていないので、ここで攻撃を喰らってしまうところである。

だが…

「なはは!」

ライはそれを、サイドステップで特に苦も無く避けてしまう。かつて対峙した『剣の軍団の将軍レンドラー』も斧の達人だったので、彼

との戦いの経験が活かされていたライには避けることは造作もなかった。そして、ライはそのままレオの背後に回り、柄頭で彼女の左腕を殴りつける。この時の衝撃で、レオは左手に持った盾を落としてしまう。

「舐めるなあー！」

レオは激昂しながら斧に輝力を纏わせて薙ぎ払ってきた。

だが、ライはそれを一瞬でしゃがんで避ける。そして、そのまま剣を持っていない手で彼女の腹に拳を打ち込む。

「ぐはああ!?!」

「手応えあり」

攻撃が決まったライは、不敵な笑みを浮かべながら呟く。レオはどろろと痛みを耐え、ライから距離を取る。

「パパ、がんばれー!!」

横でミルリーフがライを応援している。余談だが、この光景を見ていた観客や実況席の面々があまりの愛らしさに頬を緩めていたとか。

「剣と体術だけでレオ姫を……おい勇者。あの男、お前より強いんじゃないか」

「ええ!?! そんな殺生な」

一方、エクレールはライのとてもない強さに驚いており、助っ人として呼ばれたシンクより強いのではないかと思うのも当然だった。

それを聞いたシンクは慌てた様子でそんなことを叫ぶ。

「チツ、紋章も持たない奴に奥の手を使うことになるとはな」

そういうと、レオは紋章を展開してきた。どうやら紋章砲を使うようである。

レオが斧を地面に振り下ろし、輝力を地面に流し込む。すると彼女の紋章と同じものが浮かび上がってきた。

「獅子王炎陣!」

レオが叫んだ瞬間、彼女を中心に火柱が何本も噴き出してきた。さらに、それによって抉られた地面の破片が炎を纏い、火山弾のように周囲に降り注いできた。あまりに規模の大きな攻撃に、周囲にいた者は敵味方問わず撃破されてけものだまになっていくのだった。

「レオ姫の紋章砲は桁が違うぞ！ とにかく逃げろ!!」

「わかった!!」

シンクはエクレールの指示に従い、二人でその場から逃げ出す。

その一方で、ライとミルリーフは……

「平凡からかけ離れちまうから、この力は使いたくなかったんだけどなあ」

「パパ、もう今更だと思っよ」

ライとミルリーフは妙に落ち着いた雰囲気で（ただしライは溜息をついていたが）、何かを話していた。

突然、二人の体が光り始める。しかし、その光はとても穏やかな優しい光だった。

「大・爆・破あ!!」

レオの最後の叫びと同時に、そのフィールド一帯を覆い尽くすほどの巨大な爆発が起こった。

爆風は戦場の外にも届く強風となり、どれ程の破壊力なのかを見たもの全てに知らしめた。

『爆破！ レオ閣下必殺の“獅子王炎陣大爆破”!! 範囲内に居る限り、立っていられる者は居ないという！ 超絶威力の紋章術！ 味方も巻き添にってしまうのがたまに傷ですが、それにしても凄い！』

実況がレオの放った紋章砲の解説をする。広範囲を攻撃する技らしく、欠点も巻き添えが大きいというものだった。

「フランボワーズ、確認せい！ 勇者と垂れ耳、あとあの男は死んだか？」

『はい！ えーつとですね…』

実況のフランボワーズにライ達の生存状況を確認させるレオ。

しかし……

「ふう、助かった。ミルリーフ、大丈夫か？」

「ピ、ピギイ」

硝煙が晴れた先にはなんと、ライが無傷のまま立っていた。

ライは古き妖精の血を引く響界種、その力である妖精の加護でレオの紋章砲を防ぎきってしまったのだ。

ミルリーフも本来の姿である竜形態（小さい方）に変化して、紋章砲を緩和したようである。

『た、大変な事態が発生いたしました！　なんと、レオ閣下の紋章砲を直に食らっているにも拘らず、無傷で耐え凌いだ人物がいます！　あの乱入者の少年です！　そして、先程の幼い少女が消え、代わりに謎の生物が出現！！　彼らは何者なんだああ！！』

「な!?!　無傷じゃと…一体何をした？」

「いや。話すと長くなるんだけど、ちよつとオレの生まれが特殊っていうか」

大騒ぎする実況と、動揺しながら質問するレオに対して、ライは説明しづらそうに話していた。

まあ、このフロニャルドに妖精がいるかどうかかわからないので、説明しても解るかどうかわからないだろう。

『え？　はい、ただいま勇者様と親衛隊帳の行方が分かりました。なんとお二人は上空に跳びあがって逃げていたようです！』

ライ達が見上げると、確かに人影のようなものが二つほど見えており、落下しているのか徐々に大きくなって見えた。

「じゃあ、二人が戻ってくる前にケリはつけさせてもらおうぜ！」

ライは剣を一回転させながら、レオに向かって駆け出す。

「獅子王炎陣大爆破に耐えきったからと言って、勝ったと思うな！」

そのままレオも斧を振り上げてライに向かって駆け出す。

ライとレオは同時に武器を振り降ろし、そのまま鏢迫り合いに持ち込む。

「貴様、先程も思ったが中々の太刀筋じゃな」

「クソ親父にガキの頃から戦い方を教え込まれたんだ。腕には自信が

あるぜ！」

ライはこのままでは罫が明かないと判断、後ろに跳んで距離を取る。

レオも同じことを考えたのか、同様に後ろに跳んで距離を取っていた。

「はああああああああ!!」

「どりゃああああああ!!」

二人は怒号を上げながら駆け寄り、再び武器を振り下ろす。ライが剣を振り下ろすとレオは斧で防ぎ、逆にレオが斧を振り下ろすとライは剣で防ぐ。軌道が読める攻撃はなるべく体を逸らす、バックステップやサイドステップを使う、等の手段で避けまくる。

もはや紋章術も召喚術も無い、肉体技による対決となっていた。

『謎の乱入少年ですが、レオ閣下に引けを取らない武術の才を發揮しています！　そしてレオ閣下の方ですが、紋章砲どころか輝力を使っている節も見当たりませんが、これはどういうことでしょうか!?!』

『最初に避けられてしまい、大技の獅子王炎陣大爆破を無傷で防がれた。恐らく、閣下はそこから小細工をしても勝ち目がないと判断しただと思います』

『なるほど！　解説ありがとうございます、バナード將軍！　ですが、閣下をそこまで追い込むとは、彼は一体何者なのでしょうか?』

実況席でもライとレオの対決に興奮気味のようなのである。

一方……

「……加勢するつもりだったが、入る隙がないな」

「だね」

いつの間にか戻ってきたシンク達だったが、ライとレオの剣戟が激しすぎて、入り込む隙がなかった。

剣戟が続いていると……

「しまった!!」

レオの斧が限界を迎えてしまい、そのまま折れてしまう。ライはチャンスと言わんばかりにと止めを刺しにかかる。

「喰らええええええ!!」



叫んだ瞬間、ライはレオに斬りかかる。

縦、横、斜めに三回連続で斬った後にダッシュ斬りを放ち、レオの背後に回った後で同じ要領で連続切りとダッシュ斬りを放つ。

「ミルリーフ！」

「ペイイ！」

ライがミルリーフを呼ぶと、ミルリーフは竜の姿のままレオにタックルを放つ。

「ピギャア!!」

そして、止めと言わんばかりにブレスを放ち、それがレオに直撃、そのまま爆発した。

「どうだ！ オレとミルリーフの必殺技、召竜連撃の威力は！」

剣を持ってない方の手でレオを指差しながら叫ぶライ。

「なんというか、僕達の出る幕なかったね……」

「同感だ……」

シンクとエクレールは、それだけ呟いて呆然としていた。レオが乱入者であるライとそのまま一騎打ちに入ってしまった、そのまま決め技まで使ってしまったので、この反応は当然だろう。

そして、爆発で生じた煙が晴れると……

「!?!」

「うむ、このまま続けても良いが」

煙が晴れた先にいたのは、武器と鎧を一式破壊され、インナーのみの姿のとなったレオだった。

胸を最低限隠すだけの服を着た上半身でへそが丸出し、下半身はデニム生地の上着とパンツという、露出度の高い服装だった。幼馴染のリシエルも同じぐらいの露出度の服装で会いに来たことがあるが、彼女の場合は付き合いが長いこともあって慣れているので特に恥ずかしくもなかった。

だがレオは初対面で慣れて無い女性、胸もリシエルより大きいため色気は彼女と比較にならなかった。ライも顔を赤くしてしまう。シンクも耐性が無かったのか、赤面していた。

「この格好では、両国民へのサービスが過ぎてしまうのう」

ライもシンクも赤面している中、レオは恥ずかしがるどころかノリノリでセクシーポーズを決めていた。似たような状況に慣れているのが伺える。

「レオ閣下、それでは…」

「うむ。ワシはここで降参じゃ」

エクレールがまさかと思ひ尋ねると、レオは小さな白旗を取り出して宣言する。

その瞬間、上空に花火が上がり、そのまま爆発した。

『予想外の事態が発生！ 勇者ではなく乱入者がレオ閣下を撃破してしまいました。ですが、彼は勇者と親衛隊長に協力していたので、撃破ボーナスの350点はビスコツティに加算されます!! 勝利条件が拠点制圧なので戦終了とはなりません、ビスコツティの勝利は揺るがないでしょう!!』

実況席からフランがハイテンションで実況を行う。内容から察して、シンク達の陣営の勝利が決まったということがライ達にも解つた。

### 第3話 迷子の勇者 I want go home

e! But, I can't go home!

ライがレオを倒したことにより、シンク達の陣営であるビスコツティという国の勝利が揺るがなくなった。

そんな中、レオに近づいてきた者が彼女にマイクを渡した。ライもマイクを渡され、それでレオと話してくれと言われる。ちなみに、その間にミルリーフが変身する様子を見せて説明もしておいた。そしてレオがライに話しかけてきた。

「乱入者、はこの状況では無粋か。まずは名を覚えてもらおうか」

「え、ああ、わかった。オレはライだ。で、こっちは…」

「義理の娘のミルリーフです」

名前ぐらいなら教えてもいいか、と思つてライ達はレオに名乗るところにした。

「ライ、そしてミルリーフよ、紋章も使わずにこの儂を打ち倒したこと、褒めてやろう。だが、次戦う時はこうは行かせぬぞ」

「知るかよそんなの。事情は知らねえけど、オレの目の前で侵略とか悪いことしようってんなら、いくらでも相手してやるぜ」

「言うではないか。じゃが儂も負けてやる気はないからのお、次こそは勝つて貴様を泣かせてやろう」

ライもレオも喧嘩腰の口調だったが、そこまで険悪な雰囲気は感じられなかった。

次にレオはシンクに向かって声をかける。

「勇者よ。その二人に活躍を取られたようじゃが、活躍できておつたからお主も決して弱くはない。親衛隊長共々精進せいよ」

シンクに対してそれだけ言つたレオは、持っていたマイクをシンクに投げ渡す。そしてシンクもそれを使ってレオに話しかけた。

「ありがとうございます。 姫さ…」

「閣下じゃ」

「…閣下！ あなたとの戦い、怖かったけど楽しかったです。次は僕

だけで勝てるように頑張りたいです！」

「よく言った。じゃが、次こそはきつちり侵略してやろう！ ライも勇者も共に儂を止めてみるのじゃ!!」

最後に啖呵を切って、レオは去って行った。

『さて、このままガレットが勝利したら戦勝の宴はガレット地酒祭りとなる予定でしたが…』

『閣下の撃退でビスコッティの勝利が揺るがなくなった今、戦勝イベントの権利がそちらに移りますね』

フランボワーズ（以下フラン）とバナードが戦勝イベントという単語を発したのを聞いたライ達は、戦いのあとなのにすぐ宴なのかと、軽すぎるノリについて考えていた。

『ビスコッティが勝利するとなると、やはり戦勝イベントは…』

『はい。フィリアンノ音楽ホールから、音楽と歌の宴をお送りします』

『姫様の歌のセットコースも、バッチリであります!』

フランがビスコッティ主催のイベントについて説明を求めると、スクリーンの映像が別の人物たちものに変わって、その人物達が説明を入れる。

一人は、ミルリーフと同じピンク色の髪をした、同じくピンクのドレスを身に着けた少女と、その少女よりいくらか背の低い白衣風のマントを着た栗色の髪の少女だった。服装から察して、前者の方がビスコッティの当主なのだろう。

ちなみに、ビスコッティ人だから揃って犬耳である。

「姫様って、歌とか歌うんだ」

「王族自ら歌：手習いとかはしてそうだけど、どうなんだ？」

「歌うんだとは何事だ貴様ら!!」

シンクとライがそれぞれ口にしたこと聞いたエクレールが、二人に対して怒鳴ってきた。

そして、そのままエクレールは二人に怒鳴り口調のまま説明を入れる。

「姫様は世界的にも有名な歌い手であらせろぞ！ 手習いで済ませるな白髪!!」

「せ、世界的!？」

「誰が白髪だ、誰が!？」

「その通りだよ勇者殿。あと、エクレールも君も落ち着きたまえ」

エクレールの一言にシンクは驚き、髪についての悪口を言われたライは怒鳴り返す。そこに近づいてきた一人の男性が一同を大人しくさせる。

見覚えのない男性に、それまで会話に参加していなかったミルリーフが話しかける。

「えっと、お兄さんだれ？」

「私はロラン・マルティノツジ。ビスコッティの騎士団長でエクレールの兄だ。君は、ミルリーフで合ってたかい？」

「あ、うん、そうだよ。(言われてみればなっとくかも)」

目の前のロランと名乗る男がエクレールの兄だと聞いて、ミルリーフは納得した。

背丈や髪の色は彼女からかけ離れているが、唯一の共通点である垂れ耳を発見したからだ。

「姫様は他国との交流などで、楽団を連れて世界中で歌っていらして  
るんだよ」

「なるほど、そういうことか」

「ただ、近頃は戦続きでツアーもめっきり滞ってしまっていてね、我々も久しぶりに姫様の歌を聴ける位なんだが……」

「貴様らも姫様の歌を聞いてみる。そうすればきっと納得するはず  
だ」

ロランの礼儀正しい態度と温和な雰囲気から、本当にエクレールと兄妹なのかが疑わしく思えた。

「えっと、それってつまり、僕達も聞いていいってことですか？」

「ああ。勇者殿もライ殿も活躍してくれたからな、特等席を用意して  
いる」

「やったあ。ありがとうございます!」

ビスコッティの姫の歌が聞けると聞いて、シンクは興奮しながらロランにお礼を言う。



か。

「異世界だもんなあ、通じなくて当然だよなあ…」

「オレ達の居た世界でも、異世界間の通信なんて出来ないから当然か」  
戦終了後、フィリアンノ城下で意気消沈中のシンク。帰る手段がないと聞かされ、手に持っていた携帯電話にも圏外と表示されており、連絡すら不能だというのが伺えた。

ちなみに、携帯電話そのものはラインバウムには存在していないが、無線などの通信機器は存在しているのでライ達でも通信装置だというのは理解できた。

「まったく、覚悟もないのに召喚に応えるからだろ」

エクレールが呆れながら呟くと、シンクが近くにいた犬を指差しながら彼女に文句を言う。

「覚悟も何も！ このわんこが踊り場から降りようとした僕に、落とし穴を仕掛けて」

「ちよつと待て！ 飛び降りって、お前何考えてんだ!?!」

ライはシンクがこちらに来る直前に取った行動を聞いて、思わずツッコんだ。シンクの身体能力を考えると近道のつもりなのだろうが、ライからしたらそんなことをするのは、自殺志願者かバカしかないというものだ。

「落とし穴、タツマキが?」

エクレールが疑問に思うと、シンクが言っていた犬タツマキが小さな魔法陣を自身の目の前に出現させた。これがシンクという落とし穴のようだ。

エクレールが近づいて、その魔法陣の方を見る。

「なになに、『ようこそフロニヤルド、おいでませビスコツティへ』」

エクレールは魔法陣に書いてある文字を読んでライ達に聞かせる。その次にタツマキが前足を手の様にしてある個所を指すと、エクレールがそこを読む。

そこには、かなり小さい文字で聞き捨てならないことが書かれてい

た。

「注意、これは勇者召喚です。召喚されると帰れません、拒否する場合は紋章を踏まないでください」

それを聞いたシンクはすぐに真っ白になった。

「そんなん、分かるかああああああい!!」

「知るか！ 私に聞くな！」

すぐに復活したシンクはキレながらエクレールに詰め寄るが、エクレールも反論する。

すると、ライ達が会話に口を挟んだ。

「でも、こんなちっちゃな文字じゃ気付かない人の方が多いよ。それにこれって、この世界の文字みたいだから、気付いても読めないんじゃないかな？」

「だな。下手すると詐欺じゃねえか？」

「何だ?! 勇者召喚は国の主にしか許されない神聖なものでな」

ミルリーフが問題点を指摘、ライがオブラートにも包まずに詐欺だと言うと、エクレールも反論する。

だが、ライは止める気はさらさらなかった。

「あと、さっきシンクが話した通りなら拒否したくても出来ない状況だったんじゃないか？ 詐欺じゃないにしてもそんな状況で呼び出すのは問題があると思うぞ」

「ウグッ」

色々と問題点を指摘されまくってエクレールはついに黙り込んでしまう。

「まあ、オレの世界の召喚を考えたら、人のこと言えねえか」

「え、どういうことですか？」

ライの一言が気になったシンクは彼に聞いてみる。すると、ライは知っている範囲でだがリンバウムの召喚術について簡単に説明した。

「オレ等の世界、リンバウムじゃ召喚術が生活の支えになってるんだけど、相手を何の前触れもなく一方的に呼び出しちまう術なんだよ」



「え？ それって、僕の状況よりひどくない？」

「ああ、恥ずかしながらな…」

ライが少々暗い表情になりながら言う。リインバウムの召喚術のシステムを考えると、フロニヤルドの勇者召喚はまだ善良な方だと言えよう。

ただ、今回のような場合はそうとも言えないが。

「まあ、オレ等も人のこと言えねえから、そんなに気にすんなよ」

ライはリインバウムでの召喚事情を話してエクレールをフオロースする。そしてエクレールが再び口を開いた。

「まあ、どちらにしても貴様らを返す方法は学院組が調査中だ。そのうちに判明するさ」

「だどいいけど…」

「ああ、もし帰れないうえに連絡も取れねえなら…」

「…オーナー、おこりすぎて胃にあな空いちやうね」

ライもミルリーフも、かなり気まずそうな表情になってしまう。

旅行雑誌【ミュランスの星】で、帝国最年少の天才料理人と紹介されたおかげで客足は以前よりも向上、オーナーであるティラーからの待遇も良くなったライ。だが、それでも連絡なしに何日も休んでしまったら、再び評価が下がってしまった、ティラーもミルリーフが言ったような状態になってしまいかもしれない。

だから、なるべく早く帰らないといけないのだった。

「とりあえず…まあ、そのなんだ。貴様等は賓客扱いだ、ここでの暮らしに不自由はさせんさ。まずは、これを受け取れ」

そう言つてエクレールはライ達に一つずつ革袋を差し出す。ご丁寧にミルリーフの分まであった。中からはジャラジャラと金属音がしているの、何が入っているのかはすぐに分かった。

「これって、金か？」

「わたしの分まであるよ？」

「いや、流石にそこまでは申し訳が…」

「戦での報奨金だからな、受け取り拒否したら財務の担当者が青ざめるぞ」

全員が気まずそうに言うが、エクレールの一言で受け取りを決めた。

「ちなみに、レオ閣下を直接倒したお前が一番多いぞ」

エクレールが、ライがこんなことを言い出した。

「そういう理由なら貫っておくけど、今の金額が多い理由、オレはなんか不本意だな」

「え?」

「貴様、せっかく活躍しておいてその言い草は何だ!？」

エクレールがまたも機嫌を損ねながらライに問い尋ねる。

ライがこの報奨金のシステムで不本意だと言うのは、彼のモットーによるものだった。

「オレのモットーは『真面目にコツコツ、爺さんになるまで働く』なんだ。これだと、あんな遊びみたいな楽しい戦いで、活躍しまくったら億万長者みたいな感じだろ? オレのモットーに反するんだよ」

「え? ああ…」

「ごめんね。パパの家族ってわけありで、だからパパは平凡な人生を送りたいんだって」

エクレールがライのモットーを聞いて、リアクションに困っていた。

どうにか平常心を保ったエクレールは、咳払いして話を続けることにした。

「兵士達も楽しいから戦に参加している者も多いだろうが、褒賞金の支給は自分がどれだけ戦に貢献できたかが大切な目安だ。少なくとも参加費分は取り戻したいというのも本音だろうしな」

「え?! 参加費!？」

「か、金取るのかよ!？」

先程の戦に参加費が必要だと聞いてライもシンクも驚く。ちなみに、ミルリーフも驚いているが二人ほど大げさではない。先代の守護竜の記憶をついでから一気に大人っぽくなったミルリーフだが、メンタル面もそれに合わせて成長しているのが伺える。ライはそれを再認識することになったのだった。

「……これはかなり初歩的なことから話さんといかんな」

「お願いします」

「頼む……」

「おねがい」

そういう訳で、エクレールにフロニヤルドの常識や戦に関する知識のレクチャーを頼むことになったのだった。

第4話 やさしいお姫様 Hello princ  
e s s !

エクレールからフロニヤルドに関する常識などのレクチャーを受ける際、城下町の散策をすることとなる。

町にはいくつも屋台が出ていたので、一行は腹ごしらえをすることにした。

ライとシンクは串焼きの様な料理、ミルリーフはわたあめをそれぞれ購入し、食べ歩きながらエクレールの説明を聞く。

「戦は国交手段でもあるが、同時に国や組織を挙げてのイベント興行でもある。今回はガレットと戦ったが、もつと規模の小さい村同士や団体同士の内戦もあるな」

「村対抗の競技大会兼、お祭りみたいなものかな？」

「まあ……そんな言い方もできるな」

（戦いが競技大会……数年前の傀儡戦争に比べたらえらく易しいもんだな）

シンクの例えが解りやすく、納得するエクレール。対してライは、数年前に起こった傀儡戦争と比較していた。

傀儡戦争とは、大昔にリインバウムを侵略しに来た悪魔の王の一人が現代に復活、ある森に封印されていた召喚獣を機械化した兵器【ゲイル】の技術を手に入れて、それによつて再びリインバウム侵略をしようとした戦争である。名前の由来は、その悪魔王が死体に霊を憑りつかせた不死の兵を大量に従えて戦いに赴いたことにある。

この兵は倫理など度外視した存在であるため、それを大量に用いた戦いよりも凄惨な戦いはないとライは思った。

そして再びエクレールのレクチャーに耳を傾ける。

「戦興業を行う際は、興行主が参加希望者から参加費用を集めて、それを両国がそれぞれに計上する。そして、戦を行い戦勝国が約六割、敗戦国が残りの約四割を受け取る、これは大陸協定で決められた基本の割合だ」

「ず、随分と合理的だな」

ライはエクレールの説明を聞いて感心していた。

「分配した費用の内、最低でも半分は参加した兵士の褒賞金に当てられる。この割合も協定で決まっている、そして残り半分が戦興行による国益だ。病院や砦を立てたり、公務を行うものを養ったりするのに使われている」

「それを考えたら、さっきの四割つてのじゃ足りないだろうな。どっちにしても負けられない戦いってことか」

ライはこのシステムを聞いて、やはり平和的に見えても戦争は戦争なのだと思った。

国としては勝った方が経済的に潤うというのが今の説明でわかったので、誰も死なない⇨平和とは考えにくいと思ったのだ。

そんな中、シンクは戦の概要を見てから思っていたある疑問について聞いてみることにした。

「これ、聞いてもいいのかな？ その大陸協定っていうのを守らなかつたり、本当に人が死んだりしちゃう戦いとかつてあつたりする？」

「フロニヤ力だっけか？ あの人が死なない理由。そんなものがあつたらこの世界を欲しがる奴が、異世界から侵略に来たりとかしそうなんだけど」

「うん。人間どころか、感情のある生き物にはそういうことを考えるのってかならずいるから」

シンクの質問を聞いたライとミルリーフも同じような質問をする。リンバウムは生命の源であるManaが豊富なゆえに侵略されたので、このフロニヤルドもフロニヤ力欲しさに異世界からの侵略を受けたのではないかという疑問が生じたのだ。まあ、ありえなくはないだろう。

すると、エクレールはバツの悪そうな顔をして再び口を開いた。

「ライ達の言うような敵はいなかったが、歴史を紐解けば、魔物との戦いなどに勇者の言うようなことはなくはないな」

「魔物？」

魔物という異形の存在というイメージがあるため、そのような存在がいない地球出身のシンクはすぐにイメージが来た。だが、リンバウムには天使や悪魔、獣人や妖怪、といった様々な異世界の住人が召喚術などで目の当たりに出来ることもあり、ライ達は魔物という単語にあまりピンとは来ないようだった。

そしてエクレールは再びレクチャーを再開する。

「我々が戦で負傷せずにいられるのは、戦場指定地に眠る戦災守護のフロニヤ力、さつきライが言った通りそのおかげだな。ただし、それ以外の土地だと怪我もする死にもする」

「じゃあ、守護されていない地域ってどのぐらい？」

「オレ等だって死にたくねえから、教えてくれ」

「元々守護力が強い場所に国や町、砦が出来ているんだ。街道や山野は危険な場所が多いな」

「つまり、町の外は危ないところが多いんだね」

ライ達の質問にエクレールは丁寧に答えて、ミルリーフが最後に結論をまとめる。

「とくに街道は大型野生動物の危険度も高い。だが戦の為に移動する隊列に加われれば逆に安全な旅が出来るという利点もある」

「まあ、武装している集団だからな。いざという時に守ってくれるだろうしな」

ライ達へのレクチャーが一通り終わったところ、エクレールが呆れ口調でこんなことを言い出した。

「しかし、貴様らは何も知らないのだな」

気に障ったシンクはムツとする。するとそこでライが口を開いた。「お前なあ、知らなくて当然だろ。オレもミルリーフもシンクも、フロニヤルドって世界自体の存在を今日知ったばかりなんだからな。逆に聞くけど、お前はリンバウムにどんな国があつて、誰が納めているか知ってるのか？ シンクの住んでいるニッポンって国のことどれぐらい知ってるんだ？」

ライも今のエクレールの発言を快く思っていなかったので、とりあえず反論する。

エクレールも少し考えてみたが…

「全く知らんわ！」

「だろ。だから、さつきみたいない方は感心しねえな」

「ぐっ………悪かった」

ライに言い負かされたエクレールは、先程の発言について謝罪する。

その後、気を取り直して別の話題を振った。

「まあ、とりあえずリコの所に行くぞ。何か進展があるかもしれないしな」

「誰？」

いきなり知らない名前が出て来たので、シンクは誰なのか尋ねてみる。

「本名はリコッタ・エルマール、学院の主席研究員で私や姫様の友人だ。さつきの映像で姫様と一緒に映っていたぞ」

「ああ、あの子か」

というわけで、リコッタのいる学院へ向かうことになった。

「申し訳ないであります！」

学院にやって来たライ達は、目的の人物であるリコッタの謝罪を受けていた。

「このリコッタ・エルマール。誠心誠意、勇者様やライ様達にご帰還される方法を探していたであります……力及ばず、未だ何ともどうにもこうにも……」

「おい、ちよつと落ち着け」

ひたすら謝りっぱなしのリコッタだったが、見かねたライが声をかける。

「まあ、まだ1日もたつてないのに見つかるとは流石に思っていないからな。シンクもそうだろう」

「え、ああ、そうそう」

「本当でありますか？」

「ああ。だから、そんなに気にすんな」

どうにかしてリコツタを安心させるライ。

もう一つ、ライはある問題について一同に話す。

「それに」

「『それに?』」

「オレとミルリーフを召喚したのが、誰かわかんねえんだよ。だから送還方法があったとしても、現状は帰れねえんだ」

「え、本当でありますか?」

「詳しく聞かせて貰おうか」

事態について気になったシンク達は、ライから事情を聞いてみる。

「オレとミルリーフの足元に、いきなりあの魔法陣に似たヤツが出てきてそれに吸い込まれちゃったんだよ」

「その魔法陣、色とかかいていた字とかがさっきのとびみように違ってたんだ」

「あと、召喚されて最初に出てきたのが、戦場のはずれの林だったからな。召喚主にも会えてねえんだよ」

そう。シンクを呼ぶのに使った魔法陣は、ミルリーフやさっきの姫の髪のようなピンク色だった。だが、ライ達が吸い込まれた魔法陣はそれより色の薄いピンク、ようするに桜色をしていたのだ。ついでに、ミルリーフはあの短い間に書かれていた文字も見ていたらしい。

「召喚主がわからない、確かに問題だな」

「でも、ひよつとしたら送還は召喚とは違う原理で行われる可能性もありますし、ライ様も帰る手段を見つけられる可能性はまだありますよ」

リコツタがライに安心させるように言う。

すると、エクレールがライとシンクにあることを聞いてきた。

「ところでお前達、帰るまでの期限についてはどれぐらいだ?」

エクレールに言われて、二人は帰るまでの期限について計算をする。

「あと16日」

「オレもそれ位が限界か?」



「！ それなら希望が湧いてきたであります!!」

期限を聞いたリコツタは嬉々とした様子で告げる。

これを聞いたライは、リンバウムの召喚師でもかなりの時間がかかりそうな課題を16日以内で達成できるという自信に驚かされた。

「あ。リコツタ、ちよつといい?」

すると、シンクが何かを思い出すようにリコツタにあることを聞いてみる。

「召喚された穴のところから、電波通つたりしないかな?」

シンクはそう言つて携帯電話を取り出す。対するリコツタは電波という単語を知らないようで、不思議そうな表情で聞き返してきた。

「え〜つと、この携帯電話つていう通信装置が使えるようになる……なんて言えばいいのかな?」

「通信というと、フロニヤ周波みたいなものがありますね。 なら、何とかなると思うでありますよ」

「本当!? じゃあ、お願いしてもいいかな?」

リコツタの一言で無効と連絡が取れそうだと解り、シンクは思わずその準備を頼む。リコツタの方も、特に断る理由がないので許可を降ろす。

その一方で、ライはエクレールに話しかけられる。

「そういえば、お前は連絡を取る道具とか持つているのか?」

「ああ。オーナーに持たされているのが一応あるな」

そう言つてライは、ポケットの中から通信装置と思われるものを取り出す。テイラー曰く、召喚術でロレイラルから召喚された最新の通信メカなのだとか。

「ライ殿、ここにいたか」

「兄上」

「ロランさん」

ライを呼ぶ声が聞こえたので振り向いてみると、声の主はロランだった。

「何か用でもあるんですか?」

「いや、私じゃなくて姫様がね。勝利に貢献してくれた君達にお礼を

言いたいそうなんだ」

「どうやらこの国の姫がライを呼んでいるらしい。特に断る理由もないので行くことにした。」

「わかりました。あ、シンクも来るか?」

「いえ。僕はちよつと試したいことがあるから、先に召喚台に行つてきます」

「わかった。じゃあ、あとで」

ライはシンクと一旦別れて、ミルリーフと一緒にロランに案内されて、姫のところへ向かった。

やって来たのは、目的の人物であるミルヒオーレ（以下ミルヒ）のいる自室。話によると衣装直しの途中だそうだ。

「姫様、ライ殿をお連れいたしました」

「はい、通してください」

ロランがノックをすると、先程の放送で聞いたミルヒの声と同じもので返事が返ってきた。

扉を開けると、その先にミルヒはいた。最初にスクリーンで見た時のようなドレスではなく、もつと動きやすそうな格好をしていた。ただし、それでもライ達が着ているような物よりは高そうだった。

「お待ちしておりました、ライ様。私がビスコッティ共和国のフィリアンノ領代表領主、ミルヒオーレ・F<sup>フィリアンノ</sup>・ビスコッティです」

「ああ、どうも。あと、オレは様づけされるような大層な奴じゃないんで、呼び捨て、だめならさん付けでお願いします」

「わたしも、呼び捨てでいいよ」

「ふふ、わかりました。では、ライさんと呼ばせてもらいます。あと、そちらはミルリーフでいいですか?」

「うん」

やわらかい雰囲気、丁寧な口調で自己紹介をするミルヒ。

呼び方云々の話を終えて、ミルヒは次の話題を振る。

「今回の戦、私達ビスコッティを勝利に導いてくれたこと、ありがとう」

「ございます」

「いや、むしろあんたが呼んだ勇者の活躍を奪って悪かったって思っただけだ…」

「いえ、ライさんがいなかったら私達は負けてしまっただけで、そのままシンボリでした。だから、ありがとうございます」

「いや、はい、ストップ。パパ、このままじゃいつまでも話が終わらないからここでお願い…すまん」

ミルリーフに制されたので、ライは思わず顔を赤くしてしまう。

「ミルリーフの言う通りですね。じゃあ、別の話に変えますね」

「ああ、わかった」

ミルヒはそう言って、ライに勇者召喚に至ったの経緯などについて話した。

「つまり、あのガレットのお偉いさんがここ最近、戦を何度も繰り返すようになったせいで負けっぱなしだったと？」

「はい。それで、一国の主にのみ使用が許される勇者召喚を行って、シンク・イズミ様を呼んだのですが……」

話している途中で、ミルヒは少し暗い表情になり、黙り込んでしまう。

「成る程。送還できないと知らないでやっちゃったのか」

「はい。だから、勇者様にとても迷惑な結果になってしまっただけ…」

ミルヒの表情はさらに暗くなった。よほどシンクのことを気にしているらしく、ライもミルリーフも彼女がどういう人物かがよくわかった。

とにかく、優しい。ただその一言に尽きる、そんなお姫様だった。

ライは、そんなミルヒを安心させようと先程の学院でのやり取りを話すことにした。

「ああ、なんか16日以内に帰れたら問題ないらしくて、リコッタもそれなら希望があるって言ってましたよ。連絡も出来るかも知れないって」

それを聞いてミルヒが反応する。そして、ライも話を続ける。

「あと、オレのいた世界じゃ召喚が生活を支えるもので、真逆の送還

術つてもものもあるから、そつちを調べたらシンクを帰せるかもしれないん」

「ほ、本当ですか？」

ライから話を聞いたミルヒは、表情がさらに明るくなった。よほどシンクのことを気にしていたようだ。

「だから、もし向こうに連絡できたら、召喚術に詳しい仲間聞いてみるわ」

「はい。ライさん、ありがとうございます」

その後、ライも帰る目途がつくまでは戦に協力すると約束して、部屋の外に出る。

「ライ殿、姫様に会った感想はどうだい？」

部屋から出て、真っ先にロランが聞いてきたのはその話題だった。

「初めて会ったばかりだから、まだ何とも言えませんが……いい人だとは思いますが。国のことを第1に思っていて、シンクのことでも申し訳なさそうに……」

「うん。なんだか、いっしょにいて心地のいい、パパみたいな感じの優しい人の雰囲気でしたよ」

「……求めている答えと違うが、好印象なようでよかったよ」

ライ達の答えを聞いたロランは一瞬黙るが、穏やかそうな表情でそう告げた。

「……ちなみに、求めている答えって？」

「勇者殿が答えたことだが、そこに可愛くて素敵が入っていると完璧だったのだが」

ロランの答えを聞いて、ライは思わずズッコケた。まあ、こんな答えを聞いたら仕方ないだろう。

ロラン曰く、ミルヒは愛され系お姫様で国民達も総じてその答えを出すとか。

「……ライ様——！」

遠くからライを呼ぶ声が聞こえたと思うと、リコツタが走って来た。

「ライ様、通信の準備が出来たであります」

「おお、グッドタイミング！」

「ちょうどそのための機械を騎車で運ぶので、相乗りして行くでありますか？」

「ああ、頼む」

リコッタに案内されて、ライとミルリーフは召喚台に向かうのだった。

## 第5話 暗躍する意思

ここは、リインバウムの帝国領、トレイユの町にあるブロンクス邸。「つたく、ライのやつどこ行つたのよ？ 昼には帰ってくるって言うてたじゃないの」

膨れながらそう呟くのは、へそ出しルツクの上にコートを着た、ウサギのぬいぐるみが付いた帽子をかぶった少女だ。

彼女の名はリシエル・ブロンクス。このブロンクス家の長女で【金の派閥】の召喚士見習いの、ライの幼馴染である。

「姉さん、気持ちちは解るけど落ち着いて」

そんなリシエルを落ち着かせようとしている少年は、彼女の弟ルシアン。ブロンクス家の秘伝である機械召喚の適性がなかったため軍学校への進学を目指していたが、かつて共闘したアルバという少年の影響から現在は自由騎士になるべく特訓に明け暮れている。

「あ、お帰り。見つかった？」

「いえ。町中探しても見つかりませんでした」

ブロンクス邸に戻ってきたのは、紫の髪と赤い瞳が特徴的なメイドの女性だった。

彼女はポムニットといい、リシエル達姉弟の世話係をしているメイドだ。先程まで御使い（ミルリーフに仕えている4人組）をはじめとした町の仲間達とライとミルリーフの捜索に出ていたが、町中の何処にもいなかったという。

「御使いのみなさんは町の外まで捜索に行つてしまいました」

「…ねえ、あいつらが間違つて隣町とかに入っちゃったら、騒ぎになつたりするんじゃないの？」

「そこはみなさんも理解しているので、大丈夫だと思います」

リシエルの言うことはリインバウム、それも帝国に暮らすものにとつての常識によるものである。

帝国では召喚獣が個人の所有物と認識されており、召喚獣のみで行動しているとはぐれ召喚獣と見なされてしまうからだ。

「…もしアイツに何かあつたら、メリアージュに顔向けが出来ん」

そう呟きながら机に伏している、高そうな服装の中年男性は、ブロンクス家当主でリシエル達の父、そしてライの雇い主であるテイラー氏だ。

彼はライの父ケンタロウとは腐れ縁、そして同時にその妻であるメリアージュは初恋の相手であるので、その息子であるライの実を案じるのは当然であろう。

「ライ…」

(ライ、よくもエニシアを心配させてくれたね。このまま帰ってこなかったら見つけ次第…)

ライを心配しているのは儂げな雰囲気、ライの服と似たようなデザインデザインの物を着た少女。そしてその隣で物騒なことを考えているのは、マフラーと眼鏡を身に着けた赤い髪の青年。

この二人が、現在忘れじの面影亭でお手伝いをしているエニシアと、以前ライが巻き込まれた事件の首謀者ギアンである。

このように、ライの身近な者達は皆、彼の心配をしている。これは単ひょえに、ライが周りの人々に愛されていることの表れだろう。

そんな状況の中……

—— p r r r r r r r r ! p r r r r r r r r !

「!? あの音は通信装置の…」

「ひょっとしたら、ライさんかも!」

突然なったアラームのような音は、ロレイラルから召喚された通信装置によるものだ。この据え置き型通信装置は、地球にも存在しているテレビ電話のようなものであり、音声だけでなく相手の顔や周囲の様子まで映すことが可能な装置である。ライの持たされているものは、これとセットになっている物なのだとか。

「この番号、間違いなくライに持たせたものだ」

「! ……あのバカ」

ライからの通信だと解って、リシエルは安心すると同時に怒りが込み上げてきた。

『お、つながって「ライ!」!?』

画面にライの姿が映った瞬間、リシエルが真つ先に詰め寄った。

「ライ、今どこにいるのよ!? そっち行くから教えなさい!!」

「急用でも出来たか!? 帰れるのはいつだ!」

「どこか行くなら行くで一声かけてくれ! おかげでエニシアが心配しているじゃないか!!」

『え、えくつと、ちよ、待!』

リシエル、テイラー、ギアンの順でモニター越しのライに詰め寄る。一斉に詰め寄せられたのでライは驚き、答えるに答えられない状態だった。

だが、そんなライに救いの手が差し伸べられた。

『あのく、そのことなんです』

「自分達から話させてもらうであります」

ライに救いの手を差し伸べたのは、シンクとリコッタだった。シンクは先に連絡を終えているので、こちら側の会話に参加していた。

リシエル達は、突然出てきた二人組がすぐに気になって、そちらを優先する。

「えくつと、あんた達は?」

『僕はシンク・イズミといいます』

『自分はリコッタ・エルマール、ビスコッティ共和国の王立研究員をしているであります』

「メイトルパの亜人なのに家名持ち? それに研究員?」

リコッタ、というかフロニヤルドの住人達は全て獣耳なので、リンバウムの住人から見たらメイトルパの亜人と間違えるような容姿である。

そのため、メイトルパの召喚術が専売特許であるギアンも、彼女が家名持ちだと聞いて混乱するのだった。

『いえ、自分はそのメイトルパという世界の住人ではなくて…』

そこから、リコッタが自分達の素性やライの現状、そしてフロニヤルドについてブロンクス邸にいる者全員に詳しく説明した。

〈説明後〉

「未知の異世界に召喚……あんたも相変わらず大変ね」



『言うな…』

事情を聞いた一同を代表して、リシエルがそのことについて指摘した。

「16日以内、となると……ライさん、その間はお店の方はわたくし達にお任せ下さいまし」

「私も最近、ポムニット並みにお料理の腕が上がってきたから、最低限お客さんに出せるはずだよ」

『お、それは助かった！ 二人とも、ありがとうな』

ライにお礼を言われたエニシアとポムニットは、思わず顔を赤らめる。

「絶対にその日数以内に帰ってこい。客はお前の料理をご所望なので、待たせると客が引くぞ」

『あ、はい。なんとかします』

テイラーはこの期に及んでもビジネスの話題を出して来た。ライは呆れつつも、自身の雇い主で育ててもらった恩もある相手だったので文句は言わなかった。

「僕の方でも連れ戻す手段がないか、調査してみるよ。もちろん、そのシンク君の分も」

『ギアンさん、ありがとうございます！』

「僕はライには助けられたからね、彼の頼みならいくらでも協力してやるつもりだよ」

シンクはさらに協力者が得られたことを喜び、その本人であるギアンにお礼を言う。

『じゃあ、そろそろ切るな』

「ライ、ちよつと待て」

ライが通信を切ろうとしたら、テイラーが待ったをかける。

『オーナー、どうしました？』

「ちよつとシンク君達の方に向けてくれ」

とりあえずライは、テイラーの指示通りにする。

「君達に頼みがあるんだが…」

『はい、なんでしょう（ありましよう）？』

テイラーの第一印象から、シンクもリコッタもかしこまった様子で答える。

「その、な、なんだ。ライのことを、頼む」

いきなり歯切れが悪くなったテイラーの様子に、シンクもリコッタも呆ける。

「べ、別にアイツのことを気にしているわけではないぞ！ その、アイツは私の初恋の人の息子だから、その人に申し訳が立たないだけで…」

『……ぷ』

テイラーの慌てぶりに、思わずシンクもリコッタも嘔き出す。

「お前達、今笑ったろ！」

『さ、さあ？ でも、テイラー様、安心するのであります』

『僕達、もとからライさんの力になるつもりなので』

二人とも笑いを堪えながらテイラーに言う。第一印象からかけ離れたリアクションをとったので、そのギャップがすごかったようだ。

「だ、だから……あああ！ ライ、さつさと切れ！」

『？ まあいいか、わかりました』

「……ここでようやく通信終了。」

「まあ、アイツが無事だったからよしかな？」

「なんとというか、何があったかわかるとそれだけで安心できるね」

「ライさんなら何があっても、なんとかかしてしまえばいいそうですし」

ライの安否がわかった途端、皆が安心してる。

連絡が無い時は絶体絶命ということもあり得たが、墮竜化したギアンを止めて、下手をしたらラインバウムが滅亡したかもしれない事件を解決してしまった彼だ。無事なら後はなんとかかしてしまうだろうと、関係者達は総じて思ったようだ。

「パパ、よかったね」

「ああ、これで一安心だな」

ミルリーフにそう話しかけられてライも応える。シンクも共々、も

といった世界への連絡に成功したので安心していった。

すると、リコッタが何かを思い出した様子でライ達に話しかける。

「ライ様、勇者様」

「ん、どうした？」

とりあえず、ライが応対しようとしたら……

「お二人の持つてる通信装置ですが、後で調査させてもらえませんかでしょうか？」

リコッタはそう言って、何やら危ないオーラを纏いながら二人に近づく。

「ちよーつとだけ分解して、構造を調べさせてほしいんです。見知らぬ機械を見ると、尻尾の付け根と研究心がキュンキュンしちゃうのであります!!」

リコッタはかなり興奮しているようで、マント越しにもかなりの勢いで尻尾を振っているのが見て分かった。

当然、その尋常じゃない様子にライもシンクも防衛本能か何かが働いた。

「あ、あはは。いや、これ貰い物だからもし壊れたら……」

「平気であります。後でちゃんと元に戻すでありますから」

断ろうとしたら今度は目を輝かせ、さらにチョビつとだが涎まで垂らした様子で二人に迫る。

「いや、だから！ 渡すわけにいかねえんだって!!」

「僕のも、分解したら保証が効かなくなるから!!」

「自分が保証するから大丈夫であります！」

リコッタもついに限界が来たらしく、二人から通信機とケータイを奪おうと駆け寄ってきたので、二人ともたまたまらずに逃げ出す。

一方その頃、エクレールは兄であるロランに報告をしていた。使っているものは、1世紀以上昔の地球の電話のようなデザイン通信機だったが、ライの持つてるもののようにテレビ電話の機能が付いているようだ。

「ははっ！ それは心強い！」

エクレールはロランから何かいい知らせを聞いたらしく、嬉しそう

な声を上げていた。

「エクレ、何か朗報が？」

さつきまでライ達を追いかけていたリコツタが、そちらに視線を移して尋ねてきた。

「ダルキアン卿が、戻ってこられる！」

「本当でありますか!?!」 なら、ユツキーも一緒でありますね！」

どうやら誰かがビスコツティに戻って来るらしいが、二人はその人物達に会えるのが相当嬉しいようだ。

「なんだ、誰が来るって？」

二人の嬉しそうな様子が気になったライは、エクレールに尋ねてみる。すると彼女は、嬉々とした様子で答えた。

「ビスコツティ最強の騎士ダルキアン卿と、我らが友人ユキカゼだ！」  
「二人とも、とつても頼りになるでありますよ！」

ビスコツティ最強の騎士、騎士を名乗るエクレールからしたら憧れの存在なのだろう。彼女の嬉しそうな様子も、わからなくはなかった。

「ん？ なにアレ？」

妙な気配がしたので振り返ったシンクの第一声がそれだった。

振り返った先にいたのは、半透明の姿をした謎の生物が複数匹。蛙の様なものや一つ目のもの、とバリエーションも豊かだ。

「まさか、はぐれ召喚獣か!?!」

「ライ様、はぐれ召喚獣が何か知りませんがアレは危なくない生き物でありますよ！」

ライが謎生物をはぐれ召喚獣と勘違い、撃退しようと剣に手を伸ばすがリコツタが慌てて止める。

そして、エクレールが誤解を解こうと説明を入れた。

「あれは土地神といって、精霊に近い土地に暮らす生き物だ」

「害があるどころか、土地神様が暮らしている土地は自然の実りが豊かになるんでありますよ」

ライは説明を聞いて、「妖精は解るけど精霊ってなんだ？」と疑問に思ったが、口に出したらまた駄目出しされそうに思ったので黙っていた。

た。

リンバウム、というよりサプレスに精霊は存在しているが、ライはつい最近まで自由騎士の存在や、世界の意思であるエルゴも知らなかったのも、同様に天使と悪魔以外のサプレスの住人についても詳しくなかったのだろう。

太陽が沈んだ時間帯、ファイリアンノ領全体を見下ろせる巨大な崖の上に人影が四つ。

一人は風にマントを靡かせる少年、見たところシンクと同年のようだ。残りの三人は色違いのお揃いの服を着た少女達だった。

どうやらガレットの住人のようだが、一人だけウサギ耳の少女が混じっていた。ガレット在住の他国出身者と思われる。

「ビスコッティに召喚された勇者と、姉上を倒した謎の乱入者か。そいつ等って強いのか？」

「はい。二人ともガウ様と同じ軽装戦士、特に後者は剣以外にも銃や格闘術も使える万能戦士のようです」

少年はどうやらレオの弟らしく、ライとシンクに用があるらしい。同行していた少女達に二人の実力について尋ねると、黒猫の耳の少女がそれに答える。

「へえ。まあ、姉上の敵討ちって訳じゃねえけど、まとめて遊んでやるか」

そして少年は少女たちを連れてその場から移動を開始した。

同時刻、別の場所にて

「クソ、妙なトコに迷い込んだ」

一人の男がどこかの林を歩きながら悪態をついていた。月明かりが射さないので容姿が良くわからない。

「マナは豊富みたいだが、負の感情が少なすぎて力が出ねえな」

男の口からマナや負の感情、と気になるワードが飛び出す、彼以外に誰もいないので気にする者もいなかった。

「まあ、負の感情はこれから楽しみつつ満たしていけば何とかなるか。楽しみだねエ…」

男は心底邪悪そうな笑みを浮かべながら言う。

ここでようやく男が林から抜け出し、月明かりによって容姿が明らかになったが、その姿はフロニヤルドの住人どころか、人間にも見えなかった。

青い色の肌、黒い眼と赤い瞳、鋭い角、そして巨大なコウモリのような翼、まさに悪魔と言ってもいい姿をしていたのだった。

第6話 宣戦布告 We are the G・n  
oise

完全に日が沈んで夜になる時間、ライ達はようやくファイリアンノ城に戻ってきた。

その道中、リコツタはライに渡された銃をいじっている。土地神の出現でうやむやになっていたが、リコツタがまたもシンのケータイを狙っていたので、ライが自身の銃を囮として渡したのだ。彼の得意武器は専ら剣なので、もし銃が駄目になっても大丈夫だと判断したからだ。

「なあ、リコツタ」

「なんでありますか?」

ライはリコツタにあることを話していた。その内容はこうだ。

「今更だけど、オレにまで様付けってやめてくれねえか? もともとオレはここにいない筈だったんだし、ただの宿屋の店長なんだからそんな高貴な人間でもないんだしさ」

ミルヒにも持ちかけた話をリコツタにもするライ。だが……

「すみません。自分、どうも人を呼ぶときは愛称か様付けが定着してまして、しつくりこないというか……」

「ああ、そうか。わかった、我慢する」

ライはここで強情したらリコツタを困らせてしまい、またエクレールが五月蠅くしそうに思ったので、妥協することにする。

すると、エクレールがライ達に声をかけてきた。

「お前達、姫様のコンサートに汗臭いまままで来られたら困る。風呂に入ってこい」

「いいけど、風呂の場所って?」

「案内図もありますし、中の者に聞いたら解るはずであります」

というわけでライ達は風呂に入ることになる。

「ねえパパ、久しぶりに一緒に入ろう」

「そうだな、たまにはいいか」

ミルリーフの爆弾発言とそれに賛成したライを見て、全員がギョツとする。

「え!? ちょ、ミルリーフ、何言ってるの!?!」

「いくら親子でも、それはアウトでありますよ!」

「というか、ライ! 貴様はなぜ冷静なんだ!!」

エクレールの言うことは尤もだが、ライの一言で全員が納得する。

「いや、竜の姿になっちまえばたいして問題ないだろ?」

「「ああ……」」

だが、ライはこう言っているものの、当のミルリーフまで同意見とも限らなかった。

「えー!? 私、こっちの姿のままがいい」

今度の発言には、流石にライも驚く。

「はああ!?! お前、いきなり何言ってるの!?!」

「ひさしぶりに頭洗ってほしいなあ。こっちの姿じゃないとそれ無理だよ」

ミルリーフはご褒美代わりにシャンプーして欲しいらしい。

だが、見た目は幼いが女の子のミルリーフと一緒に風呂に入るのは、周りの目を考えると色々とマズい、そう思ったのはライだけではなかったので一斉に止めに入る。

「ダメだよ! いくら親子だからって女の子が男の人と一緒に入っちゃ!!」

「お前、羞恥心あるのか!?!」

「その、色々とアウトでありますよ!」

全力で止めるシンク達。すると……

「……………ダメなの?」

「「!?」」

ミルリーフがウル目になりながら言う。



「わたしが、ミルリーフがパパに甘えたら、ダメなの？」

だんだんとミルリーフの目に涙が浮かんできた。その姿を見たシンク達は、背中に電流が走るような衝撃を受けた。

(なに!? この可愛さは一体なんなの!?)

(保護意欲が掻きたてられる!? 姫様とは別路線の愛しさを感じるぞ!)

(こんな顔でお願いされたら、断れないであります!!)

シンク達は涙目のミルリーフを見た瞬間、共通のことを思った。

メツチャ可愛い、お願い聞いてあげたい、と。

だがその一方で、ライは冷や汗を流していた。

(やべえ。これ断ったら、こいつらに殺されそう…)

ライはミルリーフとは出会ってから濃厚すぎる(決していやらしい意味ではない)日々を送って来た。そのため耐性がある程度ついていたが、シンク達はそうでもない。下手に断ったら、シンク達にボコにされるヴィジョンが見えた。

「……わかった、今日だけだぞ」

それを聞いたミルリーフは涙が引いていき、すぐに満面の笑顔になった。

「ワイー! パパ、だあーいすき!!」

そのまま笑顔でミルリーフはライに抱きつく。その様子を見ていたシンク達は思わず頬を緩めており、揃ってミルリーフに惱殺されているのが伺えた。

(やれやれ、これが素だから恐ろしいよな)

その一方で、ライは頭を押さえしなからそんなことを考えていた。

城に入ったライ達は、現在迷子状態だった。

「誰もいないな」

「たぶん、みんなコンサートの準備で忙しいんだね」

「みんな、それだけ姫様のお歌がすきなんだね」

そんな感じの会話を時々交えながら城内をさまよっていると……

「あそこかな？」

「とりあえず入るぞ」

それっぽい場所を見つけた三人は、早速入ってみる。

「あ、ロッカー！ 大正解!!」

「ロッカー？」

リンバウムには銭湯のロッカーや類似するものが存在しないので、ライもミルリーフも首を傾げる。だが、シンクに脱いだ服を仕舞う簡易金庫のような物、と説明を受けて納得する。

早速服を脱ぎ、風呂桶を片手に風呂場に入りますが、彼らは近くにあった張り紙の存在に気付かなかった。尤も、気付いていてもフロニヤルドの文字を読めないので意味ないが。ただし、その張り紙にはかなり重要な内容が書かれていた。

『大浴場 ただいまの時間 女性用。ミルヒオーレが使わせて貰っています』

「うわあ、露天だ」

「広い風呂だな、流石は城ってか」

シンクは大浴場が露天風呂だったことに感動し、ライも広い風呂について感心する。

「あ、誰かあそこにいるよ」

「あ、本当だ。先客かな？」

ミルリーフが指差した方を見ると、湯気で見え辛いがたしかに人影がある。どうやら体を洗っていたらしく、シャワーでその泡を流しているようだ。すぐに流し終え、シャワーを止める。そして、体についた水滴を犬のように体を震わせて飛ばす。

その人物は、尻尾の毛や髪の色がピンクで、体は細く、胸は小さいが体格は女性のソレだった。

すると、女性はこちらに気付いて顔を向ける。

「「え？」」

「勇者様、とライさん？」

「あ、姫様だ」

人物はミルヒだった。ライもシンクも特殊な性癖があるわけではないので、周囲の人間が気にしなければミルリーフと一緒に風呂に入っても問題はない。

だが、目の前にいるミルヒの場合はそうはいかない。彼らは同年代、揃って10代だから思春期真っ只中なのだ。

そんな彼らが一緒に風呂場に裸でいるとどうなるか、言うまでもないだろう。

「ぎゃあああああああ!? なんで、なんで姫様がいるんだ!?!」

「ああああああああ!?! ぼ、僕達何も見てませんから!!」

思春期真っ只中の二人が同年代の少女の裸を見たら、当然このようになる。例外のリアクションはドスケベの大歓喜ぐらいだろう。

「す、すみません。お二人の前でこんなはしたない…」

「イヤ、普通に考えて悪いのオレ達だから!!」

ミルヒは胸を隠しつつも、何故か自分が謝るという行為に出たためライが衝動的にツッコむ。

「とりあえず、僕達すぐに出て行きます!!」

「ああ、また時間を空けて出直すから…」

慌てて風呂場を出ようとした男子二人だったが、慌ててたために足元に注意が及ばなかったのがまずかった。

「二あ」

足元には二人が持っていた風呂桶が落ちており、二人はウツカリそれに足を引っかけってしまう。ミルヒがいたことに驚いて床に落としてしまったが、二人そろってそのことを忘れていたのだ。

それによって二人そろって転んでしまい、湯船に落下してしまう。

「勇者様!」

「パパ、大丈夫!?!」

ミルリーフとミルヒが湯船に近寄る。すると、二人が湯の中から顔

を出す。

「お二人とも、ごめんなさい」

すると真つ先にミルヒの姿が映った。彼女は湯船に沈んだこちらを覗きこむようなポーズとなっており、そこに胸を隠すような手の配置が合わさってかなり大胆なポーズとなっていた。ライもシンクも反射的に湯に潜って見ないようにするのがあった。

「私、普段はこちらの大浴場にはなかなか入れないものですから……あの、私も上がりますので！ みなさんごゆっくり!!」

そのままミルヒは大浴場から出て行った。それに合わせてライ達は勢いよく顔を出す。

「やっぱり、パパも男の子だったんだね」

「どういう意味だよ、それ？」

茶化すようなミルリーの一言に顔を赤くしつつ、疲れた様子で返すライ。

「あの、勇者様」

「はい？」

今度はミルヒが扉越しにシンクに声をかけてきた。

「召喚の事とかこれからの事とか、勇者様にお話したい事がいっぱいあるんです。ですから、コンサートが終わったら、少しお時間いただけますか？」

「あ、はい。いくらでも」

「ありがとうございます。では、また後ほどー」

ミルヒの言葉にそのまま返すシンク。それを聞いたミルヒは、嬉々とした様子で返す。

「ああ、びつくりした……」

ミルヒが去った後、ライは大きく深呼吸した後で呟く。

「パパ、あんなことがあつていきなりだけど……」

「はいはい、頭洗ってくれだろ。忘れてねえから安心しろ」

「ありがとう、パパー！」

というわけでライがミルリーフにシャンプーしてやることにする。すると、シンクがあることに気付いた。

「アレ？ 姫様がいたってことは、ここ女湯？」

「あ…」

まあ、その心配は当然だろう。ミルリーフも自分が男湯に入るのとはもかく、ライ達を女湯に連れ込むのはマズイというのは解っていた。

早速大浴場から出て、確認を取ろうとしたその時……

「きゃあああ!？」

いきなり、ミルヒの悲鳴が聞こえた。

「今のは!？」

「ライさん!？」

「パパー!？」

ライ達は大浴場を飛び出し、即座に着替えを済ませて外に出る。

頭上から視線を感じた一同が見上げると、謎の三人組の姿があった。左から順にウサギ、黒猫、虎の耳の少女達だ。

そして、中央の黒猫少女はミルヒを抱きかかえている。そのミルヒは縛られ、口も塞がれており抵抗できない状況だった。

とりあえず、ライは三人組に向かって叫んだ。

「お前等、一体何者だ!？」

「我ら、ガレット獅子団領!？」

ライの質問に答えるように、ウサ耳の少女がポーズを決めながら名乗りを上げる。どうやら所属はガレットのようだ。

「ガウ様直属、秘密諜報部隊!？」

次は虎耳の少女が名乗りを引き継ぐ。

そして黒猫少女が一言もしゃべらないうちにその両脇に残りの二人が並んでポーズを決める。

「ジエノワーズ!!」

ジエノワーズと名乗る三人組が叫んだ直後、その背後で爆発が起こった。その時の爆発が来ている服の色に合わせて、緑、黒、黄色い色をしていた。レオの時もそうだったが、この世界の住人は派手好きが多いのだろうか？

すると、ミルヒを抱えている少女がこちらに向かって話しかけてき

た。

「ビスコツテイの勇者殿と、レオ閣下を倒した戦士殿。あなた方の大切な姫様は、我々が攫わせていただきます」

「うちらはミオン砦で待つてるからなあ！」

「姫様のコンサートが始まるまで、あと一刻半。無事に助けに来られますか？」

そのまま続けて虎耳とウサ耳の少女達も口を開く。

人前で堂々と誘拐を宣言しだすジェノワーズに、ライは怒鳴り口調で反論する。

「お前等、何ふぎけたことを言ってるんだ!! 大体、こんな堂々と誘拐して何のつもりだ!!」

「率直に言いますが、大陸協定に基づいて、要人誘拐奪還戦を開催させて頂きたく思います。こちらの兵力は二百、ガウル様直下の精鋭部隊」

「そして、ガウル様は勇者殿及びあなたとの一騎打ちをご所望です」

ライの反論に黒猫少女とウサ耳少女は説明を入れる。

「二人が断ったら、姫様がどうなるか！」

最後に虎耳の少女が脅しのようなことを言っただけで戦いを強要してくる。

ジェノワーズが大体話し終わったところで、ライはミルリーフとアイコンタクトを取る。すると、ミルリーフがどこかに行ってしまう。

「受け」 「待て、シンク」

シンクが宣戦布告を受けようとしたところに、ライが制止をかける。

「ライさん！ 今断ったら姫様が」

「これじゃ相手の思うツボだ。とりあえず、オレに任せてくれ」

シンクに対して自分に任せるように言うライ。そして、再びジェノワーズに声をかけた。

「今日は昼間に戦ったんだろ。なんでこの時間にもう一回やろうって思ったんだ？」

「昼間の戦に参加していなかったガウル様、つまりレオ閣下の弟君がお

二人の実力に興味を持ったので戦いたいと言うご所望です」

「本当にそれだけか？ 誘拐つてのは身代金目当てとか何か得になる目的があるのが相場だろ」

「込み入った事情で深くは話せないんですが、ガウル様がミルヒオーレ姫様と話したいことがあるそうなんです」

そんな感じでジェノワーズに質問を投げ続けて対話を取るライ。すると……

「ピギィー！」

「きゃあ!？」

黒猫少女の足に何かが噛みついた。それによって彼女はバランスを崩してしまい、そのまま抱えていたミルヒの体を落としてしまう。

「姫様!!」

このままではミルヒが怪我をしてしまうかもしれない、シンクが思わず叫ぶがその心配は無用だった。

「ぶにー！」

何処からともなく現れた不思議な生物が、ミルヒをキャッチする。その生物は、耳が手の様に肥大化した紫の毛の可愛らしい生き物だ。

「な、なんやコイ」「ムイ、ムイー！」つえ!!」

今度は虎耳少女に、ゴーグル付の飛行帽をかぶった蜥蜴をデフォルトしたような生き物がタツクルをかます。

「ピ、ピギィー！」

「ぶに」

「ムイ」

そして、最初に黒猫少女に噛みついた生物がその後から現れた二匹を先導、そのまま飛び降りる。

すると、シンクはその生物に見覚えがあることに気付いた。

「あれって、まさかミルリーフ?」

「ああ。さつきあいつにアイコンタクトを取ってたな」

そう、謎の生物は竜形態のミルリーフだったのだ。さつきライとア

イコンタクトを取ったミルリーフは、ジェノワーズの死角に回って召喚術を使用、呼び出した召喚獣達とこっそりとジェノワーズに近づき、ミルヒの救出に向かったのだ。そして、ライがジェノワーズに對話をすることで時間を稼いでいた、ということだ。

ちなみに、ミルヒをキャッチしたのはプニム、虎耳少女にタツクルしたのはテテという召喚獣だ。

ミルリーフと召喚獣達は無事に着地、プニムが抱えているミルヒも無事だ。

ミルリーフは再び人型に変身、ライやシンクと一緒にミルヒに近づく。そしてミルヒを縛っていた縄を解き、口を塞いでいた布も外す。

「姫様、だいじょうぶ?」

「ええ、ありがとうございます」

助けた本人であるミルリーフがミルヒの安否を確認する。どうやら縛られる以外のことはされていないようだ。

「ミルリーフ、よくやった」

「んふふ」

ライがミルリーフを褒めながら頭をなでてやる。当のミルリーフ本人はそれによって至福の表情を浮かべていた。

すると……………

(ふええ!? 勇者様、なんだかミルリーフが物凄く可愛いんですけど

!!)

(やつぱり姫様も!?! ですよ、可愛いですよ!!)

ミルヒがシンクに小声で話しかける。どうやら、ミルヒもミルリーフに悩殺されてしまったようだ。

その一方で、ジェノワーズは何やら落ち込んでいる様子だった。

「しもうた。もう姫様が救出されてもうた…」

「これじゃガウ様の命令が達成できません…」

「どうしよう…」

あからさまにシヨンボリモードなジェノワーズ。



すると、シンクがジェノワーズに声をかけてきた。

「君達…」

「「え?」」

その時のシンクの声には、静かな怒りが籠っていることにライは気が付いた。とりあえず、彼に任せることにする。

「そのガウルつて王子が僕と戦うためだけに姫様を誘拐しようとしたってことでいいんだよね?」

「え? はい、そうですが…」

シンクの様子に戸惑いつつも、ウサ耳少女が答える。

すると、シンクは驚きの発言をした。

「だったら、僕の方からそっちに乗り込む。これだったら姫様も誘拐しないでもいいはずだよ」

「……つまり、勇者様からガウル様への宣戦布告、ということでしょうか?」

シンクの発言に黒猫少女が質問をすると、シンクは思いっきり叫んだ。

「ああ、そうさ。僕はビスコッティの勇者シンクだ! どの誰とだって戦ってやる!!」

「…わかりました。では、ミオン砦でお待ちしております」  
そして、そのままジェノワーズは去っていくのだった。

---

「姫様、勇者!」

「大丈夫でありますか!?!」

数分後、ようやくリコッタとエクレールが到着する。

「姫様、大丈夫でありますか?」

「ええ、ミルリーフのおかげです」

リコッタがミルヒの安否を確認している中、エクレールはライと向き合っている。

「ライ、あの時は勇者をよく止めてくれた。礼を言う」

「ん?」

いきなりエクレールがライに対して礼を言う。

「あの時、このバカが宣戦布告を受けていたら公式の奪還戦になって  
姫様がコンサートに出れなかったかもしれない。だからコイツを止  
めてくれたお前には感謝してるんだ」

「ああ。あのままじゃ姫様がどうなっちゃうかわかんねえから、慎重  
にやるべきだったからな」

ストレートにバカと言われているシンクだが、何故か反応がない。

「そして勇者、お前なにを勝手に宣戦布告したんだ？」

今度は、そのシンク本人に声をかけるエクレール。

「エクレール、勝手なこととしてゴメン」

シンクはエクレールの方を見るなり彼女に謝った。

「僕の世界じゃ、人が攫われるのって大変なことなんだ。しかも相手  
はコンサートを控えている姫様だった。みんながコンサートを楽し  
みにしてるのに、その王子は姫様を誘拐しようとした。僕は、ビス  
コッテイの勇者として、僕個人としても許せなかったんだ」

このシンクの言葉を聞いたミルヒ達は、思わず感激した。

彼はこんなにもこの国の民のことを思ってくれた。それも勇者と  
してだけでなく、一個人としてもだ。これは感激するしかないだろ  
う。

早速シンクが一人で移動をしようとしたら……

「オレも協力するぜ」

「わたしも」

ライとミルリーフが協力すると名乗りを上げた。

「ライさん、いいんですか？」

「オレも帰る目途が付くまでは戦に協力するって姫様と約束したから  
な。協力させてもらうぜ」

ライの協力は、とりあえず約束によるものだった。一方のミルリー  
フは……

「パパに頭洗ってもらおう約束が延期しちゃったから、早く終わらせな  
きゃ」

「『あ、あはははは……』」

ミルリーの理由を聞いた全員は、苦笑するしかなかった。

「……まあそれは置いてだ、私も参加するぞ。さっさと終わらせて姫様の歌を聞きたいしな」

「自分も微力ながら、協力させてもらおうであります！」

「二人もありがとう。じゃあ、早速行こう！」

エクレールとリコツタも今回の戦いに協力してくれるという。

戦力が集まったところで、早速ミオン砦に向かうことにする。

「あの、勇者様」

こんどはミルヒがシンクを呼び止めたので、シンクはミルヒの方を見る。

「勇者様の気持ちは嬉しいのですが、勇者様にはコンサートに来てほしいので、無理はしないでください」

ミルヒのこの言葉を聞いたシンクは、笑顔でミルヒに向き合った。

「はい。絶対に戻ってコンサートを見に行きます。勇者は嘘をつきません！」

「……はい、わかりました」

シンクとミルヒがここで約束を交わす。ライはこの光景を見て、これが召喚師と召喚獣の本来のあり方ではないか、と心のどこかで思った。

「よし、もう行けそうだな。じゃあ、早速行くぜ！」

「『オー……』」

ライ達によるミオン砦攻略戦が、いま幕を開けたのだった。

## 第7話 激闘！ ミオン砦

現在、ライ達はそれぞれセルクルの背に乗ってミオン砦に向かって  
いる。ちなみに、ミルリーフはライと二人乗りで、ライの膝の上だ。  
最初、二人とも騎乗というものに慣れていなかったので振り落され  
そうな様子だったが、もともと身体能力が高かったこともあり、すぐ  
に慣れた。

「オレ達はたったの五人だからな、なんかの作戦が無いと厳しいぞ」

「ああ。ガウル殿下の精銳は二百、兵力差は歴然だ」

「……そういえば、リコッタはどう戦うんだ？ なんとなく召喚師み  
たいな後方支援ってのは解るんだが」

ライはリコッタの戦い方について気になった。まあ、彼女は見たま  
んま研究職の人間なので戦うとしたら、ラインバウムの召喚師のよう  
な後方支援、下手をしたら大火力砲撃といったものだろう。

「おおむね正解でありますね。自分は砲術師、ようは大砲での援護射  
撃を担当しているであります」

「大砲……すごいもん使うんだな」

リコッタの戦い方を聞いたライは、思わず冷や汗をかく。リコッタ  
の説明によると、持ち運びができる小型の大砲を用いるのだが、ライ  
はそう言ったものを見たことが無いので、聞いた瞬間は砦付近に巨大  
大砲が設置されてるものだと思っていたとか。

すると、それを聞いたミルリーフがあることをライに提案する。

「パパ、今回はリコッタについてっていいかな？」

「いいけど、何でいきなり？」

普段ライにベツタリなミルリーフが自ら別行動を取ると言うので、  
当然ライも疑問に思う。

「うまく召喚術を使えば、リコッタのお手伝いができるし、プニム達を  
傍に置いておけば敵が来ても安全かなあ、って」

ライはミルリーフの言ったことに、内心で驚いていた。先代の守護  
竜の力、知識や記憶といったものを全てを継承後のミルリーフは確かに  
大人びた感じにはなった。それからそんなに日にちが立たないうち

にギアンとの決戦を終えて日常に戻ったため、普段の甘えんぼなミルリーフに戻ったような印象で見えていたのだ。確かに根つこの部分は甘えんぼで、変わったと言えば一人称が自分の名前から「わたし」に変わったぐらいなのだが、やはりあの時の大人っぽくなった部分は大きく残っていたようである。

とりあえず、そのままミルリーフはリコッタと行動することとなった。

すると、今度はリコッタがライのすぐ隣に近づいてきた。

「ライ様、さっきの銃をお返しするのであります」

リコッタはそう言ってライに銃を投げ渡し、ライもそれを受け取る。すると、リコッタはそのままライにあることを話す。

「ライ様、実はその銃、さっきの間に軽い改造を施したのであります」  
「改造？」

そのままリコッタは改造についての説明をする。

「輝力を弾薬の代わりにすることで、弾切れの心配を無くしたのでありますよ。輝力を込める量で威力も調節可能であります、使い過ぎるとライ様自身が消耗してしまうので気を付けて欲しいであります」  
「成る程。ありがとう、助かったぜ」

リコッタがライの銃に施した改造は、フロニャルド限定だが弾切れという銃で一番目立つ欠点を克服したものだ。これなら補給の心配をしないでも戦えると、ライはリコッタに礼を言うのだった。

「ライ、もし輝力の生成の仕方がわからないなら私に聞け」

「エクレールもありがとうな」

「お前は勇者とちがって紋章を授かってないからな。輝力の使い方をお教わってないだろ」

「え？ 授かる？」

ライはエクレールの言ったことについて疑問を思った。するとリンクがそれについて説明をする。

「ライさん、紋章は人がくれたり自分で買ったりしたもの登録しないと使えないんです。僕も姫様からもらった紋章で紋章砲撃つてますから」

「え、マジ!？」

ライはシンクから紋章の概要を聞いて驚く。

「お前、まさかやり方を知っていたらその場で紋章術が使えるとでも思ったのか?」

「ああ。紋章って人の個性が形になって出て来たものなのかなあ〜って」

「あの、ライさん。何でそんな、地球の漫画みたいなことを?」

「いや、なんとなく。ってかマンガってなんだ?」

一種のコントのような会話が展開されているが、そろそろ別れて行動するのにちょうどいいエリアに突入した。

先程リコッタがライに銃を帰すために近づいたままだったので、そのままミルリーフがリコッタの方に跳び移る。

「リコッタ、よろしくね」

「ミルリーフ、よろしくであります」

リコッタとそれだけの言葉を交わして、早速移動を開始する。

「パパ、行ってくるね。わたしもがんばるから」

「おお、頑張れよ」

そのまま、リコッタとミルリーフを乗せたセルクルは別のエリアに向かって走っていくのだった。

ミルリーフ達が視界から見えなくなってから……

「ミルリーフは呼び捨てなんだな……」

「まあ、見た目のこともあるしね」

ライは自分の呼び方について、さん付けか呼び捨てをリコッタに推奨したが、しっくりこないと言う理由で断念せざるを得なかった。

だが、ミルリーフは見た目的にリコッタも呼び捨ての方が呼びやすいと思ったようであり、それを間近で見たライは複雑な気分になるのだった。

同時刻、ライ達を遠巻きに見ている人物の姿があった。

縞合羽を纏い、頭に笠をかぶるといいう、見たまんまシルターン（または江戸時代辺りの日本）の旅人。ご丁寧に望遠鏡まで使って見えた。

服装の所為もあって性別は良くわからない。

「親方様〜！」

その人物を親方様と呼んで駆け寄ってきたのは、同じような格好をしているが、合羽の隙間から見える服装と声色、これらから察してこちらは女性だと言うのが伺えた。

ちなみに、同じく合羽の隙間から見える尻尾は狐を彷彿とさせており、犬に近い尻尾のためビスコッティ人と思われる。

「何か面白いものでもございましたか？」

「おお、ユキカゼ！ どうやら戦のようでごござる」

親方は女性と思われる高めの声をしていたが、巡りの大樹自由騎士団のイオスという前例があったため、やはり性別不明のままである。果たしてこの二人は味方なのだろうか？

ライ達と別れたミルリーフとリコツタは、砦付近の林に到着後、砲撃の準備をしていた。

「じゃあ、さっそく…」

リコツタが砲台を設置している間、ミルリーフはサモナイト石をいくつかり出している。

「あの、ミルリーフは何をしていますか？」

「味方をよぶ準備だよ」

よくよく考えれば、最初の戦でペンタ君を召喚した時は後方からこっそりとやっており、ミルヒの救出にテテやプニムを召喚した時も物陰に隠れていたので、フロニヤルドの誰にもリインバウムの召喚術を見せていなかった。

リコツタの疑問も当然である。

「じゃあ、始めるね」

ミルリーフがサモナイト石に魔力を込め始めると、彼女の周囲にま

ばゆい光が充ち始める。その幻想的な光景に、リコツタは思わず見とれた。

「いっしょにがんばろう…召喚、ワイヴァーン！」

ミルリーフが召喚獣の名を叫ぶと、光が一層強くなる。そして光が晴れると……

「り、竜?! 竜が出てきました!!」

ミルリーフによって召喚されたのは、メイトルパに住むワイヴァーンという種類の竜。このワイヴァーンは見た目は凶暴そうだが、人懐っこい性格で知られている。だが、両翼で高速飛行し、口から放つ強力な火球で敵を蹴散らす、戦闘能力の高い召喚獣である。

「急に呼び出してごめんね。でも、いまは人手が足りないから力を貸してほしいんだけど…」

懇願するようにミルリーフはワイヴァーンに話しかける。

するとワイヴァーンは首をもたげて、ミルリーフを見ながら小さく頷く。

「ありがとう」

ミルリーフは礼を言いながらワイヴァーンの鼻辺りを撫でてやる。その直後にリコツタに向き合った。

「リコツタ、この子の背中にも何個か大砲のせられる?」

「…あ、はい。イけるであります!」

一部始終を見て固まっていたリコツタは、ミルリーフに呼ばれて我に返る。

時間も惜しかったので3, 4個ほどしか載せられなかったが、準備万端だ。

「じゃあ、おねがい」

「G y u a a a a a a a a !!」

ワイヴァーンはそのまま咆哮を上げて飛翔、砦へ向かって飛んでいく。

ちなみに、中継もある為あまり近づいたらパニックに陥ってしまうため、相手に見え辛く火球が届くギリギリの距離からの射撃を指示し



た。

ガレット軍がパニックになればこちらが有利なのは確かだが、中継が入っているようなので視聴者側までパニックになるだろう、という配慮である。

「じゃあ、そろそろ始めるであります」

「オツケー。みんな、リコッタを守ってね」

「ムイー」

「ぶに」

それに合わせてリコッタが砲撃を開始する。ちなみに、テテもプニムもリコッタがワイヴァーンの背中に大砲を乗せている間に召喚しておいたようだ。

ようやく、ミオン砦が視界に入るまでのエリアに突入したライ達。道中でライもエクレールから輝力の精製法を聞いておいたので、戦闘準備は万端だ。

すると、エクレールがライ達にいきなり話を持ちかける。

「お前達、戦う前に一つ言っておく」

「なんだ、いきなり？」

「我々だけでは、ガウル殿下の精鋭二百人を相手にするのはぶっちゃけ厳しい」

至極当然のことを言い出すエクレールだが、まだこの話には続きがあり、本題はそこからだった。

「だがな、かつての大戦では千を越える騎兵隊を切り抜け、見事一騎だけで敵将に辿り着いた伝説の騎士だって存在した！」

「一人で千人も!？」

「そいつ本当に人間か!？」

ライもシンクもバカデカイ声で驚く。まあ千対一で一人勝ちなのだ、驚くのも無理はなからう。

「それを考えれば、百人やそこから我々でも相手にできるだろう！」

「だね。やってやれないことない！」

(まあ、ミルリーフとリコッタを含めたら、一人で四十撃破でノルマ達

成だからな。イケそうだな)

ライ達はそのまま気を引き締め直し、ミオン砦に正面から突っ込んでいく。

ミオン砦正門前、見張りをしていたガレット兵達がライ達の接近に気付いた。

「垂れ耳隊長と勇者、マジで来ます！ 真つ正面！」

「よおし！ 返り討ちじゃ、ボケエ！ 弓兵、弓構え！」

そのまま弓で撃退しようと構えを取るが…

―ドカーンッ！―

「「「「「ぎゃあああああああああ!!」「「「「「」

突如上空から輝力による砲撃と巨大な火球が降り注ぎ、正門前の敵兵達に直撃する。

直撃しなかった敵兵達も爆風に巻き込まれて撃破され、まとめてけものだまに変化していく。

「リコの砲撃は相変わらず強力だな」

「ミルリーフもちゃんとやってくれたみたいだな」

ライとエクレールが砲撃組の活躍について感心している。

「じゃあ、僕らも行くよ!!」

シンクが先陣を切って砦に乗り込む。ライ達もそれに続いて一気に乗り込んだ。

そこまでは良かったが…

「熱烈大歓迎ってか？」

「みたいですね」

入っていきなりとんでもない数の敵兵がいた。

おそらくは精鋭二百人の半分近くがここに集まっているのだろう。

「だが、私達も負けるわけにもいかない。このまま突っ切るぞ!!」

エクレールが啖呵を切って双剣を抜き、構えを取る。シンクも貸し与えられた武器、【神剣パラディオン】を構えなおす。

昼間の戦ではライが活躍してばかりだったので触れられていないが、このパラディオンは普段は指輪の姿をしており、持ち主が頭で思い描いた武器に自在に変化する力があるのだ。シンクは元の世界で

やっていた棒術という文字通り棒を武器として使う武術をやっていたので、パラディオンは棒状に変化させているのである。

「オレも負けてられねえな」

この様子を見ていたライは、剣を右手に、銃を左手に構え、臨戦態勢に入る。

「てめえら、恨みはねえし特に悪いこともしてねえけど、急ぎの用事があるんでな

まとめてブツ飛ばしてやる!!!」

ライが叫ぶのに合わせて、三人は敵軍に向かって駆け出した。

第8話 最強の騎士、見参！ Advent, sa  
murai & ninja

ミオン砦内では、激戦状態が続いている。

エクレールは両手に持った双剣による、手数を生かした攻撃で戦う。

シンクは棒に変化したパラディオンのリーチを生かした攻撃をする。棒は金属製で強度もあり、使い慣れているシンクにはそれを活かした防御も可能だ。

そしてライは、剣と銃を操る臨機応変な戦い方だ。銃はリコッタの改造により、輝力を弾丸の代わりにすることで弾切れの心配がない。そのため、連射モードで複数人の兵達をまとめて蹴散らせる。

そのうえ、元から得意だった剣術は、シンク達の近接戦と見比べてもレベルが高いことが伺える。飛び込んでは一閃を放ち、他の敵兵達の攻撃も咄嗟に回避する、ヒットアンドアウェイ戦法で確実に一人ずつ仕留める。

そこにリコッタとミルリーフの援護射撃も加わり、外回りの兵達がこちらに来る前に撃破され、中々順調だった。

だが、いつまでもそれが続くと言う訳にもいかなかった。

「ぶるうううあああああああ!!」

いきなり叫び声、それもかなり太い声が聞こえたと思ったらライ達を目がけて巨大鉄球が飛んできた。

「いい!?!」

「なにアレ!?!」

「マズイ、避ける!!」

ライもシンクも仰天するが、エクレールの叫びで我に返り、その場から退避する。

ドゴンツと大きな音を立てて鉄球は地面に激突した。打ち付けられた鉄球はその半分ほどが地面にめり込んでおり、深く食い込んでいるのが伺える。

あまりの破壊力に戦慄していると、攻撃を仕掛けてきた人物がこちらに近づいてきた。

「ほく、この俺の鉄球斧の一撃を避けるとは、やゝるではないか」

男は黒い甲冑を装備しており、身の丈は2メートル近くはある大男だ。そして手に持った武器は斧。よく見ると斧の柄に鎖が付いており、その鎖の先に先程飛ばした鉄球が繋がっていた。

「ねえエクレール、あの強そうな人だれ？」

「ゴドウィン・ドリユール將軍。ガウル殿下の忠臣で、異例の速さで將軍に昇進したという噂を聞いたことがある」

エクレールがシンクの質問に答える中、ライはゴドウィンを見てポーっとしていた。

「あの、ライさん？」

「…ああ！ 悪い」

シンクに呼びかけられたライは、そこで飛んでいた意識が戻ってくる。

その様子が気になったエクレールは、ライに何があったのか聞いてみる。

「將軍の姿を見てポーっとしていたようだが、何かあったのか？」

「いや、あのおっさんとよく似たのを知っていたから気になって…」

ちなみに、ライが言うおっさんとはレンドラーのことである。武器が斧で声も体もでかい、雰囲気もなんか似ているのだ。

そして、現れたのはゴドウィンだけではなかった。

「へえく、勇者だけや思ったらその兄ちゃんも来たんやな」

「さっきの雪辱、晴らさせてもらいましたようか」

「お前等、たしかジエノワーズとか言ってた…」

現れたのは、虎耳の少女とウサギ耳の少女、ジエノワーズの内の二人だ。

「そういうえば、まだ名乗ってなかったな。ウチはジョーヌ・クラフティ」

「私はベール・ファールトンです」

虎耳とウサギ耳はそれぞれ名前を名乗るのを聞いて、ライは「律儀

だな」と思った。

すると、一緒に自己紹介を聞いていたシンクはあることに気が付いた。

「あれ？ 確かもう一人いたはずだけど」

そう、ジェノワーズは三人組だったはずだが、もう一人の黒猫耳の少女がいなかった。

「ああ、ノワなら砲兵を抑えにいったわ」

「ついでに言えば、私達は本当ならもつと奥で待機してるはずですけど、被害が思ったより出たので急遽出てきちゃいました」

ジョーヌの一言を聞いて、ようやく気が付いた。そう、さつきから砲撃が止まったままなのだ。ワイヴァーンのブレスも止まっている辺り、リコッタだけでなくミルリーフも何らかの理由で動けなくなってしまったのかもしれない。

ライ達がガレットの将校クラス達に追い詰められている最中、ミルリーフ達も絶賛ピンチだった。

「ミルリーフ、ごめんであります……」

リコッタがガレットの兵士達に抑えられており、ミルリーフの目の前には残りのジェノワーズが対峙していた。

「おねえさん、姫様を攫おうとしてた……」

「一応自己紹介。ジェノワーズのセンター、ノワール・ヴィノカカオ。さつきは諜報部隊って名乗ったけど本当はガウ様の親衛隊だから、そこるところよろしく」

「わたしはミルリーフ。一応よろしく」

律儀に自己紹介をしてきたジェノワーズ最後の一人ノワール。ミルリーフもとりあえず、礼儀だと思っただけで自分の名を名乗る。

「さっそくだけど、リコッタは返してもらおうから」

「そう簡単には行かせない、リコもあなたも抑えさせてもらう」

ミルリーフは、早いところノワールを倒してリコッタを救出しよう、そうしないと砲撃を使えないし、ワイヴァーンを下手に使ったら

彼女に危害が加えられるかもしれない。

というわけで、ミルリーフVSノワールの戦いが勃発した。

「勇者とその坊主は我らが主、ガウル殿下のご指名だ。片方だけでもいいから広間まで来てもらおう！ 小娘の親衛隊長に用はない。降参するなら許してやるぞ？」

勝利者を気取ってエクレールに対して進言するゴドウィン。だが

：

「仕方ねえ。シンク、エクレール！」

何かを決心したライは、シンク達に大声で呼びかける。

「オレがこのおっさん抑えとくから、二人で親玉のそこに行ってくれ！」

「はあ!? お前、いきなり何を言ってるんだ！」

「そうだよ！ ライさん確かに強いけど、この状況じゃ無茶だよ！」

二人にはライの意図がわからなかった。

「オレとシンクのどっちかが行けばいいんだろ？ だったら実戦慣れしているオレが抑える方に回る方が確実だからな」

ライの言うことは尤もだ。だが、だからといって納得できると言うわけではないようだ。

「そんな、そういうのは僕個人としても納得できません！ だから僕がこの人を抑えます!!」

「いや、二人とも生き残ってガウル殿下の好きな方と戦っていただく方が礼儀として正しい。だから私がここを抑える！」

シンクもエクレールも自分がこの場を抑えると言って聞かない。だが、ライも引き下がらなかった。

「ここは年上の言うことを聞けって！ オレとしてはここで二人に潰れて欲しくねえんだよ!!」

「いいや、ここは年下が出しゃばる方が駄目ですって！ 僕が抑えますから!! エクレールも女の子なんだから、ここは僕に任せて！」

「おまえに足止めなんて難しい戦、出来るわけないだろ！ それにラ

イ、お前が生き残った方が勝率も上がるはずだろ、その辺りも考えろ!!」

そのまま口論に突入してしまった三人。ライも、シンクも、エクレールも自分が一人でゴドウィン等を食い止めると言ってる聞かない、しかもそれが延々と続く悪循環状態に入っていたのだ。

その一方で……

「あのく、おじ様……」

「ウチら、ほったらかしにされてもうたな……」

ゴドウィン達ガレット陣営の面々が完全に忘れ去られてた。

ゴドウインは何も言っていないが、だんだんと額に青筋が浮き上がっている様子から、忘れられたことについてかなり怒っていることが伺える。

そして、ついに限界を超えてしまった。

「うおらあああああつ！ ガキ共おお！ この土壇場で、楽しいやり取りしてんじゃねえええ!!!」

ブチギレたゴドウインは、そのまま怒声を上げながら鉄球を分投げる。そしてそれがライを目掛けて飛んでいた。

「やべえ!!」

ライは咄嗟にある行動をとる。なんと、いきなり剣を誰もいない方に投げ捨てたのだ。

だが……

「はああああー!」

——ドンッ——

「なにい!?!」

なんと、ライは両手を勢いよく前に突き出し、それで飛んできた鉄球を止めたのだ。

ゴドウインは思わず驚き、シンク達もジエノワーズをはじめとしたガレット軍の面々も口をあんどりと空けて驚いていた。

ちなみに、ライが鉄球を止められたのはストラという技によるものである。このストラは、自身の身体能力を上げる、生物の自然治癒力の向上、といった効果のある呼吸法（ようは気孔術のようなもの）で



ある。仲間の一人である龍人族の武術家セイロンからやり方を教わっていたので、このような芸当ができたのだ。

「お返しだああ!!」

ライは、そのまま受け止めた鉄球をゴドウィン目がけて投げ返す。このまま倒してしまおうと言う魂胆だった。

だが、そうそう上手くいくものではないようだ。

「だっしやああ!!」

ライが投げ返した鉄球は、割り込んできたジョーヌが自身の得物である巨大斧を叩きつけたことで地面に激突、そのままカウンターが終了してしまっただ。

「チツ」

「そうそう上手くはいかさへんで!」

舌打ちするライにジョーヌはそう啖呵を切る。

「どうやら、貴様を見くびっていたようだ。手を抜いていたとはいえ閣下を倒しただけはある。だが…」

「! ライさん、なんか苦しそうですけど…」

ゴドウィンの言ったことが気になり、シンクはライの方を見る。ライは息切れしており、先程に比べて披露しているのが一目で伺えた。

「ハア、なに、慣れないこととして、ハア、ちよつと疲れた、ハア、ただだ。大丈夫」

ライはもともとストラをあまり使っていないなかったこともあり、力加減の操作は上手くできていないようである。ストラは確かに自然治癒力や身体能力の向上が可能な技だが、その分の体力を消耗してしまうというデメリットがある。ライはゴドウィンのパワーのこともあり、咄嗟に強力なストラを使ってしまった、これによって一気に大量を消耗してしまっただ。

「こんな疲れ切った坊主を相手にしても、殿下は楽しくないだろう。まだひよつこな勇者の小僧と、見習いに毛が生えた程度の小娘の方が手ごたえがありそうなのでな、ここで坊主には退場してもらおう!」

そう言っゴドウィンは斧を持った右腕を振り上げる。確実にとどめを刺す気のようなだ。

(ヤベエ、避けられねえ!!)

「くたばれええええええええ!!」

そのままゴドウインは持ち上げた斧を、疲労で動けないままのライにめがけて振り降ろそうとする。

その瞬間…

—ガキンツ—

突如何かがゴドウインを目がけて飛んできた。ゴドウインは咄嗟にそれに気づき、ライへの攻撃を中断してそれを防ぐ。最終的にそれは弾かれ、砦の床に突き刺さった。

「あれは、大剣か?」

そう、飛んできたのはライ達の背丈くらいはある両刃の刃と、やたらと長い柄の大剣だった。これほど巨大な武器を投げたのが何者かとライもシンクも疑問に感じたが、エクレールは大剣に刻まれた紋章に見覚えがあったようで、それを見て言葉を漏らす。

「この刀は…」

(え? 刀?)

まあ、刀といえば片刃の剣のイメージがあるのでライ達の疑問も尤もだった。とりあえずフロニヤルドではこれが刀、と考えて思考を打ち切り、飛んできた方角を見る。

「遠間より失礼仕った!」

「アーンツ!」

すると、そこに立っていたのはライ達を遠巻きに見ていた縞合羽の人物だった。

すぐ隣に可愛らしい白い子犬を連れており、本人は盃を片手にたたずんでいる。

「おお、久しぶりでござるなエクレール。しばらく見ない内に大きくなっただ」

どうやら、エクレールのことを昔から知っているらしく、そこからその人物がビスコッティ陣営の味方であることが伺えた。

それとは別に、ライはあることを考えていた。

(ござる口調…女の侍? いや、イオスみたいにあれでも男か?)

以前、仲間の一人である、元侍の吟遊詩人シンゲンから侍の中にはござるという語尾を付けて話す者がいると聞いていたので、その人物が侍だと睨んでいたようだ。ちなみに、女の侍はシルターンでも珍しいが、ライは以前に無限回廊から迷い込んだ【転生の塔】というところの守護をしていた組織【白夜】のメンバーで、女侍のユヅキという人物と戦ったことがあった。そのため、ライはすぐに女の侍という考えを思いついたのだ。

その一方、エクレールは嬉しそうな表情をしていた。なんとというか、憧れの人物を目の前にしている、そんな感じである。

「ダルキアン卿！」

「え？」

「ダルキアンだと？」

「あの人が、昼間言ってた？」

どうやら、この侍口調の人物がエクレールが言っていたビスコッティ最強の騎士らしい。侍っぽいが騎士？という疑問がライとシンクの中に渦巻いていたが、ダルキアンはそのまま口を開く。

「そちらの勇者殿と斧將軍、あとその白髪の少年にはお初に御目にかかる」

ダルキアンはそのまま、勢いよく笠と縞合羽を脱ぎ捨てた。その下にはビスコッティ騎士団の制服のような意匠の服を着ている。そして、縞合羽が脱ぎ捨てられたことで体格がわかり、そこから女性だということをはつきりとわかった。

そして、ダルキアンは声高らかに名乗りを上げる。

「ビスコッティ騎士団自由騎士兼、隠密部隊頭領、ブリオツシュ・ダルキアン!!」

名乗りを上げたダルキアン（以下ブリオツシュ）は、その次に何か書類のようなものを広げながら口上を続ける。

「騎士団長ロラン殿からの要請により、助太刀に参った!!」

だが、敵も勝利がかかっているので必死だったようだ。ブリオツシュの後ろにある塔から、口上を続ける彼女に弓を射ようと準備をする兵の姿をシンクが見つける。そして、その矢が放たれてしまった。



そして…

「勝負(びい)ぎるよ」

花火が炸裂した直後にさわやかな笑顔で告げるのだった。

ブリオツシユがライ達と合流していたのと同時刻。

「やああ!!」

ミルリーフは振りかぶった両手に魔力を纏わせてノワールに殴り掛かる。

だが、ノワールはそれをいともたやすく避けてしまう。先程からこの調子であるため、ミルリーフは段々と消耗して行ってしまう。

ちなみに、その間に一般兵達が集まってきて、テテもプニムも倒されてしまっている。

(わたしだけじゃこの場を切り抜けられない。でも、ワイヴァーンを呼び戻しても他の召喚獣を呼んでもその前にリコツタが…)

「リコにもあなたにも悪いけど、ここでリタイアしてもらおう」

そして、ノワールは両手にナイフを持ち、ミルリーフに向かって駆け出す。

が…

『ぐわあ!!』

その時、何処からともなく輝力のできた手裏剣がリコツタを抑えている兵達を目がけて飛んでいく。

それによってリコツタを抑えていた数人の兵達を撃破、そのまま全員けものだまと化した。

「(今だ!) ワイヴァーン、フレアキャノン！」

「Gyu a a a a a a a a a a!!」

ミルリーフの呼びかけに応じてワイヴァーンがこちらに飛翔、そのまま火球をブレスをノワール及びガレット兵達にぶつ放す。

「回避!!」

『ぎゃああああああああああああああああ!!』

ノワールが回避指示を出して自身もその場を離れる。

だが、彼女以外の兵達がまとめてブレスを喰らってだま化した。

「今の攻撃は？」

ミルリーフがリコツタを捕えた兵達を倒したのが誰かと辺りを見回しているとき……

「リコ、大丈夫でござるか？　あと、その幼子もおかげで助かったでござる」

いきなり聞こえた声の方に、ミルリーフとリコツタだけでなく、ノワールも顔を向ける。そこにいたのは、ブリオツシユの付き人と思われる狐の耳と尻尾を生やした金髪の少女(?)だった。

背丈は高い方だが、見た目から察した年齢は少女。なのになぜ(?)かということ……

(お、おっぱいおっきい。ミントお姉ちゃんくらいあるかも……)

ミルリーフの思った通り、バストサイズがすごい大ききだったからだ。それはもう、見た目十代の女の子には大きすぎるほど。ミルリーフの知る範囲では、いつもライが野菜を提供してもらっている召喚師の女性ミント、町にある古い屋の店主シャオメイの真の姿であるメイメイぐらいだろう。

「ユツキー!!　来てくれたでありますか!?!」

「騎士団長からの要請があったでござるよ。それに大事な友人であるリコの危機でござるからな」

ユツキーと呼ばれた彼女は、リコツタとは友人同士のようなのである。

「まさか、ユキまで駆けつけて来るなんて思わなかった。ということ  
は親方様も?…」

「その通りでござるよノワ」

「マズイ、報告に行かないと……」

この会話から察するに、ノワールとも面識があるらしいことが伺える。

そして、その彼女がいることでブリオツシユもこちらに向かってい  
ると言うのを察して、ノワールはすぐにその場から去っていく。

そのあと、ミルリーフは少女（？）に話しかけた。

「おねえさん、わたしたちの味方なの？」

「そうでござるよ。拙者はビスコッティ共和国隠密部隊筆頭、ユキカゼ・パネトーネでござる」

名前を名乗った後、ユキカゼはひだまりのような笑顔で「にんにん」と口にしたのだった。

だが、それとは別にミルリーフはあることを考えている。

（この人、なんとなくだけどリコツタとか姫様とは違う。なんていうか、別の生き物？）

ミルリーフは、竜特有の勘によるものか、至竜特有の魔力探知力によるものなのか、ユキカゼがミルヒヤリコツタとは違う種族ではないかと察していた。

だが、悪魔のような邪悪さは感じなかったので、味方であると結論付ける。

その後、ミルリーフも自己紹介をして、三人でライ達の下へ駆けつけるのだった。

第9話 それぞれの対決 Heroes Atta  
ck

ブリオツシユが名乗りを上げた直後、それに合わせるかのように火花が打ち上げられた。

いや、おそらく合わせて打ち上げられたのだろう。この局面でガレットがそれを行うはずもないことから、ビスコッティ側しかありえないのだ。

「花火だ?! 誰だ、こんなものを上げたのは!!」

岩の周辺で部下を率いていた、警備隊長らしき人物が声を張り上げて怒鳴るが……

直後、警備隊員が全員まとめてけものだまへと変化していく。そして、その後ろには彼らを倒したと思われる人物が立っている。

ユキカゼだ。

「拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊……」

「おのれー!! いつの間にもー!!」

「うえ…最後まで言わせてほしいでござる」

名乗りを途中で邪魔されたユキカゼは、自分に向かって突撃してきた隊長に向かって、構えを取る。

「紋章拳」

ユキカゼの紋章が手の甲に浮き上がる。直後、彼女は物凄いスピードで走りだし、敵隊長の懐に一瞬で飛び込んだ。

「ユキカゼ式体術、狐流ー!」

輝力で強化された拳は、隊長の甲冑を砕き、大ダメージを与える。

「蓮華昇!!」

それだけでは終わらず、拳と同様に強化された蹴りを放つ。その威力は凄まじく、蹴り上げられた隊長は天高く打ち上げられてしまう。

隊長が限界まで空に打ち上げられたかと思うと、ユキカゼは同じ高



さまで跳びあがり、そのまま懐から小太刀を取り出す。

「斬!!」

そしてその小太刀で斬撃を放って止めを刺し、そのまま隊長はけものだまへと変わる。

とりあえず、この隊長に何か言葉を送るとしたら、「フロニヤルドに居てよかったね」が適切だろう。

「ビスコツティ騎士団隠密部隊筆頭、ユキカゼ・パネトーネにござる」

最後に物凄くいい笑顔でニン、と言うユキカゼ。

「ユツキー! 花火と砲弾、ゲットして来たでありますよー!!」

「ナイスでござる、リコ!」

直後に、救出されたリコツタとミルリーフが麻袋いっぱいの花火と砲弾を持ってユキカゼのところへ駆けて行く。

ちなみに、もう直接戦場に乗り込むことになったのでワイヴァーンは送還している。

すると、ミルリーフがユキカゼの方に駆け寄ってきた。

「ユツキー、今の必殺技すごかつこよかったよ!」

「ミルリーフ、ありがとうでござる」

凄くキラキラした笑顔でミルリーフがユキカゼに言うと、当のユキカゼ本人も思わずお礼を言う。

ちなみに彼女、物凄く人当たりがいいこともあつてかミルリーフもすぐに仲良くなり、思わず愛称で呼んでいるほどである。

ちなみに、その時の会話の最中に、リコツタのことも愛称のリコで呼ぶことを了承されたのだった。

「じゃあ、早速エクレ達の援護に向かうでござるよ」

「了解(であります)、ユツキー!」

そして、ユキカゼがミルリーフとリコツタを同時に負ぶる。二人とも体が小さいのでユキカゼもまとめて負ぶることが出来たようだ。

足に輝力を込め始めると、足元に大きな紋章が展開、さらにユキカゼがジャンプすると、物凄いスピードで高く跳びあがっていった。

「お、やってるでござるな」

ユキカゼが砦内を見下ろすと、兵達が一斉に移動を始めている様子

がよくわかった。おそらく、ビスコッティ最強であるブリオツシユが現れたことから、彼女を物量戦で倒そうと待機兵達を集めてる最中なのだろう。

「リコ、ユツキー。さっき話したアレ、さっそくやつちやおつか」

「了解であります。応援の一発をドカンといくでありますよ！」

「でござるー！」

ミルリーフが何かを提案すると、二人そろってそれを了承すると、一誠に集めた花火と砲弾をばら撒く。そして、それと同時にミルリーフがサモナイト石に魔力を込め始めた。

リコッタとユキカゼには繚乱大百花という合体技があり、これには大量の花火と砲弾を用いるのだ。だが、今回はミルリーフも加えて更にアップグレードした技にしようと言う案らしい。

「リコ&ユツキー式砲術」

「+ミルリーフのペンタ君召喚」

リコッタとユキカゼが手の甲に紋章を発動したのと同時に、大量のペンタ君が召喚される。ペンタ君は実は不定形生物（ようはスライムみたいなもの）なので、分裂すれば数も増やせるのだ。

これによって、現在大量の爆発物がミオン砦上空にあるのだが……

嫌な予感しかないのは気のせいではなからう。

「「爆裂、大百花く!!!」」

リコッタとユキカゼが拳を合わせ、さらにその上にミルリーフが手を置く（ミルリーフは紋章が無いので形だけ）。

直後、輝力が周波のような感じで飛び散った花火に行きわたり、全ての花火と砲弾の導火線に火がつく。

そして、それがペンタ君と一緒に砦内に降り注ぎ……。

—ドツツツツカー————

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!?』

花火や砲弾が一斉に爆発、さらにそれがペンタ君にも誘爆して、本来の繚乱大百花よりも規模の大きな爆発となる。

それによってガレット兵達は逃げまどい、だま化し、もう阿鼻叫喚としか言いようのない大惨事となっていた。

爆発の規模は凄まじく、ゴドウィン等だけでなくライ達まで驚いていた。

驚きつつもこの状況を利用して移動を始めてる辺り、結構上等だ。

「エクレ、これ一体何事?!」

「おそらく、リコとユキの合体技だが、こんな強力だったか?」

シンクが大慌てする中、エクレールは冷静に状況を分析する。友人達の合体技だということには気づいたようだが、同時に様子が可笑しいとも思ったようだ。

そして、その隣でライが冷や汗をかきまくっている。

(やっぱ、ミルリーフと一緒に何かやらかしたのか? このやり過ぎ感、絶対そうだ)

流星親子とでも言おうか、ライはミルリーフと一緒に大暴れしたのでろうと分析していた。

三人がちょうどこちらへと走って来たセルクルに飛び乗って親玉のガウルの下へ急ごうとする。すると、エクレールがブリオツシュに向かって叫んだ。

「ダルキアン卿! エクレール・マルティノツジです!!」

「応!」

敵兵達を倒しつつ返事をするブリオツシュ。もともと強いうえにそんな余裕がある辺り、最強の名は伊達ではないようだ。

「我々はこの戦に決着をつけるために、中に突入します!」

「存分に務めてくるでござるよ。ここは拙者とユキカゼに…」

そのままもう一度裂空一文字の準備をする。

そしてもう一度放つと、それによって目の前の兵達が一斉に倒されていく。

「任せるでござるよ」

そしてゴドウインに刀の切っ先を向けながらいい笑顔で言うのだった。

「ジョー、ベル。ここに親方様が…」

丁度その時、ノワールが駆け付けてきた。ブリオツシユがこちらに向かっているかも知れないと報告に来たようだが…

「…もう遅かったみたい」

「うん、そうなんよ」

「ノワ、遅いです」

既に到着しているため無駄足だったようだ。だが、すぐに無駄足でもなくなったようである。

「お前らああ!!」

いきなりゴドウインがジェノワーズの面々に大声で呼びかける。

怒鳴るような口調だったので三人揃って思わずビクツとする。

「ダルキアンは俺が相手をする。お前等は親衛隊長を抑えろ!!」

「…は、はい…」

ブリオツシユの介入によって圧倒的に不利になったにもかかわらず、ゴドウインの目からは闘志は消えていなかった。そんな彼の指示に従って、ライ達の後を追うジェノワーズ。

やはりすんなりとは通してはくれないようだ。

その頃、ミオン砦に向かって全力疾走するセルクルの姿があった。そして、その背に乗っているのは……

「ガウルめ。未遂に終わったとはいえ、誘拐なんぞ勝手にしおって…」ガレットの現領主であるレオだった。どうやらガウルがミルヒを誘拐しようとしていたことは彼女にとって不本意であったようで、それを実行しようとしていた彼に折檻をしようとしているようだ。

「へえ。あの女、強い怒りと、それ以上にデカイ不安があるみたいだな。こいつは丁度いいぜ」

その一方、上空でその存在を悟られないようにしながら飛ぶ男がおり、そいつはレオの姿を見ながらそう漏らしている。

それはもう、凄まじく邪悪な笑みで。

シンクが砦の内部に乗り込むと、一人の人物がいた。年はシンクと大体同じ、レオとよく似た銀髪が特徴であることから、彼がガレットの王子ガウルのようなだ。

「来たのは勇者の方か。俺はガレットの…」

だが、シンクは急いでいるのでガウルの名乗りをいちいち聞いている余裕がないようで、いきなり攻撃を仕掛けようと駆けだす。

「聞く耳、ねえってか！」

その一方、ガウルは名乗りを中断されたにもかかわらず、嫌な顔一つせずに壁にかけてあった武器を手に取り、近くに停めてた自身のセルクルに跨って臨戦態勢に入る。

そして、シンクの攻撃を防いで、そのまま鏢迫り合いに持ち込む。

「ちよつと急ぎの用事があるんでね、早いとこ終わらせてもらおうよ!!」「いいぜ、出来るもんならなあ!!」

ついに勇者VS王子の一騎打ちが始まった。

一方、シンク達が一騎打ちをしている部屋の手前では、ライとエクレールがジェノワーズと対峙していた。

シンクが奥へ進み、ライ達もそれに続こうとしたらベールの弓撃で

妨害されてしまったので、彼女たちを倒してから先に進むことにしたのだった。

「お前、さつき抜けてたっていう…」

「はじめまして、ノワール・ヴィノカカオです。さつきはあなたの娘とちよつと戦つてました」

一人だけライと会つていなかったノワールは、律儀にも自己紹介をする。

「ガウ様は一騎打ちを所望つて、姫様誘拐しようとしたときに言うたはずやで」

「というわけで、お二人はその間私たちジェノワーズのお相手をしてもらいます」

「エクレとは久しぶりにやりたかつたから、そこのところよろしく」

ジェノワーズの面々がそれぞれの得物を構えながら口にする。ノワールは投げナイフ、ジョーヌは船の錨のような巨大斧、ベールは弓、とそれぞれの戦闘能力が形になったような武器だ。

「エクレール、あのノワールつてやつはお前をご所望みたいだな。残りの二人はオレがやるから、行つて来い」

「な!? おい、さつきやたらと息切れしてたが大丈夫なのか!」

エクレールは、さつきライがストラの加減を誤つて体力を必要以上に消耗してしまったことを懸念している。

「なに、ちよつとそれに効く木の実を持ってたからかじつて回復した」  
このライが言う木の実とは、キツカの実というリンバウムではさほど珍しくないが、回復薬として重宝される果実のことである。実は、ライの腰に下げているバッグにいくつつかの回復薬が入っており、キツカの実もそこに入っていたのだ。

「そうだとしてもまだ回復しきつてないだろ! そんな状態で二対一などとふざけてるのか!」

「いや、オレは大真面目だ」

エクレールが忠告するも、ライは効く耳を持たない。

「だからいけ「パー!」って、ミルリーフ!」

かと思つていたら、こちらに向かつてミルリーフが駆けてくる。

「ミルリーフ、リコッタ達の手伝いはどうしたんだ!？」

「もう親方様とユツキーがほとんどやつつけちゃったから、パパの方を手伝おうと思って」

まあ、ブリオツシユ達に任せればあの場の戦況は問題ないだろう。

「……実は、手伝ってくれたらかなり助かる。ありがとうな」

「まあ、この場は一人でも戦力がある方がいい。手伝ってくれ」

「オツケー、まかせて!」

ということ、三対三になってどうにか対等に戦えそう。

ライ達もジエノワーズも構えを取り、戦闘準備万端である。

「じゃあ、手加減なしでブツ飛ばさせてもらうぜ!」

「そこはライと同感だ。覚悟しろ!」

「わたしもがんばっちゃうぞ!」

「…やれるものならやってみて」

「そう簡単に勝ち譲らへんで!!」

「覚悟しちやってくださいね」

ベールがそのまま矢を放ち、ノワールとジョーヌも駆け出す。それに合わせてライ達も駆け出した。

(姫様。ちゃんと約束の時間にコンサート、行くから!!)

同時刻、シンクはガウルと戦いながらミルヒとの約束を守り通すことを思う。果たして、決着はどうなるか？

くオマケく

「ところで、親方様とユツキーって誰だ?」

「前者はダルキアン卿の敬称、後者はユキカゼの愛称だ。ちなみに、私はユキと呼んでいる」

構えを取りつつ、ライはエクレールとそんなやり取りをしていた。

まあ、二人の敬称と愛称もいきなり聞いたので、わからないのも当然だろう。

第10話 邪悪の降臨 An intruder  
is Demon

シンクとガウルの一騎打ちが始まった。シンクは棒形態のパラ  
ディオーン、ガウルは槍で戦う。

お互いセルクルに乗りながら武器で打ち合い、距離を取ってはまた  
接近して打ち合い、その繰り返しとなっていた。

そして、これをいくらか繰り返していると：

バキツ、という音を立ててお互いの武器が折れてしまい、真ん中か  
らきれいに真っ二つとなった。

「いいねえ。十分に客を呼べる腕前だな」

満足そうな笑みでシンクのことを褒めるガウル。そのあと、折れた  
槍を捨ててセルクルから降りた。

「だが、俺らの戦は見せてなんぼの代物だ。もうちよつと派手な技が  
欲しい」

そう言つて、自身の乗っていたセルクルを離れさせる。

今度はガウルが構えを取り、直後に紋章が彼の背後に展開される。

「強さと華麗さ、豪快さ。その辺が騎士と戦士の必須事項。そして、そ  
ののための力が…」

直後、ガウルの背後の紋章は色鮮やかになる。

「この輝力だ！」

叫ぶと同時に、ガウルの四肢に輝力が纏わりつき、雷を纏った爪へ  
と変化する。

これが、ガウルの真の戦闘形態。その名も：

「輝力解放、獅子王爪牙!!」

獅子王爪牙を発動したガウルは、シンクに飛び掛かる。

シンクは折れたパラディオーンを束ねて、それで攻撃を防ごうとす  
る。

「おらああー！」

まず、ガウルは飛び掛かった勢いでシンクに蹴りの一撃をかます。



防いだおかげでダメージは少ないが、乗っていたセルクルから落とされてしまう。

「どりやりやりやりやりやりやりや!!」

ガウルは更に連続パンチを繰り返して出る。あまりにも速すぎる攻撃スピードに、シンクは防戦一方となってしまった。

そして、ガウルはここから一気に止めを刺しにかかって来た。

「天雷ー!」

雷を纏った輝力弾を放ち、シンクを空中に吹き飛ばす。

ガウルは、今の攻撃の反動で後ろに吹き飛ばすが、足に装着された爪でブレーキを掛ける。そして、そのままシンクの吹き飛ばされた場所まで跳びあがる。

勢い余って通り過ぎてしまったようだが、その擦れ違い際に攻撃をする。始めからこれが狙いだったようだ。

天井付近まで跳びあがったガウルは、両手を天井に付き、そのまま勢いよく押して、その反動でシンクに向かって飛び蹴りを決める。

「爆砕陣!!」

そのままシンクは床に思いつき叩き付けられ、ガウルはそのままシンクの上に乗る、サーフィンの要領でそのまま床に彼をこすりつけながら移動する。

途中、何か違和感を感じたがその直後に壁に激突、辺りに土煙が舞う。

土煙が晴れると、頭を押さえて悶絶するガウルの姿があった。どうやら、勢い余って頭を打ち付けたようだ。

痛みが引いたのか、立ち上がったガウルは鼻血を垂らしつつも「うははは!」と笑い声をあげる。

「どうよ! 獅子王爪牙からの天雷爆砕陣!! 街じゃ噂の輝力系必殺技だ」

誰もいない中で、ガウルは今の技の簡単な説明を大声でする。  
「終わったな」

ガウルは勝利の余韻に浸りながら、指で顎を抑えながら格好をつけて言う。

直後、すぐ隣の壁が吹き飛んだ。

「勝手に終わらすな!!」

土煙が晴れると、そこにはシンクが立っていた。彼には目立った外傷も見当たらず、ピンピンしている。

「あ、あれえ!?! いや、今のは普通に終わりだろ!?! な、何で立ってんだよ、てめえ!?! 化け物か? 化け物なのか!?!」

ガウルは失礼にも、シンクを勝手に化け物呼ばわりしながら彼を観察している。

すると、あるものに目を付ける。

それは、パラデイオンの両端部分だった。その装飾がいくらか凹んでいる。

そこから導き出された結論は

・飛び蹴りの一撃を折れて二本になったパラデイオンを束ねて防ぐ。

・床にたたきつけられた際、後頭部に交差させて直接頭が床にたたきつけられるのを防ぐ。

というものだ。

(コイツ、あの一瞬でそんな防御を…)

ガウルはシンクの咄嗟に取った防御手段に感心する。ここから、シンクの戦闘センスが高いことが伺えたからだ。

しかし…

いきなりシンクの頭部から血しぶきが噴き出す。

「やっぱり効いてた!?!」

無傷に見えてしつかり傷を負っていたようだ。シンクは突然の流血に驚き、慌てて辺りを駆けずり回る。

「バカ! テメエ、落ち着け!」

とりあえず、ガウルはシンクを大人しくさせようと

「異世界人のお前はけものだまになれねえんだから、あんま無茶な耐え方したら…」

ガウルがシンクに注意していると、シンクはいきなり首を勢いよく振って自身についた血を払う。

「イヤ、余計な心配はノーサンキュー」

血を払い終わったシンクは、ガウルと距離を取った後、彼に何かを言う。

「なんとなくわかったけど、輝力の使い方ってこんな感じ！」

シンクはガウルの獅子王爪牙を目の当たりにして何かひらめいたようで、早速紋章を展開する。

バトンの要領で折れたパラディオンを振り回しながら輝力を折れた先に集めていく。

すると、そこから刃が生え、二本の短槍へと変化した。見様見真似でこのような技が出来た辺り、シンクのセンスは相当の物のようだ。

「姫様とコンサートの約束があるから、急いで終わらせてもらおうよ!!」

「……へ？ コンサート?!!」

シンクの今の発言を聞いたガウルは、一瞬困惑する。

だが、シンクは早く決着を付けようとしてたためそれに気づかず、すぐに攻撃を仕掛けるのだった。

一方こちらは、ライ達の戦闘の様子。

「はああ!!」

「甘い!!」

ノワールが数本のナイフを投げつけてくるが、エクレールは紋章剣を放ち、飛んできたナイフをまとめて落していく。

「やっぱり、エクレは強いね」

「ノワール、貴様に褒められても嬉しくないわ!」

「だっしやあ!!」

ジョーヌがライを目がけて自身の武器を振り下ろす。

ジョーヌは自身の体格に合わない巨大な武器を軽々と振り回すパワーファイターで、戦闘能力は高いようだ。

「よつとー！」

だが、ライは軽やかなステップでジョーヌの一撃を避けた。命懸けの戦いを繰り返してきたライは危機管理能力などは鍛えられており、相手に最も隙が出来るタイミングで避けることくらい造作もなかった。

そして、その時出来た隙に攻撃してジョーヌを倒そうとする。

「ボールー！」

「はあい」

その時、ジョーヌの呼びかけに間延びした返事で答えたボールが、ライを目がけて弓撃を放つ。紋章術によって放たれた矢はビーム兵器のような攻撃となってライに迫ってくる。

「ピギャアアー！」

だが、ミルリーフが竜形態で飛び出してブレス攻撃でそれを相殺する。

「ナイスだ、ミルリーフー！」

ボールの攻撃が不発に終わったことで、チャンスだと言わんばかりに標的を変更するライ。

咄嗟に駆け出し、剣を右手から左手に持ち替えて、代わりに右手に銃を持つ。そしてボールに向かって走りだした。

「オラア!! ちい、ちっこいだけにすばしっこいな」

ジョーヌは割り込んできたミルリーフを攻撃するが、的が小さいうえに動きも速いので中々攻撃が当たらなかった。

「やく、来ないでくださいー!!」

一方、接近を許してしまったボールは若干錯乱気味になりつつも再び弓を放つ。

「軌道が丸わかりだー！」

しかし、慌てながら放たれたボールの矢はライの言う通り軌道が丸わかり、彼にとっては避けることも造作なかった。

「ボールんところには行かさへんで!!」

すると、ジョーヌはミルリーフを後回しにして、ライの突撃を阻止しようとする。ジョーヌは、ライを撃退しようとする斧を振り上げて飛び

掛かってきた。

「輝力充填！」

すると、ライが右手に持った銃に輝力をため込み始めた。リコッタは輝力を込めた量で威力が調節可能、と言っていたので試してみた。自身の手握り拳より一回りほど大きい輝力の塊が銃の先端に生成された。先程連射モードで試したら、実弾と同じサイズでそれと同等の威力になったのだ。これで撃つたらかなりの威力が期待できそうである。

ちなみに、その間にベールの矢がもう一本飛んできたが、これも造作もなく避けてしまうのだった。

「これでも喰らえ!!」

ライは咄嗟に後ろ振り返り、ジョーヌの武器に狙いを定めながらバックステップで跳ぶ。

そして発射した。

発射された時の反動で勢いよくライは後ろ（ベールの居る方向）へ吹き飛ぶ。そして、発射された輝力弾は真っ直ぐに飛んでいき、当初の狙い通りジョーヌの武器に命中した。

すると、バゴンツという音を立てて武器は木端微塵になるのだった。

「えー!! そんなのアリですかー!!」

反動を活かして飛んできたライを見て、ベールは絶叫する。迎え撃とうと矢に手を掛けようとしたが、既に遅かった。

「遅え!!」

ライはすぐに方向転換、銃を捨てて剣を右手に持ち帰る。そして、ベールのすぐ目の前に着地して彼女の弓を叩き切った。

「悪い」

「きやあ!?!」

最後に、勢いよく回し蹴りを放ってベールを吹っ飛ばす。けものだまにはなっていないが、ダメージが大きい&武器が破損したので、敗北は確定だろう。

「ちい、よくもベールを!!」

ジョーヌは武器を壊されつつも、ボールの敵を討とうと拳を構えながらライに向かって走ろうとする。

「ピギィ!!」

「あイタ!」

だが、そこにミルリーフが飛び掛かり、ジョーヌの足に噛みついた。突然の攻撃による痛みと驚きでジョーヌはバランスを崩してその場に倒れんだ。

その隙を逃さなかったミルリーフは、咄嗟に人型形態になり、うつぶせ状態のジョーヌに馬乗りする。

「今のうちに…」

ミルリーフは、早いところジョーヌを倒してしまおうと、両手の拳に魔力を込め始めた。

そして…

「おりやりやりやりやりやりやりやりや!!」

「痛たたたたたたたたたたたたたたた!!」

ミルリーフは両手でひたすらジョーヌの頭をポカポカと叩きまくる。傍から見たらかわいいが、魔力を込めてやっているので結構痛い。

2, 3分ほどそれが続いて……

「うわあ…」

「…やりすぎちゃった?」

ジョーヌはだま化したうえにタンコブを大量に作って失神していた。

ここまでやられると、敵ながらかわいそうにも見えるものである。「まあ、それは置いといて…エクレール、こっちは終わったぞ! 手伝おうか?」

とりあえず、ライははまだ戦闘中のエクレールの手伝いをしようと、彼女に声をかける。

「な!? もう片付いたのか………お前達は休んでいる。ノワールは私が倒す!!」

一瞬間があつたが、負けず嫌いなエクレールは結局一人でノワール

を倒すことにする。

ライ達は、とりあえず彼女の言葉通り休むことにした。

一方、ブリオツシユの方はというと……

ガレットの兵達は全員がだま化しており、残りはゴドウインのみ。劣勢に立たされているだけあってゴドウインは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

一方のブリオツシユは、あの大勢の敵と戦ったにも拘らず、息切れ一つせずに余裕そうであった。

「親方様ー、大変でございます!!」

突然、ユキカゼが慌てた様子でブリオツシユへと報告をしてきた。

「敵、増援が参ります!!」

「数は？」

増援の報告だったので、ブリオツシユは早速敵戦力の確認を取り、それにリコツタが答える。

「それが、一騎のみなのであります」

リコツタが望遠鏡で確認を取ると、セルクル一頭分の陰しか見当たらない。

そしてそれに乗っていたのは……

「レオ姫様が一騎だけで突撃してくるのであります」

「どうやら、先程出撃したレオがちょうど到着したようだ。」

「正門、開けええええ!!」

レオが門の管理をしていた兵達に指示を出すと、彼らは早速門を開け、砦内に彼女を入れた。

レオが到着するなり、ゴドウインは跪く。彼も一国に仕える騎士なので、自国の君主への礼儀は完璧なようだ。

「これはレオ姫、ご無沙汰でござる」

レオはブリオツシユのすぐ傍まで接近、当のブリオツシユも彼女への挨拶を交わす。

「久しいの、ダルキアン。だが、姫と呼ぶな。今は領主じゃ」  
「これは失礼を」

この状況でも姫と呼ぶな、だけは欠かさないレオ。どうしても譲れないこだわりか？

「そこをどけ、ダルキアン。儂はガウルに話がある」

レオは颯爽とドーマから飛び降り、ブリオツシユに言い放つ。

「申し訳ございませぬ。ここは戦場、そして拙者は若者達の殿をしておりますので…」

「押して、通れと?」

「御意に」

ブリオツシユの言葉を聞いたレオは、斧を構えて戦闘態勢を取る。

「儂を以前の儂と思うな。もはや貴様が相手でも、引けを取らぬ!!」

自信満々にそう言ってレオは、紋章を展開する。こちらは準備万端のようだ。

「お相手仕るでござる」

ブリオツシユも刀の切っ先を向けながら紋章を展開する。

そして、お互いに駆け出し、武器を振り降ろそうとする。

しかし……

「があ!?!」

「な、なんじゃ!?!」

いきなり、信じられないことが起こった。

なんと、レオの背中から青白い色の腕が生え、それがブリオツシユの首元をつかんできたのだ。当のレオ本人も驚いている辺り、彼女の技によるものではないようだ。

今度はその腕が、掴んでいたブリオツシユを勢いよく投げ飛ばす。

「ぐああ!?!」



投げ飛ばされたブリオツシユは砦内の壁に激しく激突、着ていた服インナーを残して、あとは全てはじけ飛んだ。

「こ、これはいつ…」

―バキッ―

「がああ!?!」

驚くレオの言葉を遮るかのように、腕は彼女を殴りつける。

レオが倒れた隙を窺ったかのように、もう一本腕が生えてきた。

「へへ、中々いい感情だったぜ。おかげで力が湧いてきた」

何処からか聞いたこともない男の声が聞こえたかと思うと、レオの背中から腕の主と思われる人物の頭が生えてきた。

声を発したのはこの男のようだ。

現在、レオの背中から青白い肌に蝙蝠の翼を生やした無気味な男の上半身が這い出してくる、というグロテスクな光景が出来上がり、傍で見っていた者全員が戦慄している。

「おー、全員ビククリしてやがるな。今出て行くから待つてな」

そういうと今度は、底なし沼から抜け出すように片足が跳び出し、引つ張り出すように残りの足も抜ける。

完全にレオの体から、男は分離した。

「最初はメイトルパかと思ったが、建物の造りからして違うみてえだな。とりあえず、ごきげんよう、未知の異世界のみなさん、つてどこか?」

「貴様あ、何者だああ!! 閣下に何をしたああ!!」

現れた男に怒鳴り付けるゴドウィン。自国の君主の体内からいきなり出現したのだ、中にいる間に何かをされていてもおかしくはなかった。

「ん? まあ、質問位いいか。何したかって言うと、さっきここに来る途中だったこの女を見かけて、その時に憑りついて負の感情を喰らってただけだ。別に他は何もやってねえぜ」

「か、感情を喰らうだど?」

いきなりわけのわからないことを言われるゴドウィン。すると、男

は律儀に説明をした。

「憤怒に憎悪、悲哀に嫉妬に恐怖、そんな感情を取り込んで、俺は力を高めんのさ。あと、名前だが……」

男は目つきを鋭くし、口角を高くして邪悪そうな笑みを作り、名乗りを上げた。

「俺の名はデイガルド。霊界サプレスの悪魔さ」

## 第11話 暴虐の悪魔 The Tyrant

突如、レオの体から這い出してきた、悪魔デイガルド。悪魔という聞いたこともない種族の出現に皆の動揺が走る。

「ユツキー、あれ何でありますか!?!」  
「魔物だとも思ったのでござるが、人型で喋る個体は聞いたことがないから違うかもしれないでござる」

魔物、エクレールがライ達にフロニヤルドの基礎知識をレクチャーした時に名が出てきた。フロニヤルドで死者が出た戦いは、主にこの魔物との戦いによるものであることから、邪悪（もしくは危険）な存在であることが推測される。

ユキカゼは最初、デイガルドの体から漂う禍々しい雰囲気から彼を魔物だと推測したらしい。

「貴様、儂に憑りついて感情を喰らったと聞いたが、悪魔とは何じゃ？ 何故儂を選んだ？ そして、目的は何じゃ？」

「おいおい、いきなり質問攻めか？ まあ、言っても減るもんじゃねえし、構わねえか」

立ち上がってレオがデイガルドに対していきなり質問攻めをする。デイガルドの方は特に問題なさそうに質問に答えることにするが…

「お前等、ここに違う世界が存在しているって聞いて信じるか？」  
いきなり別の質問を繰り返してきた。

「いきなり何を…」

「とりあえずこの問いに答えろ。説明するためにも必要なことだ」

「…まあ、異世界から勇者を召喚する手段があるから信じるも何も常識じゃ」

「へ、なら話は早い」

レオはフロニヤルドでの異世界の見方について話すと、デイガルドは早速質問に答え始める。

「俺の元いた世界の名は、さっき言った通り霊界サプレス。実体を持たない精神生命体の住む世界で、人の魂の輝きを育て慈しむ天使と、人の感情を喰らって力の糧にする悪魔の二種族が代表的だ。そして、

俺は後者の悪魔に該当するってわけだ」

自身の出身世界と種族の特性を答え、二つ目の質問に移る。

「お前を選んだ理由だが、適当に空飛んでた時にお前を見かけた。そんな時に糧になりそうな感情を強く感じたのが理由だ」

デイガルドはレオを指差しながら話す。そして更に説明を続けた。

「大体の悪魔は憎しみとか妬みの感情を好んで喰らうんだが、俺は偏食家だな。怒りとか恐れ、あとそれ以上に不安の感情が好きなんだよ。で、さつきも言った通りお前には怒りとデカイ不安を感じ取ったから憑りつかせて貰った」

そして、最後の質問の答えを語り出す。その時、先程名乗った時のような邪悪な笑みを再び浮かべる。

「最後に俺の目的だが、

殺戮と侵略だ」

その時、デイガルドの纏っていた狂気じみたオーラが場にいた強まり、場にいた全員の背筋が凍るような感觸がした。

「もともと、俺はラインバウムって世界の侵略を企んでいたんだが、ラインバウムは結界が張られているから外部から任意に入ることが出来ない。どうするかと思ったその矢先に召喚獣として呼ばれたんだが、その時の召喚師がいわゆる初心者でな、初めての召喚に成功したらしくて浮かれてやがった」

その後、デイガルドの口から出た言葉はフロニヤルドの住人たちにとっては恐ろしいものだった。

「その隙を窺って、そいつをぶつ殺して召喚術の知識を奪ったのさ」

殺す。デイガルドははつきりとそう言った。

「殺した……じゃと？」

「知識を奪った？ どうやってだ？」

レオもゴドウィンも、口には出していないがユキカゼ達もデイガル

ドの言葉に動揺を隠せなかった。そして同時に、知識を奪ったと言うことに疑問を感じる。

「一部の悪魔の間では、知識は血液に溶け込んでいるとされていてな。その血を一滴残らず飲み尽くせばその知識を得られて、血の知識で血識っていうらしい。俺もそれに肖ってその召喚師の血識を根こそぎ奪って召喚術を得たって訳だ」

人を殺して、その相手の血を飲み尽くす。フロニヤルドではフロニヤルの特性によって故意に人の命を奪うということは皆無、それによって住民達も温厚な種族となっているため、デイガルドの発言に皆はかつてない戦慄を覚えるのだった。

「で、早速召喚術を試そうと思ったら、間違った知識が混ざっていた所為で術が暴発しちまって、気が付いたらこの世界に居たって訳だ。多分、俺が召喚の門に飲まれちまったんだろ」

召喚術の暴発、デイガルドはそれによってフロニヤルドに来たらしい。

「それから今日までの三日間、適当な森に隠れながらこの世界の観察をした。いきなり出てきたら騒がれて捕まっちゃうから集落には行けなかったが、付近を通る住人や土地にあるマナってエネルギーを調べた結果、ここに飛ばされたのは嬉しい誤算だと解ったのさ」

そこからデイガルドは、話し方が嬉々としたものへと変わっていき。

「住人は負の感情が少ないから俺の力の糧にはなりそうにないが、それはこれから徐々に増やしていけばいい。マナは多ければ多いほどその世界の大地を豊かにするんだが調べた結果、この世界はリインバウム以上にマナが多いことが分かったのさ。なんか、マナの塊がそのまま生物になったみたいなのがいるらしいから、それが主な原因と見た」

「マナ？ 大地が豊かというと、土地神でござるか？」

降りてきたユキカゼが自身の推測を口にする。土地神は土地を豊かにする生物であるが、デイガルドはそれをマナの塊が生物化した物だと思っただけらしい。

そして、再びデイガルドが口を開く。

「だから、俺は急遽この世界の侵略を考えた。ここで暴れて、住人どもの不安や恐怖を煽って力を高め、悪魔王クラスの大悪魔になって俺は世界の支配者になる！ 殺しと支配、それが俺がこの世界でやるべき目的だ!!」

興奮気味でデイガルドは己の目的を語った。フロニヤルドでは考えられない野蛮な野望であった。

すると、先程まで壁に打ち付けられていた状態のまま話を聞いていたブリオツシユが立ち上がろうとしている。

「そのような輩、ビスコツティの隠密対頭領として…」

「やらせるか!!」

デイガルドはいきなり黒い魔力を左腕に出現させ、それをブリオツシユに向けて放つ。

「ぐあああー!」

「お前は一番危険そうだからな、しばらくは動けなくなってもらうぜ」「親方様!!」

ブリオツシユに放たれた魔力は彼女にダメージを与えた後、ロープの様になって彼女を拘束する。デイガルドは彼女がこの場で一番の実力者だと見抜いたようで、先に無力化してしまう。

それを目の当たりにしたユキカゼがブリオツシユに駆け寄ろうとしたら、いきなりレオがそれを止めてきた。

「レオ様、何をする気でござるか!？」

「こやつは儂自らが倒す。結果的に儂がこの物を強くしてしまったのだから、その尻拭い位自分でやらんでどうする?」

レオは口ではこう言っているが、内心ではあることを考えていた。(目的が殺戮と侵略、まさかこいつが?)

そして、一瞬何かを心配するかのような顔をするが、それを振り切ってデイガルドに名乗りを上げる。

「儂の名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ、ガレット獅子団領国の領主じゃ。儂を利用した罰、儂自ら与えてやろう!!」

「領主? 国ってことはお前王族か。王族自ら侵略者の撃退とは面白

れえ!!

デイガルドは自分に立ち向かってこようとするレオを前にして、自らも臨戦態勢に入る。

どこに仕舞っていたのか、黒い三又の槍を取り出して構えてきた。「どおりやあああああああ!!」

レオは斧を振りかざしてデイガルドに向かって駆け出す。

すると、デイガルドはブリオツシユを拘束した時と同様に黒い魔力を放出し、それを槍に纏わせる。そして、その槍で一閃を放つ。

「な…」

「何だ、その攻撃は？ 目を瞑ってても防げるぞ？」

デイガルドは槍の一線でレオの斧を破壊してしまった。

「そらよ！」

「がはあ!？」

レオが動揺している間に彼女の腹に蹴りを入れるデイガルド。

「もういっちょよ!!」

更に魔力を左手に込めて掌底を放つ。

「これで最後!!」

「ぐあああ!？」

止めに回し蹴りを叩き込んでレオを吹っ飛ばす。もはや戦いではなく一方的な暴力であった。

吹っ飛ばされたレオは先程のブリオツシユ同様壁に激突、インナーだけを残して装備の全てがはじけ飛んだ。

「そんな、レオ様が一方的に…」

「イヤ、違うでござる」

驚愕しているリコツタを尻目に、ユキカゼはそれを否定している。

「ユツキー、どういうことでありますか？」

「レオ様は焦っている様子が見えたのでござる。それで本気の実力が出せなかったようござるよ」

ユキカゼの分析から、レオがデイガルドに一方的に倒された理由がわかった。

リコツタは、そのユキカゼの言葉に一を疑った。

「レオ様が戦いの場で焦る。一体どういうことでもありますか？」

「あの男はレオ様に大きな不安があると言っていたでござるが、何か関係が…」

「大見得切った割に呆気なかつたな。まあ、見せしめ程度には…」

「待てえ!!」

すると、今度はゴドウインがデイガルドを呼び止める。その時の彼の目には、ブリオッシュと戦った時以上の闘志が見えた。

(もしもこいつがこの場を離れて殿下に目を付けたら……その前に倒さねば!!)

ゴドウインはガウルまでがデイガルドの凶刃に晒されるのを防ぐために、彼をこの場で止めようとしていたようだ。

この様子から、ゴドウインがいかにガウルを慕っているのかがよくわかる。

「殿下の存在を知られぬように…… 貴様あ、よくも閣下を!!」

「將軍、待つでござる!!」

ゴドウインはガウルの存在を悟られないようにレオの敵討ちという建前で戦いを挑む。念のために言っておくが、レオにも忠誠は誓っているがガウルに対しての忠誠心の方が強い、それがゴドウイン・ドリユールという男だ。ユキカゼの制止も聞かず、ゴドウインは鉄球を構えだす。

紋章を発動したかと思うと、鉄球を勢いよく振り回しだした。回転が続くに連れて、鉄球に輝力が充填されていく。

「へえ、おっさんもやる気か」

デイガルドは両腕に魔力を込め、それを前に突き出してゴドウインの攻撃を真正面から止めようとする。

「鉄球・剛速球!!」

ゴドウインが技名を叫ぶと、振り回していた鉄球をデイガルド目に向けてブン投げる。

「ふん!!」

だが、デイガルドはそれを受け止めてしまった。両腕をコーティン





る。

フロニヤ力が働いているはずなのに、デイガルドは大きな傷を負ったのである。

「やりやがったな、てめえ!!!」

だが、デイガルドはそんな周りの状況を気にも留めず、怒りに満ちた形相で右腕に魔力を集める。

魔力はシンク達が紋章に輝力を収束させるよりもはるかに速いスピードで収束され、黒い塊に変化した。

「ゴドウイン、離れろ!!」

レオが我に返って叫ぶが、既に遅かった。

「消し飛ばせ!!」

デイガルドが魔力の塊を目の前のゴドウインに向けて射出、それをもろに食らったゴドウインは凄まじい勢いで吹き飛ばされ、壁に激突。しかもその壁を突き破ってライ達がいるエリア、更にはそれすらも突き抜けて砦内のシンクとガウルが一騎打ちをしているエリアまで吹き飛んで行ったのだった。

「な、何だ今のは…」

突然何かが壁を突き抜けて飛んできたため、エクレールとノワールも思わず戦闘を中断する。

「あの野郎お…ん？ まだ他にもいたのか」

突き破られた壁の先からデイガルドが現れる。

その姿を見て真っ先に反応したのは、ライとミルリーフだった。

「な、何でこんな所に悪魔がいるんだ？」

「今の攻撃も、この人が…」

「…その人間、悪魔を知ってるつつうことは、リンバウムの人間か」

一方、シンクとガウルの一騎打ちはいまだに続いていた。単槍二本で攻めてきたシンクに対して、ガウルは壁に掛けてあった剣で対抗し

ている。

「勇者、さつきコンサートがあるって言ってたけど、マジなのか？」

「そうだよ、未遂に終わったけどあのまま姫様が誘拐されてたら台無しになったじゃないか…」

「畜生、ジェノワーズのアホどもめ。適当な仕事を…」

「何をゴチャゴチャと！」

応戦しながらシンクにコンサートについての質問をしてきたガウル。この様子から、彼はコンサートのことを知らなかったらしい。

だが、シンクは急いでいたのでその様子に気付いてはいないようだった。

すると、その時…

—ドカーンツ—

「!?!」

いきなり壁が爆発して、何かが飛んできた。二人が飛んできた物を見ると、やたらと大きいけものだまだった。

「ゴドウイン!!.. なんでだま化してんだ!?!」

突き飛ばされてきたのがだま化したゴドウインだと解り、驚愕するガウル。自分の臣下で実力者の男がそのような目に遭っているのだから、当然の反応だろう。

突然の事態に驚いた二人は一騎打ちをやめて、ゴドウインが飛んできた方向へと駆け寄る。

「ライさん、一体何があったんですか!?!」

「ああ、シンクか。ちよつとマズイ状況になっちまってな」

苦虫を噛み潰したような表情でシンクに話すライ。

「お前が姉上を倒した乱入者か？」

「姉上?.. じゃあ、お前がガウルって王子か」

「まあな。で、話は変わるがアイツは何だ?.. 多分、ゴドウインをやつたのもアイツだろうが…」

ガウルはライに対して、目の前にいるデイガルドについての説明を求め。

すると、デイガルドの方がシンク達に反応する。

「へえ、まだいたか。お前等には名乗ってなかったから名乗ってやろう。俺はサプレスの悪魔、ディガルドだ」

ディガルドの名乗りを聞いて驚くシンク。

「悪魔!? あの、願いを叶える代わりに魂寄越せっていう…」

「…シンクの世界で悪魔がどういふのかは知らねえけど、少なくとも違いそうだな」

ライはシンク達に悪魔の簡単な説明をする。

「悪魔は負の感情を食って力を高める種族で、人間に協力的な奴もいるけど大多数が他の種族を敵視している」

「なるほど」

それを聞いていたガウルとエクレールも臨戦態勢に入りながらライの話の結論を出す。

「あそこにいる男は」

「その大多数の内一人ってことか」

「まあ、そうだな」

そこに、ノワールも加わり、シンクもパラディオンを棒に戻して構えなおす。

「…ガウ様、私も戦う」

「あの人が危険なら、僕もやります」

実質五対一となっているが、ディガルドは余裕そうな表情でいる。

「さて、ここは纏めてぶちのめして見せしめになってもらおうか」

ディガルドは再び槍を取り出し、更に魔力を纏って完全戦闘態勢になっている。

ミオン砦戦、決戦の時だ。

## 第12話 悪魔との戦い Battle of Heroes

ライ達は総じて構えを取った状態のまま動きが無い。この場にいる面々は、デイガルドの実力を知らないため、全員が警戒しているようだ。

「おっと、そっぴや忘れてたな」

いきなり、何かを思い出したかのようなそぶりを見せるデイガルド。槍を地面に突き刺して、右手をポケットに突っ込んだと思ったら、サモナイト石を取り出した。

召喚術の適性は、リインバウムの住人ならランダムで一つ、それ以外の世界は出身世界の召喚術の属性、という具合に一人一人が決まっている。例外として、エルゴの王を始めとした伝説の召喚師や、名もなき世界（シンクが住んでいた地球）は全ての属性の召喚術が使える。

デイガルドはサプレスの悪魔であるため、適性のある属性は霊となっている。

「俺の傷を癒せ、聖母プラーマ」

デイガルドが召喚したのは、慈愛の笑みを浮かべた細目の金髪美女だった。この召喚獣、聖母プラーマは癒しの魔力を持っており、回復系召喚獣の代名詞ともいべき存在である。

プラーマは自身を召喚したデイガルドの左腕に両手をかざし、そこに癒しの魔力を集中して当てる。

「召喚術まで使いやがるのか」

「まあ、色々あつて使える術に限られてるんだがな」

デイガルドも流石に二度も同じ説明をする気は起きなかったようで、ライ達への説明は省略している。

骨を折られて力なく垂れ下がっていた左腕は、プラーマによって全開状態となり、いつでも戦える状態となった。

「さて、こっちは準備万端だ。いつでも来な」

デイガルドは再び槍を手に取り、ライ達を誘う。だが、皆が警戒し

て全く動かなかった。

「来ないのなら、こっちから行かせてもらうぜ!!」

痺れを切らせたデイガルドが仕掛けてくる。

「な!?!」

「喰らえ!」

デイガルドは凄まじい勢いでシンクとの間合いを詰めて刺突を放つが、シンクは咄嗟にパラデイオンを構えてそれを防ぐ。だが、デイガルドの放った刺突は予想以上の力であったため、再びパラデイオンが折れてしまう。

その瞬間をチャンスとばかりにデイガルドは槍を引き、更に思いつきり振りかぶって、そのまま槍を振り下ろしてきた。だが、シンクは咄嗟に折れたパラデイオンを再び短槍へと変えて、それを交差させてデイガルドの一撃を防ぐ。

「裂空十文字!!」

エクレールがその隙に紋章剣で攻撃を仕掛ける。紋章剣は真っ直ぐにデイガルドへ向かって飛んでいく。

「そんなもんぶっ放していいのかなっ!!」

直後、デイガルドは槍を引いてその場で大ジャンプし、その先にはシンクが無防備な状態で立っているのみ。

「うわああ!?!」

「しまった!!」

エクレールの紋章剣はシンクに直撃、爆発が生じる。爆炎が晴れるとシンクが立っており、マントと上着が弾け飛んでいる。幸い、フロニヤ力のおかげで防具破壊以外の被害は出ていなかったようだ。

「隙だらけだぜ、小娘!!」

エクレールが真上からの声に気付いて空を見上げると、デイガルドが槍を向けながら彼女を目がけて、落下の勢いによる攻撃を仕掛けようとする。

「どらああ!!」

「うおっ!」

丁度その時、ガウルが現れて飛び蹴りを放つ。咄嗟の事態に反応でき無かったデイガルドは、そのまま蹴りを喰らって吹っ飛ばされる。

「喰らえー！」

その吹っ飛んでいるデイガルドを見たノワールは、チャンスとばかりに何本ものナイフを投げる。

「やべえ!？」

デイガルドは空中で器用に体勢を整え直し、左腕で払いのける仕草で魔力を放ち、それで跳んできたナイフを全て防ぐ。ちょうど防御が終わったところで地面に着地した。

「お返しだあ!!」

もう一度左腕に魔力を込め、それを放ってノワールに反撃するデイガルド。だが、いきなり彼女の姿が消えて、攻撃はそのまま塀にあたって爆発する。

すると、デイガルドの背後にノワールが現れ、ナイフで斬りかかろうとする。

「そこか！」

だが、デイガルドはすぐに気づき、振り向くと同時にバツティングの様に槍をおもいきり振りかぶる。距離が近かったこともあり、槍の刃ではなく柄があたったが、悪魔の身体能力もあり、ノワールは吹っ飛んで壁に激突。

「ノワール！」

「ガウ様、ごめん。リタイア」

ノワールはデイガルドの攻撃によるダメージを負い、ぶつかつた時の衝撃で着ていた服も破けて下着姿になってしまい、戦闘不能状態となる。

ガウルも、羞恥心など無視してノワールの快方に向かって一時離脱する。

「服が破けただけか？ もっと血とか流してもおかしくはない筈……」

その一方、デイガルドはノワールの様子を見て思案している。隠れてフロニヤルドの観察をしていた&本人がその恩恵を受けないこともあつて、フロニヤルの存在やその効果を知らないようだ。

「隙あり！」

「うげ!？」

思案中だったディガルドを見て、ライは飛び掛かって剣を振り下ろす。咄嗟のことで驚きこそしたものの、どうにか回避するのに成功する。

しかしライの攻撃がそれで終わるはずもなく、そのまま縦、横、斜め、と斬撃を放ちまくる。だが、その後持ち直したディガルドも、槍の柄で攻撃を防ぎつつも突きを放つ、薙ぎ払う、といった攻撃で反撃する。

一対一だとこのまま苦戦を強いられるだろうが、ライ以外にも戦力はまだいる。

「さつきはよくもー！」

「行くぞ勇者！」

更にシンクがこのタイミングで復活し、エクレールと二人で飛び掛かる。

「オララララララララララ!!」

「ハアアアアアアアア!!」

「でやああああああ!!」

ライは剣を高速で振つての連続斬り、シンクは二本の短槍による連続突き、そしてエクレールの二刀流による連続斬り、三人による猛攻でディガルドは一気に防戦一方へと追い込まれる。

「クソ。勿体ねえが、仕方ねえー！」

ライ達から距離を置いたディガルドは、数個のサモナイト石を取り出して、何かを始める。

「誓約の下に現れよ、タケシーどもー！」

「「「「ゲレレレー!!」「」」」」

ディガルドが行ったのは誓約の儀式だったようで、サモナイト石と同じ数のタケシーが召喚された。

タケシーは下級の雷精で、サプレスの召喚銃としてはメジャーな種族である。その分、野生化したはぐれ召喚獣としてもよく見かけるのだが。



今回は数の差を埋めるために、緊急で複数体召喚したようだ。

「タケシー軍団、こいつらの相手をしろ！」

「二」「ゲレレレーー!!!」「三」

タケシーはデイガルドの命令を受けると、何体かがライ達の方に突撃していく。

「な、なんだコイツ「ゲレー」ヒッ?!」

突然接近してきたタケシーに動揺するエクレールだったが、直後にタケシーが舌で舐めてきて思わず固まる。

だが、それだけでは終わらなかった。

「ぐあああああ?!」

後ろに待機していたタケシーが雷を落とし、それがエクレールの直撃したのだ。それによってエクレールは感電し、服も破れてインナー姿になってしまう。

「エクレール!」

「シンク、よそ見るな! エクレールの二の舞になるぞ!!」

ライの言う通りだ。実際、このタケシー達は連携が取れており、距離のタケシーに気を取られていると雷撃を受けてしまうが、後方のタケシーには近距離の方が近づけさせてはくれない。マズイ状況である。

「おらー!」

「いけー!」

すると、ガウルが獅子王爪牙で雷撃担当のタケシーに攻撃、ミルリーフも召喚したメイトルパの召喚獣ポツクルの攻撃でタケシーを落とす。

「ミルリーフ、ナイスタイミング!」

「王子もありがとう!」

ライとシンクは二人に礼を言いつつ目の前のタケシーに攻撃を放って撃破する。倒されたタケシーはそのまま目を回して気絶し、いきなり消滅した。おそらく、送還されたのだろう。残る敵はデイガルドだけになった。

だが……

「残念。お前らがタケシーどもに気を取られている間に準備は終わってたぜ」

デイガルドは余裕の笑みを浮かべながらそう言っており、彼の体のある一か所に魔力が集まっている。

(口? なんでそんなところ!?)

ライの疑問だが、その答えはすぐに出た。

「ハアアアア!」

デイガルドが大きく息を吐き出したかと思うと、黒い煙のようなものが口から噴き出した。すると、その煙が辺り一帯を覆い尽くす。

「な、なんだ?」

「目くらましのつも、り、か!」

煙を浴びたガウルとエクレールがいきなりふらついて、膝をついてしまう。

「パパ、なんか頭が!」

「ああ、オレも立ち眩みが!」

ライとミルリーフも、エクレール達ほどではないが煙による異常を訴える。すると、デイガルドが律儀に説明を入れてきた。

「こいつは触れた相手の生命力を徐々に削り取る瘴気で、俺が独自に作った技だ。まあ、まだ未完成だから動くのに支障が出る程度しか効果は無いんだがな」

それを説明しながら、翼を広げて宙に上がるデイガルド。

「しかし、お前等の場合は進行が遅いみたいだな。まあ、逃げる分には問題ねえが」

「てめえ、逃げんのか!」

「野望のためにも捕まるわけにいかないんでな! じゃあ、次は確実に殺すからな」

そのまま捨て台詞を吐きながら、塀を超えるために高度を上げようとするデイガルド。

「裂空一文字!」

「ぬおお!」

いきなりデイガルドを目がけて攻撃が飛んできたため上昇を阻止されてしまう。技名から察して、使った人物は当然…

「待たせたでござるよ」

「ダルキアン卿！」

ブリオツシユが刀を片手に佇んでいる。

それを見て、拘束した本人であるデイガルドは驚いている。

「何!? あいつは俺が拘束したはず、一体どうやって?」

「拙者が解除したでござるよ。初めて見た術だったから時間は掛かったでござるが」

ユキカゼが自信満々にそう言う。何故彼女がそのようなことに詳しいのかは解らないが、今はそれどころではなかった。

「ち、これ以上魔力を消費したくなかったが…」

デイガルドは悪態をついた後、槍に魔力を纏わせて堀に向けて投げつける。

すると、堀の上半分がそのまま崩壊、デイガルドはそのまま若干高度を上げただけで堀を飛び越えていった。

「クソ、上手く立てれば撃ち落とせたのに…」

妖精の血を引くライや、至竜であるミルリーフは魔力耐性によってエクレール達ほど酷くはないが、立ち眩みのせいで上手く戦えない状態である。

そんな中、一人だけまったく効果のない人物がいた。

「勇者、貴様は何で平気なんだ?」

「それが僕にもさっぱりで…」

何故かシンクはデイガルドの瘴気が全く効果が無く、シンク本人にもその原因がわかっていないらしい。

響界種であるライにも少なからず影響を与えた技がただの人間であるシンクに全く効果がない、これにはライもミルリーフも驚かされているようだ。

「まさか…」

そんな中、ガウルがその原因について気が付いたようである。

「ガウル殿下、何か解ったんですか?」

「もしかしたら、パラディオンが所有者である勇者を守ったのかもしれない」

「え？ 宝剣って要は武器だろ。なんでそれが？」

ライの疑問は尤もだが、ガウルにも根拠はあるらしい。

「姉上から聞いたことがあるんだが、フロニヤルド諸国に伝わる宝剣には固有の意思があるらしい。たぶん、それが勇者を守ろうと力を発して、あいつの技が効かなかったんじゃないのか？」

「ありえない話ではないでござるな」

ガウルの立てた仮説にブリオツシユが同意し、一応の原因説明が終わった。その直後、ライが皆に向き合っていることを指摘する。

「ところで、アイツをこのまま放っておいたらまた何か事件を起こすのは確実だ。まだそんな遠くに行つてなはずだから、追っかけて仕留めた方がいいと思うんだが」

「ライ殿の言う通りでござるな。何かいい手はないでござるか？」

皆が思案している中、シンクは先程のガウルとの戦いを思い出し、それをもとに何かを思いつく。

「ライさん、あいつを追いかけるいい方法を思いつきました！」

「お、良い手があったか」

「勇者、どうやって追いかける気だ？」

「俺も興味あるな」

シンクのアイデアに、エクレールやガウルも興味津々である。

「じゃあ、こんな感じで」

「え!? シンク？」

早速その方法を実践するシンク。まず彼が取った行動は、なんとライをおぶるといふものだった。

「その名も、勇者超特急!!」

安直すぎるネーミングに、呆然としてしまう一同。その一方、ライはシンクがたぶん自分と同じくらいの体重であろうと思い、そんな自分をおぶって立てるところに感心していた。

「え〜つと、王子……ゴメン、名前なんだっけ？」

「覚えておけよ！ ガウルだよ!!」

シンクは戦を終わらせるのに躍起になっていたのか、ガウルの名を  
いまいち覚えていなかったようだ。

「ガウルの輝力武装を参考にした技だから、大丈夫！」

そう言いながら自分の両足に輝力をため込むシンク。準備は万端  
のようだ。

「じゃあ、僕が追いかけるのに専念するので、ライさんは攻撃をお願い  
します」

「ああ。けど、この状態じゃ銃撃以外の攻撃が使えねえぞ。それだけ  
じゃ決定打が喰らわせられねえと思うんだが」

ライの心配は尤もだったが、その心配は無用だった。

「大丈夫ですよ。他にもとっておきがあるのでその時に出します」

「なるほど。じゃあ、ちよつくら行ってくるわ」

「うん。パパ、行ってらっしゃい！」

ライが皆に言うのと、代表としてミルリーフが口を開く。

そして挨拶が済むと、シンクが足に溜め込んだ輝力を爆発させて、  
大ジャンプする。

「行ってきまー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ライをおぶった状態でシンクは叫びながら跳んでいき、そのまま砦  
の塀を超えていく。本来の高さなら届かなかったが、デイガルドが上  
部分を砕いていたおかげで、シンクもそこを飛び越えることが出来  
た。

「そういうえば、ミルリーフはどうする気でござるか？」

ユキカゼが残っていたミルリーフに対して尋ねる。

「あとでパパたちを回収するために魔力の回復。ついでにみんなをコ  
ンサートに連れて行けるから、後でリコを呼んでくれるかな？」

「わかったでござる。ところで、さっきの竜を呼ぶのでござるか？」

「ううん、流石にもう一回呼ぶのは気が引けるから別の方法で」

リコッタとの会話を終えたミルリーフは、ポケットからキャン  
デーを取り出して口に含む。何故かリインバウムのキャンデー  
には魔力を回復する力があり、召喚師達の必需品となっている。

「食べる？　ちなみにメロン味だよ」

「いただくでござる」

「イヤ、私がいい」

一方、ブリオツシユはレオが休んでいるところにやって来た。

「少しいいでござるか、レオ姫」

「じゃから今は領主だと言ったであろうか」

相変わらずレオは姫と呼ばれるのは嫌らしい。なので、ブリオツシユもいい加減呼び方を変えることにした。

「時にレオ様、我が国に侵略を繰り返されているそうでござるか？」

「それがどうした。平時通りの儂らガレットの戦興業じゃ」

ブリオツシユは話に聞いていたガレットの異常な侵略行為について聞いてみるが、あまりいい答えは返ってこなかった。

「レオ様の侵攻に、我が国の真面目な騎士団長が頭を悩ませております。姫様のコンサートを始めとした一般イベントを行えないのとまで…」

「それがどうした!!」

すると、いきなりレオが声を荒げる。

「貴様らの国の犬姫が開催する、秋の芋掘りバトルだの、海水浴もどき水上戦で若者の英気を養えるか！」

「……イヤ、中々楽しそうでござるが」

レオの不満に対するブリオツシユの答えは、間違っではない筈だ。

「誰も楽しくないと言うとらん。それだけではいかんと言っておるのじゃ」

声を荒げて告げるレオに対して、ブリオツシユは冷静に対応する。

「まあ、ウチの姫様にも至らぬ点ではありますが、年と経験を重ねればもっと立派な領主になれる筈です。ですから、いましてお待ちしております…」

その時、ブリオツシユはレオの表情の変化に気付く。

「それが出来たら、どれだけいいものか…」

その時のレオの表情は、とても辛そうだった。それを見てブリオツ  
シュは、何かを感じ取る。

「ともかく、おしゃべりはここまじゃ。何があろうとも、儂は儂の道  
を行く」

そのままレオは立ち上がって、ドーマに跨って砦を後にした。

# 第13話 決着と一日の終り G o t o t h e C o n c e r t

ミオン砦を脱出したデイガルドは、そこから離れたところの平原を飛んでいた。

「しかし、この世界は本当によくわからんな。メイトルパの亜人に似た種族がリインバウムの人間みたいな生活様式で暮らしているうえ、あの黒猫女に重傷とみられる傷はなかった…」

飛行中も考え事をしているデイガルド。フロニヤルドという世界そのものを不可解に感じているらしい。リインバウムとそれらを囲む四界はそれぞれが独自の文化を持っているが、フロニヤルドは種族と文化の組み合わせがそれらに比べると異質なようだ。

「まあ、それはどっかの町の襲撃でもして無理やり聞き出せばいいか。最悪、血識でもぶんどりや問題ねえだろ」

かなり物騒なことを口に出しながら自己完結するデイガルド。

「? なんだ、この音?」

デイガルドは、背後からドドドドツという音が聞こえるのに気付く。しかも、だんだんと音も大きくなっているようだ。

気になって振り返ってみると…

「待てええええええええ!!」

「何!?!」

背後から追ってきたのは、ライをおぶった状態で全力疾走しているシンクの姿だった。シンクの新技、勇者超特急は想像以上のスピードを出していたのである。

「シンク! もう視界にあいつが入ったけど速すぎねえか!?!」

「だからこそその超特急ですよ!」

ライもクロックラビイという召喚獣を憑依させてスピードアップをしたことは何度もあるが、生身の人間でこのスピードを出すのは流石にすごかったようだ。



「まあ、これで攻撃が入るな」

ライはおぶられた状態で銃を構える。モードは単発、威力は反動を考えて標準、スコープは残念ながらついていないので片目を瞑ってデイガルドに狙いを定める。

「クソ、追つてくんじゃねえ!!」

デイガルドがこちらに振り返って、両手に魔力を集めて、それを交互に発射してくる。

だが、攻撃が直線的だったので、シンクはそれをいともたやすく避ける。

「シンク、上手いこと避けたな」

「今日一日戦ったんですから、体が覚えますよ!」

しかも余裕そうにライと会話までしている。彼の言うこともあながち間違いではないようだ。

「今度はこっちの番だ!」

ライは叫んだ直後、二、三発ほど続けて発砲する。だが、デイガルドも槍を手に取る。剣と違って面積が小さいので銃撃などの防御には向かない筈だが、弾丸が飛んでくるのに合わせて槍を振るい、弾いて行く。デイガルドは悪魔であることが関係しているのか、身体能力と同様に動体視力が高く、夜目も効いているようで、このような芸当が出来たようだ。

「やっぱこの状態じゃ、決定打に欠けるな」

「だったら、もっとあいつに近づきましょう!」

ライの悪態を聞いたシンクは、足に更に輝力を込め、またも加速した。

「何! まだ加速するのか!?!」

シンクの急な加速に驚愕するデイガルド。

そんな中、シンクにおぶられているライはあることを思い出す。

「シンク、確か輝力は使い過ぎると疲労がたまるらしいけど、大丈夫なのか?」

昼間の戦でエクレールから紋章砲の使い方を教わった際、シンク自らが実感したことである。

ライの心配に対するシンクの答えは…

「今は大丈夫です。それに、そうなる前に勝てばいいだけです！」

「…オーケー。それでいく!!」

そのまま一気に走っていき、デイガルドとの間合いを詰めていく。

「このままじゃヤベエ……ってなんで俺は相手に合わせてんだ!?!」

デイガルドが何かに気付いて叫んだと思うと、翼をはばたかせて高度を上げ始めた。

「え、高!?!」

「マジかよー!」

「お前らが追ってきたのに驚いて忘れてただけだ! 見くびんじゃねえ!」

そのまま一気に上空へと飛び上がってしまい、こちらの攻撃が届かない範囲に逃げられてしまう。

「おい、シンク! あいつを何とか追えねえか!?!」

「例のとおきで追えないこともないんですけど、条件が揃わないと…」

すると、シンクの視界にあるものが入った。それは、形が傾斜状になっっている大きな岩だった。

「ライさん、早速揃いました!」

「何? どうするんだ?」

「時間も惜しいので、実践で!」

シンクは会話を打ち切って、走りながらジャンプ、その場で足元に輝力を集める。そして、それを何かの形に押し固めたかと思うと、輝力を炎のように噴射するサーフボードのような形状の乗り物へと変化した。

結構面積も広いので、シンクはライを乗り物の上に降ろす。

「シンク! なんかすげえのが出たんだけど!?!」

「名付けて、滑空ボード、トルネイダー! これを使って…」

そのままトルネイダーの進路を変えて、先程の岩が眼前に見える位置に移動する。

「ライさん。一気にいきますから、!」

「へ？」

何をどうするのかと聞く前に、シンクは輝力をトルネイダーに溜め込む。

「ブーストライドオー!!」

シンクの掛け声に合わせて、トルネイダーは矯め込んだ輝力を炸裂させて加速、そのまま眼前の岩の傾斜を勢いよく登っていき…

「行っけー!!!」

「うおおおおおおおおお!!」

そのまま斜面を登り切ったトルネイダーは、勢い余って上空へと上昇、つまり飛行に成功したのだ。

シンクの考えた出鱈目な飛び方に、ライも振り落されそうになったが、どうにか踏みとどまれた。

「シンク、こんななるならって最初から言え！」

「すみません、説明してる余裕がなくなつて。それと使わないに越したこともないんで」

シンクに対して怒鳴るライだが、若干震えている。よっぽど驚いたようだ。

「あとは……いたー！」

シンクは辺りを見回して、デイガルドを発見する。一方、デイガルドもこちらに気付いたようだ。

「こんなところまで追いかけて来るか」

「逃がすか！」

デイガルドは飛行速度を上げて逃げ切ろうとするが、シンクもトルネイダーを加速させて追いかける。

その最中、ライはデイガルドを倒すのにいいアイデアを思いつく。

「シンク、止めは任せろ」

「何かいい手はあるんですか？」

「ああ。輝力銃を使って思い付いたことなんだけど、上手くいけば倒せるはずだ」

「え？ それって」

「はあ……」

ライは剣を両手持ちにして、そこに何と魔力と輝力を溜め込み始めたのだ。先程、輝力銃を使って思い付いたと言ったのは、どうやらこの手段のようだ。

魔力を腕力に置き換えて攻撃するマジックアタックの応用と、「単純に輝力を物に溜め込み、ぶつけて炸裂させるだけなら紋章や術式は必要ないだろう」という考えだったようだが、上手くいったようだ。それによって剣は、ライの魔力で一番相性の良いメイトルパ属性の緑の魔力が輝力と混ざり合い、美しい深緑の輝力光を纏っている。

「おいおい、なんかヤバそうだな。だったら俺もとっておきで！」

ライの様子を見たデイガルドも、槍だけでなく右腕全体に魔力を纏わせる。それによって、槍と右腕全体がサプレスの属性を意味する紫の魔力光を発している。

デイガルドはありつただけの魔力を込めたようで、ついに息切れまではじめた。

そして、二人は同時に必殺技を放つ。

「必殺！」

そのままライはトルネイダーを足場に大ジャンプ、月をバックに剣を振り上げて叫ぶ。

デイガルドも槍を持った腕を後ろに引き、迎撃態勢に入ります。そして、ライが射程内に入ったと認識したら、技名を叫びながら一気に突きを繰り出す

「デモンズジャベリン!!」

デイガルドの突きを放つと同時に腕を覆っていた魔力は槍に集まり、突きそのものが巨大になってライを貫こうとする。

だが、ライも新たな必殺技を放っている。召竜連撃と違ってライだけで使う新たな必殺技だ。

その名は…

「響・界・斬・魔・剣!!」

技名を叫んだライは、勢いよくデイガルドの突きに向かって剣を振り降ろす。すると、振り下ろされたと同時に剣先から魔力と輝力が混ざった膨大なエネルギーが放出された。

「ぬ、おおおお……」

「おおおおおおおおおおお！」

二人の放ったエネルギーは激突、そのままお互いを飲み込もうと拮抗状態になる。互いの技の激突により、バチバチと電流が走るような音が鳴る。

そして、ついに片方の技が打ち消された。

「何!?!」

打ち消されたのは、デイガルドのデモンズジャベリンだ。

「喰らええええええ!!」

ライの響界斬魔剣は、デイガルドの技を打ち消してもなお勢いは衰えず、そのままデイガルドを飲み込む。

「ぎゃあああああああああああ!?!」

エネルギーに飲み込まれながらデイガルドは断末魔を上げ、そのまま吹き飛ばされる。

悪魔デイガルドを、響界者ライが見事打ち倒したのだった。

「……………って、これヤバくね?」

ふと、ライはこのままでは落下して地面に激突してしまうことに気付く。このフロニヤ力の強さは解らないが、もし弱かったら落ちた衝撃で死んでしまうのは確実である。

だが、その心配は無用だった。

ドシュツという音と同時にトルネイダーがライの落下先に回り込み、シンクがライを受け止めたのだ。

「ふう、ナイスキャッチー!」

「シンクか、助かった!」

ライは、とりあえず助けてくれた礼をシンクに言う。

「ライさん、今の技すごかったですけど…」

シンクが指差しながら見つめているのは、ライの握っている剣だった。

なんと、刀身が丸ごと消し飛んでおり、柄もボロボロになっている。「ああ。多分、紋章とかりコツタの改造みたいなやつとか使わなかったせいだと思う」

ライは、お紋章を介して輝力を運用した攻撃を使う理由がこれではないかと考えている。仮にそうでないにしても、輝力を魔力と混ぜてしまった所為で出来たエネルギーが普通の武器では耐えられなかったという線も考えられる。

「まあ、今度どうにかして紋章を手に入れるわ」

「その方がいいと思います」

次回から響界斬魔剣は紋章剣として使おうととりあえず決めておくライであった。技や紋章についてあれこれ話している内に地上に到着したため、そのまま着地する。

着地と同時にトルネイダーを解除するシンクだが、いきなり息切れを始めてしまう。

「はあ、はあ、すみません。いきなり疲れが…」

「緊張の糸が切れたんだろ。とりあえず休んどけ」

ライに言われて、シンクはとりあえず横になる。その状態のまま、シンクはライに話しかけた。

「ライさん。姫様との約束、果たせそうにないですね」

「あ、その、……突き合わせて悪かった」

コンサートの話を思い出した二人は、どつと落ち込んでしまう。  
すると……

「パパー」

どこからともなくミルリーの声が聞こえた。と思っていたら、今度は何かがはばたく音が聞こえだす。

ライが声のする方を向くと、何かに納得するような表情を浮かべる。そして、ライの視線の先にあったものがこちらの真上に来たことで、ああむけに倒れているシンクもその正体に気付く。

「うわあああああ!？」

それは巨大な竜で、思わずシンクも驚きのあまり叫んでしまう。

「ミルリーフ、まさかこつちでその姿になるとはな」

「こつちの方が早いからね」

「へ？ ミルリーフ!？」

竜がミルリーフの声で喋り出すのを聞いて、シンクは更に驚く。

「ああ。実はあつちが本来のミルリーフの姿で、ちっこい方の竜は力を抑えたものだったんだよ」

「ええ!? 人間じゃないってというのは昼間の戦の後で聞きましたけど、これは流石に…」

ライからミルリーフの正体を聞いて、もうどう驚いていいかわからなくなってしまうシンクだった。

「勇者様、迎えに来たでありますよー!」

「このまま姫様との約束をすっばかす気か!」

背中からリコッタとエクレールの声が聞こえてくると思ったら、エクレールとユキカゼが降りてきた。この分だとブリオツシュも乗っていると思われる。

「みんな、迎えに来てくれたんだ。ありがとう」

「か、勘違いするな。お前がコンサートに来なかつたら、姫様が悲しむからな」

「それでもありがとう」

「エクレ、とりあえず勇者殿に肩を貸してあげるでござるよ」

エクレール達に支えられながらシンクはミルリーフの背に乗る。ライもそれを見送って乗り込んだ。

ちなみに、ライ達の予想通りブリオツシュがすでに乗っており、酒をたしなんている。

「ところで、ガウルは?」

「ガウル殿下なら、レオ閣下のところに戻って行つたぞ」

それを聞いたライ達がエクレールに理由を聞いてみる。

「どうやら、姫様のコンサートについてご存じなかったらしくてな。責任を感じて、自ら折檻を受けるとジェノワーズ達を引き連れて帰っていったぞ」

「なんだ。意外と誠実な奴なんだな」

だからこそその王族なのだろう、ともライは思うのだった。

「みんな乗ったね？」

「ああ。ミルリーフ、頼む」

「オツケー！ リコ、案内おねがい」

「了解であります」

リコがファイリアンノ領までのナビを取り、ミルリーフは飛び立った。

ミルリーフの背に揺られながら、ライ達はファイリアンノ城の音楽ホールに向かう。

その際、ライはシンクにあることを話すことにした。

「なあ、シンク」

「？ ライさん、どうしました？」

「姫様が、オレを自分の部屋に呼んだ時に話してたんだが…」

ライは、昼間にミルヒが話していたことについてシンクに話すことにした。

「姫様、お前の召喚についてすげえ後悔してたぜ。まだ、領主になって日が浅いから力不足なんだって、その所為でお前にも迷惑かけたってな」

ミルヒがシンクの召喚についてのことで自分を責めている、それを包み隠さず話すライ。

「あとで姫様本人に話すのは当然として、オレもここで聞いておく。お前にだって個人の暮らしがあるんだ、ぶつちやけ迷惑じゃねえか？」

それを聞いたシンクは、表情を崩して笑顔になる。

「全然迷惑じゃないです。さつきみたいなアクシデントはありませんけど、呼んでもらって凄く楽しかったので、むしろ良かったです。それに…」

「ひよっこでも頑張ればきつと飛べる、毎日一生懸命ならきつと立派



な大人になれる、僕の師匠の教えです。だから、姫様が領主になりたてのひよっこでも大丈夫ですよ」

「…そうか」

シンクの答えを一通り聞いたライは、再び口を開く。

「だったら、コンサートの後にでも伝えてやれ。そうすりゃ、姫様も安心すると思うぜ」

「はいー!」

もう回復したのか、カラ元気なのは不明だが、元気そうに返事を返すシンクであった。

「みんな、お城が見えて来たよ」

ミルリーフの言葉を聞いて一同が進行方向に視界を向けると、たしかにフィリアンノ城が見えていた。

「もう着いたのか! 思ったより早いな」

「その上乗り心地もよかったでござるよ」

エクレールがミルリーフの飛行速度に驚く中、ブリオツシユは呑気に乗り心地についての感想を述べる。

「ねえリコ、姫様のいる建物がどれか教えてくれないかな?」

「ああ、あそこの丸い建物でありますよ」

リコツタが指差す方を見ると、そこには円形の建物が立っているのが見えた。ネオンを発して一際目立ったので、すぐに分かった。

「オツケー! みんな、飛ばすからしっかり掴まってね!!」

そのままミルリーフは飛行速度を上げ、一気に音楽ホールを目指す。

---

一方、音楽ホールの控室にて。

ミルヒはステージ衣装に着替えて出番を待っている。スカート部分を膨らませた真っ赤なドレスを着て、頭に赤い花飾りをつけたその衣装は、彼女にとっても似合っている。

だが、彼女の表情は少し暗い。先程、エクレールが砦から通信を受

けた際に、謎の乱入者の出現で戦が中止となり、現在シンクはライと二人でその相手を追跡中だと聞いたのだ。相手がこちらに敵意のある存在だと聞かされたため、シンクの身を案じているようだ。

すると、控室の扉からノックの音が聞こえたので、その当てを部屋に入れる。

「姫様、そろそろ時間ですよ」

入ってきたのは、タイトな服装の眼鏡をかけた、絵にかいたような秘書の出で立ちの女性だった。それもそのはず、彼女の名はアメリカ・トランペ。ミルヒの専属秘書官である。

アメリカから時間を知らされたミルヒは、ステージへと向かう。

『お待ちせいたしました。ミルヒオーレ・F・ビスコッティ姫殿下、ご登場です!』

アナウンスと同時に暗かったステージに明かりが付き、その中央に佇むミルヒの姿が露わになった。

ミルヒは気持ちを切り替えて、表情を笑顔に変える。

「な、何だアレは?」

「こっちに向かってこない!」

客席の方がざわめいたかと思うと、このホールに向かって何か巨大な影が上空から近づいてくるのがわかった。至竜形態のミルリーフだ。

そして、そのミルリーフはあつという間にホールの真上に来たかと思うと、まばゆい光を体から発する。

「はい、とーちやく」

光が晴れると、ミルリーフは人型形態になっており、上に乗っていたライ達一行と一緒にステージに着地する。

「…ちよつと、派手すぎたか?」

「まあ、いいではござらぬか」

苦笑しながら呟くライに、ユキカゼがフォローを入れる。

そして、その中からシンクがミルヒに近づいて行く。

「姫様、約束通りに間に合わせましたよ」

「勇者様！」

ミルヒはシンクが約束を守ったことから心底の笑顔を浮かべる。

そして、シンクは特等席に案内され、ライはその隣にあるエクレール達の座る騎士団用席に向かう。本当はライにも特等席が用意されていたのだが、エクレール達と話をしたいと言うことで、特別に騎士団関係者の席に座らせて貰った。ちなみに、ミルリーフは単純にライと一緒に居たいと言う理由だ。

「ライ殿、ちよつといいでござるか？」

「どうしました？」

席に向かう途中、ブリオツシユがライに話しかけてきた。

「あの、デイガルドという男についてでござるが……」

「とりあえず、倒しました。生死は不明ですけど」

デイガルドの命を奪ったかもしれない、ということ考えたライは後ろめたそうにブリオツシユに答える。

「あの男は確かに拙者達に一方的な敵意を持っていた。流石の拙者でも、あの男はこの世界の住人達とわかり合おいとはしないと思うでござる」

「はい。あいつは根っからの悪人が多い種族の生まれだから、その認識で間違いないと思います」

ブリオツシユはデイガルドの本質を見抜いているようで、そのことをライに告げる。

「でも、もし生き残っていたら拙者達に任せてもらえないでござるか？」

「え？」

「拙者とユキカゼには秘密のお役目があり、あのものがそれに関わる可能性があるのでござる」

あまり深く話せない事情がブリオツシユにはあるらしいが、それにデイガルドが関わると思われるらしい。

「…わかりました。でも、オレが帰る日までにその時が来たら、協力させてもらいます。流石にオレの世界と無関係じゃないので、気になると言うか……」

「わかったでござる。その時は助けてもらおうでござるよ」

話し終えるころにはライ達も席に付き、コンサートが始まった。

「今日の戦ではビスコッティに来てくれた勇者様、本来この国に呼ばれる筈のなかったにも関わらず協力してくれた勇敢な親子、そしていつも頑張ってくれている、この国の騎士達が勝利を運んでくれました」

ミルヒのスピーチからコンサートは始まる。勇敢な親子とは当然、ライとミルリーフのことである。

「今日の勝利を糧に、今日よりもっと素敵な明日を皆さんに送れる様に頑張る勇気を乗せて歌います。『きつと恋をしている』——」

最後に曲名を告げると、音楽が鳴り響き、それに合わせて観客たちが蛍光ライトを振る。それによってステージの灯りはより一層強くなった。

前奏が終わると、ミルヒの歌声がホール全体に響く。

その、優しく心が癒されるような歌声に、ライもミルリーフも思わず聞きほれてしまう。

のだが…

「なんか、思ったのと違うな」

「どうした、姫様の歌にどこか不服でもあるのか？」

不機嫌そうなエクレールの顔を見るなり、そのことについてライは否定する。

「イヤ、そうじゃなくてな。なんというか、使う楽器とか歌の種類とかがオレのいた世界じゃ見たことない物ばっかだから慣れなくてな」

ライの思ったミルヒの歌というのは、国に代々から伝わっていったような伝承を歌った歌だとか、楽器はリユートやハープを使うものだったりとか、を想像していたらしい。

「まあ、それを踏まえてもいいもんだぜ。ミルリーフもそう思うだろ？」

「うん。みんなが姫様のお歌が好きな理由がわかったね」

「だろ？ 心して聞くんだな」

自分のことのようにエラそうな言い方をするエクレールだったが、  
それだけミルヒのことが好きな証拠だろう。  
こうして、ライ達のフロニヤルド一日目は幕を閉じたのだった。

第14話 平和な一日 The Vacation  
in Biscotti

ライとミルリーフ、そしてシンクがフロニヤルドにやって来て数日が経過。その数日の間に、彼らは城内の面々とすっかり親交を深めており、エクレール達を愛称で呼ぶほど親密になっている。

ライについてはユキカゼのみを愛称で呼んでいるのだが、これにはある事情があった。

～回想～

「勇者殿にライ殿、拙者のことはもっと親しみを込めて愛称とかで呼んでほしいでござるよ」

褒章授与式の後、ユキカゼがいきなりライ達にこのようなことを言うのだった。

「親しみ?」

「別に名前で呼んでんだし、オレとしては込めてるつもりなんだが…」  
「リコく、エクレー、ミルリーフ、二人がまだ拙者に懐いてくれんでござる～」

ライとシンクが二人そろってこう言うと、いきなりユキカゼがリコッタ達に涙声で言いだす。

「え、えくつと…」

「拙者はこんなに二人を可愛がろうとしているのに、ううつ、寂しいでござる、切ないでござるよ～!」

ライとシンクがリアクションに困っていると、ユキカゼは涙目になってリコッタにすり寄る。見た目年齢的に逆な気もするが…

「ユツキー、よしよしであります」

「勇者、それにライ! ユキを泣かせるな馬鹿共!!」

「そうだよ! じゃないとユツキーが可愛そうだよ!!」

リコッタがユキカゼを慰める中、エクレールとミルリーフが二人を怒鳴りつける。ミルリーフはすっかり彼女らと親密になっているようだ。

「そうはいってもよ、オレが人のこと愛称で呼んだことないのはミルリーフだって知ってるだろ」

「それに、年上をそんな愛称で呼ぶなんてさすがに失礼じゃ…」

「確かに拙者、二人よりは割かし年上でござるけど別に気にしないでござるし、ライ殿もこれを機に試してほしいでござる。どうせならユキちとかで呼んでほしいでござるよ〜」

「イヤ、ユキちってなんだよ!?!」

どうにか絞り出した言い訳でも真つ向から叩き潰される。そして二人はどうとう観念するのだった。

「え〜つと、じゃあユツキー!」

「ならオレはユキで!」

「それにござる!」

二人が愛称呼びを承認した途端、泣き止んで元通りの彼女に戻った。まさか嘘泣き?」

「あ、シンクはわたしとリコツタのお揃いだ!」

「本当であります! ちなみにライ様はエクレやノワとお揃いでありますよ」

ということである。

〜回想了〜

そして現在、ライはどうしているかというと…

「はああああああ!」

「よつと!」

フィリアンノ城内の訓練スペースでエクレールと模擬戦をしている。エクレールは自分より圧倒的に強いライを目の敵にしているらしく、ライはミオン砦戦の翌日に工房で注文し、今朝方完成した新品の剣の試し切りついでに、仕方なく彼女の相手をしているのだった。

「おらあ!」

ライの放った一閃がエクレールの得物である二本の短剣を弾き飛ばし、勝負がつく。

「クソ、また負けた」

「なあ、もういい加減休ませてくれよ」

「まだだ！ 貴様に勝つまでやる！」

朝から始めたこの模擬戦の戦績だが、九戦やってライの全勝となっている。

「わかった。次でちょうど十戦目になるからこれで最後、それでいいか？」

「十分だ。次こそは勝つ！」

とりあえず、キリのいい回数になったのでこれを最後にすることになった。

「みんな、厨房から差し入れが入った。一息入れよう！」

するとそこでロランから休憩の合図が入ったので、結果として模擬戦は打ち止めになる。正直な所、ライは助かったと思うのだった。

差し入れを持っていたのは、シンクとリコッタ、そしてミルリーフである。

「ライさん、厨房からの差し入れは花蜜のタルトですって」

「わたしも運ぶの手伝ったよ」

「そうか。えらいぞミルリーフ」

ライに褒められながら頭を撫でられ、至福の笑みを浮かべるミルリーフ。その光景が、城に務める者達の最近の癒しとなっていた。

「エクレ、お菓子の差し入れでありますよ！」

「いや、今回はもっと練習をしたいからいい」

リコッタから差し入れの報告を聞いたエクレールだったが、彼女はそれを断った。

「珍しいでありますね？」

「それもこれも、ライの奴に勝てない所為だ！ このまま後れを取ってたまるか!!」

「ちよ、オレの所為!?!」

とんだトバッチリだった。まあ、ライでなくてもそうなるだろう。すると、そこでシンクが反応する。

「じゃあさ、僕とやらない？ 僕もライさんにちよつとは追いつきたいし」

シンクのその提案を聞いたロランが、タルトを口に運ぶのを思わず



中断する。

「それはいい。勇者殿、また相手をしてやってくれるか？」

「はいー」

ロランからの許しも出たので、急遽シンク対エクレールの模擬戦が行われることとなった。

「みんな！ 勇者殿と親衛隊長の戦い、よく見ておくように」

「「はい!!」」

ロランが他の騎士達に話すと、全員が元気よく返事をする。

「今日の武器は何にするんだ？」

「今日は……これ！」

エクレールに武器を聞かれると、シンクは近くに置いてあった剣を手取る。

そして何を思ったのか、左手でそれを空中へと放り投げだし、剣は回転しながら天高く飛んでいく。

「!？」

ライとミルリーフ親子は、いきなりのシンクの行動に驚く。その一方で騎士団員達は興味津々でそれを見つめている。

シンクは、ペン回しの要領で器用に指を動かしながら、右手に持った鞘を回しまくる。そして、それを上手いこと垂直な所で止めたかと思うと、そこに丁度剣が落ちてきて、綺麗に鞘に収まる。

「剣にしようー」

無駄に格好をつけたシンクの武器選択に拍手を送る騎士団達。

「ねえパパ、もし剣が柄から落ちてきたらどうするつもりだったんだろ？」

「さあ？ ああなること前提でやってたみたいだから、考えてなさそうだぜ」

ライ親子がこっそりとそんな会話をしている。ここの戦いのようなパフォーマンスとしての戦いを見たことがない二人からしたら、当然のリアクションだろう。

そうこうしている内に、エクレールとの模擬戦が始まった。

今回はエクレールも、シンクに合わせているのか普通の剣で戦って

いる。

「エクレ、楽しそうでありませぬ」

「そういや、なんか生き生きしてるな」

ライもシンクとエクレールの模擬戦を見学していると、隣にいたりコツタの言葉が耳に入る。

ライはエクレールと模擬戦の際に、自分に勝とうと必死になっている様子を見ている。そして一人での訓練や他の騎士達との模擬戦では、相手の実力が足りなかったのか物足りなさそうな様子だった。

対して、シンクと戦っているときは妙に生き生きしており、動きの切れがいいのだ。

「妹誉めはなんだが、若い騎士らはなかなか相手になる者がいなかったからな。実力白昼の相手ができたのはエクレールにとっては良いことだな」

やはりエクレールは騎士団内でも強い方だったらしく、そのことから兄であるロランにとってもシンクの存在は嬉しかったらしい。

「歳も近いし、勇者殿をあれの婿に欲しいくらいだよ」

「あいつ婿にしたら、後が大変そうだよな」

とかなんとか言っている間に決着がつきそうになる。そして二人が同時に剣を振り下ろす。

その瞬間。

―ドクンツ―

「!?!」

ライとミルリーフが悪寒のようなものを感じ取り、それと同時にシンク達の剣がぶつかった衝撃で真つ二つに折れてしまう。

「今何か、物凄い悪寒と不吉な予感が…」

「エクレール、まさかお前も?」

「ということは、お前達もか?」

「うん」

どうやらライ達だけでなく、エクレールも同じものを感じ取ったらしい。

「そう? 僕は何も」

その一方で、シンクは特に問題がなさそうな様子である。エクレールについては解らないが、ライは響界種でミルリーフは至竜であるから第六感も優れているのかもしれない。

「ライさんは大丈夫そうだけど、エクレはお腹出して寝てそうだから体でも壊したんじゃないかな？」

そう言いながらエクレールの頭を撫で始めるシンク。すると、次第にエクレールの顔が真っ赤になっていき…

「うわあああああああああああああ！」

「おぶううううううううう!?!」

エクレールは大声を上げながらシンクに腹パンを喰らわす。かなり力を込めたようで、シンクはその場で蹲って悶絶する。

「このアホ勇者！ 勝手に騎士の額に触るな!!」

そのままエクレールは声を荒げ、蹲っているシンクの体を踏みつけまくる。

「まさか、さっきの悪寒の正体ってこれか？」

「というか、そうであって欲しいかな？」

ミルリーフの言うことも尤もだ。まだディガルドが死んだと決まったわけではないため、彼による報復を予感した、とう可能性も捨てられないのである。

だが、今はとりあえず忘れることにして二人でシンクを助けることにするのだった。

「実際、仲も良さそうだしな」

「えーっと、どうなんでありませんよう？」

その光景を見ながらロランが穏やかそうに言い、傍で聞いていたりコツタが反応に困っていた。

それからしばらくして、三人は移動を始めた。

目的地は城からいくらか離れた森の中にある、ブリオツシユ等隠密部隊が住んでいる風月庵という庵だ。森を進んでいるといつの間

か竹林に突入しており、その中に目的の庵があった。建築様式は純日本風で、ライにとつてはシルターンを髣髴とさせるものだった。

風月庵の庭では、隠密部隊の隊員だという犬達がくつろいでいたり、使用人らしき人物が掃除や洗濯物干しをしている。

その中で、見知った顔の人物を発見した。

「ユツキーー！」

「おつす、来たぜ」

「ああー、いらっしやいでござる〜」

ユキカゼが庭で野菜の入った籠を持っているのを発見するのだった。服装は普段の隠密衣装ではなく、ラフに丈の短い浴衣を着ている。

聞けばブリオツシユは近くの川で釣りをしているらしく、そんな彼女の昼食用の食材を運ぶのだと言う。

せっかくなのでライとシンクも釣りをすることにしたので、竿を貸してもらってユキカゼに同行することにした。

川に到着すると、ブリオツシユはすでに釣りを始めていた。

「ダルキアン卿、こんにちは」

「おお、勇者殿にライ殿。今日は釣り日和でござるよ」

早速釣りを始めるライとシンク。その近くでユキカゼは持って来た野菜を切り分けて昼食の準備をする。

ライ達の釣る魚が今回のメインということとなった。

「それにしても勇者殿にライ殿、二人そろって不思議な御仁でござるな」

「ん？何が？」

いきなりブリオツシユが二人に対していった言葉が引っかかる。

「聞けば二人そろってビスコツテイに来て未だ数日。なのに、騎士団員のみんなやりコ達、場内の者達はすっかり心を許している」

「まあ、エクレには殴られたり蹴られたりしてばっかですが…」

「オレも一方的にライバル視されて、いい迷惑なんだが…」

「それだけ気を許している証拠でござるよ」

と、二人の協調性の高さについての話をブリオツシユとしている。

「あ、かかった!」

シンクの竿に辺りが出た。その瞬間…

「フィッシュオン!!」

ライとミルリーフが同時に叫ぶ。

「ライ殿、今のは一体?」

「あ、その、オレ等の釣りの時の癖って言うか…」

「あう、はずかしい…」

つつい叫んでしまったリインバウムでの釣りの掛け声に、ライは親子そろって顔を赤くしている。

その一方、シンクはかなり苦戦していた。引き具合からして相当の大物のようだ。

「シンク、オレも手伝う!」

「いいえ、大丈夫です…」

シンクは強がってライの手伝いを拒む。全身の力をフルに使って、ようやく魚が釣れた。

釣れたのは地球の古代生物を髣髴とさせる、鋭い牙と岩のような鱗の、全長2メートルはあるだろう巨大魚だった。魚は釣り上げられた勢いでそのまま宙を舞い、ユキカゼが調理をしている目の前に落下した。

「ユキカゼ、そいつの調理も頼めるでござるか?」

「心得てございます」

ブリオツシユの指示に従い、ユキカゼが巨大魚の調理を始めようとしたら一人の人物が待ったをかける。

「ユキ、こいつはオレに料理させてくれねえか?」

待ったをかけた人物は、ライだ。

「ライ殿、出来るでござるか?」

「ああ。オレ宿屋の店主やってるって言ったけど、同時に料理番もやってんだ。こっち来てから飯は人任せだったから、腕前が訛んねえようにと思っただけな」

「パパのお料理、すんごくおいしいんだよ! 旅行雑誌で帝国一の最年少料理人に選ばれたぐらいなんだよ!!」

ミルリーフがライの料理の腕について自慢するように話す。旅行雑誌の名は「ミュランズの星」といい、レストロ・メニエという帝国宮廷料理店の初代料理長が作った雑誌である。

ミルリーフの話を聞いた一同が返事をする。

「ちよつと食べてみたいかも…せつかくなんでもお願いします」

「じゃあ、役割分担ということでもそっちはおねがいするでござる」

「カナタやユキカゼの食事でも悪くないが、どれ程の物かお手並み拝見といこうかでござる」

揃ってライの調理を了承し、ブリオツシユに至っては半ば挑戦状のような言い回しである。ちなみに、カナタとは風月庵で働いている使用人の女性である。

「よーっし。お前ら、手をよく洗って待っていな！」

ライは巨大な魚を慣れた手つきで下ろしていく。鱗が大きく皮も厚いので、皮は剥いでしまうことにした。

ライの料理が出来るまでのつなぎに、シンク達はユキカゼが準備した分の食事を食べる。平らな石を熱して鉄板代わりにし、その上で野菜や小さな魚を焼いて食べる、ちよつとしたキャンプ気分の昼食だ。

「勇者殿もライ殿も異世界の住人、しかも別々の世界の出身でござったな」

「じゃあ、二人ともいつか故郷に帰るでござるか？」

ブリオツシユ達から話を聞いたライが答える。

「ああ、オレは仕事あるし、仲間もいるから帰らねえといけねえや。シンクも帰るつもりだったろ？」

ライが答えた後、シンクに話題を振る。

「……しまったああああ!!」

すると、いきなりシンクがその場で倒れこみ、そのままのた打ち回り出す。

「ほぼ完全に忘れてたー！ まだ帰る方法も見つかってなかったん

だー!!」

「……お前、バカだろ。オレだって定期通信でリシエル達に調査頼んだから」

ライがシンクのウツカリ具合に呆れていると、ミルリーフがあることに気付く。

「あれ？ ユツキー、フロニヤルドの召喚で呼ばれたら二度と帰れないんじゃないの?」

「召喚勇者は元の世界には帰れない、というのがこの辺りでは一般的でござるが、遠方の国では役目を終えて帰郷したという話を聞いたことがあるでござるよ」

ミルリーフの疑問に答えたのは、ブリオツシユであった。どうやら旅の最中に送還された勇者の話を聞いたことがあるらしい。

すると、その話を着たシンクが復活する。

「そうなんですか!?!」

「リコも、その辺りまでは調査が進んだと言っていたような……」

「よかつた〜」

ユキカゼからさらに話を聞いたシンクは、物凄く安心した表情になる。

「勇者殿には、やはりご家族が?」

「はい。父さんと母さん、あと親戚とか友達とか」

ブリオツシユから家族の話題を振られたシンクは、家族構成や交友関係について話す。

「おっし! 巨大魚ムニエル完成!!」

丁度その時、ライが担当した料理が完成する。料理を配りながらライも会話に参加していく。

「聞いた感じ、シンクは本当に普通の家族がいるんだな」

「そういうライ殿はどうなんでござるか? その年で働いている辺り、わけありのようでごござるが……」

「差支えなければ聞かせて欲しいでござる」

ライとしても話しづらいわけでもなかったので話すことにした。

「まず、オレの幼馴染姉弟、その父親でオレの店のオーナー、街の駐在

兵士でオレの兄貴代わりに同じくねえちゃん代わりに召喚師、ミルリーフに仕える四人組、あとはつい最近まで死んだと思っていた母さんにも会えたな」

「え？ ライさん、それって…」

シンクは、ライが最後に発した言葉が引つかかる。母親がつい最近まで死んだと思っていた、というのは普通の家に生まれ育ったシンクからしたら想像もつかないだろう。

「オレが物心つく前に死んだって親父から聞かされてたんだけど、つい最近になって嘘だったってわかってな。直接は暮らせてないんだけど、会おうと思えば毎日会えるから別に寂しくはないな」

ライの母メリアージュは、トレイユの町の近くに生えているラウスの樹という樹木が作り出した結界に住む妖精なのだが、その樹を別荘を建てるのに邪魔だと言った貴族によって切られてしまい、結界の開け閉めが出来なくなってその中に閉じ込められてしまったという。ライの父ケンタロウは、そんなライを悲しませないためなのか嘘を言ってたのだった。

だが、ギアンが敵対していたころ解魂病という病の病原体を召喚してトレイユを汚染、その際にライの響界種の力を解放して、ともに解魂病を慈雨の大奇跡という技で浄化した。その時にライは母の生存とその正体を知ったのだ。

戦いが終わってから、ライはラウスが切られた跡地である望月の泉にて定期的にメリアージュと話に行っているのだ。

「母上殿に会えてよかったでござる」

「だね。僕もちよつと泣けて来た」

「うむ。家族の愛に勝るものはないでござるよ」

具体的なことは面倒くさかったのか話してはいないが、シンク達は大体の事情を察して感動している。

すると、ブリオツシユはあることに引つかかる。

「？ とところで、その父上殿はどうなのでござるか？」

ブリオツシユがライに父親に関する話題を振った瞬間…



「……ああああああああああああああ!!」

いきなライが発狂したのでシンクは仰け反り、ブリオツシユ等も予想外の事態に目をぱちくりさせる。

「ミルリーフ、ライ殿はどうしたでござるか?」

「…実は、パパは自分のおとうさんがあんまり好きじゃないんだ」

ミルリーフが苦笑しながら説明すると、ライが具体的な説明を始めた。

「ああ。あのクソ親父はな、まだ四歳位の頃からオレに戦い方を叩き込んだと思ったら、双子の妹のエリカが病気だから治療法探しに行くつつつてそのまま使っても寄越さずに帰ってこねえまま約十年、最近帰ってきたと思ったら…」

説明から愚痴へと変わっていき、そのままライの父に関する愚痴は延々と続いた。

とりあえずしばらく放っておくことにしてライの作ったムニエルを食すことにするシンク達。ムニエルの味は、そろって「筆舌に尽くし難し!」と思わず叫んでしまいそうになるほど美味かったらしい。

第15話 星詠みの姫 Black Prophecy

ライ達がブリオツシユ等と釣りや昼食を楽しんでいたのと同時刻。  
〜リインバウムにて〜

ブロンクス姉弟は、ポムニットと一緒にシャオメイの店にやって来た。彼女の占いでライの連れ戻す手段のヒントを得られるのかもしれないと踏んだのだ。

「こ、これってどういうこと?」

リシエルは、占いの内容を聞いてシャオメイに尋ねる。

「どうって言われても、そのまんまの意味としか言えないわね。なんならもう一度読み上げるけど?」

「お願い。もしかしたらあたし達の聞き間違いかも知れないから」

そしてシャオメイが占いの内容を読み上げるのだが……

「界の境界を越えし者の前に邪悪に縛られし者が降臨、大地を蹂躪する。それに伴い別なる邪悪が降臨して混乱が訪れるだろう」

内容がこれなのだ。

「やっぱり聞き間違いじゃなかった……」

「…メチャクチャ不吉ですね」

ルシアンもポムニットも、占いの内容を聞いて顔をしかめる。あまりにも内容が不吉すぎるので、それも当然だろう。

「これも星の導きである以上、逃れることはできない……でも」

「…でも?」

一拍置いてシャオメイが口にした言葉。

「お兄様ならどんな困難が来ても乗り越えられるはずだし、大丈夫」  
ウインクしながらリシエル達に告げるシャオメイ。

「ライ、マジで無事でいなさいよ。邪悪なんて、ブツ飛ばしてやりなさい」

口調は強気だったが、リシエルの表情には不安の色が見えている。

〜地球にて〜

とあるマンシヨンの一室から一人の少女が出てきた。

「シンクのバカ。メールとかしよつちゆう送って来るくせに、偶に途絶えるから心配するんじゃない」

独り言を呟きながら出てきた少女は、シンクの幼馴染レベッカ・ア  
ンダーソン。シンクをはじめとした一部の友人からベツキーという  
愛称で親しまれている。

そんな彼女も、文句を垂れつつシンクの心配をしているようだ。

(あ、そういえばまだ今週の占い見て無かった)

そう思ったレベッカはポケットに入れた携帯電話を取り出し、エレ  
ベーターを待っている間に占いのサイトを覗く。

「私の運勢は可もなく不可もなく。で、シンクは……」

シンクの運勢を見た瞬間、彼女はギョツとする。占いの内容は……

「今週は最悪、予期せぬ不幸が襲って来まくり……」

占いの内容を見て呆然としてみると、丁度エレベーターが彼女の居  
る階に到着した。

そんな感じで不吉な占いがリインバウムと地球で行われたとはつ  
ゆ知らず、フロニヤルドにいるライ達はブリオツシュ等と休日を満喫  
している。

そして夜になった。

フィリアンノ城下町の大通りにて、巨大な影が闊歩しているのが目  
撃され、道行く人々の注目をかつさらう。

その正体は……

「すみませ〜ん!」

「おお、すまぬ。ちよつと失礼するでござるよ」

ブリオツシュの乗るセルクル、ムラクモだった。その体は、後ろを  
ついて行くライ達の乗るセルクルと比べても二回り以上に大きく、本  
当に同種の生物なのか疑わしかった。

そりや注目もされるだろう。

「ねえ親方様。その子、目立ちすぎない？」

「ムラクモは拙者と同じく凶体がデカイでござるからな」

「イヤ、あんた自身と比べてもかなりデカイぞコイツ」

ライの膝の上に座るミルリーフが、思わずブリオツシユに指摘してしまう。そのブリオツシユの返事に対するライのツツコミだが、まさにその通りだ。

「さて、拙者らは騎士団本部に顔を出すでござる。たしか勇者殿はその後、姫様と御会見でござったな」

ミルヒは領主の仕事が忙しいせいでありシンクと話せていない。だが、今日のこの時間帯はスケジュールに余裕が出来たらしく、シンクとの会見という名目のお茶会を開き、二人で話すことが決まっていたのだ。

シンクはその話を聞いた際、ライも誘ったのだが何故か断わられたのだ。ユキカゼはシンクがブリオツシユと話している際、こつそりとライから理由を聞いてみる。

「ライ殿はどうして姫様との会談を断ったのでござるか？」

「イヤ、普通に考えて姫様とシンクが二人っきりの方がいいだろ？」

オレでなくても男が二人もいたら邪魔者にしか見えねえ気がすんだよ」

「……ライ殿、結構空気が読めるでござるね」

「どういう意味だよ」

とのことだった。ライと話を終えたユキカゼは、今度はシンクに声をかける。

「姫様に失礼のないようにするでござるよ」

「大丈夫！」

そのままライ達は城に帰っていく。ライはミルリーフを連れて自分達に宛がわれた部屋へと戻ってくつろぐことにし、シンクは会談の前に風呂に入るように言われたので大浴場へ向かった。

余談だが、シンクは大浴場に入った際、メイド長のリゼル率いるミルヒ直属メイド隊に、徹底洗浄の名目で揉みくちやにされてしまった

らしい。こつそりと様子を見に来たライは、断つて正解だったと胸を撫で下ろして安心するのだった。

そしてライはシンクが大浴場から連れ出されたのを見計らい、ミルリーフを連れて自身も風呂に入り、一日の間に流した汗を洗い落とすのだった。

部屋で二人がくつろいでいると、扉をノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

「ライ様、失礼するであります」

部屋を訪れてきたのは、エクレールとリコッタだった。

「ライ様、銃の点検が終わったから届けに来たであります」

「おお、サンキュー。ところで、エクレールは何で…」

「リコの付添だ。暇だったからな」

そっけない態度でエウレールは言う。まあ、リコッタとは友人同士だからちよつとくらい付添はどうということないだろう。

「二人とも、せっかく来たんだ。茶でも淹れるから適当に掛けてくれ」

「ありがとうございます」

「まあ、せっかくだから飲んでやらんこともない」

相変わらずツンケンしているエクレールであった。

ちなみに、ライの宿屋ではチーズやフランクフルトの様な軽食メニューも取り扱っており、それに合わせてコーヒーや紅茶の注文も入る。それによってライはお茶淹れもお手の物だった。

「初めて飲んだ時も思ったんだけど、ここの茶ってそのものの味や香りが果物みたいに甘くて、不思議だな」

「そのお茶は花茶といって、ビスコッティの名産の一つでありますよ。遠方の国では結構な高級品として扱われているでありますよ」

「姫様と勇者の会談でも出されてると思うぞ」

リコッタやエクレールがライに対して茶の説明をする。

ライの知る茶は茶葉を発酵させた紅茶、させてないお茶（いわゆる日本茶で、シルターンの茶）二通りだ。この花茶は色こそ紅茶に近いが、茶葉の種類がビスコッティ特有の物であるため味が極端に違うの

だろうと、二人の説明を聞いて結論付けた。

「ねえリコ、急に気になったことがあるんだけど」

「ミルリーフ、何でありますか?」

そのまま一服していたらミルリーフがあることを尋ねてきた。

「姫様がシンクを勇者にえらんだ理由って、知ってる?」

「ああ、それオレも気になるわ」

「本当にいきなりだな」

エクレールの言う通りいきなりである。もっと早いうちから聞けたことではあるので、ここで急に聞いて来たらそういう反応は当然だろう。

「流石に当てずっぽうは無いからな。何かでシンクのことを知ったんだろうけど、どうやって…」

「一度だけ姫様から聞いたことがあるであります」

すると、そこでリコッタが口を開く。召喚主であるミルヒから聞かされたことがあるらしい。

「その話の前に説明したいことがあります。紋章術の一種に、星詠みというのがあるのでありますよ」

「星詠み?」

「占いみたいなもの?」

ライもミルリーフも首を傾げ、それにリコッタが答える。

「おおむね正解であります。映像板を用いて未来を占うのでありますが、他にも別の世界の様子を覗くこともできるのでありますよ」

「別の世界を覗く!?!」

リコッタの説明を聞いて、ライ達は声を揃えて驚く。

ラインバウムは結界で覆われているため、ラウスブルグや今回のようなケースでもない限り、行き来どころか様子の覗き見など不可能なのだ。それを考えると、その様子を覗ける星詠みは相当凄いものということになる。

「まあ、個人差があったりで、見れる時間とかも限られているんでありますけど」

「いや、それでも十分スゲエんだけど」

「で、私も聞いたのだが、姫様がその星詠みで勇者が活躍しているところを見たそうなんだ」

まあ、そのような技術があったからシンクのあの卓越した身体能力を知ること出来たのだろう。当然の判断だった。

その後、ライはリコツタ達を部屋に送る。その帰りしなに、ある人物の顔が視界に入った。

(お、シンクがいる)

丁度ミルヒとのお茶会を終えて自室に帰る途中のシンクを発見したのだ。一国の姫と会いに行っただけに、黒の燕尾服という正装姿だった。

「うつつ、シンク」

「あ、ライさん」

声をかけると、シンクとミルヒが反応する。

「そうだ！ ライさん、明日の朝に姫様と散歩の約束したんですけど、ミルリーフと一緒にどうですか？」

「あ、いいですね。ライさんもよければ一緒に……」

ライはシンクがミルヒと二人きりの約束だと判断し、今日の会談と同様に断ろうとしたら、ミルヒまでが誘ってくる。

ここで断つたら後で気まずい展開になると判断した。

「…わかった。どの道ミルリーフと散歩はその内する予定だったから、問題ねえぜ」

「わかりました。明日の朝6時、城門前にセルクルの用意をさせているのですぐにわかると思います」

ということ、ライも明日の朝の散歩に参加することとなった。まあ、ミルリーフと一緒に連れて行くのだから、二人とは別に親子団らんでもしてればいいという妥協もあつての答えである

その後、ミルヒと別れて二人で廊下を歩くライとシンク。ライは先程リコツタから聞いた話をライに振ってみることに敷いた。

「さっき、リコツタからお前が勇者に選ばれた理由を聞いてよ。姫様がお前の活躍を見たんだってな」

「そ、そうなんですか。リコもそれ知ってたんですね」

何故かその話題を振った瞬間、シンクの歯切れの悪くなった。

「どうした？　なんか拙いことでもあったか？」

「実は、その姫様が見た試合なんですけど、僕の負けたヤツなんですよ」

シンクの話聞いてライは驚くが、「当然ですよね」という表情を浮かべながら話を続ける。

「対戦相手はナナミっていう僕の親戚で、この間話した師匠で、同時にライバルでもあるんです」

「ああ、例の」

初日の夜にコンサートに行く途中、シンクが話していた師匠が彼の親戚なのだという。

「でも、お前が負けた試合を見て、なんでお前を選んだんだ？　そのナミか、他の世界のもっと強い奴を呼べばよかったんじゃない？」

「え？　リコは言っただけじゃありませんか？」

「活躍を見てた、しか聞かなかったぞ」

それを聞いたシンクは、何かに気付いたような顔をした。

「ああ、たぶん姫様が恥ずかしくて言わなかったんだと思います」

「？　どういうことなんだ？」

「姫様曰く、その時僕の流した悔し涙が決め手だそうです」

「悔し涙？」と、ライが首を傾げると、シンクがそのまま説明を続けた。

「その涙が、自分のすべてを出し切った人の流す、尊くて綺麗な涙だったそうです。それを見て、僕を選んでくれたらしいんですよ」

「そっか…」

確かに、本人が恥ずかしがりそうな理由だった。それを聞いたライは、話さなかったのも当然かと思わず苦笑するのだった。

く同時刻、ガレット獅子団ヴァンネット城にてく

場内にいきなり何か割れるような音が聞こえる。

「クソオ…またか」

音が聞こえた部屋にいたのは、レオだった。彼女は現在荒れ果てており、足元に割れた花瓶が落ちていることから荒げて叩き割ってし



まったようだ。

「戦を済ませて戻っても、やはり何も変わらん。いや、かえって悪くなった！」

レオが忌々しそうに見ているのは映像板だった。どうやら星詠みをしていたようで、口振りから以前にも行ったことがあるようだ。

「さして強くもないはずの儂の星詠み。なのに、何故、こうまではずきり未来が見える……?」

表情が忌々しそうなものから悲しげなものへと変わり、嘆くようにそう言うレオ。

そして、映像板に映っていた光景にもう一度眼をやる。

そこには、大勢の屍が横たわっている、地割れが起こっている、地面から火柱が上がる、といった地獄絵図のような光景が映っており、地面には折れたパラディオンとピンクの短剣が突き刺さっていた。

そしてフロニヤ文字が示されており、こう書かれてた。

『『エクセリード』の主 ミルヒーレと『パラディオン』の主 勇者シンク、30日以内に死亡。その後ビスコッティ共和国とガレット獅子団領国に災厄が訪れる。この映像の運命はいかなることがあっても動かない』

「ミルヒだけでなく勇者まで死ぬ！星の定めた未来か知らんが、かのような出来事、起こしてたまるか!!」

子の星詠みの結果を見直したレオは、何かを決心したような表情になり、今いる部屋とつながっている隣の部屋に移動した。

「貴様を出すぞ、グランヴェール!!」

レオがグランヴェールと呼んだのは、その隣の部屋に安置されている戦斧で、青白い不思議な光を纏っている。

「天だろうが、星だろうが、貴様となら動かせる!!」

その翌日、レオはビスコッティ及び、その周辺諸国に対して驚きの布告をするのだった。

同時刻、どこかの洞窟にて、白い光に包まれている巨大な結晶と、その前に佇む人影がある。

その人影だが、背中の右側には天使を思わせる白い翼が生えており、左側には蝙蝠に似た悪魔の翼を生やした、かなり異様な容姿をしている。

「この調子だと治療が終わるまで、大体4日か。まあ、あの傷で生きていたのが奇跡だという状態だったからな」

「どうやら誰かの治療をしているらしく、結晶の中にはその治療相手が眠っている。」

「俺は表に立つ訳にはいかないから、お前はもう暫く俺に利用されてもらうぞ、デイガルド」

そう、男が結晶の中に入れて治療していたのは、先日ライ達によって倒された筈のデイガルドだった。

災厄の時は、刻一刻と近づくのであった。

## 第16話 勇者と姫と親子の朝

シンクとミルヒのお茶会から一夜明け、約束の朝になった。ちなみに、ミルヒはこの時にシンクと楽しい時間を過ごす分だけの仕事を終わらせようと、時間になるまで書類仕事を済ませるほどの張りきり様だった。

ライ親子とシンクはミルヒが来るより前に指定場所にやって来ると、そこに二頭のセルクルが用意されていた。片方はライが借りているセルクルだったが、もう片方はシンクではなく、ミルヒのセルクルだった。

「あの、このセルクルって姫様のですよね？」

「はい。名前はハーランといつて、フロニヤルド全土でも希少な飛翔種という種別のセルクルなんです」

ライに説明を入れたのは、セルクルの用意をしてくれた若手騎士で、エミリオという名である。

「へえ、お前レアツ子だったんだ」

シンクがハーランのことをそう呼んでいると、そのハーランがシンクにじやれ付いてくる。最初はライ達も微笑ましく傍観していたのだが…

「シンクーー！」

仕事を終えたミルヒが到着し、こちらに気付いてやってくる。そこで彼女はあんなものを見た。

「うわあああああああああああ!!」

「ハーラン、やめろー！」

「シンク食べたらお腹こわしちゃうよ！ ペツして!!」

ハーランがシンクの頭を齧っており、ライとミルリーフがそれをやめさせようとしている光景だった。カオスである。

「まあ！ ハーランがこんなに懐くなんて、シンクってセルクルにも好かれるんですね!!」

「って、そんなこと言ってる場合じゃないだろ！」

「うん。だから姫様、助けて」

ハーランに頭を齧られてシンクは涎まみれになっている。にも拘らず、ミルヒのリアクションは呑気すぎて、ライも思わずツッコンでしまうのだった。ちなみに、ここ数日で一番騒がしい朝だったとか。

その後、ライ達はセルクルに二人乗りして湖沿いの道を疾走する。そして到着した場所は…

「私の秘密の場所なんですけど、どうですか？」

「へえ〜」

「うわあ〜」

「きれい〜」

ミルヒに案内されたのは、とても広い花畑だった。その広大かつ美しい光景に、ライ達は思わず見とれてしまう。

「姫様は普段、ここで何をしていますか？」

「普段は、のんびりとお散歩したり、お弁当を食べたりしたり、ですね」

「それもいいですけど、その前に軽く運動でもしませんか？」

「はい？」

「実は昨日の内に、試したことがあるんです」

それを聞いたミルヒは首を傾げ、ライ達も何をするつもりなのかと様子を見ている。

その試してみたことをミルヒの前で実践するシンク。それによってパラディオンは円盤状の道具、いわゆるフリスビーに変化した。

「いいですか？ これを僕が放り投げるから、姫様にはそれを取って来てほしいんです」

「あ、はい」

と、そういう訳でシンクとミルヒのフリスビー遊びが始まった。

シンクが投げたフリスビーをミルヒが追いかける様子を見ていると、あまり運動慣れしていないのが伺える。だが、それでも必死に追いかけて、自分の視線と同じ高さに降りてきたところを一気に飛び出してキャッチする。

それをシンクの指示に合わせて投げ返すと、フリスビーの形状により、腕力のあまりないミルヒでも高く、そして早く飛ばすことが出来

た。そしてそれをシンクが、大ジャンプして跳んでいる最中にキャッチして、そのまま上空で投げ返すと言う離れ業を披露してギャラリーのライ達を驚愕させるなどのことがあった。ちなみに、ライもミルリーフもシンクの活躍を戦い以外で見るのは初めてだったので、改めて彼の身体能力に驚愕しているのだった。

そんな中、ミルヒは尻尾を振りながらこの遊びが楽しいとシンクに告げている。

「パパ、シンクと姫様、すぐくたのしそうだね」

「あ、ああ。そうだな…」

ミルリーフは純粹に二人のやり取りを楽しそうと捕えていたのだが、一緒に見ていたライは何故か表情が引き攣っている。

(なんか、飼い犬と飼い主みたいに見えて背德的なんだが、オレだけか?)

理由はこんなことを考えていたからだ。リシエル達やシンクの友人達がいたならば同意が得られたかもしれないが、その面々が来れるかどうかかわからないので難しかった。

「ライさーん！　せつかくだから一緒にやりませんか？」

「ミルリーフもどうですか？　楽しいですよー！」

シンクとミルヒがライ達も誘ってくる。それを聞いたミルリーフが、ライの方をじっと見てきた。まあ、十中八九混ざりたいのだろう。

「じゃあ、形は変わったけど親子団欒といくか」

「ワイー!!」

ライの答えを聞いたミルリーフは、満面の笑みで喜んだ。

ちなみに、この時のミルリーフの表情にシンク達の表情が物凄く緩んだそうだ。

「じゃあ、ミルリーフに投げますよ」

「オツケー」

ミルヒが持っていたフリスビーはくるくると回転しながら飛んでいき、ミルリーフがそれを先程のミルヒと同じように追いかける。

そして、同じく高度が下がってきたところで前に跳び出してキャッチする。

「やったよ、姫様!!」

「やりましたね、ミルリーフ!!」

「じゃあ、つぎはパパに投げるよ!」

「おお、どんと来い!」

ミルリーフは、先程シンクがミルヒに見せた手本を思い浮かべながらその通りの仕草を取る。フリスビーを右手に持って、体を右方向にひねり、それを元に戻した時の勢いに乗せて投げる。

人型の状態のミルリーフは魔力の扱いに長けてるが竜形態と違い、身体能力が見た目相応になる。それでも投げられたフリスビーは勢いよく飛んで行った。

「お、意外と飛ぶな」

ライは身体能力や体力は高いものの、シンクとは鍛えた筋肉が違うこともあって彼のようなアクロバットジャンプは出来ない。だからただ追いかけるだけでなく、フリスビーの高度が下がったところで走力を上げて落下地点に回って受け止める。

「ライさん、今度は僕です!」

「おっし。じゃあ投げるぞ!」

と、早速ライもフリスビーを投げてみる。だが…

「あ…」

ライは力加減を誤ってしまい、これまでで一番高く飛んで行ったのだった。

「シンク、すまん」

「大丈夫、すぐにとつて来るから問題ないですよ」

そう言つてシンクは走っていく。だが、流星に高すぎたようで、そのことについて小さくつぶやいていた。

そこでシンクはある行動をとつた。

「おっ!」

パラディオンの棒形態を普段よりも長くして、それで棒高跳びを行つてフリスビーの飛んでいる高度まで跳びあがった。

「トルネイダー!」

更にそこからトルネイダーを発動、空中でバランスを取りながら上

手いことフリスビーをキャッチし、そのまま地上に降りるのだった。

その後、四人は持って来たバスケットに入れていたサンドイッチで朝食を取りながら談笑する。

その際、ミルヒが領主になった際に受け継いだ宝剣【聖剣エクセリード】がいまだに覚醒していない、フロニヤルドではどの国にも二本一対の宝剣が受け継がれている、等の話をする。

その後、シンクが帰った後もまた来たときにパラディオンを貸して欲しいということになって、シンクがまた来てくれるとミルヒが喜ぶなどのことがあった。

ちなみに、その際シンクがミルヒの頭や喉をシンクが撫でて、本人が気持ちよさそうにしているのを見て、ライはまたも背徳的に思ってしまうのだった。

「パパ、楽しかったね」

「ああ。昨日の朝と違ってのんびり出来たしな」

ライはミルリーフと一緒に城の厨房にいた。昨日の昼食の件でユキカゼがライの料理センスの高さに目をつけ、それを人手を欲しがっていた給仕のおばさん達に話した結果、手伝いを頼まれたのだ。ライ自身も昨日言ったように腕が鈍らないというメリットがある為、手伝うことを決めたのである。

そして、昼の食事の仕込みに入ろうとした直後に、それは起こった。『こちら、ヴァンネット城前のパーシー・ガウディです！ つい先程、ガレット獅子団領のレオンミシエリ閣下より衝撃の発表がありました!!』

作業中にもニュースが聞けるように付けられた映像板から、緊急速報が入ったのだ。ビスコッティ出身のアナウンサー、パーシーが慌てた様子でニュースを告げている。

『と、とにかく、その発表の映像をご覧ください!!』

直後、映像がその発表をしたという会見の物に変わる。壇上にはレオが側近であるバナード將軍を連れて会見を行っている。

『四日後より予定していたガレット領民の戦闘競技会、この内容を少々変更しようと思う』

どうやら戦興業に關係のある会見のようだ。そしてレオは話を続ける。

『先の戦での敗北に加えて、ビスコッティには勇者が召喚され、それと同時に偶然ビスコッティ側に就くこととなったライという名の戦士も現れ、武勇名高きダルキアン卿までが帰国した。終いには昨夜のミオン砦戦での謎の乱入者による戦の中断、ここまで苦汁を舐めさせられて国内に籠っている獅子団戦士の名折れであろう』

そして、レオは不敵な笑みを浮かべながら告げた。

『よつて、ビスコッティに新たな戦を申し込む！』

その発表と同時にカメラのフラッシュが一斉にたかれた。ライやミルリーフだけでなく、食堂に居合わせていたシンクヤリコツタ達全員が作業を止めてそのニュースに見入る。

『急な戦を申し込む手前、付随興業はビスコッティ側が好きにやってくれて構わん。商工会や個人商店の参加も大歓迎じゃ。無論、賞金は大量に用意するぞ。皆、稼ぎ時じゃからこぞつて参加してくれ！』ビスコッティ側の承諾を得次第、チケットの売り出しを開始する。開催まで時間が無いゆえ少々慌しくなるが、こちらも詳細は追って説明しよう。参加の意思がある者皆にきちんと行き渡るようにするゆえにな』

すると、レオが目を細めたかと思うと、衝撃的なことを告げた。

『そして、国家間の勝利懸賞として賭けたい物がある』

それと同時に、傍で控えていたレオの家臣と思われる男が、豪勢な刺しゅうを施された布で覆われた物の近くに立ち、その布を勢いよく取り払う。

その下から現れたのは、青白い光を纏った戦斧と、その真上に浮かんでいる青と緑が混ざったような色の光球だった。

『ガレットの宝剣、【魔戦斧グランヴェール】と【神剣エクスマキナ】』



国の代表の証であるはずの宝剣を、賭けの対象にするというのだ。この発表と同時に、会見に集まっていた記者たちの視線が宝剣に集中し、再びカメラのフラッシュがたかれる。

『この会見を聞いているな？ ミルヒオーレ姫殿下。ビスコッティにも、これに見合うものを出してもらえれば僥倖じゃ』

レオは壇上から立ち上がったかと思うと、今度はミルヒにメッセージを投げかける。同時刻に自室でニュースを聞いていたミルヒは当然、城に務めており現在のレオの様子可笑しさに気付いている者たち全員がこの意味を理解した。

「ライさん、これって…」

「宝剣に見合うもの、つまりビスコッティも賭けろって言ってやがるのか」

「そうでござるな。でも、これではまるで…」

ビスコッティの宝剣を賭けろ、つまり本気でビスコッティを侵略すると言っているようなものだった。

『ガレット、ビスコッティ両国民に告ぐ。己の国のため、自らのため、戦う勇気があるのならこの戦に馳せ参じよ!!』

そんな政治的問題を知らずにいる国民達は、レオの言葉と同時に歓声を上げ、今後の戦への期待と興奮を高鳴らせているのだった。

## 第17話 姫の決意

会見の後、ライ達は城内で先程の会見について話し合っていた。

「なあ、宝剣は国の代表の証って聞いたけどよ、そんな物を賭けの対象にして大丈夫なのか？」

「確かに問題ではありませんけど、国同士の友好の証として一時的に貸し出したりすることは時々あるのであります」

「おそらく、民衆は今回もそのノリだと思っているみたいでござるよ」

今回のレオの様子について知っている城勤めの者達、最近フロニャルドに来たばかりであるライ達だからこそ気付けた疑問ということであつたようだ。

「何か、僕達にできることはないのかな？」

「こういうのは政治家の仕事だ。戦うだけ、とか一つのことではしか役に立てないオレ達の立場じゃ何も出来なさそうだ」

「ライ殿の言う通りでござるな。姫様や騎士団長達の答えを待つしかないでござるよ」

シンクはライ達と話しながら歯がゆい気持ちで歩いている。すると、向こう側で何かがあつた。

エミリオをはじめとした騎士数名が誰かを囲んでいる。囲まれているのは騎士の鎧を着ていたが、何か様子がおかしい。

「あれ？ アイツって…」

それに真つ先に気付いたのはライだつた。囲まれていたのは、ジェノワーズの一人であるジョーヌだつたのだ。

すると、ユキカゼが真つ先に近づいて事情を聞いてみる。

「エミリオ、どうしたでござるか？」

「パネトーネ筆頭。実は、ガレットの密偵が騎士団に化けて…」

「密偵ちやうって!!」

密偵だと言われたジョーヌは真つ先に否定する。そこに遅れながらライ達も到着する。

「ねえ、そうじゃないなら何でもこの騎士のかっこうしてるの？」

「アー!? この間の…ってこれには事情があつてやな!」

ミルリーフの顔を見て過剰反応したジョーヌ。まあ、ミオン砦で自身をフルボッコにした本人に会ったのだから、仕方がないだろう。

ジョーヌは、視線をライとシンクの方に合わせて、懐から何かを取り出す。

「ウチはさるお方から、勇者シンクと委託騎士ライ宛の秘密のメツセージを持って来ただけや!!」

「メツセージ? って、矢文とか見つからない方法が他にもあったんじゃないかねえのか?」

「あ……まあそれよりも、読み終わったら付いて来て欲しいんやけど……」

それから、二人はジョーヌから届けられた手紙を読み、彼女に付いて行く。

付いて行った先にいた手紙の差出人の正体、それはガウルだった。どうやら隠れて出てきたらしく、フードを被って顔を隠していた。

「ガウル、話って?」

「当然、今回の戦についてだ。今回の戦にはどうにも納得できないことがあってな、俺やゴドウインは反対なんだよ」

ガウルが隠れてやって来た理由は、当然だった。彼の姉であるレオは一国の主、そんな彼女に反対意見のことで敵対国の関係者に相談をしたなど、知られては色々とまずいだろう。

「こっちでも、ガレットは本気でビスコッティを侵略する気なんじゃないかって話なんだけど」

「ああ。そんな由緒正しい宝を賭けの対象にするってのは尋常じゃないから、そういう思惑があってもおかしくはないからな」

「いくら姉上でも、それはねえ筈だ」

ライもシンクも城内の関係者達や自身の考えについて話すが、ガウルは真っ向否定してきた。そして、ガウルはそのまま言葉を放つ。

「ビスコッティとガレットは友好国として、何代も前からずっと支え合ってきたんだ。それを今更侵略だなんて、道義も立たなきや意味もねえ。だが、告知されて民が楽しみにしている以上、戦はもう避けら

れねえ」

「やっぱり無理か。どうするつもりなんだ？」

「ギリギリまで懸賞に出される宝剣の扱いをハッキリするように姉上に具申するつもりだ。だが、そいつが叶わずに姉上の目的がはつきりしなかった場合は、どうにかしてお前らが勝ってくれ」

ガウルが偽りのない眼でそう懇願してくる。その様子に対して、ライは彼にあることを聞く。

「聞いてもいいか？ 国同士が友好的だからって、ガウルは何でこの国に肩入れするんだ？」

「俺は、ビスコツティって国が普通に好きなんだよ。飯は美味しい人も景色もいい。姫様だって優しいしな」

ガウルは素直にそう言う。一国の王子である以上、自国が一番というのはあるのかもしれないが、それでもガウルはビスコツティが好きだよ。なようだ。

「それに、フロニヤルドの戦は楽しい興業じゃなきゃいけないんだ。参加者や支援者や見学者、戦に関わりのない国民達、それらが勝つても負けても楽しくなきゃいけない。大変な思いするのは王族だけがいい。だが今回はその筋が通らねえ。それだけさ」

ガウルが自分の思いを告げ終わると、手綱を力強く握りしめる。その様子から、両国の現在の関係についてどう思っているのかが見て取れる。

「流石に、王族にはそれ相応の思慮があるんだな」

「まあ、普段いい加減だからその分しっかりしねえといけねえってのが強いんだがな」

ライに言葉を返した後、ガウルはセルクルの向きを城と逆向きに向け、ジョーヌと二人でその道を行く。

「話は以上だ。俺がこんな話をしたってのは、城の連中には言うなよ」  
「ガウル、ありがとう」

「ああ。シンク、ライ、頼んだぜ」

去り際にシンクがガウルに先程話してくれたことの礼を言う。ガウルがシンク達にこの話をしたのは、直接会った回数は少ないながら

も競い合い、共闘もしたので通じ合っているのだろう。

すると、シンクはあることが気になったため、遠ざかっていくガウルに大声で聞いてみる。

「ガウルー！ 最後にもう一個、姫様とレオ閣下が昔は仲が良かったって聞いたけど、何か知らないー?!」

「悪い、俺もよく知らねえ。けど、二人のことならアメリカタが詳しいはずだ」

それだけを告げるガウルの後ろ姿は、次第に小さくなっていく。

そして、早速城に戻ってアメリカタから詳しい話を聞いてみることにする二人。

「シンク、アメリカタさんからはオレが聞いておいておく」

帰りの道中、ライがシンクにそう言った。二人で聞きに行くつもりだったシンクは、思わず首を傾げる。

「姫様の支えになってくれる奴は多い方がいいだろ。だからお前は姫様についていてやれ」

「……ライさん、ありがとうございます」

ライの気回しに、シンクは礼を言うのだった。

その後、ライはミルリーフを連れてアメリカタの下へとやって来て、ミルヒとレオの関係についての話を聞いてみた。

「両国の先代領主が旅立たれる前、レオ閣下は姫様をととても大切に扱ってくださいました。その様子はまるで、生まれについての姉妹のようでもありました」

アメリカタは話しながら部屋のタンスの上に飾っている写真立ての方に近づき、それを立て直す。

そこには、幼い頃のレオとミルヒの姿が映されていた。

「幼い頃から臣下と民を思いやる心をお持ちだった姫様と、武術と紋章術にとっても秀でていたレオ閣下。お二人は互いに足りないところを補い合い、大切なことを教え合っていました」

聞けば聞くほどミルヒとレオの仲の良さはハッキリとした物であ

ることが解る。ならば何故そのようになってしまったのだろうか？

「お二人が領主となられてからも目立った波乱もなく、会う機会は減っても公式非公式問わずに仲良くしていたのですが、半年前のこと」

「どうやら、ここからが異変の始まりのようだった。だが、それは予想とは違うものだった。」

「レオ閣下が、急に姫様や我々騎士団のことを気遣ってくださるようになったのです」

「気遣う？」

「ビスコツティの軍備増強を提案したり、姫様が危険な目に合うような興業は避けるように、姫様に護衛を付けるように、といった具合にとても一生懸命に話していました」

昔からそうだったのなら、優しいミルヒを心配しての過保護な行動だと取れる。だが、九にそのような行動をとるのは確かに不可解である。

「ですがその三か月後、今から三月ほど前に急に冷たくなられて、現在の様になってしまわれたのです」

「あの、いくらなんでも急すぎじゃないですか？ 徐々に避けるようになって、とかなら解りますけど…」

ライとしてもこれは不可解極まりなかった。急に心配して、急に敵対してきて、これでは相手の真意を本人にでも聞かない限り知ることなど出来そうになさそうさだ。

「ええ。ですから、そこまで急な姉妹のように思っていた幼馴染の心変わりに、姫様は領主と個人の両面で心を痛めてしまったのです。そのうえ、今回の戦でもし負けてしまつて、宝剣まで奪われてしまつたら…」

アメリカタのその様子を見て、ミルヒと国の心配をし過ぎて何があったのかを推論する余裕もないらしい。裏を返せば、それだけ仕えているミルヒを気遣っている、秘書の鏡のような人物なのだが。

その後、ミルヒが宣戦布告についての告知を国民に対して行うように、ライ達は城のバルコニーに向かっている。

「ねえパパ、さっきの話…」

「ああ。不可解極まりない話だったよな」

移動中も、先程のアメリタの話のことを考えているライとミルリーフ。しかし、いくら考えても結論が出てこない。

「やっぱり、レオ様にちよくせつ聞いた方がいいかな？」

「話してくれるかどうかは解んねえけど、それしかないか」

真相を知る手段が一番確実性に欠けるものしかない。かなり致命的な状態である。

『コーンにーちわー!!』

廊下を歩いていると、ミルヒの声が響いた。どうやら発表が始まったらしく、城に残っている者にも聞こえるようにしているため、廊下にいるライにも聞こえたようだ。

「考え事している間に、始まったか」

「パパ、急ごう」

ライはミルリーフを連れて走る。その間にも、ミルヒのスピーチが続く。始めにレオの告知についての話をし、政治のサポートをしている元老院の老人衆が驚いて椅子から転げ落ちた、など冗談を混ぜて話を行っている。おそらく、国民達の緊張感をほぐしているのだろう。

そして、ミルヒがガレットとの戦での連敗について話し出したところでライ達はバルコニーに到着した。

「悪い、遅れた」

「ライさん、どうでした？」

「不可解極まりなかった。詳しいことは後で話す」

ライはそこで話を切り上げ、ミルヒのスピーチを聞くことに専念する。

『これまでの敗戦は単に、十分に戦支度を行えなかった私の力不足です』

ミルヒがこれまでの連敗は自分の無力さによるものだと自分を責めるように集まってきた国民達に告げる。

すると、国民達が総じて「そんなことはない」など、ミルヒに非は無いという意見を投げかけてくる。これは、ミルヒがそれだけ国民達に慕われているということのようだ。

「ありがたい、みんな。でも、だからこそこれ以上負けないようにこの半年、準備を重ねてきました」

商工会が武器を用意した、若手騎士達も強くなった、そして極めつけに勇者と思わぬ助っ人が来てくれた。だからビスコツティは今まで以上に強くなったと、ミルヒは自身を持って告げる。そして、次に彼女が発した言葉こそがレオへの答えだった。

「だから、レオ閣下からの戦いの申し出を、よろこんでお受けします！」  
そのミルヒのその言葉と同時に、花火が打ち上げられ、ミルヒの答えに対して国民達は歓声を上げる。

そして、右腕を空にかざし、人差し指に差している指輪状態のエクセリードをカメラに映るように向けながら言葉を続ける。

「勿論、神剣パラデイオンと聖剣エクセリードを賭ける条件もお受けします。何故なら、私達は負けないからです!!」

ミルヒの言葉に対して、またも国民達が歓声を上げる。

「あんまり、驚かないんだな」

「さつき姫様から話を聞きましたから。そういうライさんも、初めてのわりには冷静ですね」

「アメリカタさんの話聞いたからな。おそらく、姫様も真相が知りたいんだろう」

周りに気付かれないように、ライとシンクが会話をしている。

そして、ミルヒのスピーチがクライマックスに突入した。

そして、ミルヒが締めの一語を群集に投げかけた。

「勝って、楽しい明日をつかみましょう!!」

その言葉とともに、群衆がこれまで以上の歓声を上げる。



## 第18話 開戦の日 Start the war

レオの告知から四日後、戦の当日が来た。この時、ライもシンクも故郷に連絡を取っている。

「じゃあ、そろそろ時間だから切るぜ」

『ライ、その…』

リシエルが何やら暗い様子だった。一応シャオメイの予言をライに伝えて気を付けるようにも言ったが、それでも心配だったようだ。「リシエル、オレはとりあえず死ぬつもりはねえぜ。つーか、クソ親父が帰ってきたら今度こそぶん殴るって決めてんだから死んでも死に切れねえよ」

『……わかった。でも、気をつけなさいよね』

「ああ。絶対生きて帰ってくる」

ライが通信を切ると、丁度シンクもレベッカへの連絡を終えたところだった。

「じゃあ、行くか」

「はいー」

そして二人はセルクルに乗り、颯爽と戦場へと向かって行く。

ライ達がフィリアンノ城に到着して戦の準備を澄まし終えたところ、城の前には一般参加兵や騎士団の面々が既に集まっていた。よほど今回の戦が楽しみだったのだろう。

『みなさーん!!』

火花が上がったと同時に、ミルヒがバルコニーから参加者達に呼びかける。

『朝早くから、こんなに集まってくれてありがとうございます!!』

ミルヒの呼びかけに対し、興奮した参加者達は歓声を上げる。よほど今回の戦が楽しみだったようだ。

『今日はガレットとの大戦ですよー! 昨日はちゃんと休めましたかー?』

ミルヒが大声で集まった参加者達に呼びかけながらそこにマイクを向ける。それと同時に返事するように参加者たちの「わあああああああ!!」という歓声上がる。

それを聞いたミルヒが「うんうん」と頷き、次に移る。

『朝ご飯はちゃんと食べましたかー?』

またも答えるかのような歓声上がる。

その後、ミルヒは一般参加者達に、隊列を組む際は騎士団の指示に従うように前もって注意しておき、そのまま本題の今回の戦の説明に移る。

『今回の戦場は、両国の国境付近です』

ミルヒが戦場の位置を伝えると、彼女の背後に置いてあった映像板にその近辺の地図が映され、それが紋章術によって拡大されて下にいる参加者たちにも見えやすくなった。

『私達の本陣はここ、スリーズ砦。ここは主に騎士団の守備隊と後方支援隊の皆さんで守ります』

今度はスリーズ砦から矢印が伸びる。どうやら進軍ルートを示しているようで、ミルヒが詳しい説明を入れる。

『主力隊はチャパル湖沼地帯から、溪谷アスレチックを抜けていくルートを進む。そして、先駆けの二番隊はそれらの難所を最速で抜けて、ガレット軍の本陣であるグラナ浮遊砦に一番乗りします』

進軍ルートの説明を終えると、映像板の使用を終了する。

『今回は遠征戦になりますので、進軍は結構ハイペースです。戦に慣れていない方、付いて行くのが大変な方、気分が悪くなった方はすぐに同行している救護隊に連絡してくださいね』

最後の注意事項の最中、映像板が再び起動し、その救護隊の姿を映す。その際映っていた救護隊員は男女一人ずつおり、男性隊員はノリノリでバイサインなぞしている。

ハッキリ言っただけ。

『さて、それでは隊列を組みますよー! 移動、開始ーっ!』

そして参加者達のテンションが最高潮に達した状態で、ビスコッティ陣営は移動を開始したのだった。

それから、ミルヒも本陣の移動を始めるようで、元老院の面々達に留守を任せている。その際、そばにミルリーフとリコツタの姿もあった。

今回もミルリーフはライと別行動のようだが、それだけ大人になったということだろう（戻ってきたらその分だけ甘える、という線もあったが）。

「姫様、主席、ミルリーフちゃん。騎車を出します。ご準備を」

「二はい二」

リゼルに呼ばれて三人は元気よく返事をする。ミルリーフの馴染み具合は更に強まったようだ。

「例の作戦ですけど、準備は大丈夫ですか？」

「バツチリであります」

「さすがリコ」

三人が小声で何かを話しており、それに使うものなのかリコツタが木の葉を二枚取り出してミルヒとミルリーフに見せる。

そして、そのあとで準備を終えて移動を開始した。

『行軍は万事順調。我らがミルヒオーレ姫様の騎車は、騎士達に守られて静かに進んでいます。姫様の愛騎ハーランも、元気についてきております』

それからして、スリーズ砦に移動中の騎車をビスコツティの放送局が中継している。ちなみに、同行しているアナウンサーは、レオの告知のニュースを伝えたパーシーである。

すると、パーシーがあることに気が付いた。

『おお!? 姫様が手を振ってくださいます! そしてその向かいの席には、ビスコツティに現れた新たなアイドル、ミルリーフちゃんも一緒です!! 今回はお父さんのライ選手とは別行動のようですが、そのおかげでこんなにも豪華なツーショットが取れました!! ありがとうございます!!』

ミルリーフは別にミルヒのように歌を歌ったりはしていないのだが、フロニヤルドに来てからというもの、その愛らしさとライのため  
に一生懸命な健気さから、勝手にアイドル扱いされて高い人気が出た  
のである。やはり幼女は人気が出るのだろうか？

その一方、移動中の騎車を見下ろす一つの影があった。

「こんな急襲、戦の道義に反すること。卑怯者との誹りを受けるのは、  
私一人でいいのですが…」

レオのお側付で近衛戦士団を率いる、ビオレ・アマレットが妙に芝  
居がかった口調で呟いている。部下の戦士団員達を連れて、不本意な  
がら砦への奇襲を仕掛けるようである。

そんな彼女に、後ろに控えていた団員達が語りかけてきた。

「そんなことを仰らず、我々にもお手伝いさせてください」

「我ら近衛戦士団、いっだってビオレ姉さまの御供を。ね、みんな？」  
『はい!!』

どこまでも付いて来てくれる部下達の言葉に、ビオレは喝を入れら  
れる。その時の彼女の顔からは、先ほど見えていた陰りが消えてい  
た。

「わかりました！ 本日最初の任務は、潜入と貴重品奪取。近衛戦士  
団一同でビスコッティ本陣へ密かに潜入、ミルヒオーレ姫様の手から  
聖剣エクセリードを盗み出します!!」

一方こちらは、ライやシンク達がいる進軍チーム。ブリオツシュを  
先頭に、ライとシンク、エクレールとユキカゼがその後ろに並んでお  
り、後ろにはその他の騎士や大勢の一般参加者が続いている。

「エクレールは勇者殿達とまた一緒に組でござるな」

「不本意ながら、私がアホ勇者達の面倒を見ないといけませんので」

「オイ！ シンクはともかくオレまでアホってどういうことだ!!」

「ライさん、僕はアホ前提ですか!？」

「お前なあ、こっち来る直前に階段の踊り場から飛び降りたとか言っ  
てたよな。それでアホじゃなかったら何なんだよ?」

「まだ引きずってたんですね…」

コントのようなやり取りを目の当たりにして、ユキカゼが笑いを堪えている。まあ、緊張しすぎて戦いに集中できないよりはいいだろう。

「まあ、この様子なら連携の方は大丈夫でござるな」

「はい」

「後の懸念は、魔物だが…」

ライ達の様子から戦闘面での心配は無さそうだと判断したブリオッシュだが、魔物という単語を口にした際に普段の気楽そうな声色がああ、のディガルドのこともあって、鳴りを潜めている。その点についてライは不意に気になった。

「ユキ。魔物って偶に聞くけど、どういう存在なんだ？ なんとなく邪悪な感じがするんだが…」

「そうでござるな。もしもに備えて説明しておいた方がいいでござる。親方様、よろしいでしょうか？」

「いいでござるよ。ああ、ディガルドのこともあって、ライ殿には帰るまでは手伝わってもらう約束でござったしな」

そこから、隠密隊コンビによる魔物の説明が始まった。

「魔物というのは、大地のフロニヤ力を喰らって成長する、禍々しい姿の存在。太古の時代には、この魔物によって国が滅ぼされたこともあったのでござる」

「基本的には邪悪な存在でござるが、土地神がなんらかの悲劇に見舞われて魔物化することもあるから、一概に邪悪とは言えないのでござるよ」

魔物がいかに危険な存在かをここで理解するライ。すると、偶然聞いていたシンクが、ここで新たな疑問を抱く。

「あれ、なんでいきなり魔物なんて物が出てくるんですか？ かなり飛躍しているような…」

「レオ姫も星詠みが出来るのでござるが、それに魔物関連の何かが映ったのが豹変の原因かもしれない、ということを経士団長と以前に話したのでござる」

「そうでなくとも、あのデイガルドとやらが生き延びて力を利用するという懸念もあるので、警戒しておいて損はない、というわけでござる」

もし、今回の一件で魔物が絡んでいたら……そう考えるとシンクの表情が若干青褪める。ライもとりあえず、気を引き締めておく。

「でも、守護の風も優しく天地に満ちて、コノハも先程から怪しい気配は何も感じていないそうでござるから、安心するでござるよ」

ユキカゼがライ達を安心させようと話す。ちなみに、コノハとはユキカゼの膝の上に載っている子狐の名前のようだ。

↳ 指定地に到着

『さあ！ 午後に入って昼食も終えた、ビスコツティ、ガレット両軍。現在、チャパール湖沼地帯で両社とも戦闘開始の合図を待っております!!』

アナウンスが響く中、ライ達も敵軍も臨戦態勢に入っており、いつでも戦闘可能な状態である。

そんな中、エクレールがライとシンクに呼びかける。

「いいか？ 開始の合図が鳴ったら、最短ルートでその先を抜ける。開始直後は、皆橋やフィールドの確保に躍起になるから、我々には目もくれぬ筈だ」

「理に適ってるな。了解」

ライ達が了承したのを確認すると、エクレールは後ろに控えている部隊に呼びかけた。

「砲術師隊！ 砲撃はしないでいいので、とにかくエルマール主席を守って、しっかりと付いて来てください!!」

『はい（であります）!!』

なぜここで戦闘関連ではさほど重要でもないリコツタを守るのか、見学や中継を視聴している者には理解できなかった。「何かの作戦に参加するため」だろうと自己解釈で終わらせたものが大半だったとか。

それから、実況席のアウンサー達の案内が入り、そのあとですぐにカウントダウンに突入する。

— 5 —

— 4 —

— 3 —

— 2 —

— 1 —

— ヒュ〜〜、バー〜〜〜ン —

そして、花火が打ち上げられた。

『開戦!!』

「全軍、進めー!!」

「ガレット戦士団、突撃いい!!」

開戦の合図と同時にロランとガレットの騎士団長バナードが突撃を指示、それに合わせて一般兵達が一斉に突撃していき、激突した。

「勇者、ライ! 一気に駆け抜けるぞ!!」

「了解、どんと来い!!」

「オーケー、親衛隊長!!」

ライ達はそのままセルクルで兵たちを無視して一気に拠点に向かうとするが……

「ひゃっはー!!」

「獲物がいたぜー!!」

「全員で囲めえええ!!」

いきなりガレット兵達がこちらに向かって飛びかかってきた。心なしか、悪人顔が目立つ奴ばかりが近づいてきた。

「ちよ、話が違う!!」

シンクは当然、ライも声は出していないが驚いている。エクレールも予想が初っ端から外れただけに困惑気味だった。

「弓、放てえええ!!」

そのまま敵に囲まれた状態で、ライ達は矢の雨を放たれて窮地に追い込まれてしまう。

「勇者!!」

「合点!!」

エクレールに呼ばれたシンクは、パラディオンを棒から短槍に切り替え、二人で紋章砲を放つ準備に入る。

「裂空・ダブル十文字!!」

シンクはエクレールの十八番である裂空十文字をコピーして使ったのだ。もともとセンスはあり、このところ毎日エクレールと特訓を重ねたため、シンクの紋章砲はエクレールが使ったものと同レベルのものになっていた。

そんな二人が放った紋章砲は、飛んできた矢を一本残らずに撃ち落とし、その余波で敵の一般参加者をひるませた。ただし、その余波が味方まで巻き込んだのが弊害とも言えた。

「死ねー、勇者ーー!!」

「うえ、僕ですかー!!?」

飛び掛かってきた敵兵達に物騒なことを言われて絶叫してしまうシンク。だが、彼の危機はすぐに去るのだった。

「ユキカゼ式弓術、一之矢・花嵐!!」

ユキカゼが弓で放った紋章術を放つ。それによって放たれた矢は、輝力で作られた金色の輝きを放つ風と花びらを纏っている。それによって、シンクに迫ってきた敵達はまとめて吹き飛ばされた。

「勇者殿、油断禁物でござるよ」

「ユツキー、ありがとう!」

一方、ライとエクレールも敵達に囲まれてしまう。

「私達をここで倒しても、大したポイントにはならんぞ」

「お前らだつてリタイアはしたくねえだろ? だったらもつと弱いのかから倒して行けつての」

「そうはいかねえな、垂れ耳隊長さんと若お父さんよ」

ライとエクレールがとりあえず、迫ってきたガレット兵達に忠告しておくが、相手の方はそれを聞き入れる気はないようだ。ちなみに、二人ともあまりうれしくない呼ばれ方をされて、眉をひそめている。

そして、相手の方からある事実が語られた。

「あんた等はともかく、勇者をぶつ倒してパラディオンを手に入れた



ら」

「レオ閣下から褒賞がたんまりと出るって通達が出ててよお」

「何だと？」

「そういうわけだから、あんたたちの方が邪魔なんだよ」

すると、ただでさえ悪人面の連中が集まっている中、特別悪そうな顔の二人が武器を向けながら挑発してくる。

片方は眼帯、もう片方はやたらと細長いモヒカン頭で、二人そろって目つきが悪かった

「だが、せっかくなんで行きがけの駄賃にサービスカットでも提供してもらおうか!!」

「ついでに、あんちゃんもかなりの手練れだしな。ぶっ倒して名声も貰おうじゃねえか!!」

本来なら多勢に無勢、勝ち目はないと普通は思うだろう。

だが…

「エクレール、舐められてるな」

「確かにここのところ、お前や勇者が活躍してばかりで私は比較的地味だし、まだ未熟だということも痛感した。だが…」

すると、エクレールはたまたま落ちていた槍を拾って、振り回しながらそれに輝力をため込んでいく。

「それでも、このエクレール・マルティノッジ！」

そのまま槍で周りにいた敵を全員まとめて薙ぎ払う。攻撃を喰らったガレット兵は全員がけものだまに変化した。

そしてエクレールは、そのまま槍を逆手に持ち替えて、槍を持った右腕を上げながら体をひねる。

「こんな奴らごときに負けはしない!!」

そして、その槍をやり投げの要領で思いっきり投げる。

投げられた槍は、その先にあった敵の一団の中心部で大爆発を起こし、その一団を全滅させたのだった。

「エクレー！ ライサーン！」

すると、シンクがこちらに向かってかけてくるのがライ達の視界に入った。

「マズい。僕、というかパラディオンが狙われてる」

「らしいな。だが、いまさら作戦も変えられないから、念のためパラディオンの武器化はやめておけ」

「うん。だから、武器も拾ってきた」

そういうシンクの手には、ガレット兵が持っていたと思われる、薙刀のような刃の槍が握られていた。

「シンク、パラディオンを奪われるのはマズいから、とりあえず雑魚はオレとエクレールに任せておけ」

「了解しましたー！」

そして、そのままライ達は進軍していく。

その後の戦況は、ブリオツシユとユキカゼのコンビによって、ビスコッテイが圧倒的に有利となっていた。大陸最強とその補佐の名は、伊達ではないということだろう。

---

一方、ビスコッテイ本陣のスリーズ砦にて。

ミルヒは、砦内の玉座に座っているが、別の場所で待機しているのか、ミルリーフが見当たらない。

「姫様、先程ガレットより使者が訪れ、至急姫様にお伝えしたいことがあると」

その報告を聞いたミルヒは、出入り口の護衛兵と顔を見合わせ、頷く。通してもよいということのようだ。

「わかりました。お通ししてください」

「かしこまります…」

すると、了解の返事と同時に数人の女性がいきなり入り込み、内部で待機していた兵達を次々と落としていく。

予想外の事態にミルヒも驚いていると、一人の女性が彼女に近づいてきた。

「姫様。無礼の程、お詫びの仕様もございません。ですがどうか、我々の願いをお聞き入れ下さい！」

襲撃してきた女性達は近衛戦士団で、近づいてきたのは、そのリー

ダーであるビオレあった。やはり決心したとはいえ、後ろめたい気持ちが強かったらしく、跪き、奇襲のことを謝罪しながら宝剣の引き渡しを要求しようとする。

「あの、ごめんなさい」

いきなりミルヒが謝ってきたので顔を上げるビオレ。すると、いきなりミルヒが煙に包まれる。

「自分、姫様じゃないであります」

煙が晴れると、そこにいたのはミルヒの服を着たりコツタだった。彼女の頭頂部には、先程ミルヒに見せていた葉っぱが乗っている。

突然の事態に驚いていると、いきなり背中に何かを突き付けられ、同時に剣も向けられている。

「動かないでくださいね」

「お姉さん、ズルしちやったね。でも、こつちもだましちやつてごめんなさい」

後ろにいたのはミルリーフで、突きつけているのは杖だった。なんでも、ライの剣を新調するのと一緒に注文しておいたミルリーフの召喚術使用時のための武器なのだとか。

剣を向けていたのは、なんとメイド長のリゼルだった。普段通りの糸目で笑顔を絶やさない表情が、今回は恐ろしくも見える。

ふとビオレが周りを見渡すと、ほかの近衛戦士達もメイドたちに抑えられて無力化されていた。観念したビオレは、両手を上げておとなしく降参する。

「まあ、お茶でも出しますので、ゆっくりとお話を聞かせてもらいましょうか？」

リゼルは、慣れた手つきで剣を回転させた後に鞘に納めて言う。

「リコ、合図出して」

「わかったであります」

ミルリーフが言うと、リコツタは用意されていた打ち上げ花火の装置のスイッチを足で踏み、合図用の花火を打ち出す。

そして、その合図をライ達が確認している現在。

「まさか、本当に本陣への奇襲が…」

「やっぱこの件、ただ事じゃなかったんだな姫様」

ライに姫様と呼ばれたリコツタの姿が煙に包まれ、案の定だがこちらでもリコツタの服を着たミルヒだということが判明した。

「これで確信が取れました。レオ様は何か隠し事があります」

「じゃあ、さっさと目的の砦に行くぜ。姫様も閣下の真意が聞きたいんだろ？」

「ですね。行きましょう」

ライに促されてミルヒはセルクルを走らせ、ライ達も三人で彼女を囲むようにしてセルクルを走らせた。

ミルヒは、レオが卑怯な真似をしてでも宝剣を欲しがると理由を知りたかった。

ビスコツテイの主としても、エクセリードの主としても、そしてミルヒオーレ一個人としても。

ライもシンクもエクレーも、そんな彼女の気持ちに答え、ともにグラナ浮遊砦に陣取っているレオのもとへ急ぐのであった。

## 第19話 勇者と店主の砦攻め Fortress

crasher

「レオ様」

ガレット陣営の拠点であるグラナ砦にて、レオに話しかける一人のメイドがいた。彼女の名はルージュ・ピエスマンテといい、本来はガウルに仕える近衛メイド長の一人なのだが、今回はレオについている。レオはあの、ミルヒの死の予言についてのことを、砦に乗り込んだビオレを始めとした極少数の家臣達に話しており、ルージュもその一人なのだ。

そして、今回の褒賞に敗戦国の宝剣を貸し与えるというのは、予言で死ぬのは「エクセリードとパラディオンの持ち主」であったということから宝剣をシンクやミルヒから遠ざけるためのものであったのだ。

「すみません。ビオレ姉様と近衛戦士団は任務に失敗、そのままスリーズ砦内に捕まってしまったと」

「そうか。ガウルはどうした？」

報告を受けたレオは、大した反応も見せずにガウルの様子を聞いてくる。

「ご命令通り、ゴドウィン将軍やジェノワーズを連れて、砦攻めに向かいました。ただ、ガウ様達は今回の戦にあまり乗り気ではいらっしやらなかったもので…」

「かまわん。せいぜい派手に暴れて、民と兵達を楽しませてやればいい」

そして、レオはルージュに聞こえない小さな声で呟いた。

「今回の戦、儂が一人で勝つ」

---

それと同時刻、チャパル湖沼地帯にてブリオツシユは本陣を守るために、そこにつながる橋に陣取って迫ってくる兵達を次々と蹴散らし

ていくのだった。そして、先程一斉に端を乗り越えようとしていたガレット兵達の半数以上を一人で薙ぎ払い、そのまま生き残った兵達も恐れをなして逃げ去っていくのだった。

「ダルキアン卿！」

すると、一人のビスコッティ騎士がブリオツシユに駆け寄ってくる。

「騎士団長より、伝令がございます！」

「応」

「ダルキアン卿と、パネトーネ筆頭の三番隊は、先行二番隊の応援に行つて欲しいとのこと」

「心得た」

伝令を聞いた後、ブリオツシユは目前に広がるガレットの軍勢を見渡す。

「敵陣は薄く伸びているな。駆けて抜けるが早かろう」

そして、それをユキカゼと三番隊の面々に報告し、一気にライ達がいる二番隊に合流しに行こうとするが…

「ダルキアン卿、お待ちあれ！」

三番隊に立ちふさがる軍勢の姿が現れた。そして、その先頭に立っているのは、ガレットの將軍の一人であるバナードであった。

「バナード將軍、久しいのう」

「ご無沙汰しております」

黒いセルクルに跨り、ランスで武装しているバナード。ちなみに、レオから詳細を聞いた極少数の一人でもある。

「失礼ですが、ここから先へはお通し出来ません」

「それは一騎打ちのご提案と受け取ってよろしいか？」

「ご無礼でなければ、是非」

そして、そのままブリオツシユとバナードが一騎打ちを始めようとする。

だが…

「その勝負、待った!!」

どこからともなく槍が飛んできて、二人の間にそれが激突すると同時に聞き覚えのある声が聞こえた。

「バナード！ その一騎打ち、私が受けよう!!」

槍を投げてきたのは、ロランであった。

「ダルキアン卿、ここは私に任せて行ってくれ」

槍を回収しながらロランはブリオツシユに言う。

「心得た。三番隊、続け!!」

ブリオツシユはロランに言われたとおり、彼にバナードを任せて三番隊を連れて先を急ぐのであった。

「やれやれ。君との一騎打ちなんて、何年ぶりになるやら?」

「私達が騎士団長の職を拝命してからは初めてだ。もう三年以上になるかな」

ブリオツシユが去った後に、二人はそんな、友人同士のような他愛もない会話をする。それもその筈、二人は実際に友人同士なのだ。しかも、プライベートでは季節の贈り物を届け合うなどをするというほどの仲なのである。

ついでだが、念のために言っておこう。贈り物の届け合い、というと一部の性癖持ちが『いかにもな感じの仲』と受け取りそうだが、二人にその気はない。というか、バナードは既に奥さんがいるのでちゃんと女性にも興味があるのは明白であった。

まあそれは置いておき、ロランとバナードの一騎打ちが始まるのだった。

一方こちらは、ビスコツティの拠点であるスリーズ砦。ここは現在、ガウル率いる部隊と、彼の臣下であるジェノワーズやゴドウィン將軍の攻撃によってピンチとなっていた。

輝力の扱いに長けたガウルの必殺技、ジョーヌやゴドウインのパワー、ベールの弓兵を率いての一斉射撃、ノワールのスピードを活かした不意打ちなど、能力のバランスが取れており、しかもそのいずれもが強力であった。今回の戦はレオが先ほと言ったように、ガウル達

は乗り気ではなかったのだが、ミルヒが砦に不在という報告を聞いて心置きなく責められるということからの結果だった。

すると、砦の上部から何かが突き出してきた。

「主席、行けそうですか？」

「はい！ 風も追い風、バッチリ行けそうです！あります!!」

「ピギイ！」

どうやらそれは発射台のようで、上にはリコッタと竜形態のミルリーフを乗せたハーランの姿があった。そして、その周りには弓で武装したメイド隊が数名ほど待機している。

どうやらライ達と合流しに行くらしく、メイド隊はその援護のために待機しているようだ。ちなみに、リコッタはミルヒのドレスのまま出撃するわけにもいかなかったので、メイド隊の制服を借りている。

「ハーラン、一緒に姫様のところに行くでありますよ」

リコッタの言葉に頷いて答えるハーラン。

すると、リコッタが右手の甲に紋章を出現させる。

「飛翔騎ハーランと学院砲術師リコッタ・エルマール、そして虹翼の守護竜ミルリーフ」

「ピィイ!!」

リコッタが名乗りの際、ミルリーフの分の名乗りも代弁する。そのあと、リコッタが輝力をハーランに流し込んだ。何が始まるかと思っていたら、

なんとハーランの翼が大きくなったのだ。飛翔種というだけあって、一定の条件（輝力による強化など）で飛行能力が身に付くようだ。そして、その状態でハーランが発射台から飛び出した。

「出撃であります!!」

「ピギィイイ!!」

そのままハーランが飛び立ったのを確認したメイド隊は、弓を構えて地上にいるガレット兵達を狙う。

一方井、そのガレット側では…

「行かせません」



ベールが弓隊総出で迎撃しようとしていた。そして、飛び立つハーランの姿を確認したと同時に一斉に矢を放った。

「あわわ!? 危ないであります!」

メイド隊が援護射撃で飛んできた矢を撃ち落とし、ハーランも矢を避けようとするが、飛んでくる矢の数が多いため状況は厳しかった。すると、そこで動いたのはミルリーフだった。

「ペイー!」

ミルリーフが鳴くと、自身の体内に溜まっていた魔力を練り固めて、いくつかの塊を作りだす。

「ピギイ…」

すると、ミルリーフが作った魔力の塊が、彼女たちを乗せているハーランの周りに、後光のような配置に並んだ。

「ピギャアア!!」

ミルリーフが鳴き声を発すると、それが合図となって魔力の塊から無数の光線が放たれた。その光線は、飛んできた矢を全て相殺し、そのまま地上の敵達に降り注ぐ。それを喰らったガレット兵達は、一斉にけものだまへと変化する。

攻撃の終了後、ミルリーフは人型形態に移行する。

「ミルリーフ、すごいであります!!」

「ありがとう、リコ。でも、まだまだこれからだよ」

そういうとミルリーフは、サモナイト石を取り出す。そして、それに魔力を込め始め……

「あゝ、リコちゃんを落とし損ねました…」

同時刻、弓兵を率いていたベールはガツカリしていた。まあ、自分だけでなく率いていた全員の攻撃が不発に終わった上に、その部下たちが半分近く倒されたのだから、当然だろう。

「ベール隊長。上から何かが…」

「はい?」

弓兵の一人に指摘されて上空を見上げると、何かがこちらにめがけて落ちてきた。



完全にハーランが視界から消えた後、ガウルは眩く。そして、ノワールと共に再び戦闘に戻るのだった。

その頃、ライ達はグラナ砦へと突き進んでいく。

『はい、こちらグラナ浮遊砦前！ ビスコッティ二番隊、いよいよ砦のゲートキーパーとの交戦距離に入ります!!』

ビスコッティ側の報道陣による実況があたりに響く。すると、その報道陣が気になる単語を発した。

『本陣を守る部隊には、レオ閣下の作戦により【特選装備部隊】が配置されています!!』

「特選装備部隊？」

ライもシンクも思わずその単語を復唱する。名前からして普通の敵と違う兵が来るのは明確だった。

「姫様、皆の中央に」

「あ、はい！」

すると、エクレールはミルヒを下がらせ、同行していた他の騎士たちに指示を出す。

「開放陣形、散開前進！ 姫を守れ!!」

『はっ!!』

エクレールの指示に合わせて、騎士達は広がり、ミルヒを守るように彼女を囲いながら前進する。

その一方、ライ達は向こうで攻撃の準備をしている特選装備部隊の姿を見た。

「なるほど、リコッタみたいに大砲を使うのか。それに銃兵もいる」

「銃に大砲!? ライさん、僕達メチャクチャ不利じゃないですか!」

シンクの言うとおりだ。現在進軍しているメンバーの中で飛び道具が使えるのはライだけ、紋章砲を使えばそうでもないだろうが溜めの時間が必要なのでこの状況では不利であった。

すると、ライがある提案を出す。

「シンク、確かエクレールから防御技を教わっていたよな」

「え？ あ、はい。確かに教わりましたけど…」

「だったら、それで防御の方を頼む。オレは新調してもらった紋章を試すついでに攻撃に回る」

「…わかりました！」

シンクは了承し、左腕に輝力を収束させて例の紋章術を発動した。「ディフェンダー!!」

技名を叫ぶと、シンクの全身を隠しきれるような巨大な盾が形成される。そして、その盾を使って飛んできた銃弾からミルヒや他の味方を守る。

砲弾も同時に飛んでくるが、弾が大きい分目視しやすいこともあって、こちらは避けるのが容易だった。

だが、今度はその砲弾が明らかにシンクを狙って飛んできたのだ。やはり先程の敵兵達同様、直接パラディオンを奪おうという魂胆なのだろう。だが、シンクはそうなるだろうと予測していたのかいたって冷静であり、パラディオンの棒形態を発動する。そして砲弾が飛んでくるタイミングを見計らい…

「たああああああああ!!」

なんと、シンクはバツティングの要領で棒を振り、そのまま砲弾を打ち返してしまう。これには戦慣れしていないミルヒは当然だが、ライもエクレールも驚きを隠せずにいた。

『何いいい!! 勇者シンク、殺人砲弾を弾き飛ばしたあ!!』

実況のパーシーも驚愕している。このような報道をしているあたり彼女は始めとしたアナウンサーは戦の記録などにも詳しいと思われるため、シンクの技は何気にフロニヤルド初だったようだ。

「ライさん、あとはお願いします!!」

「あ、ああ！ 任せろ!!」

どうにか心を落ち着かせたライは、そのまま攻撃のために一気に前へ乗り出し、早速紋章を展開してみる。

紋章のデザインは、ライ曰く『ミルリーフと剣』だそうで、至竜を思わせる竜のシルエットの前に、バツ字になるように交差させた剣が

描かれたデザインである。ただし、今回は銃を使つての紋章砲のよう  
だ。

(イメージは、ミサイルとかいうロレイラルの兵器。技名もそれを使  
う召喚術から取つて…)

ライにとつての強力な攻撃はやはりリインバウムの召喚術のよう  
で、それを今回のイメージに使つたようだ。ライはとりあえず、技名  
を叫んだ方がパフォーマンス的にもいいかも知れない、と空気を讀ん  
で咄嗟に技名を考える。どうやら、リシエルの使う召喚術から名前を  
取るようだ。

そして、その技名は…

「フアランクスキャノン！」

ライの構えた銃から、ミサイルを思わせるシルエットをとつた輝力  
の塊が、四発ほど連続して発射される。そして、発射されたそれが飛  
んでいき、特選装備部隊に激突して爆発した。

爆発によつて、特選装備部隊の大半はけものだまへと変化し、その  
ままダウンしてしまうのだった。

「うわあ惨い……」

「あいつの世界の技のイメージか？ 一体どんな世界だつたんだ…」

まあ、異世界から巨大な機械兵器やら武芸に優れた鬼やらが召喚さ  
れてくるような世界だ。今回のような技はいくらでも作れそうであ  
る。ちなみに、今回の紋章砲の元になったのは、「機神ゼルガン」と  
いう召喚獣だ。この召喚獣は合体機構を持つた二体のロボットなの  
だが、今回はその片割れが使うミサイル攻撃「フアランクス」を名前  
とイメージに使つたのだ。

「……まあいい。我々はこのまま残敵を掃討、そのまま砦に突入する  
ぞ!!」

『おおおおおおお!!』

エクレールは気を取り直して、味方の士気を挙げてそのまま斬敵の  
掃討に乗り出すのだった。

『すごいすごい！ 勇者シンクと委託騎士ライ、ゲートキーパーを見

事に撃破しました。先程の騎士エクレールにも引けを取らない強さだ!! そんな三人によって砦への潜入が成し遂げられようとしています!!』

かなりノリノリで実況するパーシーだったが、ふと空を見上げるとあることに気が付いた。

『お天気代わりでしょうか？ 東の空から、若干雲が流れてきました』その雲は雨雲のように暗い色をしていた。まるで、これから起こる災厄を表しているようだが、このときはあの予言を見たもの以外に気づく者はいなかった。

いや、もう二人ほどいた。

「へえ…この気配が旦那の言っていた魔物つてやつか」

ディガルドと、彼を治療した天使と悪魔の両方の翼を持った男の姿があった。

「ああ。俺の見立てが正しければ、さっき言った通りの方法で操れるはずだ」

「了解。じゃあ、旦那にはいくら感謝しても足りねえけど、ありがとうな」

「むしろこちらが感謝したい気分だ。表立って動けない以上、俺の悲願はお前の侵略行為によって果たされるのだからな」

「オーケー、オーケー。じゃあ、俺が支配した後のフロニヤルドを楽しみにして待つてな」

そのまま飛び去っていくディガルドを見送り、男は邪悪な笑みを浮かべているのだった。

## 第20話 災厄、降臨

ライ達が砦に突入しようとしていたその頃、レオは砦のてっぺんにある簡易テラスで仮眠を取っていた。そして、その様子を何やら悲しそうな目で見ているルージュがいる。ミルヒが死ぬかもしれない予言、それが急に悪化したというため、精神的な疲れがたまっていたのだろう。そんな中でも無理をしている彼女を憂い手の表情のようだ。そんな中、レオはある夢を見ていた。

く星も見えぬ曇天に、嫌な絵が見えよるく

そこに映っていたのは、曇り空の中で宙に浮かんでいる武闘台のよな場所。どうやら、グラナ砦の武闘台のようで、その中央にたたずむ人影あった。

その人影は顔が陰になっていたが、どうやらミルヒのようである。そして、そのミルヒの隠れている顔の、目の部分から何やら液体が流れていく。どうやら泣いているらしく、涙を流していたようだ。

く泣くな、泣かんでくれミルヒ。お前を悲しませるようなことは…お前を苦しめるものは…

そのレオの言葉が響いたと同時に、血飛沫と瓦礫が飛び散った。

レオの目の前には、大きく抉られた武闘台があり、その部分に沿って右半身が丸ごとなくなったミルヒの姿があった。左半身だけとなったミルヒは悲しみに満ちた表情で絶命しており、そのまま抉られた箇所から地上に向かって落ちていく。

そして、絶望に染まり切った表情のレオの目の前には、ミルヒを殺した者の姿があった。

それは、魔人だった。全身に武者甲冑を纏い、側頭部から生えた二本の角、両目とは別に額から生えた巨大な目玉、どす黒い色をした蝙蝠のような翼、先端部分が三又に裂けた鋼鉄で覆われた尻尾、そして





『グランヴェールもエクスマキナも、ここにある。これを奪えば、ポイント的に貴様らの勝利は確定じやろうな』

レオの誘うかのような口ぶりにライ達は思わず警戒する。

『無論、一人ずつでは相手にはならんだろうから、二人か三人でまとめかかってきても構わん。儂はその時に貴様らを倒してパラディオンを奪い、そのままミルヒの陣をぶちのめしに行く。さあ、上がってこい!!』

最後に敵意を見せつけるかのようなことを言っただけを飛ばし、通信が終了した。

「あのみなさん」

「姫様、本当に大丈夫なんですか？」

その時、ミルヒはライ達に声をかける。シンクの反応からして、彼女が何をしようとしているのか知っているようだが……

その頃、レオはというと……

「レオ様……」

「問題ない。待っていれば勇者達が何も知らずにパラディオンを運んでくるじやろう。それで少しは星の運命も変わるかもしれないな」

心配するルージュに、大丈夫だということを知らせるレオ。だが、やはりその表情には陰りがあった。レオは武闘台の端によって、気を紛らわすように戦場を見渡す。先程から曇っていた空がさらに黒く染まっており、レオは並々ならぬ不安を感じ取っていたのだった。

そして昇降機が武闘台に到着。扉が開いて中から出てきたのは

……

「お邪魔いたします、レオンミシエリ閣下」

ミルヒだった。ライもシンクもエクレーもおらず、彼女がたった一人でレオのもとにやってきたのだ。ドレス調の鎧を纏い、バスター

ソードのような大剣を携えている。ミルヒは完全戦闘態勢に入っていたのだ。

レオは戦場に直接乗り込まないであろう人物、しかもそれが守ろうとしている幼馴染であったため、激しく動揺している。

「レオ様が国の宝剣をかけて戦うというのなら、私も宝剣を手にこの場に来なくてはいけないと思います、失礼ながら勝手に推参いたしました」

ミルヒの言い分は尤もだったが、レオ自身はそれについての予想を全くしていなかったようだ。幼馴染で彼女のことをよく知っていることから、普段の守られている立場だったのが今もそのまま残っているとも思っただろう。よく知っているが故に固定概念が染みついたという弊害だった。

「レオンミシエリ閣下、どうかお聞かせください。この戦の本当の理由、レオ様のお心の真実の在り処を！」

ミルヒがレオに対して問い詰めながら右手を差し出すと、その手にはエクセリードだけでなくパラディオンも指輪の形で彼女の指に嵌っていた。それによってミルヒが本気であることをさらに実感したため、レオの動揺はさらに激しくなった。

すると、いきなりレオのそばで控えていたルージュが駆け出す。ミルヒに近づきながら懐からナイフを取り出し、それでミルヒに刺突を放ってきたのだ。

だが、ミルヒもある程度の戦闘訓練を受けていたのか、咄嗟に剣を構えてその攻撃を防いだ。

「ルージュ！私は今、レオ様と！」

「お叱りは後でいくらでも！ですが、今は説明を差し上げている時間がございます！」

ルージュも辛そうな様子で告げると、そのままミルヒの剣を弾いて彼女に隙を作る。そしてその隙に宝剣を奪おうとミルヒに手を伸ばそうとする。

だが…

「きゃああっ！」

いきなり指輪の片方、エクセリードが強い光を発し出し、それによってルージュが弾き飛ばされた。

やがて光が晴れると、ミルヒの右手には先程の剣ではなく、ピンクを基調とした短剣が握られていた。どうやらこの土壇場でエクセリードが覚醒したようだ。

「宝剣が必要ななら、事情を説明していただければ、いくらでもお貸しします。なのに、どうしてレオ様は私に何も教えてくださらないのですか？」

ミルヒはそう言いながら、意思表示の行動としてエクセリードをレオに見せるように構える。その様子からレオの表情はさらに曇っていく。

「昔はあんなに仲良くしてくださいって…いつも優しくしてくださいって…宝剣のことだけじゃないです…このところの戦のことだって…」

言葉を紡ぐごとにミルヒの声が涙ぐんだものに変わっていく。

「レオ様は…レオ様は、そんなに私のことをお嫌いに…？」

最後に叫ぶように訴えかけてくるミルヒは、ついに目に涙を浮かべるまでの段階に達していた。

その時のミルヒを見たレオは、自分がミルヒを守ろうと突き放した結果、状況を作ってしまったことを悟る。そして同時に、ミルヒを追い込んでしまったことに対しての強い負い目も感じていた。

同時刻、ライ達は先程の広間で待機していた。レオと一対一で話が見たいというミルヒからの希望によるものだ。

「ライさん、やっぱり僕らも行つた方がよかつたんじゃないですか？」

「なんだか胸騒ぎがします」

待っている間ソワソワしていたシンクは、思わずライに尋ねてしまふ。

「ああ、オレもさつきから嫌な予感がバリバリだ。だから行きてえんだけど…」

「昇降機がこちらからでは動かせないから仕方ないだろ。それに、一

人で行きたいとおっしゃった姫様の意思を無視なんぞできるか」

シンクだけでなく、エクレールやライも内心では不安があったようだ。ただし、スルーされていたもののエクレールは尻尾の動きに心情が現れていたのも一目瞭然だったが。

そんな中、シンクがある場所を見ていた。

「ねえ、エクレ。ここから行けそうじゃない？」

シンクが指摘した場所を見ると、そこは展望台に続く渡り廊下となっており、壁をよじ登れば上に行けそうな様子であった。

まあ、シンクの身体能力なら問題もないだろう。

「まあ、行けそうだな」

「だが、姫様は来ないでほしいと…」

ライもエクレールもこれは登れる、と判断する。だが、エクレールはミルヒの言っていたことを未だに引きずっている。

すると、シンクがこんなことを言い出した。

「イヤ、姫様は『ここから先は私一人で』って言ったんだから、こっちから上に行けば大丈夫」

「子供か貴様は」

そう言っただけでシンクはそのまま壁をよじ登っていく。だがエクレールの言う通り、子供の屁理屈のような言い分であった。

「シンク、オレも行く。戦力は多い方がいいだろ」

「ライさん、助かります」

「おい！ お前まで…」

ライまでシンクと一緒にいくことに、憤慨するエクレールだったが

：

「この間の悪寒がここでの的中するかもしれないねえからな。後で怒られようが、惨事になるよりはマシだろ」

「なんだったら、エクレは休んで。僕とライさんで行ってくるから」

「……誰が行かんと言った」

結局、三人で上に登っていくこととなった。

「なあ、なんか雷がさつきより激しくないか？」

「たしかにそうだな。今日は嵐が来るなんて予報もなかったし…」  
ある程度の高さまで登り切ったライは、エクレールにそう聞く。実際、自然界での雷はある程度の間を置いて起こるため、ここまで連続して雷が落ちるのは不自然極まりなかったのだ。

するとその瞬間…

—ゴゴゴゴゴゴゴ—

いきなり雷とは別に地響きのような音が聞こえたのだ。しかも、音は下からではなく上、すなわちミルヒ達がいる武闘台から聞こえてくるのだ。

「これは…：エクレ、ライさん!!」

「まさかの的中かよ!!」

「だな。急いで上がるぞ!!」

危惧していた事態が起こったため、三人はスピードを上げるのだった。

その頃、天空武闘台ではありえない事態が起こっていた。

なんと、屋上から武闘台が丸ごと削り取られ、ミルヒとレオを乗せたまま空中へと上昇していたのだ。

『こ、これはいったい!? グラナ砦名物、天空武闘台が上昇しているように見えますが…』

「ちよ!? あ、あれ!!」

パーシーがその様子を遠くから実況していると、カメラを回していた隣の男性が何かに気づく。

暗雲から何かが現れた。見たところ黒い球体のようで、周囲には電流が走っており、禍々しいオーラのようなもの感じ取れた。

そして、その中で眠っていた何かが目を開きだす。

---

上昇していく武闘台の上で、ミルヒとレオは突如現れた球体にその意識を向けられていた。

「あれは、このあたりの土地神様?」





「あ、はい…」

レオは早速ミルヒの安否を確認する。一方のミルヒは、ついさつきまでの自身に対して冷たい態度だったレオがいきなり助けてくれたことに対して、少なからず困惑しているようであった。

その時、ミルヒはあることに気づく。魔物がいつの間にか新しい触手を生やして、こちらに攻撃を仕掛けてこようとしていたのだ。

「レオ様、危ない!!」

ミルヒは咄嗟にレオの前に躍り出て、エクセリードで防御をしようとする。

「駄目じゃ、ミルヒ!!」

レオが叫ぶも、時既に遅しだった。

魔物の攻撃はエクセリードの刀身を貫き、ミルヒの体に達していたのだ。

その光景を見て、レオは星詠みで見た彼女の死のヴィジョンがフラッシュバックした。さらに魔物はミルヒの脇腹に打撃を加えて吹っ飛ばし、そのまま纏わりついていた靈魂のようなものに、ミルヒの体を丸呑みにさせる。その靈魂は取り込んだミルヒを取り込もうと、魔物の本体に向かって飛んでいった。

「ミルヒ……」

最初は茫然としていたレオだったが、その表情は次第に満ちたものへと変わっていく。

「貴様ああああああああああああああ!!」

レオは体中に輝力を纏う。彼女の憤怒の感情に合わせるかのように、その出力は普段の彼女と桁違いだった。

レオはこの状態で魔物を撃滅しようとするが……

「ぐわああ!!」

いきなり黒いエネルギーがどこからともなく飛んできて、レオに命中する。突然の不意打ちに対応出来なかったレオは、そのまま吹っ飛ばされてしまう。



「おいおい。俺としては、もうちよつとあんたに絶望して欲しかったんだけどな」

いきなり不意打ちを仕掛けてきた相手のものと思われる声が聞こえた。しかも、レオにも聞き覚えがある声だった。

どうにか起き上がり、レオはその声のした方に顔を向ける。

「き、貴様は?」

「おう。久しぶりだな、領主様」

そう、ミオン砦で乱入してきたサプレスの悪魔、デイガルドである。

「貴様、あの後ライ達に仕留められたと聞いたが、なぜ生きている?」

フロニヤ力の恩恵を受けられないで致命傷を受けたら遅かれ早かれ生きてはいられぬ筈……」

「ある親切なお方が瀕死の俺を治療してくれてな。まあ、そいつについては素性をバラすなつて釘を刺されてるんで誰かは言わないがな」

レオと言葉を交わしたデイガルドは、何を思ったのか、魔物の方に向かつて飛んでいく。驚くことに、魔物はデイガルドに対して全く攻撃を仕掛けなかったのだ。悪魔である彼を、自身と似たような存在だとも思っているのだろうか?

あつという間にデイガルドは魔物の背に降り立った。

「えーつと……あつた、あれだな」

デイガルドは辺りを見回して何かを探していると、目当てのものを見つけてすぐにそれに近づいた。

それは魔物の頭部の辺りに突き刺さった、赤い色をした不気味な刀だった。抜けないようにするためか、その周囲を何本もの鎖で固定されている。おそらく、先程ミルヒが見つけたものはこれだったのだろう。

すると、デイガルドはその刀の柄をいきなり握りだした。

「……なるほど。こいつの名前はキリサキゴホウ……シルターンの妖怪みてえな名前だな。で、肝心の操り方は……よっし」

柄を握った瞬間、魔物の名を始めとしたいいくつかの情報がデイガルドの脳内に流れてきたのだ。

「じゃあ、早速あの女を殺っちまうか!!」



「どつか適当な街に行つて、破壊の限りを尽くせ。恐怖の感情が俺の糧になるのだからな、そうすりゃ俺は力を大悪魔クラスに底上げできるからな」

指示を出しながら再びレバーのように柄を動かし、魔物の進行方向を変える。そして、それによつて魔物はグラナ砦から離れていく。

「レオ様あああああああああ！」

目の前で君主が喰われてしまったルージュは、絶望のあまりにレオの名を叫ぶ。

「おいおい、まさかあれが例の魔物つてやつか？」

「そのようだな。だが、なぜここから離れているんだ？」

それからすぐに、ライ達が最上階に到達した。今来たばかりで事情を知らないライ達は、キリサキゴホウが砦から離れる理由の見当がついていなかった。

「パパー——！」

「勇者様——!!」

いきなり上空から声が聞こえたのに反応して、ライ達は視線をそちらに映す。すると、ハーランに乗ったミルリーフとリコツタがこちらに降り立とうとしていた。

「パパ、あの怪物つて……」

「いや、オレにもさっぱりで」

ミルリーフが事情を求めてきたが、ライ達も事情の把握をできていなかったので説明が出来なかった。

「ねえ、あれつて……」

「あれは……ルージュ殿!!」

シンクがルージュの存在に気づき、ライ達総出で彼女に近づく。

「ルージュ殿、あの魔物はいったい？ それから、姫様とレオ閣下は何処に？」

「みなさん、実は……」

ルージュが事のあらましを話す。そして、全員が事情を理解した。「姫様達がああ魔物に取り込まれただど!？」

「しかも、デイガルドと一緒に…」

状況を全員が理解し、エクレールが現状についてまとめる。

「姫様とレオ閣下は、おそらくあの魔物に取り込まれつつある。今は二人の持っている宝剣の守護でどうにか耐え凌いでいるが、それもお二人の輝力次第だ。いつまでももたん」

「つまり、輝力が尽きたら二人は消化されちまうのか？」

「……おそらく」

状況は絶望的である。だが、それを聞いてむしろ闘志を燃やす人物が一人いた。

「……そんなの、させるかよ!!」

「シンク……だな。させたら駄目だよな」

シンクにつられて、ライ達も闘志を燃やしていく。

すると、ミルリーの体がいきなり輝きだし、その状態で砦のから飛び降りた。そして、一瞬光が強くなったかと思うと、至竜形態になってそのまま飛び上がった。

「パパ、シンク、あれを追うから早く乗って!!」

「ああ、わかった」

「ミルリーフ、ありがとう」

「私も行かせてもらうぞ」

そのままミルリーの背中にライ、シンク、エクレールが乗り込む。いつでも行ける状態になった。

「皆様、自分はルージュ殿についています」

「そうだな。ルージュさんを一人にしておくのも心配だからな」

「リコ、ルージュ殿を頼んだぞ」

リコッタは残していくことになったが、これで出撃準備は完了だ。

「じゃあ、飛ばすよ!!」

「おお、頼む!」

そのまま、ミルリーフはライ達を乗せ、キリサキゴホウのいる方に向かって飛び立つのであった。

く彼らだけでは荷が重い、誰か援軍を……

どこかで、何かがそんなことを思った。それが人なのかどうかはわからないが、どうやらライ達の戦力についての心配をしているようだ。

くお願い……界の狭間を制する者を助けて……

誰かは、新たに別の者達に助けを求めた。その誰かのいる世界

ラインバウムへ。

第21話 邪なる者、抗う者 Evil vs Ju  
stice

「ここは？」

ミルヒが目を覚ますと、見覚えのない場所にいた。辺りは木が一本残らず枯れている荒れ果てた土地で、空は暗雲に覆われて、赤い稲妻が走るという、不気味と言っても差し支えない光景だった。

「ミルヒ、か？」

すると、ミルヒの耳に聞き覚えのある声が響いた。声のした自身の背後を見ると、そこにはレオの姿があった。どうやらついさつき目が覚めたようだ。

「レオ様！ 無事だったんですね！」

「それは儂のセリフじゃ。お前、あの時魔物に傷を負わされて…」

先程までの溝を忘れたかのように互いの無事を喜ぶレオとミルヒ。ここに来て二人の仲の良さを垣間見ることができる。

「ところでミルヒ、ここはいったい何なのじゃ？」

「すみません。私もさつき目が覚めたばかりで…」

どうやら、二人ともこの空間の正体を知らないようである。

『姫君』

いきなり聞き覚えのない声が聞こえてきた。声のする方を振り向いてみると、何もない空間から何かの姿を現す。現れたそれは、白い体に金色の隈取りのような模様が入った狐だった。その神々しい姿を見た二人は、この狐の正体を直感で察知した。

おそらくは土地神、それともかなり高位の存在であろう。・

『聖剣と魔戦斧の姫君達、申し訳ありません』

土地神は二人を宝剣の所有者だと知っているようだ。そして、何故か二人に対して謝罪の言葉を告げだす。そして、信じられない一言が告げられた。

『我が子が、あなた方に酷いことをしたこと、深くお詫び申し上げます』

「子？ あの魔物がか？」

「さて、どっか手頃な街はねえかな…」

キリサキゴホウの頭部で刺さっている刀を握ったまま、デイガルドは辺りを見回している。どうやら破壊活動を行う場所を探っているようだ。

「そうだな、あいつらがまた邪魔しに来る可能性も捨てきれねえから見張りでも呼んどくか」

独り言を呟きながらデイガルドはサモナイト石を取り出す。今回は最初からライ達の妨害を予想して、以前誓約したタケシー達を召喚して戦力をそろえようという魂胆だった。

「召喚、タケシー軍団！」

取り出した4、5個のサモナイト石に魔力を込めて叫ぶと、その数と同じだけのタケシーが召喚された。

『ゲレレレーー!!』

召喚されたタケシー達は、元気そうに鳴き声を上げる。すると……  
「オ、オオ……」

キリサキゴホウの周りに纏わりついていた靈魂達が、タケシーと同じ数だけ接近してきた。

そして…

『ゲレレエエ!?』

「何!？」

なんと、靈魂がタケシーの体の中に入り込んだのだ。これについてはデイガルドも完全に想定外だった。

「ゲ、ゲゲレゲ……」

憑りつかれたタケシー達の様子がおかしくなったかと思うと、次第にその体に変化が起き始める。

「お、おお……こいつはもしかしたら、もしかするんじや…」

タケシー軍団に起こった変化を見て、冷や汗を掻きつつも笑みが浮かび上がるデイガルドだった。





その時、シンクがミルヒを発見した。何やら青白い光を放つ球体に閉じ込められており、同時に中に入っているエクセリードが淡いピンク色の光を放っている。どうやらあの光が宝剣の守護のようだ。

レオもすぐ隣に同じような状態で閉じ込められており、同じくグラウンヴェールから守護の光が放たれている。

運がいいことに二人がすぐ近くにいたため、同時に助け出すことがかなう状況だ。

「シンク、早いところ助け出しちまうぞ！」

「はい。二人とも、スピードあげるよ！」

「さっさとやれ、勇者！」

シンクはトルネイダーを一気に加速させ、ミルヒ達のところに近づこうとする。

「ゲベレエアアアア!!」

いきなり真下から謎の雄叫びが聞こえたかと思ったら、その直後にトルネイダーに衝撃が走る。

「うわああ!?!」

「しまった!!」

「落ちる!!」

あまりの衝撃の強さに、三人はトルネイダーから放り出されてしまった。だが、キリサキゴホウがちょうど完全に立ち上がり、その背中からの距離が縮まったので、難なく着地に成功するのだった。

その直後、ライ達に進軍してきた何かが目の前にゆっくりと降りてきた。

「な、なんだコイツ…」

ライ達が見たものは、周りにいた靈魂が実体を持ち、後頭部から翼が生え、鋭い爪を持った二本の前足を備えた謎の敵だった。しかも、その周りに同種の個体が何体か集まってきている。

「へえ、思ったよりも早い妨害だったな」

声のする方を見てみると、この一件の首謀者であるデイガルドがこちらに向かつて飛んできた。

「早速お出ましかよ、デイガルド」

「おお、俺の名前を覚えていたか。光栄だな」

「オレはあんまり思い出しなくなかったんだがな」

デイガルドの言葉に対してそう返すライの表情には、あからさまな嫌悪感が感じられる。

「貴様、この化け物は一体なんだ？ 以前戦った時の下僕達とは別物のようだが…」

「こいつらについてだが、百聞は一見に如かず、だな」

エクレールの質問に対し、そういつて懐からサモナイト石を取り出し、召喚術を行使する。

「ゲレレー！」

召喚されたのはタケシーだった。まだ召喚していない分のうち一匹のようだ。

「オオ、オ…」

「ゲレエエ!？」

先に呼んだタケシー達のように、キリサキゴホウの周囲を飛び回っていた怨霊がタケシーの体内に入り込んだ。すると……

「ゲ、ゲレ、レ……」

ゲエベレレレレレレレレレレレレレレ!!」

タケシーが狂ったような唸り声をあげて体に変異しだした。タケシーの両手が肥大化して、鋭い爪が生え、肉食獣の前足のような形状になり、顔が前に突き出した形状へと変わり、体も二回りほど大きくなる。つまり先程の謎の敵達と同じ姿になったのだ。

元のタケシー達からの変わり様を見てライ達が驚愕する中、デイガルドが得意気に話し出す。

「どうだ、イカすだろ。同じ霊体同士、何か引き合うものがあつて混ざり合っちゃまったつてところだな。ちなみに、パワーもスピードも元のタケシーの比じゃねえぜ」

その時の得意気なデイガルドの様子にシンクは啞然とし、思わずライに声をかける。

「ライさん、確かあのタケシーってあいつと同じ世界の生き物じゃ…」  
「オレも実は、仲間が召喚した奴以外の悪魔を見るのは初めてなんだが、そもそも種族単位でこういう考えを実行するらしい」  
傀儡戦争。以前にも述べたが(第4話参照)、この戦争は侵略者の大悪魔が人間を鬼に変えたり、死体に霊を憑りつかせたりして、それらを傀儡として操ったりして戦ったためにこのような呼ばれ方をしている。このように、悪魔は自分たち以外の種族を自らの眷属として利用するということを平気で言う種族なのだ。

この戦争はライ達がミルリーフと出会う5、6年前の出来事であるため、直接経験していないライ達トレイユの住人にとっても記憶に新しい。そのため、ライはデイガルドが今回の一件で偶然発見したであろう、タケシーと魔物(正確にはその力の一部)の融合を平気でやっているのに対して、同じ世界の住人に対して平然と行っているのに驚くも、シンクやエクレールほど極端な驚き様ではなく、少なくとも表面上は冷静を保っている。

「まあそういうことで、お前らにはこいつらの相手でもしてもらうぜ」  
『ゲエベベベレレレレレ!!』

デイガルドは変異したタケシー達(以下、凶化タケシー)を睨め、再びあの妖刀の刺さっている場所に戻っていく。

「早いところこいつを何処か小さい集落でもいいから…つて!」  
「やああああああああ!!」

デイガルドが妖刀のある場所に戻ってきた瞬間、驚く。なぜなら、ちょうどミルリーフがキリサキゴホウに向かって急降下蹴りを仕掛けてくる最中だったからだ。

そして、デイガルドが驚いている最中、ミルリーフの蹴りがキリサキゴホウの眉間にクリーンヒットした。

ードーンッー

「Gyaooooo!!」

「ぬぐああ!」

至竜形態のミルリーフによる蹴りは飛行速度とミルリーフ自身の重量からかなり重たい一撃となり、キリサキゴホウも怯む。一方、

デイガルドはその時の衝撃によってその場に倒れこんだ。

「おいおい、あいつらこんなもんを召喚出来たのか…」

デイガルドはミルリーフを見てライ達が召喚したものだど勘違いするが、すぐにその考えを自ら否定する。

その理由は…

「(ぎっきの声とこの魔力、あの時砦で見かけたピンクのガキと同じ……) そうか、あの竜はあの時のガキ」

魔力の質などからデイガルドは目の前の竜がミルリーフだということに気づく。

そして…

「竜から人になるなんてこと、普通の竜には出来ねえ筈。となると……」

そこまで口にして、ミルリーフの正体に気づいたようだ。彼女は至竜だということに。

「ふ、ふふ…」

あはははははははははは!!」

ミルリーフの正体に気づいたデイガルドは、声を上げて笑い出した。普通ならば、シルターンの龍神や高等天使と同列になるはずの至竜と敵対するのだから、普通は不利になると焦りを見せるはずだからだ。その異様な自信を見て、ミルリーフも竜の姿のままたじろぐ。

その様子に、ミルリーフは思わず声を出す。

「な、何がおかしいの!?!」

「いや、至竜だなんて高等な竜がなんで人間と一緒にいるかどうかは知らねえが、てめえもガキの姿にして喰らえば、キリサキゴホウはもつと強くなるはずだ」

デイガルドは自信があるのか慢心しているのか、ミルリーフまでキリサキゴホウに取り込ませようというのだった。それを立ち上がりながら話すデイガルドは、そのまま妖刀の元に歩みを進める。

「じゃあそういうことだから、てめえも叩きのめしてやるぜ!!」  
「!?」

妖刀を握ってそこに魔力を流し込むディガルド。すると、キリサキゴホウの尻尾にエネルギーの膜が張られ、それが何本もの鋭利な針状に変異した。例えるなら、ヤマアラシの背中の針のような感じである。そして、それをミルリーフに向けて振り下ろしてきた。

「ゲエベベベレレレレレ!!」

「おわ!?!」

ライ達は現在、凶化タケシー達相手に苦戦していた。ディガルドの宣告通り、パワーやスピードは元のタケシーの比ではなかった。

現在、凶化タケシーがシンクに向かって突進してそのまま噛みつきうとしてきたが、シンクはパラディオンでそれを防いでいる。

「負けてたまるかああ!!」

シンクは咄嗟にパラディオンを分割、棒から短槍に切り替えて引き抜き、そのままバツの字に切りつける。

「ゲレレレレレベベベ!!」

凶化タケシーは斬られた痛みでのけぞり、シンクはその隙について紋章を発動する。

「裂空十「ゲベレエアア!!」ぐわああ!?!」

攻撃しようとした瞬間、背後から別の凶化タケシーが突進による妨害を仕掛けてくる。

それによつてシンクが倒れ伏し、それを目の当たりにした先程の凶化タケシーがいきなり口を開ける。

「ゲレエアアアアアアアア!!」

凶化タケシーの雄叫びと同時に、凶化タケシーが口から雷の弾を打ち出した。魔物の力との融合により、雷を落とすタケシーの力が変異したようだ。

「うわああああああ!?!」

立ち上がる隙も与えられなかったシンクは、そのまま雷弾を喰らっ

てしまう。

「勇者!?!」

「ゲエエエベレエエエエエエ!!」

「うわああ!?!」

シンクが敵の猛攻を喰らったことに気を取られたエクレールは、自身が対峙していた凶化タケシーの突進をもろに喰らってしまった。

「ゲレエアアア!!」

「がはっ!?!」

さらに別の凶化タケシーによる突進を腹部に喰らうエクレール。フロニヤ力の効き目が薄くなっている今、少女の肉体強度ではシンク以上のダメージとなってしまふ。

「シンク、エクレール、大丈夫か!?!」

「ゲベレエアアア!!」

「うおっ!?!」

ライに向かつて凶化タケシーが噛みつこうとしてきたが、ライは咄嗟に剣を前に突き出し、それを防ぐ。凶化タケシーはその剣をかみ砕こうと、顎に力を加えだす。

「やられてたまるか!!」

「ゲベエア!?!」

だが、ライはその前に膝蹴りを凶化タケシーに叩き込んで、ダメージを与える。その衝撃で相手が怯んだところで剣を引き抜き、そのまま袈裟斬りを叩き込む。さらにそれにとどまらず、ストラで強化した腕力で殴り飛ばす。

連続して重たい一撃を叩き込まれた相手は、そのまま伸びるのだった。

「よし、まず一ぴく「ゲレエアアア!」ぐわああ!?!」

一体倒したのも束の間、もう一体別の凶化タケシーが背後から飛び掛かってきた。

「ゲレアアア!!」

「ぐわあ!?!」

飛び掛かってきた凶化タケシーはライの左肩に噛みつく。牙はか

なり深いところまで食い込んでおり、ライの肩を噛み千切るつもりのようなのだ。

「てめえ、いい加減にしろ！」

「ゲレエ!？」

ライは噛みつかれた痛みには耐えながら、右手に持った剣を凶化タケシーに振り下ろす。その痛みで、凶化タケシーはライの肩から離れた。

「おらああ!!」

「ゲレエアアア!？」

ライはそのまま凶化タケシーに回し蹴りを放って吹っ飛ばす。飛ばされた凶化タケシーは、先程の攻撃で伸びているもう一体の凶化タケシーに衝突する。その時、ライは攻撃のチャンス逃さなかった。

背中に背負っていた銃を右手に持ち、そのまま紋章を発動する。

「フアランクスキャノン!!」

先程、特選装備部隊を倒すのに使った技で一気にとどめを刺しにかかった。

「ゲベラアアアアアアアアアア!？」

フアランクスキャノンを喰らった二体の凶化タケシーは、断末魔を上げて爆発する。そして、爆炎が晴れた先を見ると、凶化タケシーは黒こげになって気絶している。遅かれ早かれ、また復活するようだ。

「シンク！ エクレール！ 大丈夫か!？」

ライはシンク達の安否を確かめようとし、まずは一番近くにいたエクレールに声をかける。

「はああああああ!!」

「ゲラアアアアアアアアアア!？」

丁度とどめを刺したところだったようだ。裂空十文字を喰らって二体纏めて吹っ飛ばされる凶化タケシーの姿が見えた。

「はあ、はあ……ライか。苦戦はしたがどうにか、って貴様、その肩!？」

「これくらい、ストラである程度直せるから大丈夫だ。それよりもシンクが…」

二人のやり取りの最中、オレンジ色の強い光がどこからか発せられた。ライ達はその光の方に視線を向けると、伸びている化凶タケシー二体と、その光の中心に立つシンクの姿があった。デイフェンダーを発動して、それを持った左腕を掲げながら息切れしている。

一応は勝ったようだ。

「シンク、大丈夫か？」

「なんとか……って二人ともひどい傷!? 特にライさんが……」

先程のエクレールと似たような反応をするシンク。まあ、肩から大量出血して、腕が力なく垂れ下がっているという状況なのだから、驚かない方が不思議なくらいだ。

「エクレールにも話したけど、ストラで治るから大丈夫だ」

そういうライは、無事だった右腕を左肩に当てており、そこから淡い光が放たれている。ストラによる治療を現在使用中なのだ。

「それよりも、今のうちに姫様たちのところに急ぐぞ」

「だったら、もう一度トルネイダーで……」

シンクがトルネイダーを使用しようとした瞬間、周囲にあの怨霊のような力の塊が大量に出現した。

「どうやら、そう簡単には行かせないつもりのようなだな」

「だな。一気に駆けていくぞ」

「じゃあ、その方向で」

ライも左腕が動かせるレベルまで回復したので、右手に剣を持った状態で、左手に銃を持つ。シンクもパラディオンを短槍形態で発動し、エクレールも双剣を構える。そして、そのまま駆けだした。



## 第22話 戦士達と希望の光

「いっけええええええ!!」

キリサキゴホウが伸ばしてきた複数本の尻尾がミルリーフを目掛けて飛んでくるが、ミルリーフは翼を広げ、そこに魔力を収束、またも拡散ビームとして迫ってきた尻尾に発射する。

ビームが当たった尻尾は怯み、攻撃を中止する。

だが、敵の攻撃はそれだけでは終わらなかった。今度は周辺に漂っていた怨霊が一齐にミルリーフを目掛けて飛び掛かる。

「その位で負けないから!!」

ミルリーフは翼を閉じ、その状態のまま体中を膜状の魔力バリアで覆う。怨霊達はそのまま飛び掛かるが、バリアに当たった瞬間に消滅してしまう。

「流石は至竜、といったところか。そう簡単にはやられねえか」

「あなたみたいな悪者になんか、負けないんだから!!」

ミルリーフが叫ぶと同時に、口内に魔力を溜め始める。そして、溜め込んだ魔力を収束してエネルギー球を作り出した。

そしてミルリーフが、ドラゴンブレスを放つような仕草で一気に魔力の放射をすると、その魔力が極太ビームと化した。これを喰らえば致命傷は確実だった。

だが、その直後にキリサキゴホウが尻尾のすべてを前に出してそれを重ねるようにする。それが終わったら今度は、怨霊の大群が集まって巨大な壁に変化した。ブレス攻撃はその壁にぶつかり、壁が消滅した後はそのまま尻尾に当たった。先程の壁によって威力がいくらか削がれ、そのまま重ねられた尻尾に受け止められ、相殺されてしまった。

「悪くねえ一撃だったな。だが『やあああああああ!!』何?」

いきなりミルリーフが最初にかましたように急降下してきたのを見て、デイガルドは驚いて仰け反る。

そのままミルリーフは、急降下の勢いに任せてキリサキゴホウの頭部に蹴りを叩き込む。



り戻していなかったため、光球への接近は容易だった。

「姫様！ 目を覚ましてください!!」

「姫様！ 姫様！」

シンクとエクレールは光球を叩きながら、中に閉じ込められているミルヒに呼びかけるがミルヒからも反応は見られなかった。それでも二人は、頑なに呼びかける。

「閣下、目を覚ませ!!」

一方、ライはストラで強化した肉体でレオが閉じ込められている光球を叩き割ろうとしている。だが、ミルヒのものと同じで光球は途轍もなく硬く、ストラで強化された一撃でもびくともしなかった。

一方その頃、魔物に取り込まれた先にあつた空間でミルヒ達は土地神から話を聞かされていた。

『もう数百年前の昔、まだ大陸に人の手があまり入っていない時代の頃の話です。私と我が子は、山間で静かに暮らす土地神でした』

土地神（以下母狐）が話し出すと同時に、周囲が話していた当時の風景に変わっていく。どうやらこの土地神の記憶が周囲の光景となつて映し出されたようだ。

少し進むと、その頃の土地神が子供と思われる小さな土地神と戯れている様子が見えた。

『ですが、あの日…』

そう言うと同時に空が曇り出し、いきなり黒い雷が落ちた。

母狐がその雷が落ちたところに駆けつけると、子狐が一本の刀に貫かれていたという凄惨な事態が起こっていた。

そして回想内の母狐が子供に近寄つて解放しようとした瞬間、子供はいきなり眼を開ける。その眼には何か禍々しいものが充ちていた方と思うと、子供の体が浮き上がりそのまま肉体が変異し、今よりもいくらか小さいがキリサキゴホウの姿になったのだ。

『落雷と共に降ってきた刀が、我が子の体を貫き通し、そのままあの子は禍々しい魔物へと変わってしまいました』

そして、キリサキゴホウに変異した土地神の子は、自身の母をその場で食い殺してしまう。ミルヒ達がキリサキゴホウに取り込まれた先でこの土地神に遭遇したのは、「彼女も取り込まれてしまつて同じ場所にいた」ということである。

『私を取り込んだあの子は、そのまま魔物として山の生き物たちを喰らつて、大地を破壊していきました。今から二百年余り前に、人里に下りようとしたところを当時の聖剣の主によつて封じられたのですが、封印が弱まったのか、あなた様の聖剣に惹かれたのか、あの子は目覚めてしまいました。そして今…』

「あやつに、ディガルドに利用されておるといふわけか」

レオの言葉にうなずき、母狐は続ける。

『あの子は魔物と化した今も泣いています。そして、邪な者の私利私欲に利用され、その苦しみは増しているのです』

キリサキゴホウ誕生、魔物化しても苦しんでいる土地神の子狐、その悲しき過去と現状にミルヒ達がショックを受けていると、また別の声が聞こえてきた。

『痛いよお…苦しいよお…』

声の主は、いつの間にか二人の目の前に現れていた。

それは、魔物と化した土地神の子供だった。地面に倒れ伏した状態で体を件の妖刀に貫かれ、苦しそうにしている。

『誰か、僕を死なせて…僕を、殺して…』

子狐が苦し紛れに吐いた言葉に、ミルヒもレオもショックを受けている。しかし、それ以上にショックなことを母狐が頼み込んできた。

『聖剣と魔戦斧の主、あなた様方の宝剣の力があれば、その子を殺すことが出来るはずですよ』

驚く二人をよそに、母狐は言葉をつづける。

『宝剣でこの子の首を落とせば、魂の緒が外れて、この子の命と共に魔物も消えるはずです。お願いします』

「……わかった。気は進まぬが『レオ様、待って下さい』つ、どうした、ミルヒ?」

レオが了承しようとする、ミルヒが静止をかける。そして、代わりに母狐に頼みに対しての返事を返した。

「……お断り致します」  
「!？」

はつきりと、母狐の頼みを断ったのだ。

「ここでこの子を斬れば、魔物は消えるかもしれませんが」

「ミルヒ、だったら手段を選んでおる暇はない！」

ミルヒに対してレオが言葉を続ける。

「儂かて本当は命を奪うことをしたくないが、このままフロニヤルドをあつ男に蹂躪させるわけにもいかん！ それに、早く魔物をどうにかせねば勇者達や国にも危害が及ぶぞ!! お主はそれでもいいのか!？」

レオの言うことは尤もだ。事態は一刻を争うため、選択の余地はないはずだ。だが、ミルヒはそれでもかまわず告げる。

「レオ様、私だって勇者様やライさん、国の民が傷つくのは見たくありません。ですが……」

この子を斬ってしまったては、この方達の積み重ねられた悲しみや苦しみは消えません」

その言葉に、レオも母狐もハツとする。そして、ミルヒが母狐に向き合つて、再び言葉を紡いだ。

「あなたもお子様も永い時の中、どんなにつらく、悲しい思いをされたことか。エクセリードとは確かに魔を絶つ剣です。ですがそれ以上に、人と命を導き、大地に希望を育むための剣です」

「あなた方もフロニヤルドに生きる命です。妖刀ごときに悲しい思いをさせられたまま終わるなど……」

私が絶対に許しません!!」

ミルヒがそう訴えると、彼女の胸から桃色の輝力光が放たれ出した。

「ビスコッティが領主、ミルヒオーレ・F・ビスコッティが、絶対絶対、許しません!!」

力強いミルヒの言葉に、呼応するかのように輝力光は眩くなつていく。

(そうじゃった。長いこと跳ね除けておつたから忘れておつたが、ミルヒはそういう娘だった。誰よりもやさしく、慈しむことを常に考えておる、儂にとつてもかけがえのない存在…)

レオもそんなミルヒの様子に、何か吹っ切れたような表情を浮かべる。

「母狐よ、先程の儂の発言も撤回させてもらおう」

レオも母狐に向き合い、言葉を紡ぐ。そして、その表情からは完全に陰りが消えており、ミルヒと同じく輝力の光を胸から発していた。

「儂もお主達が悲しみに暮れたまま消え去ることを許さぬ。ガレット獅子団領主にして魔戦斧グランヴェールの継承者、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワが絶対に許さぬ!!」

「な、なんだ!?!」

ライ達が割ろうとしていた光球に、いきなりヒビが入った。

「これは一体…」

「勇者、割れるぞ!」

すぐさまヒビは大きくなり、一瞬にして光球は碎け散った。そして、その中から全裸状態のミルヒとレオが姿を現した(おそらく、消化途中で無くなったのだろう)。すぐさま、ライはレオを、シンクとエクレールはミルヒを受け止めた。

「姫様!」

「大丈夫ですか、姫様!?!」

「閣下もしっかりしてくれ!!」

ライ達が呼びかけると反応があり、すぐに目を覚ました。

「シンク、エクレール?」

「ライ、お主来てくれたのか?」

「はい、姫様」

「無事で何よりです」

「とりあえず、無事みたいだな……あ」

ライがふと何かに気づく。それによって他の面々も同じものに気づき、ライ達救出組がミルヒとレオの胸元に視線を集中、二人も自身の胸元に視線を集中した。そう、いきなり光球から出てきた二人は何故か裸に穿かれているため、いろんなところが丸見えだったのだ。

よって…

「何を見とるんじや（見ているんだ）貴様ああああ!!」

「ごぼおお!!」

「ああああ、すみません!!」

ライはレオに、シンクはエクレールに顔面を思いつきりぶん殴られ、そのまま顔を抑えたままのたうち回る。一方、ミルヒは胸元を隠しながら蹲り、そのまま謝罪の言葉を放つ。

先程の事態から一転して、カオスな状況となっていた。

「パパ、何してるの…」

一方、上空ではミルリーフがその様子を見てあきれている。キリサキゴホウがいきなり動きを止めたので、ライ達に気を回す余裕が出来たようだ。

「そんなことより…」

そんな中、ミルヒが先ほどの話を思い出し、ライ達にその詳細を告げようと視線を彼らに向けた。

「シンク、ライさん、エクレール、私達この魔物を助けたいんです」

「へ？ 助ける」

危険な存在である魔物をなぜ助けるのか？ ライ達はミルヒの言葉を理解できずにいた。すると、レオが説明を交代してきた。

「どうもこの魔物、土地神が後天的に変異したもののようだな。体に刺さった赤い刀が原因だそうなのじゃ」

「赤い刀……まさかあのー」

ライはレオの言葉を聞いて真っ先に思い出した。デイガルドがキリサキゴホウを操作する際に握っていた妖刀があったことを。

「ダルキアン卿とユツキーが土地神から魔物になることがあるって  
言ってたけど、これがそうだったんだ」

「はい。だから、例の刀を抜けば元に戻るかもしれないんです」

「……わかった。あとはオレ達に任せてくれ」

ミルヒから話を聞いたライ達は、立ち上がってデイガルドのところ  
に向かおうとする。

「みなさん、私もご一緒させてください」

「僕もただ見守るだけなのは性に合わん。手伝わせろ」

すると、ミルヒ達が同行を申ししてきた。ついさっきエクセリードが  
覚醒したミルヒ、もともと実戦経験の多いレオ、二人とも戦力として  
は申し分ないが……

「イ、・イヤ、今の二人の状態じゃ……」

それを聞いたライは、言いにくそうに、視線を逸らしながら告げる。  
ミルヒもレオも真つ裸、行動できる状態ではなかった。そのことを指  
摘された二人は、先程のことを思い出して縮こまってしまう。

すると、折れたエクセリードとグランヴェールがひとりでに浮き上  
がり、ミルヒ達のすぐ目の前に飛んでいく。

『うわああ!』

突然の事態に固まる一同だったが、いきなり二本の宝剣が強い光を  
発し出し、驚きの声を上げる。

「え?」

「こ、これは?」

光が晴れると、エクセリードの形状が短剣から長剣へと変化してお  
り、グランヴェールも破損個所が修復されていた。そして、全裸だっ  
たはずのミルヒとレオもいつの間にか戦装束を着た姿になっていた。

「エクセリード……これ、あなたが?」

「……ライに垂れ耳、お主達も……」

「……え?」

レオに指摘されて、ライとエクレールも自分の前進を確認してみ  
ると、傷が全快しており、衣服の破れた個所も修繕されていた。

「何故、私達まで回復しているんだ?」



「もしかして、儂らの時の余波でか？」

「だとしたら、太っ腹だな」

何はともあれ、ライ達はこれで戦闘準備完了だ。

そして、宝剣に変化が起こったのはミルヒ達だけではなかった。

「パラディオン……うわあ!？」

今度はパラディオンの指輪がひとりでに輝きだし、その光がシンクを飲み込んだ。そして光が晴れると、シンクの傷が全快し、ボロボロだった勇者装束も元通りになっていた。そして肝心のパラディオンはというと、金色の刃の両刃の剣へと変異していたのだった。

「エクセリード、私達に頑張れって言ってくれてるんですね？」

「グランヴェールも、この不甲斐ない儂に力を貸してくれるのだな」

「パラディオン、頑張るからもう少し僕に力を貸して！」

シンク達はそれぞれの持っている宝剣に語り掛け、そして手に取った。

「姫様、閣下、我々もお供させてもらいます！」

「乗り掛かった舟だ。デイガルドの野郎に一泡吹かせてやろうぜ！」

ライとエクレールもそれぞれの武器を構え、戦闘態勢は整った。

「あいつ等、なんで復活してやがるんだ!？」

一方、デイガルドは妖刀の刺さった個所からライ達の様子を目の当たりにし、動揺している。

『ゲバアアアアアアアアアアアア!!』

するといきなり、何かが咆哮をあげたのでデイガルドはそちらを向く。そこには、先程ライ達によって倒された凶化タケシー達が復活して集まっていた。

「おお、ナイスタイミング！ お前ら、あの連中がこっちに近づいてくるから、迎撃に移れ!!」

『ゲベレレ!!』

凶化タケシー達はデイガルドの前に整列し、口内に電気エネルギーを充填し始める。さらに、一斉に亡霊の大群、刃が生えた大量の触手が出現した。ライ達をこれで迎撃するのだろう。

「僕と姫様はトルネイダーで一気に突き進みますけど、ライさん達は…」

「手は打ってあるから大丈夫だ」

「お前達はあやつへの攻撃準備に集中しておけ。迫ってくる敵は儂らが片づける」

「…了解しました。じゃあ、行くよ姫様!!」

「はい、シンク!!」

そのまま、シンクはトルネイダーを出現させてミルヒと二人乗り、一気に突き進む。一方、ライ達は輝力を足に集中し、シンクがミオン砦で使った勇者超特急のような走力強化技で突き進む。輝力武装がなかったためこのような形をとったようだ。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!」  
「でりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりりゃ!!」

ライとエクレールは先行しながら、高速の連続切りで迫りくる触手を捌いていく。デイガルドも必死なので攻撃が激しいが、全快状態の二人には特に問題はなかった。

ちなみに、一番多く捌いたのはエクレールだ。

次に、亡霊の大群が集まって、巨大な太刀のような形になってこちらに飛んでいく。単発の威力が高く、紋章術の準備をしていないライ達では防ぎきれない。だが、心配は無用だった。

「魔神・閃空斬!!」

レオがグランヴェールで必殺の紋章術をぶっ放し、その太刀を消滅させた。宝剣での最大出力で放ったため、まだ攻撃が生きたままだ。そして、それがデイガルドへ向かって真っすぐ飛んでいく。

だがデイガルドも咄嗟に、空いている魔力で盾を形成してそれを防ぐ。だが、いくら威力が削がれた状態でもまだ強力だったようで、盾を消した後の腕は痙攣していた。

「お前ら、一斉射撃!!」

「ゲレレアア…」

デイガルドが凶化タケシー達に指示を出すと、そのまま雷弾の発射準備に入る。

『ゲレアアアアアア!?』

いきなり上空からの攻撃が入り、それをもろに喰らった凶化タケシー達はまたも黒こげになって気絶する。

「パパ達の邪魔はさせないよ!」

それは上空で待機していたミルリーフだった。ミルリーフは上空にいたままだったので詳しい話は聞けていなかったが、ライ達が行動に移したことから打開策を見つけたのだろうと推測できた。そしてそのライ達を攻撃しようとするタケシー達が目に入ったので撃破に乗り出した、というわけだ。

「ミルリーフ、ナイスだ! シンク、このままいくぞ!!」

「あとはお前達と姫様に任せる。ドンとやってこい!!」

「はい! 姫様も」

「はい!!」

いつの間にかシンク達の攻撃準備が整ったようで、パラディオンもエクセリードも輝力を纏って輝いている。その一方で、ライの剣も輝力をいつの間にか溜めていたようで、シンク達のものとは比べていくらか弱い輝力光を発している。そして、三人は一斉に剣を振り上げ、攻撃準備に入った。

「ホーリー:」

「響界:」

それを見たデイガルドは、刀から手を放し、獲物である槍を出現させた。

「クソ、こんなところで俺の野望を終わらせてたまるか!!」

デイガルドも負けじと、槍に魔力を溜め始める。先程からキリサキゴホウの出現による恐怖などの不の感情により、デイガルドも魔力はある程度上がっている。それを出し惜しみしないで使う気ようだ。

「セイバアアア!!」

「斬魔剣!!」

三人が剣を振り下ろすと、大出力の輝力が放たれ、デイガルド目掛けて飛んでいく。

「デモンズジャベリン!!」

対して、デイガルドも必殺技をライ達に向けて放つ。

デイガルドはキリサキゴホウの出現で不安を煽られた付近の住民や戦の参加者達から、負の感情を吸収してパワーアップしていた。だが、シンク達は対となる希望の力を宝剣に込めて必殺の一撃を放ち、かつライの強力な一撃を織り交ぜているため、勝負の結果は見えていた。

「何!?!」

力負けしたのはデイガルドだった。負の感情を取り込んでパワーアップしたのに力負けした、それによって驚愕しているデイガルドに向けて攻撃は飛んでいく。

「ぐわあああああああああああ!?!」

ライ達の攻撃を受けたデイガルドは吹っ飛び、そのままキリサキゴホウの上から落下した。

「今だ!!」

ライに促されてシンク達は宝剣を指環に戻し、一気に刀のところまで飛び込む。そして、そのまま引き抜こうとする。

「く、このお……!」

「か、固い……」

「でも、諦めません……!」

三人がかりで妖刀を抜こうとするが、鎖で繋がれているうえに深く突き刺さっているので中々抜けない。

その間、キリサキゴホウは崖に足を滑らせるが巨体からすぐに崖下に足をつける。そして近くの岩肌にも巨体を打ち付けて、こちらの妨害をしてきた。

だが、それでも諦めずに引き抜こうとしていると、シンク達の宝剣が光を発し出した。その直後、刀を繋いでいた鎖の一部が独りでに千

切れた。

「後はオレに任せろ!!」

ライはシンク達を離れさせ、ストラで肉体を強化して一気に引き抜こうとする。

「ん、この、おりゃああああああああああ!!」

結果、妖刀を引き抜くことに成功する。すると、引き抜いた後から何か飛び出してきた。

すると、ミルヒがそれを見た瞬間に走り出した。

「えい!!」

そのまま頭から滑り込んで落下先に先回りし、それを受け止める。

「まさか、そいつが…」

「はい。この子が例の土地神様です」

この時、魔物と化した土地神の子狐は妖刀の呪縛から解放され、本来の姿に戻れたのだった。

## 第23話 絶望の顕現 The Satan

ライ達によって妖刀から解放された子狐。あとは安全な場所に運べば、万事解決だった。

すると…

「！ タケシー達が…」

「元に戻っていく…」

先程の攻撃でのびていた凶化タケシー達が、次々と元のタケシーに戻っていった。どうやらキリサキゴホウの消滅によってタケシー達に取りついた力も消滅したようだ。ちなみに、元に戻ったと同時に力尽きたのか、タケシー達は強制送還されて消えていった。

そして、変化があつたのはタケシー達だけではなかった。

「？ 魔物の体が…」

「これは、土か？」

触媒にされていた子狐が解放されたことにより、残ったキリサキゴホウの肉体は一気に朽ち果てたようだ。このままここには、崩壊に巻き込まれてしまうので、早急に脱出する必要があつた。

「……って、ライさん!!」

「ん？ って、なに!？」

ライによって引き抜かれた妖刀の枝刃が伸びて、触手のようになっていた。そしてその枝刃が、妖刀を握っていたライの腕に巻きつこうとしている。

どうやら、今度はライの体を触媒に魔物化しようとしているようだ。

「くそ、あっち行きやがれ!!」

するとライの体から不思議な光が発せられ、触手がそれに反応して動きを止めた。古き妖精の血を引く響界種であるライが、妖精の加護を発動させたようで、妖刀はその力を拒絶しているようだ。

「ライさん、それって一体？」

「あ、ああ。とりあえず、戻ってからゆっくり話す」

自分が妖精とのハーブだということを話していなかったのを思い

出すライ。とりあえず、帰還してから話すことにしておく。

「で、とりあえずこいつは……どりゃああああ!!」

このまま持つていてもまずいと思ったライは、おもむろに妖刀をブン投げる。その様子に、場にいた面々は茫然としていた。

「……………よし、早いところ脱出するか。ミルリーフ、頼む!!」

「オッケー!」

茫然とするシンク達を無視して、ミルリーフを呼んで脱出の準備に入るライ。もう何とでもなれ、という雰囲気だった。

「クソ、またあいつらにしてやられた…」

一方、ライ達によつてキリサキゴホウの上から落とされたデイガルドは、傷だらけだったもののまだ生きている。デイガルドは地に付した状態のまま、崩れゆくキリサキゴホウの肉体を見つめており、忌々しそうな顔をしている。

「このままじゃ俺の野望が…つてあれは!?!」

その時、デイガルドの目にあるものが映った。ライが先ほど投げ捨てた妖刀だった。デイガルドが倒れている場所から距離はかなり離れているが、悪魔ゆえに視力も人間離れしていたのか、デイガルドはそれを見落とさなかったのだ。

「触った感じ、あれがキリサキゴホウの力の核みたいなものだった筈……まだ望みはありそうだな」

デイガルドはその直後、プラーマを召喚して自らの傷を治療し、妖刀が投げ捨てられた地点へと飛んでいく。

「あつたあつた……つて、すげえことになつてるな」

妖刀を発見したデイガルドだったが、刃が生き物のようになごめいしているのを見て、思わず引く。まあ、サプレスの霊的生物やシルターの妖怪でも、ここまでいかがわしい物はそうそう無いだろうから、仕方ないだろう。

「さて。こいつをとりあえず回収しておけば、何かしらに使えるだろうな」

それでも己が野望のために、デイガルドは妖刀を回収しようとする。その時だった。

「生憎だが、その禍太刀は世に害をなす存在ゆえに、そなたのような邪な者に渡すわけにはいかないでござるよ」

デイガルドは背後から声がしたので振り返ると、こちらに向かって歩みを進める者がいた。それはビスコッティ最強の騎士、ブリオツシュ・ダルキアンその人だった。

「ライ殿や勇者殿のおかげで魔物も退治されて、あとはその禍太刀を封じるだけに済んだでござる」

「拙者は存じ上げていたでござるよ。みんな、ああ見えてよくできる子達だと」

「そうでござったな」

今度は別の場所からユキカゼが現れ、ブリオツシュに語り掛けながら歩み寄ってくる。そして、デイガルドがあたりを見回すと、何匹もの犬達が包囲していた。

「てめえらは、あの時のー!」

「ここから先は拙者達【隠密隊】のお役目ゆえに、拙者達でお相手させてもらうでござるよ」

ブリオツシュが宣言すると、腰の刀を抜いてユキカゼと二人で構えをとる。

「チツ、だったら俺も容赦しないぞ!!」

デイガルドは咄嗟に、禍太刀と呼ばれた妖刀を右手に握り、左手には槍を出現させて武装する。すると…

「な、なんだ!?!」

いきなり禍太刀がデイガルドに触手化した刃を絡めようと、その刃を伸ばして彼に近づける。

「まさかコイツ、俺の肉体を奪うつもりか?」

デイガルドは禍太刀が何をしようとしているのかに気づき、表情を歪める。



「てめえみてえなわけわかんねえ物が、俺を支配するんじやねえ!!」

デイガルドが怒号を上げると、禍太刀が動きを止めた。その光景を見たブリオツシユとユキカゼは、思わずデイガルドを睨む。

「あの禍太刀を気迫のみで抑えつけるか……どうやら貴様は相当危険な存在のようでごさるな」

「だったらどうする?」

「この場で悪事を働けぬようにするでごさる!!」

「どうやってだ? そんなもって、やれるならやってみな!!」

そしてデイガルドが右手に握った妖刀を振り下ろすと、蠢いていた枝刃が次々とユキカゼを追尾するように伸びていく。だが、ユキカゼはその攻撃をしなやかな動きで一つ一つ避けていく。

そして、全ての攻撃をよけた後、小太刀を構えて何かの言葉を口にする。

「——浮き世に仇なす外法の刃、封じて回るが我らの勤め——」

どうやらその言葉は何かの呪文のようで、それを唱えると同時にユキカゼの持つている小太刀が金色の光を放ちだす。それに合わせて、コノハの胸についている鈴や隠密隊の犬達が啜えている小太刀も同様に金色の光を放つ。

「——大地を渡って幾千里、浮き世を巡って幾百年——」

詠唱を続けていると地面に輝力で何かが描かれていく。あつという間にそれは完成、どうやら魔法陣のようなものようだ。

「——天弧の土地神ユキカゼと討魔の剣聖タルキアン——」

一瞬、気になるワードを口にしたユキカゼだったが、デイガルドはいまだにフロニヤルドの生態を知らず、土地神が何なのかを理解していないので特に気にしてはいない。そして同時に、この様子からこれから彼女らが何をやる気なのかを察して警戒を強める。

「まさか、この刀を俺ごと封印する気か!?」だとしたら、やらせてたまるか!!」

デイガルドはデモンズジャベリンの要領で、槍だけでなく禍太刀にも魔力を纏わせてがむしやらに振り下ろす。だが、いきなりユキカゼの目の前に彼女の紋章が展開され、それがデイガルドの攻撃を防ぎき

る。

「――流れ巡った旅の内、封じた禍太刀、五百と九本!!――」

ユキカゼの言葉と同時に彼女の周囲から無数の金色の剣が出現した。

「――天地に外法の華は無し――!」

ユキカゼの最後の詠唱と同時に、先程現れた無数の剣がデイガルドと禍太刀に突き刺さっていく。デイガルドの先程の推測は当たっていたようで、現れた剣によってデイガルドは禍太刀もろとも力を抑えられてしまう。

「マズい!!」

「――朽ちよ、禍太刀――!」

ユキカゼの言葉と同時に、先程から動きのなかったブリオツシユに変化が起こる。彼女の構えていた刀に輝力が収束され、身の丈を超える大きさの大刀に変化したのだ。

「神狼滅牙」

ブリオツシユは技名を口にすると、その場から凄まじい勢いで跳びあがる。

「天魔封滅!!」

そしてそのまま技名の続きを叫び、唐竹割の要領でデイガルド諸共、禍太刀を両断する。

「お、俺は、こんなところで…」

デイガルドがそれだけ呟くと同時に、その場でブリオツシユの輝力と同じ紫色の光を放って爆発した。

攻撃の跡地にはデイガルドも禍太刀も無く、一本の小刀が刺さっていた。  
「ユキカゼ、無事に済んだでござるか?」

ユキカゼブリオツシユに言われて、刺さっていた小刀を抜き取って確認を取る。

「はい。封印刀の中にしつかりと…」

そういつてその刀を抜き取って空にかざす。どうやら、デイガルドごと禍太刀をそれに封じ込めたらしい。そして、それを確認したと同時にブリオツシユも技を解除する。

「後はこれについて姫様達に報告を」

「でしたら拙者が行ってくるでござる」

「うむ。任せれ……!!」

ブリオツシユがいきなり言葉を止め、ユキカゼの手元を見て目の色を驚愕に染める。

「親方様、どうs「ユキカゼ！ その封印刀を離すでござる!!」え!? わかりました!!」

ブリオツシユの突然の慌て様から尋常じゃないと察し、ユキカゼは封印刀を投げ捨てる。そしてそれに視線を向けてユキカゼも驚愕する。

「な!? 封印刀にヒビが…」

封印刀にヒビが入っており、それが次第に大きくなっていく。そして、そこからどす黒い瘴気のようなものが漏れ出していた。そしてほとんどなくして、封印刀は砕け散った。

「イスカ様の打った封印刀が砕けた？」

「まだあやつにそれだけの余力が？」

どうやらあの刀は内側から封印が破られたらしく、ブリオツシユはデイガルドにそれだけの力が残っていたことに驚く。すると、砕けた封印刀から先程の瘴気が大量に発生、それが集まってデイガルドの姿を形作っていく。

「へへ、どうやら上手くいったようだな…」

出てきて早々にデイガルドが口にしたこの言葉だが、彼の姿を見たブリオツシユ達はすぐにそれが何なのかに気づいた。

「な!?!」

「禍太刀を、自分の体に…」

デイガルドはなんと、自分の腹部に禍太刀を突き刺していたのだ。どうやら、封印される間際にやったようである。

「血迷ったでござるか!? それではその禍太刀に乗っ取られてしまう



警戒している。

「ダルキアン卿、ユツキー!!!」

上空から声が聞こえたかと思うと、至竜形態のミルリーフが飛んできており、シンクが二人に対して呼びかけたようだ。

「勇者殿！ それにライ殿や姫様達も一緒にござったか」

ライ達はミルリーフの背中から下りて、ブリオツシュ達のところに駆け寄る。

「ダルキアン卿、一体何事ですか？」

「いきなりでかい爆発が起こったと思っただら今度は妙な黒い繭みたいなやつが出てきたんだが、あれは？」

どうやらライ達はブリオツシュが神狼滅牙を使った際の爆発に気が付き、それでこちらにやって来たようだ。

「爆発は禍太刀、あの魔物の力の核になっていたあの刀を親方様とで封印しようとした技によるものでござる。そして、あの繭は……」

「デイガルドが禍太刀を自らの体に突き刺して取り込もうとし、その時に自らを覆い隠すために起こしたものでござる」

「……な!?!」

ライ達は驚愕した。デイガルドを倒しきれず、しかもキリサキゴホウの力の核だった禍太刀を取り込まれてしまったという

「どうやら禍太刀の力を逆に掌握しようという魂胆のようござるが……」

「じゃが、あの刀は魔物の肉体で長いこと生命を喰らっておったから、相当な力を蓄えておるはずじゃろう。そんなものを体に取り込んだら、逆に支配されかねんのでは？」

「それが、あの者は気迫だけで自分を乗っ取ろうとする禍太刀を抑えつけていたのでござるよ。果たしてどうなるか……」

「どつちにしても、危険な敵の誕生に変わりはないってことだな」  
「ライの言う通りです。警戒を怠らないようにしましょう」

エクレールの一言で、ライ達は問題の黒い繭の方に視線を移す。そして、いつデイガルドが出てきてもいいように臨戦態勢に入った。

「あの、ダルキアン卿……」

「ライ殿、どうしたでござるか？」

「実は、オレが例の刀をさつき適当に投げ捨ててしまつて、もしあそこでもっと別の手段を取つていればこうは…」

ライは先程の行動に罪悪感を感じ、ブリオツシユにそのことで謝罪の言葉を投げようとする。

「禍太刀は普通にやつても破壊は不可能、封印しか手がないのでござるよ。だからライ殿や勇者殿が無理に何かしようとしたら逆に取り込まれた可能性もあつたでござるから、そう悲観的にならないでいいでござるよ」

「ダルキアン卿…」

「それよりも今は、あやつが出てくるのに備えて億でござるよ」

「…わかつた」

そして、ライ達はデイガルドが中にいる竜巻に視線を向けたのだつた。

その頃、デイガルドは、竜巻の中心で苦しそうにしている。彼の体内で禍太刀が肉体の主導権を奪おうとしているようだ。

「う、ぐおああ、うぐうあああ…」

『我ニ喰ワレヨ。ソシテ破壊ノ限リを尽クセ』

デイガルドの脳に、禍太刀の意思が直接語り掛けてくる。

(……俺は、ここで死ぬのか？　こんないかがわしい刀一本に意識を食われて、体を取られて、そんな無様な死に方で死ぬのか？　つーか、俺は何で異世界支配なんて考えたんだ？)

薄れゆく意識の中で、デイガルドがそんなことを考えていると、彼の脳裏にある記憶が蘇っていく。

それは今から数年前のこと…

『ここは、リインバウム？　俺は召喚されたのか？』

『物分かりが良くて助かりますね。そして、私が召喚した者です』

デイガルドはどうやら、一度リインバウムに召喚されたことがある

らしく、目の前の色白い肌をした銀髪の男に召喚されたようだ。そしてこの男……いや、この悪魔こそが…

『デイガルド、あなたには護衛としてアルミネスの森に付いて行ってもらいます。期待していませんからね』

『ありがたき幸せ、メルギトス様！』

そう、かつてリインバウムを侵略した際に調律者<sup>ロウラー</sup>と兵器に改造された豊穡の天使アルミネによって封じられ、数年前に復活して傀儡戦争を引き起こした大悪魔メルギトスだ。ここからわかるように、デイガルドはメルギトスに仕えていた悪魔だったのだ。ただし、メルギトスと彼の腹心の悪魔達が、召喚師から血識で覚えた召喚術により後から呼び出したことようだったが、それでも忠誠心は強かったようだ。

だが…

『メルギトス様、申し訳ありません…』

デイガルドは調律者とその仲間達との戦いにより負傷、それによって強制送還されてしまう。サプレスに戻った彼は、傷が完治したところにはメルギトスが再び召喚してそばに置いてくれると信じ、サプレスで己の肉体をいやすのだった。

だが、彼のその望みは果たされなかった。

『め、メルギトス様が死んだ、だと？』

『ああ。クレスメントの、調律者の末裔に負けた。しかも死に際には撒いた源罪<sup>カスラ</sup>もアルミネの生まれ変わりに浄化されて、一矢報いることすら出来なかった』

デイガルドはサプレスにて同朋からメルギトスの悲報を聞いて愕然としている。この悪魔はデイガルドと同じく後からメルギトスによって召喚されたようで、メルギトスの死によって強制送還されたらしい。

その詳細を聞いたデイガルドは、膝をついた。

『くそう、調律者め。よくも、メルギトス様を…』

そのまま、デイガルドは悔し涙を流している。彼にとってメルギトスはそれほどまで尊敬できる存在だったようだ。







魔物じや。あれはデイガルドが変じた姿じゃったか」

レオの見た夢で現れた魔物は、キリサキゴホウではなかった。デイガルドがその力の核である禍太刀を取り込んだ姿であったようだ。

『ふふふ。今の俺は魔物だとかそんなもんで量れる存在じゃねえな』

その時、デイガルドが

『このフロニヤルドを拠点とし、リインバウムを始めとした異世界の全てを総べる為に顕現した至高の悪魔。禍太刀を力の核として魔王クラスの大悪魔と化したのが今の俺だ。さしずめ、禍太刀の悪魔王デイガルドとでも名乗ろうか。あひやひやひやひやひや!!』

自ら悪魔王を名乗るデイガルド。だが、それだけの凄まじい威圧感と膨大な魔力が放たれており、ハツタリではないのは確かだった。

「親方様…」

「ああ。今回の相手は今までの魔物達とは比較にならないかもしれないかもしれぬでござるな」

今までに幾多ものの魔物を退治して封じたブリオツシユとユキカゼだったが、そんな二人でも戦慄を感じるほど、今のデイガルドは危険な存在だという。

「それでも……」

それでもこいつを倒さねえとオレ達に明日は来ねえ!!」

「パパ、わたしもがんばる!!」

真っ先に戦闘態勢に入ったのはライとミルリーフだ。ライは剣と銃を同時に構え、ミルリーフも至竜形態のまま、最初から手加減なしの全力状態だ。

「ライさん、そうですね。僕達であいつを倒しましょう!!」

「みんなの笑顔のためにも、負けられません!!」

「みんなの笑顔は姫様の笑顔。このエクレール・マルティノツジも、力をお貸しします!!」

「儂とグランヴェールの力も見せつけてやろう。覚悟しろ、デイガルド!!」

「若者達がこうも張り切っているなら、拙者も手を貸さぬわけにいか

ぬな」

「お役目だけでなく、拙者としても貴様の存在は許せぬ!!」

ライに触発されたシンク達も次々と獲物を構え、臨戦態勢に入り、デイガルドに相對する。戦闘準備は万端のようだ。

「そういうわけだ、デイガルド。」

地の果てまでぶつとばしてやる!!!」

『ほざいてろ、下等生物どもがあああああああああああああ!!』  
今まさに、決戦が始まった。

## 第24話 希望の兆し

「喰らえ！」

「喰らうでござるー！」

まず、ライがデイガルドに銃で、ユキカゼが輝力手裏剣で攻撃しながら突撃し、シンクがそれに続いていく。

『そんな攻撃が今の俺に効くか!!』

デイガルドは攻撃を受けても微動だにせず、向かってくるライ達に向けて右腕の大太刀を振り下ろす。

ライ達はそれを見ると、咄嗟に散らばって攻撃を回避する。

「行くぞー！ シンク、ユキ!!」

「合点承知!!」

ライはシンクとユキカゼに呼びかけると、剣を構えた状態でストラを使用する。そこにユキカゼが跳んできて、ライの構えている剣の胴に飛び乗る。

「行って来い!!」

ストラで強化された腕力により、剣に乗ったユキカゼを天高く打ち上げ、同じく跳んできたも同様に打ち上げた。

「ユツキー、お願い!!」

「了解でござるー！」

ユキカゼが右足を突き出してきて、シンクがそこに飛び乗る。そして、そのタイミングを見計らってユキカゼが右足でシンクを蹴り上げてさらに大ジャンプする。それによって、シンクはデイガルドの頭部付近まで一気に飛んでいった。

「たああああああ!!」

シンクは棒形態のパラディオンをデイガルドの頭に勢いよく振り下ろす。兜越しにディアルドの頭部に振動が伝わり、軽い脳震盪を起こして一瞬よろけた。

『ちい、考えやがったな。だが、これならすぐに……』

「獅子王烈火」

持ち直そうとしたところ、デイガルドの目の前にレオがグラン

ヴェールに輝力を収束して現れた。

そしてそれと同時に、ミルリーフが上空で滞空しながら魔力ビームの発射準備をしている。

「爆炎斬!!」

「いつけえええええ!!」

そのまま炎の紋章術を放って攻撃し、ミルリーフもそれに合わせて一斉射撃を行った。放たれた炎は巨大な火の鳥の姿になってディガルドに飛んでいく。

『だらああああ!!』

ディガルドは達に魔力を纏わせて、それをレオの紋章砲に叩き付ける。それによってレオの攻撃は相殺されたが、そこにミルリーフが放ったビームが雨のように降り注いだ。

『へへ、これで終わりか?』

「流石にこれで倒せるとは思わなかったが、いくらなんでも効かなさすぎじゃろ」

ディガルドはこれだけの猛攻撃を喰らってもまだピンピンしており、レオも忌々しそうに見ている。だがその一瞬の隙を突き、今度はエクレールとブリオツシュがディガルドに飛び掛かる。

「裂空……」

二人とも紋章剣の使用準備が完了しており、いつでも使用可能状態だ。

「十文字!!」

「一文字!!」

ブリオツシュの紋章剣と、それをもとにエクレールが編み出した応用技が同時に放たれる。

『おらよ!!』

それを見たディガルドは大太刀を振るい、攻撃をまとめて相殺する。魔力を用いずに武器の性能のみで紋章術を相殺する、その攻撃力

はすさまじいようだ。

『その程度の攻撃じゃ俺に当てること、ぐああ?!』

喋っている途中でいきなりピンク色の輝力が放たれ、それを顔面に喰らってしまおうデイガルド。

「姫様、やりましたね!」

「エクレールやブリオツシユのおかげです」

今の攻撃を放った人物は、ミルヒだった。今の彼女はエクセリードを覚醒させているため、今回の戦闘にも参加可能となっている。だが、ついさつき戦えるようになったばかりのうえ、ライやシンク、レオやブリオツシユといった腕の立つ面々が集まっているため、デイガルドはそちらに気を取られてミルヒのマークを忘れていたようだ。

そのため、今回は不意打ちに成功したのだろう。

『うぐ、ぬう……』

「? あいつ、ミルリーの攻撃を喰らった時よりダメージが大きくないか?」

ライの指摘通り、デイガルドは若干苦しそうにしている。攻撃の規模は明らかにミルリーの方が上だった筈なのに、何故かミルヒの攻撃の方がダメージが大きいのだ。

「もしや……」

ブリオツシユが何かに気づいたようで、シンクがそれについて尋ねる。

「ダルキアン卿、何か分かったんですか?」

「これは拙者の推測でござるが、奴の力の源が禍太刀であるから、宝剣の魔を払う力が有効なのではござらぬか?」

「なるほど。じゃからさつき、儂の攻撃を優先して相殺したわけか」

確かに、レオが同じく宝剣のグランヴェールで紋章砲を放った際もそれを接戦して相殺していた。デイガルドも本能的にそれを察したのか、武器に魔力を纏わせるという念の入れようだった。ブリオツシユの推測もあながち間違いではなからう。

すると、それを聞いたライは新たな疑問が浮上する。

「あれ? さつき、シンクが直接宝剣で攻撃したのに、あそこまで効か

なかつたはずじゃ……」

「これも推測でござるが、パラディオン本来の姿である剣の形態よりも力が弱いのかもしれないでござる」

まあ、パラディオンの剣としての姿はミルヒ曰く必要な時に変化するそうなので、他の形態にはリミッターのような力が働いているという可能性はあった。

『おらあああ!!』

「!? やべえ!!」

戦いの場であるにも考察に入ってしまった一同に、いつの間にか復活したディガルドが太刀で薙ぎ払ってきた。どうにか全員気が付き、その攻撃の回避に成功する。

ちなみに、ミルヒはシンクに抱きかかえられて事なきを経た。

『てめえら、一発喰らわせたところで俺を無視してお喋りたあ、舐めてくれるじゃねえか! ええ!』

バカにされたと思ひ激昂するディガルド。気のせいか垂れ流している魔力の量が増している。

『今度はこつちから行かせてもらうぜ!!』

ディガルドが垂れ流していた魔力が、いきなり彼の口元に集まっていったかと思うと、黒いエネルギー球へと変異する。

『があああああああ!!』

ディガルドが咆哮を上げると、と同時にそのエネルギー球が天高く跳んでいく。

「そ、空に撃った?」

「あの男のことだから、何か意図があるのでござろう」

エクレールはディガルドの奇怪な行動に首を傾げるも、ブリオツシユはディガルドがこの局面でこんな間抜けな失敗はしないと見抜き、警戒を強める。

『まあ、そつちは後のお楽しみってことで!!』

そして再びディガルドは太刀を振り下ろしてきたが、先程と違いそちらに意識を集中していたので容易く避けた。

「そんな単調な攻撃で、ぐわああ!」

「がああ!?!」

「シンク、エクレーール!!」

攻撃を避けたかと思うと、シンクとエクレーールに向けて何かに向つていき、二人纏めて吹っ飛ばされる。ミルヒが二人の心配をする中、ライやブリオツシユは攻撃が飛んできた方向に視線を向け、その攻撃を放った物を見据えている。

「し、尻尾?」

「まさか、あのような使い方をするとは…」

どうやら、デイガルドは自身の尻尾を鞭のように振り回し、それでシンク達を吹っ飛ばしたようだ。同じく尻尾を持つフロニヤルドの住人でも、長さや形状のこともあつてかこのような発想には至らないだろう。

『おらおら、呆けてる場合じゃねえだろ!!』

「!? 姫様、いったん離れろ!!」

ライは攻撃の激化を予測し、ミルヒを離脱させる。デイガルドはそのまま、太刀と同時に尻尾を使った攻撃を織り交ぜて手数を増やしてきた。今の動きは巨体であるため動きは鈍重だが、代わりに攻撃の間合いが広くなったため、そこに手数が増えたことで凄まじい猛攻と化していた。

「ダルキアンよ、このままではこちらが攻撃する隙が無いぞ!」

「レオ姫、手は打つてあるでござるよ」

「隙ありでござる!!」

その時、デイガルドの背後からユキカゼの声が聞こえた。どうやらいつの間にか背後に回っており、そのまま不意打ちを仕掛けようとしているようだ。声が聞こえたにもかかわらず、デイガルドは振り返りもせずにライ達への攻撃を続けていた。

「ユキカゼ式忍術。閃華…」

『甘いなあ!!』

ユキカゼが攻撃しようとした瞬間、突如としてデイガルドの片翼が



巨大化した。

「ぐうう!？」

ディガルドはその巨大化した方の翼で、ユキカゼを叩き落とした。  
「ユキカゼ!!」

『他人の心配をしてる場合か!!』

今度はディガルドの額の眼球から、光線が放たれた。ブリオツシユも咄嗟のことで回避できずに、左肩をその光線で貫かれてしまう。利き腕出なかったので戦闘は続行可能だが、長引くと傷が広がる危険もある。

「よくもユツキーたちを!!」

二人がやられたことに怒りを爆発させたミルリーフは、ディガルドに向かって急降下し、その勢いで蹴り倒そうとする。

『おっと。そーいやお前を忘れてたなああ!!』

ディガルドは両翼を肥大化させ、先程ユキカゼを叩き落とした要領で、急降下してきたミルリーフにその翼を叩き付ける。どうにか落ちなかったものの、強烈な打撃を喰らって体中が揺れ、ミルリーフは脳震盪を起こす。

「あ、ああ……」

『で、こいつでフィニッシュだ!!』

ディガルドが叫ぶと同時に、ミルリーフの目の前に魔方陣が出現する。そして同じ見た目の魔法陣が、ミルリーフをとり囲むように四方八方に出現した。

—パチンツ—

最後にディガルドが左手で指を鳴らすと、その魔方陣から極光が放たれる。

—どおおおおおおおおおおんツ—

最後に大爆発が起きた。

爆発が晴れると、ミルリーフが傷だらけの状態で落ちてきて、落下中に子竜の姿になってしまう。おそらく、大ダメージを受けて消耗したためにそれを抑えようとしたのだろう。

「ミルリーフ!!」

その光景を見たライはその場から走り出し、落ちてきたミルリーフを受け止めようとする。ライはどうにか間に合い、落ちてきたミルリーフのキャッチに成功した。

「ミルリーフ、大丈夫か!？」

「ピ、ピギィ…」

ミルリーフは重傷を負ってはいるが、意識は残っており、治療すれば助かりそうだった。

「こやつ、全身が武器と化しておる。しかもさっきのあの威力は……」  
「複数の動作を行いながら、瞬間的にそちらの操作に意識を映している感じでござるな。こんなことが可能なか……」

デイガルドの、まるで複数の思考があるかのような複雑な攻撃と、ミルリーフを落としたあの一撃に、その場にいた全員が戦慄している。

「ダルキアン卿、レオ閣下!!」

声のした方を見ると、先程吹っ飛ばされたシンクとエクレールがこちらに駆け寄ってくるのが見えた。エクレールの方は、ブリオツシユの方に真っ先に向かっていった。

「ダルキアン卿！ その傷は……」

「拙者よりユキカゼを。先程デイガルドに叩き落されてしまったでござるから、拙者より重症の筈でござる」

「ユキが!？ 閣下、姫様の方は……」

「ミルヒはライが向こうに下がらせた。流石に一人であるの猛攻を避けられそうになかったからな」

「そうですね。勇者、私はユキを回収するから閣下たちと攻撃に回れ」  
「わかった、エクレー」

戻ってきたシンク達が、早速行動に移ろうと思ったその矢先、いきなりデイガルドが空を見上げた。――

『そろそろみたいだな』

デイガルドが何かを呟いたかと思うと、一同の脳裏にある光景が浮かんだ。それは、先程デイガルドが魔力球を空に向けて放ったあの行動だった。先程の猛攻で意識がそちらに持っていかれ忘れかけてい

だが、それが今になってこちらに返ってくるようだ。

「まさか……全員、ここから離れろ!!」

レオが叫ぶと同時にシンク達はその場から離れ、バラバラの方向に逃げる。すると、上空から黒いエネルギー弾が雨のように降ってきた。

「うわあ!? さっき撃つたのは一発だけじゃ…」

「まさか、空で分裂でもしたのか!？」

そのままデイガルドを中心に半径50mほどの範囲で、魔力弾が降り注いでいく。あまりの範囲の広さに、全員が回避に集中せざるを得なかった。

「エクレ、姫様とユツキーが!!」

「!？」

ミルヒは身体能力が他の面々と比べて低く、ユキカゼも先程ブリオツシュが言ったように身動きが取れない状態であるため、一方的に攻撃を喰らってしまうのは確実だった。

のだが、その心配も気鬱だったようだ。

いきなり、ピンクの輝力が放たれる光景がシンク達の視線に入ったのだ。

「エクレ、もしかしてアレって……」

「ああ。姫様がエクセリードで身を守っているようだ」

「おー……いい!!」

「勇者殿ー、エクレー!!」

ミルヒの安否を確認した直後、ライとユキカゼの声が聞こえたのでそちらに視線を移す。その先には、ライが脇に子竜ミルリーフを抱え、ユキカゼを負った状態でこちらに駆け寄って来ていた。ミルリーフを受け止めた直後にあの攻撃が始まったので、そのままユキカゼも救出したのだろう。

「ライさん、ユツキーを助けてくれたんですね!」

「ああ。でも、その状態で、走り回った、せいで、少し疲れが……」

流石のライも、人一人分の体重を支えながらあの猛攻を凌ぐのは体力が持たなかった。そして、その隙をディガルドは逃さなかった。

『固まるのは命取りだぜえええ!!』

「ぐああああああ!!」

「うわああああ!!」

ディガルドはその隙を見て、しゃがむと同時に右足でライ達を薙ぎ払う、俗にいう足払いを放ってきた。

「く……」

「今のは、流石に……」

ライ達はディガルドの足技を喰らって満身創痍となっていた。あの巨体からなる足技の威力はすさまじく、これと言って攻撃を喰らっていなかったライも大ダメージを負っている。しかも、ライはすでに重傷を負っていたユキカゼやミルリーフを庇ったため、受け身を取れずに余計なダメージを負ってしまったようだ。

『中々に粘ったみたいだが、そろそろお終いにするか』

そう言っただディガルドが太刀を振り上げると、何処からともなくピルクの輝力が放たれた。先程のようにミルヒが不意打ちを仕掛けたようだ。

だが、ディガルドは咄嗟に攻撃に気づいて、振り上げた太刀をその輝力に向けて振り下ろし、相殺してしまう。

『同じ手を二度と食うかよ!!』

「きやあ!」

そのままディガルドは攻撃が飛んできた方にいたミルヒを見据え、ブリオツシュに使った光線攻撃を放つ。それが左手の甲を貫通し、ミルヒは持っていたエクセリードを落としてしまう。

「「姫様!」」

「ピギイイ!!」

ついにミルヒまでが攻撃を喰らってしまい、ライ達が揃って声を上げる。

『さて。全員に最低一発ずつぶち込んだし、このままとどめに行く

か!!」

デイガルドが太刀にこれまでと比べ物にならない膨大な魔力を込めたかと思うと、それをいきなり地面に突き刺した。それによって、地面にデイガルドを中心とした巨大な魔方陣が描かれた。

「ま、まさか……」

『ああ。中央を除く魔法陣内の物体を一つ残らず塵と化す技だ。一瞬で終わるから、苦しまずに死ねるぜ』

ライ達は今、逃げようにも満身創痍で体の自由がきかないため逃げられない。レオやブリオツシユは先程の魔力弾の雨で散り散りになつてしまったのでわからないが、今この場で動けない自分達は少なくとも逃げられない。

「姫様、急げば間に合うかもしれないから、早く逃げて!!」

「我々のことはいいいですから、早くお逃げください!!」

「イヤです! シンクやライさん達を置いて逃げるなんて、出来ません!!」

「姫様はビスコツティの象徴だろ!! そんなあんたがここで死んだら国民が悲しむだろ!!」

「ライ殿の言う通りでござる、だから姫様はお逃げください!!」

ライ達は必死になつてミルヒを逃がそうとするが、ミルヒはその優しさからライ達を置いて行けずにいた。

『えらく強情なお姫様だな。まあ、おかげで攻撃する手間が省けたぜい』

どうやら、この大技の準備中でもある程度の攻撃は可能なようで、どの道ミルヒの脱出は絶望的だったのだ。

『じゃあ、お前らが死んだあとは任せな。そのあとでこの悪魔王デイガルド様がこの世界の支配者として君臨してやるからよ』

その時、魔法陣が少しずつ光り出してきた。どうやら攻撃の準備が整いつつあるようだ。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

もはや危機は逃れられない、そう思いライは叫んだ。

そして……

『ぐあああ!?!』

いきなり何かが飛んできたかと思うと、それがデイガルドの顔面にぶつかった。その時の衝撃でデイガルドは仰け反り、それによって地面に刺した太刀が抜けた。それと同時に魔方阵が徐々に消滅していき、攻撃が不発に終わったことが明白となる。

そして、その隙を見計らってミルヒがライ達を駆け寄ってきた。

「みんな、大丈夫ですか!?!」

「なんとかな。それにしても一体なにが……」

ライが視線をその物体が飛んできた方に見ると、そこには見覚えのあるものがあつたのだ。

「な、なんでアレがいるんだ?！」

それは、オレンジの色をした巨大な人型の機械だったのだ。これはロレイラルの召喚獣ナツクルボルトといい、巨大な両腕をジェット噴射で打ち出して敵を粉砕する戦闘兵器だ。召喚獣がいるということはそれを召喚できる者がいるということ。だが一体誰が…

「あれは、何だ?！」

次にエクレールが何か気づく。いつの間にか上空に正体不明の飛行物体が現れたのだ。

シンク達がそれに対して警戒する中、ライとミルリーフはその正体に気づいた。

「ろ、ロレイラルの乗り物? あれに乗ってる人がアレを召喚したのか?！」

またもロレイラル関連の物が出現、少なくとも味方のようなだが何者なのか? ライがそう思うと、その乗り物の窓が開いて、ある人物が身を乗り出してライに呼びかけてきたのだ。

「ラーラーラーラーイ！ 助けに来たわよおおおおお！」

「リ、リシエル!？」

なんと、それに乗っていたのはリシエルだった。なぜ彼女がフロニヤルドにいるのか、など疑問はあったが援軍が来てくれたことを喜ぶのがいいだろう。

『召喚師だと!? 一体どうやってこの世界に来たんだ!?』

予想だにできなかった事態に、デイガルドも思わず狼狽える。

「生憎だが、来たのは召喚師だけではないぞ」

その時、デイガルドの耳に聞き覚えのない女性の声が聞こえた。そしてその声のする方に振り替えると、いきなり矢が飛んできたのだ。

『ぎゃあああ!?!』

その矢がデイガルドの額についている眼球に突き刺さる。そして立て続けに矢が放たれ、そのすべてがデイガルドの顔に刺さっていた。

『な、何が起こっ「ホワタアアアアア!!」ぐあああ!?!』

今度は掛け声と同時に何者かがデイガルドの頭部に飛び掛かり、そのまま右のこめかみに蹴りを叩き込んだ。連続して攻撃を喰らったデイガルドは、そのまま倒れ込む。

そして、その蹴りを放った人物は空をかけてきた何かに手を掴まれ、その何かと共にライ達のすぐ近くまで降りてきた。

「ライ、それに御子様、大丈夫ですか?」

「店主殿に御子殿、助太刀に来てやったぞ」

空を駆けていたのはインディアン風の衣装を身に纏い、背中に翼を生やした女性。その手には弓が握られており、デイガルドに矢を放ったのも彼女のようなようだ。もう一人の蹴りを放った人物は、カンフー映画の衣装のような服を着た、角の生えた赤毛の青年だ。

この二人はミルリーフに使える4人の御使いのうち2人、順にアロエリとセイロンという名だ。

アロエリは幻獣界メイトルパの有翼亜人セルフアン族の弓の名手で、セイロンは鬼妖界シルターン出身の龍人族の武術家（同時に龍人

族の未来の長)だ。

「アロエリにセイロン、二人ともどうやって?」

「それは後で落ち着いてから話そう。それよりも今はあれをどうするか」

セイロンがそう言っ指を指した方には、起き上がろうとしているデイガルドの姿があった。

「勇者、ミルヒ、ライ!!」

「エクレール達も無事でござるか!」

その時、レオとブリオツシユがこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「貴様ら、何者だ?」

「ちよつと待て、閣下。二人とも味方だから安心してくれ」

セイロン達を見るなり、グランヴェールを構えて警戒心をむき出しにするレオ。まあ、いきなり現れた見たこともない種族が相手だと、この反応は当然だろう。

「ライ、あなた御子様にお怪我を負わせて……」

「またも後ろから声が聞こえてきた。声の主を見た一同、特にシンクは驚く。」

「え、天使?」

そこには、シンク達と同年代の少女の姿をしていたが、背中に白い翼を生やしており、薄い紫色の髪をドリルヘアにし、その先端に光る輪が嵌っているという容姿だった。

輪の場所はともかく、その姿はまさに天使そのものだった。

「私は御子様に使える御使いの一人、リビエルと申します。とりあえず込み入った話は後にして、まずは皆さんの治療をいたします」

そう言っリビエルは懐からサモナイト石を取り出して、召喚術を行使する。

「召喚、聖母プラーマ」

現れたのはデイガルドも召喚していた聖母プラーナだ。デイガルドが召喚していた召喚獣が現れたので一部のメンバー(主にエクレール)が警戒していたが、召喚術の概要はライから聞いていたのですぐ



に警戒を緩める。

プラーマを呼び出した直後、リビエルは両手をかざして魔力を収束させる。すると、それに比例してリビエルの翼も光を放ちだした。

「光の翼よ。彼の者達の傷を癒したまえ!!」

プラーマの治癒魔法に合わせてリビエルは淡い光をライ達に放つ。すると、ライ達の傷が見る見るうちにふさがっていった。この光は天使特有の能力“治癒の奇跡”で、一般的な傷だけでなく肉体の不調や欠損部まで治療してしまう力だ。

ただし、欠点として魂そのものに負担をかける為、使いどころを間違えるとかえって体調不良を促してしまうこともあるという。ただし、ライやシンクをはじめとし、この場には若く生命力があふれたものが集まっているのでその辺りも心配はなからう。ユキカゼも自身で土地神を名乗っていたことから普通の生物よりも魂が強靱なのだろうし、ブリオツシユも見たところ問題無さそうだ。

『隙だらけだぜ、てめえら!!』

するとディガルドがいつの間にか起き上がっており、治療中のライ達を目掛けて攻撃を仕掛けてきた。口元に魔力を収束して、それを弾丸として打ち出してきたのだ。

「やれやれ。君は回復中の隙ぐらいカバーする要員がいることも考えられないのかい?」

何処からともなく声が聞こえたかと思うと、突如一体の巨大な獣が上空から現れた。

その獣はエジプトのファラオの被り物を被った虎のような姿で、背中から鷲の頭と翼が生えているという、奇怪な姿をしていた。そして、その獣は咆哮を上げたかと思うと同時に、黒い稲妻を落としてその魔力弾を相殺したのだ。

「ま、魔物のような姿?」

「だが、儂らを助けてくれたじゃと?」

「こいつは確か……」

周りが驚く中、ライはその獣に見覚えがあった。これも召喚獣で、

凶魔獣レミエスという名だ。複数の幻獣を外道の術で合成した存在で、ある人物が十八番としている召喚術だ。

すると、レミエスの背中から一人の男が下りてきた。そしてその男は、ライと同一年ほどの少女を抱きかかえている。

「ライ、まだクラウレが療養中だから僕らが代わりに来たよ」

「だから安心してね、ライ」

「ギアンにエニシア!？」

なんと、リシエルや御使いに混じってギアンとエニシアまでがフロニヤルドに足を踏み入れていた。非戦闘員の彼女がいることに、驚きを隠せなかったライだった。

「ギアンはともかく、なんでエニシアまでここに？」

「みんなに無理を言っただけで連れてきてもらったの。流石に私は直接戦えないけど、みんなの役に立てるはずだから」

そう言っただけでライを無理やり納得させるエニシア。まあ、ギアンが墮竜化した際もエニシアの能力があったから勝てたようなものなので、納得せざるを得なかった。その時に丁度治療が終わり、レオが真っ先に問い尋ねる。

「ライよ、この者達は一体？」

「さっきも言ったように、全員リインバウムでのオレの仲間だ。ギアンやエニシア、あとリシエルはシンク辺りも通信越しに会ってるだろう」

「まあその通りなんですけど、それにしてもずいぶん个性化的な方達で……」

シンクも流石に顔が引きつっていた。悪魔の次に天使やら龍人やらと立て続けに会ってしまったのだから、この反応は当然だった。

すると先程の乗り物が着陸し、中からリシエルが下りてきてライ達のところへ駆け寄る。彼女しか降りてきてない辺り、どうやらリシエル自らが操縦していたようだ。

「ライ、どうやら無事みたいね」

「おかげさまでな。とにかく、来てくれてありがとう」

「ま、まあ幼馴染のピンチなんだから、当然よ当然！」

ライに礼を言われたリシエルは、思わず顔を赤くする。

「つて、そんなことより！ エニシア、もう全員揃ったからアレをお願い！！」

「うん、それじゃいくね」

そう言うと同時に、エニシアの体が光り出したかと思うと、その光がライ達にも移っていった。

「な、なんじゃこれは？」

「とつても、優しい光……」

「だが、これは……」

「体の奥底から、力が湧いてくる！」

シンク達はエニシアが放つ不思議な光と、それによる不可思議なパワーアップに驚きを隠せずにいる。

「これは、紋章術ではござらん」

「かといって、ライ殿達の召喚術とも違うようでございます」

ブリオツシユとユキカゼもこの力について考察するが、見たことない系統の力ゆえに見当がつかない様子だった。

「これは、私の生まれつきの力です」

「生まれつき？」

エニシアの言葉に、シンク達は首を傾げる。ライ達はかつてこの力によって墮竜と化したギアンを止められたので、この力の詳細をよく知っていた。

「エニシアは妖精と人間のハーフでね、これは彼女の妖精としての力なんだよ」

「妖精とのハーフ……」

シンクがエニシアの詳細を聞いて唖然としている。フロニヤルド組も妖精が何かは知らなかったが、名前の響きから精霊と似た何かだと推測し、エニシアがその特殊な力を持っていることに驚く。

そこで口を開いたのは、いつの間にか人の姿になったミルリーフだった。

「妖精はメイトルパに住む花から生まれる生命で、生まれたもとなった花ごとに異なる力を持っているの」

ミルリーフがそこまで説明をすると、ギアンがその続きを引き継ぐ。

「エニシアの母親は、その妖精の中でもとりわけ特殊な力を持った月光花シグマリアという花から生まれた妖精なんだ。そしてそのシグマリアの妖精の力というのは……」

「……生物の秘めたる力と才能を開花させる。だからみなさんが感じている力は、皆さんの中で眠っている力なんです」

「儂らの秘めたる力……」

「私に、これほどの力が眠っていたのか」

「でも、これなら……」

「あいつに、デイガルドに勝てる!!」

エニシアの力の正体を知り、シンク達の目に闘志が宿っていく。そして、それを見てデイガルドが焦り出した。

『妖精の血を引く人間、だと？ しかも、それによるパワーアップ!』

「まあ、そういうことだ。で、デイガルド」

その時、一同は総じて得物を構えて臨戦態勢に入る。そしてその先頭にライが立ち、剣の切っ先をデイガルドに向ける。

「さっき言ったことを今度こそ実行させてもらうぜ」

「ライさん、僕にも言わせてください」

「おう、せっかくだからいいぜ」

隣に来たシンクも、今度はパラディオンを神剣形態にして、ライ同様に切っ先をデイガルドに向ける。

そして、二人で同時に叫んだ。

「今度こそ、地の果てまでぶつとばしてやる!!」

第25話 絶望を打ち砕け We are Her  
oes

「オレとリビエルで奴を牽制するから、ライ達は地上から攻撃を頼む」  
「わかった。二人とも、頼んだぜ」

アロエリはリビエルと二人で飛翔する。

「リビエル、憑依召喚を頼む」

「任せて、アロエリ」

アロエリの指示を受けると、サモナイト石を取り出して召喚術を使用する。憑依召喚とは、妖怪や霊体の召喚獣を他者の体に宿らせることで、味方の強化や敵の弱体化を促す召喚術のことだ。アロエリはリビエルに強化用の憑依召喚を頼んだようだ。

「召喚、氷魔コバルディア!!」

リビエルによって召喚されたのは、黒い鎧と青いマントを身に着け、二本の剣を繋げたダブルセイバーのような武器を持った女性の悪魔だった。コバルディアは名前通り氷の魔法に長けた召喚獣で、その氷魔法で直接戦闘や憑依による強化を促す応用の利く召喚獣だ。

召喚されたコバルディアは半透明になったかと思うと、アロエリの体と同化した。憑依に成功したようだ。

「氷の矢を受けてみる!!」

アロエリが早速デイガルドに弓を射ると、放たれた矢が氷の魔力に覆われて飛んでいく。そして、同様に氷の矢を連続して発射すると、それがデイガルドの体のいたるところに刺さる。すると、刺さった箇所からデイガルドの体が凍り付いてきた。

『この程度の攻撃で俺を止められると思うな!』

だが、デイガルドは意に介さずにアロエリに狙いを定め、太刀を振り下ろしてきた。やはり的が大きすぎるようで、強化したとはいえ矢の攻撃では決定打は与えられないようだ。アロエリはデイガルドの攻撃を、落ち着いて回避する。

「オレだってこの程度で効くとは思ってないさ。あくまで牽制してい

るだけだ」

『何？ はっ!?』

その時、どこからか巨大な火の鳥が飛んできて、それがデイガルドの左腕に命中した。

『ぐあああ!?! し、しまった…!』

「あの程度の攻撃で気を逸らされるとは…：貴様、本当は大したことないのではないか?」

今の攻撃が飛んできた方を見ると、レオがグランヴェールを構えてドヤ顔で立っている。急な増援によつて、デイガルドは動揺しているようだ。

『こつなつたら、頭数を揃えさせてもらうぜ』

すると、デイガルドの周囲に魔力が立ち込め、召喚術の発動する前触れが起こる。この状態でも、どうやら使えるようだ。しかもそれだけでなく、キリサキゴホウの周囲に現れた靈魂のような物も現れた。数が増えて不利になる、と思われたが……………

『な!?! 召喚術が…!』

なんと、召喚術がいきなり中断されて、靈魂だけが出現した。増援の数を減らされてデイガルドも思わず動揺する。

「あつちの方は召喚術じゃないみたいだな。送還術が効いてない」

召喚術が中断されたのは、ギアンによるものだった。ギアンは召喚術の原型である『送還術』を使えるのだ。

送還術とは、サプレスの悪魔やシルターンの悪鬼といった異世界からの侵略者を迎撃するために生み出された術で、相手を無理やりもといたい世界に送り返す術で、これを逆転して召喚術が生まれたのだ。現在は召喚術の発展で廃れてしまっているので、おそらく送還術を使えるのはギアンだけと思われる。

「あつちの靈魂どもは、我らに任せてください!」

「拙者達も見せ場が欲しいでござるよ」

ギアンの前にエクレールとユキカゼが躍り出てくる。二人とも紋章を展開しており、戦闘準備万端だ。そして、そんな二人に向かって

靈魂達が飛び掛かって来た。

「紋章剣…」

「ユキカゼ式忍術…」

二人の紋章が色鮮やかになり、技の発動準備が完了した。

「裂空十文字!!」

「閃華・双烈風!!」

エクレールは自身の十八番を、ユキカゼは先程の戦闘で出しそびれた技を放つ。ユキカゼに関しては、ミオン砦戦でミルリーフの窮地を救った輝力の手裏剣を飛ばす技のようだ。

二人が技を放つと、とんでもないことが起こった。

「うえ!?!」

「で、でかい…」

なんと、二人の技が通常よりも強化されて放たれたのだ。『裂空十文字』は普段の数倍の出力で輝力を飛ばして靈魂を次々と押しつぶしていき、『閃華・双烈風』は投げると同時に手裏剣が巨大化して、次々と靈魂を切り裂いていった。

「ユキ、確かエニシアは私達の潜在能力を引き出したと言っていたよな」

「だとすると、拙者達にはここまでの強力な力が眠っているということになるでござるな」

二人は、自身の中に眠っているという力の強さに、驚愕するのだった。デイガルドも同様だったようで、二人の方を見ながら呆然としていた。

『な、なんなんだあれは…ぬぐつ!?!』

茫然としてみると、デイガルドは胸部に痛みを感じて苦痛の表情を浮かべる。痛みのする方を見ると、シンクがパラディオンを突き刺していた。

「よし、効いてる!」

『な!?! てめえ、いつの間に…』

「あなたが味方と呼んでる間に近づいたんですよ。しかもエクレ達の攻撃に驚いてたんで、隙だらけでしたし」

そう。シンクはライやセイロンといった前衛組と共に、デイガルドが召喚術を使っている間に接近、攻撃を仕掛けたのだ。まずシンクを担いだセイロンが、ジャンプ台役のライに打ち上げられ、限界まで跳びあがった後でシンクを蹴り上げ、それに合わせてシンクもジャンプして一気に飛びあがって攻撃をしたという算段だ。

『てめえ、離れろ!!』

デイガルドがシンクを払い除けようとしたら、咄嗟にパラディオンを抜いて咄嗟に地上に降りる。

「童よ、あとは任せたまえ」  
わらべ

「わかりました!」

すると、地上に落ちていくシンクと入れ違いにセイロンが飛びあがって来た。どうやらライが先ほどと同じ手順で打ち上げたようだ。シンクはそれを見ると咄嗟にパラディオンを棒に変化させる。

「行っけえええ!!」

シンクはセイロンとすれ違う際に棒をバットの要領で振り回し、それをセイロンが足場代わりにして一気に飛びあがる。

「ホワタアアアアアアアアア!!」

『ぐがあ、ああ…!?!』

セイロンは高速でデイガルドの懐に飛び込み、シンクがつけた傷口に蹴りを叩き込む。生傷に直接衝撃が与えられたので、デイガルドのダメージは大きかった。

攻撃を終えると、セイロンは重力に従ってそのまま自然落下するが、そこにアロエリが飛んできて、先程のように彼の腕を掴んでそのままデイガルドから距離を取って飛翔する。ちなみに、落下していったシンクはライにキャッチされて事なきを得た。

『クソがあ……これでも喰らいやがれ!!』

猛攻を喰らったデイガルドは激情し、周囲に魔力の塊をいくつも作り出す。そして、それらを辺り一面に乱射しだした。

「あいつ、とうとう見境が無くなったな」

「これは避けるの難しそうですね…」

怒りに任せて撃ち出された魔力弾だったが、その一つ一つの的確に



ライ達を狙っている。

だが、その回避について心配するのは気鬱だった。どこからともなく、無数のビームが放たれてそれが魔力弾を一つ残らず撃ち落した。

「この攻撃は…」

「パワー！」

「シンクロー！」

上空から、至竜形態のミルリーフがミルヒを背に乗せて飛んできたのだ。どうやら、今の攻撃は二人によるものだったようだ。二人のおかげで難を逃れたかと思うと、ミルリーフの背中からミルヒがブリオツシユに抱えられた状態で飛び降りてきた。

『てめえら、いい加減にしやがれ!!』

直後にデイガルドがまたもぶち切れしたかと思うと、地上のライ達に向けて額からレーザーを放ってきた。それと同時に、尻尾をこちらに伸ばしてそれを連続で突き刺してくる。攻撃をよけながら、ブリオツシユはあることが気になっていた。

「さつきデイガルドの額は矢を受けて潰されたはずなのに、普通に機能している?。」

「まさか、再生したのか?。」

そう。デイガルドは額にある眼球からレーザーを放つのだが、それはさつきアロエリの矢によって潰されて使えなくなったはずだった。にも拘らず、こうやって普通に使っている。どうやらパワーアップと同時に再生能力まで手に入れたようだ。よく見ると、レオの攻撃で丸焦げになった左腕や、シンクがつけた胸の傷口が徐々に治っていくのが見える。

逆転できたかと思っただらまたふりだしになってしまう、そう思ったその時…

『んんっ!?!』

なんと、いきなりデイガルドの頭が凍り付いた。それによって眼球も凍って魔力の収束も中断され、レーザー攻撃も止まった。

「みんな、大丈夫か?。」

「ギアン、助かった」

何かの足音が聞こえたのでそちらを振り向くと、レミエスが背中にギアンとエニシアを乗せて走ってきていたので、その攻撃によるものようだ。レミエスの背からギアンがこちらに声をかけてくるので、ついでに彼の知恵を借りることにした。

「ギアン、あいつなんだけど、とんでもねえ勢いで再生していくんだ。どうすりゃいい?」

「みたいだね。それを攻略するとなると……」

ギアンは早速思案してみる。そして、結構速く考えがまとまった。

「やっぱり、強力な攻撃を連続して叩き込んで再生する隙を与えないようにするしかないな」

「そうだよなあ。あの時もそうだったけど、コイツにそれをやるとなると骨が折れそうだな……」

比較的単純な作戦だが、デイガルドの今のサイズを考えると結構難しい。

ちなみに、ライの言うあの時というのは、ギアンが敵としてトレイユの町に攻めて来たことだ。ギアンは幽角獣という聖獣の血を引いており、それによってデイガルドと同じく再生能力を持っていたので、自身がやられて厳しい攻撃を考えた結果、この結論に至ったというわけだ。

どうしようかと思っていたら、リビエルがこちらに下りてきた。

「だったら私が強力なのを一発ぶちかまします。皆様、下がってください」

「リビエル……そうか、あれを呼ぶのか。みんな、とりあえずリビエルの言う通り下がれ!」

皆が距離を取ったのを確認すると、リビエルサモナイト石と一冊の本を取り出す。取り出した本を開くと同時にサモナイト石に魔力を込めると、それに連動して開いた本のページがひとりで、しかも高速でめくられていく。

「おいでなさい!!」

召喚に必要な魔力が溜まったところで本を閉じ、叫ぶと同時に召喚

術が行使された。

「あ、あれは……」

「女の人？」

「あのような者を戦わせるのでござるか？」

召喚されたのは杖を携えた天使の女性なのだが、一見してもそんなに強そうではない。だが、シンク達が魔力という力を感じることに慣れていないため気づいていないが、実はこの女性はすさまじい魔力をその身に秘めていた。

「いいや、あれだけじゃない。上をよく見ろ」

「上？ ……ええ!？」

「きよ、巨大な鎧!？」

ライに指摘されて上を見上げると、天使たちと同じ白い翼を持った上半身だけの巨大な鎧がいたのだ。そして、その鎧には強大なエネルギーに満ちている。

この召喚獣の名は聖ジャルヌアーク。上空に現れた巨大な鎧、通称“聖鎧”を使役して戦う天使の聖乙女で、清き歌声とともにあらゆる不浄を浄化するといわれている。

「~~~~♪」

ジャルヌアークが歌いだしたかと思うと、聖鎧は左腕を振り上げてそこに浄化の魔力を集める。そして、左腕全体に魔力が溜まったと同時に、ジャルヌアークと聖鎧は飛びあがる。

まだ頭が凍っているので喋れないが、デイガルドが焦り出したのが見て取れた。ジャルヌアークのような高等天使は悪魔の最大の天敵なので、攻撃を喰らいたくないのは当然だろう。どうにか防ごうと、デイガルドは太刀に魔力を纏わせる。

「させないよ。レミエス、頼むー!」

ギアンはエニシアを抱きかかえてレミエスから降りると、デイガルドにレミエスを<sup>けしか</sup>喚ける。レミエスはデイガルドに飛び掛かって押し倒し、そのまま四肢を抑えて動きを封じる。

「リビエル、今だ!!」

「わかりました。ジャルヌアーク、大聖浄!!」



『今度こそ喰らうか!!』

ディガルドも太刀を構えてこの技を防ごうとする。封魔と銘打たれた技である以上、宝剣や天使の力同様に今のディガルドには効果が絶大なのは確実なので、なんととしても防ぎたかった。

「せつかくの大打撃、防がせるわけにはいかぬ。アロエリ!!」

「ああー!」

セイロンが叫ぶと、アロエリは腰のホルダーに弓を掛け、セイロンの右腕を自身の両腕でつかみ、一気に飛翔する。

「いけええええ!」

「ウオアタアアアアアア!!」

天高く上昇したアロエリは、そこからセイロンをディガルド目掛けて力の限りブン投げる。投げられたセイロンは雄叫びを上げながら蹴りの態勢に入って下降していく。そして、ディガルドの右肩に直撃した。

その衝撃で構えを解かれたディガルドは、攻撃を諸に喰らう。

『ぎゃあああああああああ!』

ブリオツシユの技を喰らったディガルドは痛みから絶叫、胸から腹にかけて巨大な刀傷をつけられた。レオやジャルヌアークの攻撃同様、効果は絶大だ。

「んじゃ、今度はアタシの番ね」

リシエルはサモナイト石を取り出すと同時に叫び、杖の先に魔力を収束させる。杖を介してサモナイト石にリシエルはありったけの魔力を注ぎ、召喚術を使用した。

「召喚、機神ゼルガノン!!」

リシエルが召喚獣の名前を叫ぶと、その召喚獣“機神ゼルガノン”が現れた。そして、それを見たシンクやフロニヤルド組はまたも度肝を抜かれることとなる。

「ええええええ!! 何ですかコレ!」

「また鋼鉄の巨人!」

「しかも二体とは……」

「ま、まさかこれロボット!」

そう、ゼルガノンは両肘から鋼鉄製のブレードを生やしたスマートな人型ボディと、胴体と頭部が一体化したような体躯で両肩に巨砲が備え付けられた重厚なボディの、まさに地球のテレビアニメに登場しそうな巨大ロボットそのものの姿をした二体一組の召喚獣だったのだ。かつてロレイラルに存在した伝説の機械技師「名匠ゼル」が作ったという究極の戦闘兵器「ゼルシリーズ」の一つに数えられ、高い戦闘能力を有する召喚獣だ。

「ゼルガノンA、クロスラッシュユ!!」

リシエルが指示を出すと、スマートな方のゼルガノンの両腕が回転して両肘のブレードが前を向いた。それと同時に背中から炎を吹きだして高速ダッシュし、デイガルドに突撃していく。

デイガルドは今度こそ喰らうまいと、ゼルガノンAを迎え撃つために右腕の太刀を振り下ろしてきた。かと思うと、いきなり何かがデイガルドに向かって飛んでいき、振り下ろされた太刀に攻撃を加えてそのまま達が振り下ろされる軌道を逸らした。

飛んできた何かは、武者甲冑を身に纏った鬼で、武器は巨大な太刀だった。ただし、今のデイガルドのように腕と一体になっているのではなく、しっかりと腕に握られている。

『な!?!』

「油断したようだな。私も召喚術が使えたとは思いついただろう」

今の攻撃はセイロンの召喚獣によるものだった。セイロンはリビエルやリシエルに比べると威力が低いというだけで、ライやアロエリよりは召喚術が得意な方に分類されているのだ。今回は攻撃を逸らすのが目的だったので、それなりに衝撃を与えられれば問題なかったということを使用したのだった。

ちなみに召喚されたのは鬼神将ゴウセツという、大昔のリンバウムへの侵略戦争で人間側についた伝説の鬼将の一体だ。そして、そのゴウセツによって攻撃が不発に終わったため、ゼルガノンAの攻撃を顔面に諸に喰らった。

『が あああ!?!』

「今よ！ ゼルガノンB、ファランクス!!」

ゼルガノンAの攻撃が入ったのを確認すると同時に、リシエルは残ったもう一体のゼルガノンに指示を出す。するとそのもう一体、ゼルガノンBの両肩が開閉し、そこからミサイルが発射された。

『ぎいあ、がああああああああ!?!』

発射されたミサイルは、今のゼルガノンAがつけた傷や、先程つけられた傷に直撃した。いかに強靱な肉体で、宝剣や封魔の技以外の攻撃の耐性が強くても、鎧を失った体に連続して攻撃を喰らうと傷はつくし、その傷口に直接攻撃されればまさに生き地獄というべき苦痛を味わうこととなる。

「おーい、貴様らあー!」

「儂らのことも忘れてもらっては困るぞー!」

「でござるー!」

その時、レオがエクレールとユキカゼを引き連れて、こちらにかけて来た。しかも、攻撃の準備が万端だ。

「魔神・閃空斬!!」

「裂空十文字!!」

「閃華・双烈風!!」

そのまま三人の紋章砲がフルパワーで放たれ、デイガルドに命中、さらにダメージを重ねていく。

それが終わったのを見ると、リシエルが再び杖を構えだす。

「じゃあ、シメの一発行くわよ。ライ、ミルリーフ、お願い!」

「わかった。やるぞ、ミルリーフ!」

「うん!」

リシエルに言われるがまま、ライはミルリーフと二人でリシエルに魔力を注ぎ込む。この技はサモンアシストといい、複数人で召喚術を行することで威力アップや魔力の節約、それによってでしか使えない召喚術を使用可能とする技だ。

そして、ゼルガノンにはサモンアシスト専用の召喚術があった。そして、その実態は……

「ゼルガノン、ドッキング!!」

リシエルの叫び声と同時に、ゼルガノン二体が飛びあがり、そのまま上空で変形を始めた。ゼルガノンAは両腕が折りたたまれると、股から開いて両足がそのまま腕の形に変形し人の上半身のような形状となる。対してゼルガノンBは、背中の巨大パーツが両足と連結して、こちらは下半身のような形状となった。そしてそのまま変形した二体が連結、平たく言えば“合体”して巨大な人型ロボットの姿となった。この合体機構がゼルガノンの真骨頂で、この状態でないと使えない強力な武装があった。

「な、ななななななな!」

「別々の体が一つに……」

「ま、まさかフアンタジー世界で合体ロボを見るなんて……」

ジャルヌアークと違った意味で度肝を抜かれたフロニヤルド陣営。特にシンクは、自身の世界では創作物の中の存在でしかなかった合体ロボの出現に、どうリアクションするべきかで困惑していた。

そうこうしているうちに、ゼルガノンの右手に巨大な剣が出現した。この剣こそがその合体時専用の武装で、それを握ったと同時に両足のバーニアを噴出して上空に飛びあがる。

「神剣イクセリオン、ゴー!!」

リシエルが叫ぶと同時に、ゼルガノンは右手に握っていた剣“神剣イクセリオン”をデイガルドに向けてブン投げる。

『な!』

先程の連続攻撃によるダメージでデイガルドは対応できず、イクセリオンが直撃した。胴体を刺し貫かれると同時に、イクセリオンから破壊エネルギーが放出され、デイガルドの体が爆発した。

『く、くそお……よくも、やったな……』

爆発が晴れた先にいたデイガルドは、左腕が力なく垂れ下がり、右



腕の太刀はボロボロになって、イクセリオンの爆発によって胴体に風穴が空いている、といった状態にもかかわらずまだ生きている。

「あんな状態でまだ生きていられるなんて、どういうことだ？」

「そうよ。普通、体の中から爆発したなら、生き物だろうと機械だろうと原形を留めている筈なのに」

フロニヤ力は悪魔に効かないというのはデイガルドと戦ったその日の内に判明しているし、効いたとしても今はキリサキゴホウが出現した影響で弱まり、その力の核をデイガルドが引き継いだのでまだ弱まったままだった。

「？ あれはいったい何だ？」

その時、アロエリがデイガルドの体に空いた風穴から何かが見えているのに気付いた。それは、金属光沢のある赤紫色の塊だった。しかも、その塊は一定周期で躍動している。

「まさか、あれがデイガルドの心臓か？」

「なにやら金属のようなものに覆われているようだが、あれは一体？」「悪魔だからって、心臓があんな妙なことになってるなんて、聞いたことありませんわ」

デイガルドの心臓については、サプレス出身であるリビエルや御使いとして博識であるセイロンもよくわからない状態となっていた。そんな中、ブリオツシユはその正体について感づいたようだ。

「おそらく、あの者が力の核として取り込んだ禍太刀やもしれん」

「え!? ダルキアン卿、それはどういう……」

「勇者殿も見えていたと思うでござるが、禍太刀は刀の状態のままでも生き物のように蠢くことがある。おそらくデイガルドは禍太刀から力を完全に取り込んで、残った刀をその特性で自身の心臓を覆う保護膜として扱っているのでござろう」

「なるほど、この世界特有の害悪をあやつが利用したということか……何か打つ手は？」

「本来ならば禍太刀は封印して、ある場所で浄化するのでござるが、もはや禍太刀に意思は残ってないと見た。デイガルド諸共完全に滅するしかないのでござるな」

「なら、その方法って何なのよ。勿体ぶらずに教えなさいよ！」

「おい、リシエル」

「コイツ、知らないとはいえダルキアン卿になんて口の利き方を……」  
ブリオツシユに対して遠慮なく問い詰めるリシエル。ここにきて、彼女が平常運転というのはある意味安心できるかもしれない。ただし、エクレールは憤慨していたが。

「勇者殿と姫様の宝剣が確実にござるな。お二人は輝力をまだあまり使っていないから、力も有り余ってるはずでござるよ」

「僕達、ですか？」

シンクとミルヒは顔を合わせ、そのあとでライの方を見る。

「わかった。一緒にやってやる」

「ライさん……！」

「よし。ミルリーフ、頼む」

「オツケー、パパ！」

ミルリーフがライ達を背に乗せ、そのまま一気に飛翔する。ある程度の高さに達すると、デイガルドの胸の辺りが少しずつ再生していくのが見えた。今を逃せばまたふりだしになると考え、シンクとミルヒは紋章剣の準備に入る。エニシアの力で潜在能力を引き出されたため、子狐をキリサキゴホウから解放した際に使ったもの以上のエネルギーが溜まっていく。そして、充填を完了したと同時に二人はミルリーフの背から飛び降り、トルネイダーを発動して一気にデイガルドの懐に潜り込む。そして、紋章剣を放った。

「フルパワー・ホーリーセイバー……！！！！」

二人の攻撃はこれまでとは比較にならない輝力を剣先から放出、それがデイガルドの心臓を覆っている禍太刀に命中した。宝剣の魔を断つ力が込められた輝力の直撃を受け、保護膜化した禍太刀が悶絶するかのごとく激しく蠢き出す。すると保護膜が下から少しずつ崩れていき、完全に心臓が剥き出しになった。それを見計らってシンク達はトルネイダーで離脱すると、ライが剣先から紋章砲を放って、その推進力でデイガルドの心臓に飛び込む。

「デイガルド、コイツでとどめだ!!」

そのままライは魔力を纏わせた剣で、剥き出しになったデイガルドの心臓を滅多切りにする。シンク達同様、エニシアの力でライの響界種の力はフルに引き出されており、その威力は絶大だ。

「はあああ!!」

ライはひとしきり攻撃を終えると、魔力を剣先から放射、デイガルドから距離を取ってそのまま上空に登っていく。そして、輝力と魔力を混ぜ合わせて剣先に集中して振りかぶる。それと同じタイミングで、先程待機していたミルリーフが魔力ビームとブレスの同時発射の準備を終えていた。

「喰らえ、召竜連撃＋響界斬魔剣……………」

最初の連続切りはフロニャルドに来る前からの必殺技である。『召竜連撃』の物で、そこにフロニャルドに来てからの新必殺技『響界斬魔剣』を組み合わせた新必殺技で決めるようだ。しかも、後者についてはデイガルドに対して初めて使った、輝力と魔力を混ぜ合わせたものを使用するというものだった。

そして、その新必殺技が十分に放たれた。

「召・竜・響・界・剣!!」

ライとミルリーフの攻撃が同時に放たれ、それがデイガルドに命中していく。ミルリーフの魔力ビームがデイガルドの四肢や頭部に当たって彼の動きを完全に封じ、防御体制の取れないままライの直接攻撃とミルリーフのブレスが心臓に命中する。絶え間なく攻撃を受け続けた心臓は黒ずんでいき、やがて少しずつ崩れていった。

もはや、ライ達の勝利は確実だった。



シンクに並んで、ミルヒやレオも口を開く。誰かへの思い、それが力となって巨悪を打ち破った、この結果はそういうことである。

『……なるほど、要するに俺はてめえらを舐めきっていたってことか』  
すると、さつきあれほど荒れ狂っていたデイガルドが突然落ち着き出した。

『どの道、俺は心臓を潰されたからもうすぐ死ぬ。けど……』

ただじや死なねえぜ、俺は』

すると、デイガルドはいきなり体に残っていた魔力を口に集める。それも、口元ではなく口内にだ。

「？ あの者は何をするつもりでぐぐるか？」

ブリオツシユがデイガルドの行動に首を傾げていると、魔力の充填が終わった。

『はああああああ……』

デイガルドは空を見上げながら口から息を吐き出す仕草を取ったかと思うと、息の代わりに大量の黒い煙が上がる。その煙は、ものすごい勢いで広がっていき、やがては戦場全体を覆っていった。

「な、なにこれ……？」

「急に、力が……」

「ま、まさかコレは……」

その時、リシエルをはじめとした何人かが膝をつき出し、心なしか顔色も徐々に悪くなっている。そんな中、エクレールはこの煙に覚えがあり、その反応を見たライもこの煙の正体に気が付いた。

「これって、まさかあの時の!？」

『察しがいいな。そうだ、あの砦で俺がばら撒いた生命を削る瘴気だ』  
「やはりか。だが、あの時よりも強力になってる……!」

『ご名答。このまま放つときや、このあたりの国全体に瘴気が行き届

いて、そこにいる奴は全員この世とおさらばってわけだ』

ミオン砦で初めてデイガルドと戦った時、彼はこの「生命力を削り取る瘴気」を吐き出して逃げた。あの時の物は未完成だったが、デイガルドのパワーアップに伴ってこの瘴気の効果も強力になっている。それにより、ついに命を奪えるほどの物と化していたのだ。

『至極単純だが、支配できずに死ぬんだったら、まとめて道連れにしてやるぜ』

「貴様、なんということを……!」

セイロンが怒りに満ちた表情でデイガルドの方を見る。その時、デイガルドの体が足元から徐々に変色してきた。

『へへ、どうやらもう限界みたいだな……感覚がどんどん無くなってきた。きやがったぜ……』

キリサキゴホウから禍太刀を引き抜いた際にその体が土となって朽ち果てたが、それと同じ現象がデイガルドに起こったのだ。デイガルドの体はどンドン土になっていき、頭以外がすべて土になったところで再び口を開く。

『じゃあ、俺は先に逝ってるぜえ……あひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや!! あひ、ひひい……』

デイガルドは反り返りながら高笑いを上げるが、すぐにそれは止み、無事だった頭も含めて、体の全てが土になった。そして、その反り返った体が重力に従って倒れていき、その衝撃で木端微塵になった。

「やつめ、とんでもない置き土産を残しておつて……!」

「このままでは、人を含めた辺り一帯の生き物が死に絶えてしまうでございぬ!」

「親方様、どうすれば!?!」

事態を引き起こした張本人が死に、仮に生きていたとしても解呪出来ないかもしれないという、どう足掻いても絶望としか言えない状況となってしまうた。

そんな中……

「なあ、ギアン」

「? どうしたんだい?」

いきなり、ライが何かを決断したかのような表情になり、ギアンに声をかける。

「今のオレは、エニシアに潜在能力を引き出されているから、普段よりも力があるんだよな」

「ああ、それは間違いないけど…」

「あと、こういう奴も天使の奇跡とかで浄化できるか?」

「悪魔の負の力によるものなら出来るはず……まさか君!?!」

ギアンはライの質問の内容から、彼が何をしようとしているのか察しが付く。そして、それを横で聞いていたリシエル達もライの考えに気が付く。

「まさか、あの時にあたし達を助けてくれたっていう……」

「ああ。今の状態なら、あの時ほど消耗はしないはずだからな」

それを話した後、ライはミルリーフとエニシアに呼びかける。

「ミルリーフ、エニシア、力を貸してくれ」

「うん、もちろん!」

「一緒に頑張ろう、ライ」

ミルリーフとエニシアはライに同意したかと思うと、彼の両脇に並んで二人が魔力を流し込んだ。『慈愛の恵み』という、自身の魔力を他者に分け与えて回復させるという特殊な技だ。本来ならば召喚師が魔力切れを起こした際に使うのだが、今回は特殊なケースだ。

「ライさん、一体何を……」

「すぐに終わらせて楽にしてやるから、待ってろ」

シンク達を安心させるように話した後、いきなりライの体が光り出した。その光は、抜かれた禍太刀がライを襲おうとしたときに発したもので、淡く優しい光だった。

「光よ、光の滴よ……」

ライはそのまま状態のまま両手を広げ、呪文を唱え始めた。彼の周囲に魔力が立ち込める。

「水面に弾け、きらめく数多の輝きよ……」

我が声を聞くのなら、集いて奇跡の力となりたまえ……」

呪文が進むと、ライの魔力が強まっていく。そして、それと同時にライの体の光が、淡い白から金色に変わっていく。

「金色の慈雨となりて全てを貫き、不浄を洗い流したまえ!!」

ライの呪文詠唱が終わると、纏っていた金色の光が天へと放たれ、そのまま雨のようになって降り注いでいく。

「こ、これは……」

「とつても、温かいです……」

「見ていて心が安らぐでござる」

美しい金色の雨を目の当たりにして、それに惹かれるシンク達。ブリオツシュもこのようなものを見るのは初めてのようで、食い入るようにそれを見つめている。

すると、辺り一帯に変化が起こった。

「! デイガルドの撒いた瘴気が……」

「どンドン消えていっとる……」

金色の雨はそのまま辺り一帯に広がっていき、やがて瘴気の蔓延している場所の全てに広がって降り注いだ。そして、金色の雨が瘴気に触れると薄くなっていき、やがては消え去ってしまった。だが、変化はそれだけではなかった。

「ユキ、お前顔色が良くなってないか?」

「ありや? 確かに調子が良くなったでござる。というか、エクレも」  
「? そういえば、いつの間にかダルさが消えている……」

金色の雨は瘴気を消し去るにとどまらず、体を蝕まれたエクレール達を癒していく。

「おぬし等、これはいったい何なんじゃ?」

「先程のエニシア殿の力と同様に、拙者もこのようなものは見たことがないでござる。よければ、説明してもらえらるでござるか?」

レオとブリオツシュが代表してライの使った力について尋ねると、リビエルが前に出てきて答える。

「『慈雨の大奇跡』、ありとあらゆる不浄を浄化する金色の雨を降らす力……私の治癒の奇跡のように、天使やその系譜に連なる生命体、その中でも高位の存在にのみ行使可能な力です」



「え？　じゃあ、ライさんも天使なんですか!？」

「いいえ、ライは天使ではありません。まあ、本人の口から聞いた方がよさそうですが……」

やがて、瘴気がすべて消え去ったところで、金色の雨が止んだ。

「よつし、浄化完了よ……」

ライがシンク達のいる方に振り返って、そちらに歩みを始めるが、いきなりよろけ出す。

「ライさん、どうしたんですか!？」

「いや、ちよつと今ので消耗しすぎただけだ……」

シンク達が駆け寄ると、ライの顔色があまり好ましくなく、息遣いも荒くなっている。

「リシエル、シンク達にオレの秘密を代わりに話してくれねえか？　もう、意識が飛びそうで……」

「本当はあんたが直接話す方がいいけど……わかったわ。ただし、細かい部分とかはあんたの口から話さないよ」

リシエルはライの頼みを聞いて、呆れ顔で了承する。

「すまねえ……な」

「あんたはとりあえず寝ときなさい。それで、早めに回復すること」

「ああ……わか……った……」

その時、ライの瞼が閉じ、そのまま力なく崩れていった。

『ライさん!』

いきなりの事態を見て、シンク達は慌ててライの方に駆け寄る。

「ライさん、しつかr……」

「zzz……zzz」

その時、ライの口から何かか聞こえる。どうやら寝息を立てているだけで、彼自身は無事だったようだ。

「こいつ、心配させておいて呑気に……」

「店主殿は以前にもあの力を使ったのだが、その時も意識が飛んでな。まあ、そうそう使うものでもないから当分は使いこなせないと思うので、勘弁してやってくれたまえ」

セイロンは憤慨しようとするエクレールをなだめ、「あつはは」と偉

そんな笑い声をあげる。

「じゃあ、あれに乗ってどつか腰を落ち着けられそうなどこに行くわよ。ライのこととかあたし達がどうやってここに来たかも、そこでゆっくり話すわ」

そう言つてリシエルは、自分たちが乗ってきた乗り物を指す。セイロンが眠っているライを担ぎ、全員で問題の乗り物に乗りこむ。

中はバスのように椅子がいくつも並んでおり、20人ほどの人数を乗せられるスペースがあった。リシエルは中に入ると先頭の席に座り、スイッチを押す。すると、動力機関の起動音のような音が聞こえ、起動を確認したりリシエルは操縦桿を握る。

「ねえ、誰かこの近くに町とかが無いか知らない？」

「町はないが、近くに砦があるからそこで頼む」

「了解。じゃあ、案内して」

レオを隣に座らせたリシエルは、彼女のナビゲートのもとで操縦し、グラナ浮遊砦へと向かうのだった。

「ここは、どこだ？」

ライが目を覚ますと、そこは不思議な空間だった。辺りには灰色の光景が広がり、物が何一つない殺風景な空間にいた。

『ここは何処でもない空間です。あなたの意識のみを呼び込ませていただけました』

いきなり、不思議な声が聞こえた。否、聞こえたのではなくライの頭に直接響いたのだ。

「だ、誰だ？」

『こちらです』

ライの前に現れたのは、不思議な光の塊だった。

『邪悪を退けてくれて感謝します、界の狭間を制する少年』

「この声……あの時の夢で聞いた！」

光の塊が発した声は、ライがフロニャルドに来る直前、夢で聞いた不思議な声そのものだった。

『私は、このフロニヤルドの意思。あなた方の言葉で言うエルゴです』  
「エルゴ……確か、リシエルが言つてた世界に宿る意思……」

界<sup>エルゴ</sup>の意思、リインバウムとそれを取り巻く四つの世界に宿るといふ大いなる意思。世界に存在する全ての物はエルゴから枝分かれして誕生し、それらが世界を形作つているという伝承がリインバウムには残っている。

かつてリインバウムを侵略者から救つた伝説の英雄、<sup>リシエル</sup>「誓約者」はこのエルゴの恩恵を受けていたため、エルゴの王とも呼ばれている。そのことから、エルゴはいかに強大な存在かが見て取れる。

『まずは、いきなりこの世界にあなたをお呼びしたことを謝らせてください』

「え？」

いきなりの謝罪の意に、ライは困惑する。その内容によると、ライはエルゴによつてフロニヤルドに召喚されたということになる。

『事の始まりは、あのデイガルドと名乗る者がこのフロニヤルドに現れたことから始まりました』

エルゴはそのまま、ライを呼ぶに至つた経緯について語り出す。

『本来ならばあそこで勇者と姫のみで魔物を退治し、依代にされたいた土地神を開放してそれで終わる筈でした。しかし、どういうわけか星の運命に歪みが生じ、あらゆる事態としてあの者が突如として現れてしまったのです』

「つまり、本当はデイガルドがフロニヤルドに来るのは、ありえないことだつたつていうのか？」

本来はデイガルドはフロニヤルドに現れず、シンク達だけで魔物を倒してすべてに決着がついたのだという。

『そして私は、あの者の意識を通じてあなたのいた世界、リインバウムの英傑達なら対抗できるかもしれないとあなたを召喚させていただけでした。』

「なるほど……つて、ちょっと待ってくれ」

ライはエルゴが自分を呼んだ理由について、腑に落ちないことが一つあつた。

「オレも直接は会ったことないけど、もつと強い人たちがいた筈だからそいつらと呼ばばよかったんじゃないかねえのか？　あと、認めたくねえけど、オレの親父もかなり強いし……」

ライはかつて出会った者達から聞いた程度だが、伝説級の人物たちの存在を知っていた。自由騎士の少年アルバから聞いた「エルゴに選ばれし勇者」、彼の上司に当たる元旧王国の騎士ルヴァイドが話した「運命を超えし若者」、とある島から来た鬼の皇子スバルの恩師だという「救い、切り開く者」、そういった存在達がリンバウムを危機から救ったというのだ。ライがクソ親父と嫌っている父親、冒険者ダイバ・ケンタロウも妻である古妖精メリアージュの力の恩恵で不死身に近い強靱な肉体を得ており、剣一本で滝や工学兵器の攻撃を両断するという人間の領域を超えた存在と化していた。そんな者達がいる中、古妖精の響界種という特殊な生まれで力も強大だが、先に述べた者達に比べたらまだ力も弱く、年若くて彼らより場数で劣るライを選んだのかは疑問だった。

『それは、あなたの力の質がこの世界と最も相性が良かったからですよ』

「へ？」

エルゴの言葉に、ライは間の抜けた声を出してしまうが、エルゴはかまわずに続ける。

『このフロニヤルドは、守護の力に包まれた大地が広がる優しい世界。故に、天使という聖なる存在、その系譜に連なる「古き妖精」の血を引くあなたの、優しい力……このフロニヤルドにこそ最も相応しいと思っただけあなたを召喚させてもらいました』

『ですが、デイガルドが想像以上の力を身に着けてしまったために、あなたのお仲間も呼ばざるを得ませんでした。そこに関しても謝らせてください』

「リシエルたちが来たのもアンタによるものか。イヤ、そこに関しては助かったし、みんな気にしねえだろうからそこはいいや」

まあ、リシエル達はレンドラー達軍団長との因縁についても言及し

なかったし、御使いの面々も今はギアンたちと特に問題なく接している。そういう意味では、あ、あまり目先での迷惑は気にしない性質なのだろう。

『その際に、このフロニヤルドを行き来するための秘法をあなたのお仲間授けたのですが、危機を救ってくれたお礼にそのまま差し上げます』

「え、いいのか?」

『あなたにはもつとこの世界を知って欲しい、そしてあなたのお仲間にもこの世界を知って欲しいので、そのまま使ってください』

とりあえず、エルゴの言葉に甘えておくことにした。そして、さらに嬉しい知らせが入る。

『あなたと出会った勇者の少年ですが、帰る手段は存在して、今日の内に彼を呼んだ国の者達が発見しています』

「! それは本当なのか!」

『はい。ですが、ある条件を提示する必要があります』

自分達だけでなくシンクが帰る手段があるというのがわかりライも嬉しくなるが、エルゴによるとまだ何かあるらしい。

『ある条件を満たさないと、彼はこの世界に二度と来れないうえに、ここで得た物は記憶を含めて全て持ち帰ることが出来ないのです』  
「な!?!」

『ですが、あなたと共に邪悪を退けてくれた彼へのお礼として、その条件をお教えます』

そして、エルゴが教えてくれたその条件は、「送還から再召喚まで91日以上空ける」「召喚主以外の3名以上に“また来る”という誓約とともに勇者が身につけていた物(内容は問わないが勇者が自身の居た世界から持ち込んだ物の方が良い)を預けておく」「召喚主に対しては勇者と召喚主の名前が書かれた約束の書と誓約の品を渡しておく」の三つだった。

「なるほど条件が結構厳しいな。でも、ここで聞けて助かった」

『先程も言いましたが、彼にもフロニヤルドの危機を退けたお礼としてです。お気になさらずに』

この空間に来てから、なんだか至れり尽くせりな状況となるライだった。

『では、このあたりでお別れとしましょう。そろそろあなたを帰す頃合いですし』

「あ……なんか、意識が徐々に……」

どうやら、ライの意識が元いたところに戻っていくようだ。

『界の狭間を制する少年、それではさようなら』

エルゴの言葉を聞き終えたところで、ライの意識は再び途切れた。

「ん？ っこは……」

ライが目を覚ますと、そこはどこかの一室で、ライはベッドに寝かされていた。眠い目を擦りながら窓を覗くと、日が沈みかけているのが見えた。戦の開始が昼食後、そこから日が沈むまでは大体6時間ほどなので、割と早く目を覚ましたようだ。フロニヤ力が何かしたのか、エニシアによつて強化されたため負担が減ったのか、どちらにしても数日寝込まないですんだようだ。

「……パパ？」

ドアが開く音と同時に聞き覚えのある少女の声がしたので、ライはそちらに視線を向ける。部屋に入ってきたのは、ミルリーフだった。

「パパ、もう起きて平気なの？」

「ああ、なんとか。フロニヤ力のせいかなエニシアのおかげかはわかんねえけど、あの時ほど疲れがたまつてねえんだ」

ライは別に強がつて言っているわけで話無く、実際に彼は倒れた直後よりも顔色が良く、体から活力がにじみ出ているような感じがしている。

「ライ、目を覚ましたのね！」

すると、開いているドアからリシエルが部屋に入つて来て、それを皮切りにシンクにエクレール、リコツタにユキカゼ、そしてエニシアが部屋に入ってきてライのもとに駆け寄る。

「おお、みんな。無事だったか」

「それはこちらのセリフだ、馬鹿者。心配させおつて……」

エクレールもツンケンした態度だったが、はつきりと心配した言っていたので、ライも悪い気はしなかった。

「そういえば、あの後どうなったんだ？ 戦とかそういうの」

「それが、魔物の出現やデイガルドの一件が気づかぬうちに報道されていてな。そのおかげでみんな非難していたが、怪我人が多く出たために中止になった」

「そ、そうなのか」

「でも、死者や行方不明者は出てないらしいんで、安心してください」

「ちなみに、埋め合わせで姫様の臨時ライブが開かれるでありますよ」

シンク達から戦についての話を聞いた後、今度はシンクの方からライにあることを尋ねてきた。

「ライさん、聞きましたよ。ライさんがエニシアさんと同じで、人間と妖精のハーフだって」

「ああ。まあ、改めてオレの口から話すわ」

そして、ライは自身の出生について簡潔に説明する。母メリアージュが古き妖精という天使の系譜に連なる特殊な妖精であること、その血と共に強大な力を引き継いで生まれたこと、つい最近にそのことを知ったこと、そういったことを包み隠さずに話した。

「言いそびれただけで、別に隠してたわけじゃねえんだ。偏見とか持つかもしれねし、無理に信じろとは言わねえ」

「いや、あんなものを見せられたら信じるしかないだろ」

「つて、そう言えばそうだな」

エクレールに言われて苦笑するライ。まあ、ただの人間に瘴気を浄化する雨を降らせるのは、いくらなんでも無理があるので仕方なかったが。

「偏見なんて持ちませんよ」

すると、シンクが口を開く。それに合わせて、リコツタとエクレールも言葉を発する。

「偏見も何も、ライ様がいなかったら自分達は死んでいたかもしれないですし、むしろ感謝しているであります」

「お前がどんな力を持っているようが、人間じゃなかるうが、お前はお前だろ」

「ていうか、僕やみんながそんなことで偏見を持ったら、僕たち絶対に仲良くなんてなれないし」

シンクの言うことも尤もだが、それでもこの言葉はうれしいものだった。

「よかったね、パパ」

「ああ。みんないいやつだな」

ライ達がシンクやエクレールの言葉に感動していると、ユキカゼが衝撃のカミングアウトをし出した。

「というか、それを言うなら拙者も土地神でござるし。異種族の交流なんてこの世界じゃ当たり前でござるよ」

「「へえ……ええ!?!」」

ユキカゼの一言で、シンクとライ、そしてミルリーフが同時に驚く。一方、ここに来て間もないリシエルとエニシアは当然だが、エクレールやリコツタは全く驚いていない。どうやら、最初から知っていたらしい。

「ユキ、まさかお前言ってなかったのか?」

「あれ、そうだったでござるか? 拙者は土地神の子でござるよ」

茫然とするライとシンクに対し、胸を張りながら「尊敬してもよいでござるよ」と冗談交じりに言うユキカゼ。その一方で、ミルリーフは少し気まずそうな表情をしている。

「ミルリーフ、その顔ってまさか…」

「うん。なんとなく、姫様やエクレとはちがう種族って気づいてたから」

ミルリーフはユキカゼと初めて会ったその時、なんとなくだがフロニヤルド基準の人間とは種族的に違うということに察していた。なのになぜ、さつき驚いていたのかというところ……

「てつきり何か事情があって隠してると思って、気づかないフリしてたのに……」

「え……ミルリーフ、気を遣わせてごめんてござる」



ちよつとしよぼくれるミルリーフを見て、あやまるユキカゼ。その光景に、場が和んだ。ちなみに、鬼妖界シルターンでは「人は野に、鬼は山に住む」という暗黙の了解があるため、異なる種族同士の干渉はしないようになっていいる。ミルリーフはユキカゼが似たような掟を破っていると思つてこのような気遣いをしたというわけだ。

「……あ！ リコツタ、さつき夢でシンクの送還についてのお告げ？  
みたいなのを聞いたんだけど……」

「ほ、本当でありますか!?!」

ライは、忘れかけていたさつきの夢の話をする。得た情報を伝え終えると、一緒になつてそれを聞いていたリシエル達も会話に入つてきた。

「なるほど。例の声が教えてくれたのね」

「ああ。その時に聞いたけど、リシエル達をここに呼んだのつてエルゴだったんだな」

「厳密には、エニシアとギアン、あとリビエルに呼びかけられたのよ」  
リシエルが告げたのは妙に限定的なメンバーだったが、そこにはある共通点があった。

「私はライと同じで古き妖精の血を引いてるし、ギアンも幽角獣の響界種だからね」

「リビエルによると、どつちも天使の系譜に連なる生命体だかららしいわ。天使はエルゴに反すると墮天使扱いされることから、エルゴに対して何か密接なところがあるそうよ」

「はあ……ところで、そのリビエルとか他の御使い、あとギアンはどうした？」

「なんか、お姫様達お偉いさんと話しに行つてるわ」

「まあそれは置いといて、おかげで勇者様の送還問題が何とかなつたであります。あとは、学院のみんなが発見してくれた送還術式があれば、勇者様も帰れるでありますよ」

「とりあえず、今のところ全問題は解決だな」

すると、シンクが何かを思い出して、ライにそれを告げた。

「ライさん、体の方が大丈夫なら僕と一緒に来てくれませんか？ 騎

士団長が会いたいそうで…」

「ロランさんが？ わかった、一緒に行くか」

「待ちなさい、折角だから送るわ」

そういうわけで、ライ達はリシエルの乗り物で目的の場所に向かうのだった。

第27話 夜空に花が舞うように Happy  
end tonight

ライ達はミルヒの臨時ライブが開かれるという場所までやって来た。そこは昼間の戦場となっていた平原の一部分で、意図的に削り取られたようなホール状になっている。その一角で現在、ライはシンクと二人でロランと話をしていた。

「勇者殿にライ殿、事の次第はエクレールから聞いたよ。君たち二人、特にライ殿のおかげで大事に至らずに済んだ。ありがとう」

「いえ、むしろエクレールを危険な目に合わせてしまつて……」

「いや、ライ殿の仲間のリビエル殿だったか？ 彼女のおかげで怪我也も治っているそうだし、大して問題ない」

ロランがフォローを入れるも、シンクの表情は暗いものから真剣なものに変わっていく。

「でも、フロニヤルドって平和な世界だと思っていたのに、あんな魔物もいるんですね」

「ああ。流石にあそこまで巨大な個体は今まで見たことがないし、例のデイガルドという男のような件も前例は無かったがな」

それから、ロランが続けて語り出した。

「守護力の働く場所から一步でも出たら、それなりに危険もある。我々の普段行っている戦には、ああいった脅威と戦う勇気を忘れないように、という意味もあるんだよ」

「戦興行に、そんな意味が……」

「傷つける力を振るうことはよいことではないが、戦わずに蹂躪されるばかりでは大切なものを守り通せないからね」

「はい」

ロランから語られた戦興行の意味、それが今回の一件もあつて、ライとシンクは強く感じ取れた。

すると、エクレールがこちらに駆け寄ってくる。そして彼女についてくる形で、エニシアとミルリーフもやって来た。

「兄上、現場警備についてスタッフが相談をしたいと」

「ああ、すぐ行く。では二人とも、私はこれで」

そのままロランはライ達に別れを告げて、エクレールが来た方に走って行った。

「二人とも、どうしたんだ？」

「パパたちがどこにいるかわかんなかったから、エクレーに連れてきてもらったの」

「ライは騎士団長さんに会いに行っただって聞いたし、エクレーちゃんがちょうど会いに行くところだからまさかと思ってね」

チャツカリとしている二人に、思わず苦笑するライだった。そんな中、シンクはエクレールに声をかける。いくら大丈夫と聞かされても、本人から話を聞かすには安心できないようだ。

「エクレー、動き回って大丈夫なの？」

「問題ない。ライやリビエル殿のおかげで体調は万全だからな」

「そっか。よかった」

安心したシンクは思わず笑顔を見せる。それを見たエクレールは、思わず顔を赤くするが、それを誤魔化すようにあることを尋ねる。

「ところでお前たち、食事はまだか？」

「あ、そういえば……」

エクレールにそう聞かれた途端、二人は空腹感に襲われる。

「よかったら、そのの屋台で食べていかないか？」

「お、いいのか？」

「じゃあ、僕もごちそうになるよ」

ライもシンクも、エクレールの誘いに乗る。まあ、今日の激務を考えると今まで腹が空かなかったことの方が不思議だったから、当然だろう。

すると……

——くう——

いきなりかわいらしい何かの音が聞こえたが、音の出どころはすぐに分かった。

「あう……」

「はは、二人も腹減ったか。せっかくだから、一緒に案内してもらおうか？」

「うん、お願いします…」

ミルリーフとエニシアは恥ずかしそうにしながら頷く。そして、そのままエクレールに案内される形で出店の方に向かっていくのだった。

だが、この光景を物陰からこっそりと見つめる影があった。

「何やら興味深げな雰囲気でありますよ」

「でござる」

リコッタとユキカゼが、物陰からその様子を覗き見している。俗に言うデバガメだ。

「あく、エニシアに先を越された……」

二人のすぐ隣でリシエルが呻いている。彼女もエニシアもライに好意を抱いているため、リシエルにとって今の状況はあまり嬉しくなかった。

実は、リシエルはエニシアと協定を結んでおり、ライが正式にどちらかに振り向くまでデートの回数を均等にする等の対等の条件でライを取り合っていたのだ。ちなみに、本人公認である。

ライがフロニヤルドに来る前はそういったものが同じ回数であったため、再会したら早い者勝ちでライをデートに誘い、恨みっこなしという口約束をしていたという。

エクレールに案内された屋台で、売っていた料理を買う一向。

「えっと、これなに？」

「なんか、シルターンのお好み焼きって料理を、クレープみたいに巻いた感じだな」

「あ、確かに」

「そっちの世界の料理はよく知らんが、これはココナプツカといってな、気軽に食べられて栄養も取れる料理だ」

見たこともない料理について見入るライ達。特に、今日ここに来たばかりのエニシアは初めてフロニヤルドで食す物なので、珍しさも人一倍感じただろう。

「まあ、百聞は一見に如かずならぬ、百見は一口に如かずだ。とりあえず食うぞ」

「それもそうだね」

「いただきますーすー!」

ライに促されて、早速ココナプツカを食べてみるエニシアとミルリーフ。

「あ、おいしい」

「うん。それに食べやすくていいね」

「これ、うちの店に出せねえかな?」

「さ、さあな……私は、コイツを勇者に持つて行つてやらねば」

ココナプツカは好評で、ライに至っては宿屋の新メニューに出来ないかと検討している。その時の目の色が本気物だったため、思わずエクレールもたじろいでしまう。

そして、シンクを言い訳にしてそのままライから離れようとしたエクレールに、いきなりエニシアが近づく。

「それじゃあ、ライは私が引き受けるから、シンク君と二人で楽しんでね」  
♪

「な!?! な、何を言っている!?!」

エニシアに耳打ちされたエクレールは、顔を真っ赤にして慌てふためく。その様子を見て、エニシアはクスクスと笑った。

「それは自分で考えてね。じゃあ」

そのままエニシアはエクレールから離れていき、ライとミルリーフを連れて移動してしまう。そして、その光景を見ていたリシエルは、ものすごくがっかりした様子だった。

「仕方ない、今回はアッチの恋模様を覗いて我慢するわ」

「リシエル殿……」

リシエルの変な開き直り方に、ユキカゼも思わず苦笑するのだった。

「ふう、腹も膨れたな」

ライはベンチに座りながら、紙コップに入っているお茶を飲み干す。すると、隣に座っていたエニシアが声をかけてきた。

「ねえ、ライ」

「ん、どうし…」

ライが応える間もなく、エニシアはライに抱き付いてきた。

「え!?! エニシア、ちょよ、どうした!?!」

いきなりの事態にライは慌てふためき、ミルリーフも固まっっている。

「ライ、私ね、本当に心配したんだよ。もしかしたら本当に帰れないかもしれないなくて、もしそうなら二度と会えないかもしれない。それに、向こうでリシエル達が占いで見てもらった時、ライにとっても不吉なことが起きるって言われて、それを伝えても強がって…」

エニシアは、今朝方の一件について話す。その後、彼女は不安で心が押しつぶされそうになっていたという。

「あのエルゴの声を聞いた時、間に合わなかったらライが死んじゃうんじゃないかって、本当に心配したんだよ。私だけじゃなくて、リシエルもルシアンも、ポムニットやグラッドさんやミントさんも、御使いのみんなやオーナー、ギアンにメリアージュさんも、本当に…ほんと、うに…」

「エニシア…」

段々と涙声になっていくエニシア。そんな彼女や、今この場にいるリシエル達駆けつけてくれた仲間、向こうで待っている面々の気持ちを聞いて、彼らに対する不義と、純粋な嬉しさが混じって湧いてくるライだった。

「……」

「ライ?…」

そんな中、ライは無言でエニシアを抱きしめる。

「悪かった。お前やみんなが、そんなに心配してくれていたなんてな。」

でも、オレはお前やリシエルを残してくれたばる気はねえから。安心しろ」

「……うん！」

ライの言葉に安心して、エニシアは再び笑顔を浮かべる。

(これは、エニシアがママに一步近づいたかな?)

その光景を見ながら、ミルリーフはエニシアに未来の母の姿を思い描くのだった。

「おお、ライじゃねえか！」

そんな中、いきなり少年の声が後ろから聞こえて来たので、驚きながら振り返ってみる。すると、そこにはガウルがいた。

「ガウル?! いきなり出てきてどうしたんだ?」

「いや、三バカ連れて屋台回ろうと思って探しててな。その途中でおまえらを見かけたから、ついでに声を掛けようと思ったんだよ」

「で、何やってたんだ?」

「あ、えーっと、その……」

もう少し長く抱擁していたら、ガウルに見られていたかもしれない。そう考えると、二人は顔を真っ赤に、人力ポットに出来そうなほど熱かった。

一方こちらは、ミルヒが控えている楽屋の裏手。ミルヒはお客が来たという知らせをメイドから聞いたので、その人物が待つというこちらを訪れていた。そして、ミルヒは見覚えのある人物を目撃する。

「レオ様！」

そこで待っていたのはレオだった。だが、彼女の隣に別の人物が佇



んでいるのに気付き、咄嗟にそちらに気を回す。

「あれ？ 確か、ギアン様ですよ」

そう、レオと一緒にいたのはギアンだったのだ。

「はい。でも、様はちよつと窮屈だからできれば“さん”で」

「わかりました、ギアンさん」

今のギアンはクラストフ家を捨てたため平民同前、そうでなくても一国の姫より身分は低いので年下のミルヒやレオにも敬語で喋っていた。何故ギアンが一緒にいるのかミルヒには疑問だったが、レオがすぐに事情を説明する。

「おまえに謝ろうと思ったのだが、今までのことを考えると一人で行く勇気がなくてな。そこで、偶然見かけたギアンに同行を頼んだのじゃ」

「とりあえず、静観させてもらうだけなのでお構いなく」

口には出してはいなかったが、レオは謝罪がしたかったのかもしれない。自身の独りよがりな行動によって幼馴染のミルヒに危険が及び、それに巻き込まれる形でシンクやライにも危険が迫った。本人に謝罪しても気にしないと云って余計に重荷に感じてしまうかもしれないと思っただのか、年長者である彼を見かけた際に丁度いいと感じたようだ。

「お前を危険な目に合わせたことや、戦興行を台無しにしたこと、そしてここ半年辛い思いをさせたこと、すまなかったな」

「いえ、今回の一件で私は領主としていろんなことを学ばせてもらいました」

そして、ミルヒはその学ばせてもらったことについて話す。戦や危険に備えること、国や民を導くことの難しさと大切さ、一国の主として大切なこと全てだった。

「レオ様のおかげで、もつと立派な領主にならねばと心に誓うことが出来ました。だから、ありがとうございますレオ様」

ミルヒの一言に、レオもつい顔を赤らめる。

「それに、ここ最近の行いも私のことを思ってだと聞いたので」

「ま、待て！ 誰に聞いた？」

ミルヒが自分の行動の真相を知っていたことに驚くレオ。だが、知っていたのは至極単純な理由だった。

「ビオレとルージュに」

「あの、馬鹿どもお……」

それを聞いたレオは首を垂れ、静観を決め込んでいたはずのギアンもつい苦笑してしまう。

「お二人を叱らないでください。私が無理やり聞き出したんです」

「わざわざ舞台前のお前を呼んだのも、その話をするためだったというのに…」

「ごめんなさい」

思わず謝るミルヒだったが、その後で彼女が表情を変える。

「でも、私はその話を聞いたとき、本当に嬉しかったんですけど、今の私はちよつと怒っています」

そのことで首を傾げるレオ（とギアン）だったが、ミルヒは彼女に詰め寄り、再び口を開く。

『未来は自らの手で決めるものゆえ、占いや星詠みに踊らされるのは愚かしいこと』と、レオ様は仰っていました」

「その気持ちは今も変わらん」

「なのに」

レオが反論する間もなく、ミルヒは彼女にさらに詰め寄って言葉を続ける。

「ここ最近のレオ様は、星読みばかりを気にして、私には本当のことを告げずに、私のことを守ろうとしていました」

「えーっと……口を挟むけど、そこに怒る理由ってあるんですか？」

ギアンの疑問にも答える形で、ミルヒは再び口を開く。

「レオ様を守ってばかりだった小さなミルヒは、今ではそれなりに大人になっています。信頼できる友人や臣下もいます。だから、レオ様はご自分を殺してまで私を守らないでいいんです」

ミルヒの怒りの理由、それはレオが自身を顧みずにミルヒを守ろうとしたことだった。幼馴染としては、彼女自身の幸せを考えてほしいということである。

「イヤ、お前はわかっておらぬ!!」

すると、レオは暗い表情で、だが強い口調で反論する。

「幼いころから儂を見守り慈しみ、そんなお前がくれた優しさがそれだけ儂を支えてくれたことか！ お前にいなくなられたら、お前のいない世界など……」

レオにとつて、「ミルヒ無くしては自分の幸せはない」といっても過言ではないようだ。そこまでミルヒのことが大切だったから、あのよ  
うな行動に出ってしまったようだ。そんなレオをミルヒは抱きしめな  
がら、何処にも行かないと言いつつ聞かせて安心させている。

一方、ギアンはそんな二人に悟られないように手で何かのサインを  
送る。その先にいたのはロランとアメリカタだった。実は、ギアンは二  
人に頼まれてミルヒ達の様子を見ていたのだ。そのために、偶然を  
装ってレオに接触したのだという。

その後、コンサートの時間が迫ったようで、メイド達がミルヒを探  
し回っているのが聞こえた。

「久しぶりにお前の歌、聞いてもいいか？」

「はい！ 一生懸命歌わせてもらいます」

レオの頼みに、飛び切りの笑顔で答えるミルヒ。ギアンも、一般席  
でライ達と一緒に見ると言いつつ、彼女たちと別れるのだった。

「お姫様が歌い手の仕事を兼任ねえ……あたし等の世界じゃ考えられ  
ないわね」

「歌い手を生業とする姫君……これが本当の歌姫というやつだな。  
あっはっは」

「セイロン、それは身も蓋も無さすぎですわよ」

一般席でそんな会話をしているリインバウム組。リビエルはセイ  
ロンの物言いに、思わずジト目になってしまう。

「とりあえず、姫様の歌は世界一だからな。お前達も聞けば納得だぞ」  
「だからなんで偉そうなのよ。自分のことでもないのに……」

エクレールの口調や物言いに、思わず悪態をつくりシエル。まあ、

初見ならみんなこうなるだろう。

すると、いきなり舞台の周りの明かりが消えて暗くなった。

「お、どうやら始まるみたいだな」

一度ミルヒのコンサートを見ていたライはそこから始まったのだと気づく。

すると、暗闇の中で光を発する不思議なキューブ上の物体が現れ、そのまま舞台の上までゆっくりと飛んでいく。舞台上に物体が到着すると、さらに強く発光し、それに合わせて舞台の上の仕切りがキューブに分解されていく。それがすべて部隊の両脇に移ると同時に音楽が鳴り響き、待つてましたと言わんばかりに観客が歓声を上げる。鳴り出した音楽は以前のコンサートの時のような優しい曲調ではなく、全体的に明るめるめのアップテンポな曲調だった。音楽が鳴る中、舞台袖からミルヒとは違う女性が出て来たかと思うと、中央にミルヒと思わしきシルエットが既に佇んでいるのが見えた。そのシルエットの人物が振り返ると同時に何かの仕掛けが動いてそのまま覆い隠してしまい、その仕掛けにミルヒの顔がアップで映される。そして、そのままミルヒが笑顔を見せると、仕掛けがいきなり光を発し出す。そして、それを通り抜けてミルヒがついに姿を見せた。来ている衣装は以前のコンサートと違って、動きやすそうなデザインのと赤とピンクを基調とした衣装だった。そして、ミルヒは先程舞台袖から出てきた女性に手を引かれながら歩み、舞台の前の方に出てくる。それを確認すると、女性は一礼して下がっていき、ミルヒは左手に持っていたマイクを両手持ちにして胸元に持つていく。そして、舞台の背景から複数人の女性たちがいきなり飛び出してきたかと思うと、それに合わせてミルヒが歌い始めた。ちなみに、飛び出してきた女性たちはバックダンサーだったようで、ミルヒの歌に合わせて踊っている。

「へえ、中々いい声じゃない」

「うん、これなら人気も納得だね」

「だけど、聞いたことのない系統の音楽だな」

「少なくとも、リンバウムや四界のどの世界の音楽にも属するものではないな」

「おそらく、このフロニヤルド独自で発達した音楽ですわね」

「世界が違えば文化も違う、まさにその通りだな」

リシエルやエニシアが純粹に歌の感想を述べる中、ギアンと御使いたちは考察に入ってしまう。

「あの〜」

「どうした、シンク？」

そんな中、シンクがリインバウム組の面々に声をかけてくる。何事かと思つて聞いてみる。

「一応、僕の世界にもあるジャンルの音楽なんですけど」

「え、あんのか？」

「アイドルっていう、可愛い女の子があんな感じの衣装で歌と踊りをやる仕事が僕のいた世界、地球には存在しているんです。逆に、カッコいい男の人がやる場合もあつて……もちろん、衣装も男向けの物でやりますよ」

「へえ〜。前の時は相席じゃなかったから聞けなかったけど、その時もそう思つたのか？」

「僕の世界じゃ当たり前前の音楽だったから、何も考えずに聞き入りました」

そう言つて苦笑するシンク。だが、ちょうど番の歌詞が終了するところだったので、一同は考察を中断することにした。

1番を歌い終えたミルヒは、後ろ姿を見せながら髪をかき上げ、振り返つて笑みを客席に向ける。そして胸元についてあつたエンブレムから栓のような物を引き抜くと、衣装が解けて光となつて消え、下から純白の新しい衣装が出て来た。さらに、マイクがいきなり蕾の閉じた花のような形状に変化する。同じものをバックダンサーたちもいつの間にか持つており、ミルヒたちはそれを天高く放り投げる。投げられたそれは上空で蕾が開き、そこから光り輝く花びらが大量に降り注いだ。そして、花びらが舞う中でミルヒが歌を再開する。

「綺麗……」

「ああ。これは幻獣界でも見れないような光景だな」

「うむ。中々に壮観であつたぞ」

御使い一同も今の演出に目を輝かせている。単純に演出の見事さもあるが、元いた世界でもリインバウムでも見れないという珍しさもあつて感動はさらに強かつたようだ。

「見えているでござるか？ あのお方がお前を救い、母君を悲しみから解き放つてくれた姫様でござるよ」

そんな中、ユキカゼが子狐を抱きながら、囁くように言い聞かせる。すると、子狐がいきなり体を震わせたかと思うと、全身が光り輝きだす。そして、その後でとんでもないことが起こつた。

「えええ!？」

「な、何だこりや!？」

「木が、いきなり……」

なんと、いきなり舞台の周りから木が生えだしたのだ。木は生えてくると同時に、そのまま花を咲かせて舞台周辺をより華やかなものに変えていった。あまりの出来事に一同は騒然とし、ギアンすら開いた口が塞がらない状態となつている。

「これは一体?？」

「その子狐の力?？」

一同が子狐に注目し、セイロンとノワールが口を開く。

「それもあろうが、それだけではござらんよ……」

ユキカゼが何かを察したように眩き、生えてきた木の方に視線を向ける。

(? ? 何かを感じる……これは、魂の波動?)

リビエルが感じ取つたそれは、ユキカゼの視線の先にあつた。するとそこには、一匹の狐がいた。見た目が子狐と似ていることから、どうやら母狐のようだ。そのまま母狐の魂は空を一直線に駆け抜け、美しい光の軌跡を描いていく。

「うおお……」

「きれいだね、パパ」

ライたちもコンサートそつちのけでつい見とれてしまう、美しい光。

その光はまるで、この世界を邪悪から守った英雄たちを祝福するかのようにも見えた。

第28話 戦士達の休息 day of holi  
day

くブロンクス邸く

『っていう訳で、期限のギリギリまでこつちにいて欲しいってことになっただんですけど、いけますかオーナー？』

『私達からお願いします』

大戦のあと、ビスコツティに帰国したライ達はテイラーに連絡を取っていた。できれば3日後のシンク送還までこつちに留まって欲しいという、周りの者達の希望があったため、そのことでテイラーに相談していたのだった。そのため、わざわざミルヒヤリコツタも頼み込んでいる。

「わかった。お前も大変だったようだし、残りの時間で英気を養っておけ」

それを聞いて、一同は表情を明るくする。

『オーナー、ありがとうございます！』

『本当にありがとう、テイラー様!!』

「ただし、帰ったらその時はこの16日分の遅れを取り戻すように！」

『はい！』

そして通信を切る。

その日の晩、テイラーはある場所に行っていた。

「というわけで、ライが帰ってくるのは3日後になるそうだ」

『まあ。あの子ったら、そんなに向こうの人達と仲良くなったのね』

そこは望月の泉といい、今は周囲の木が枯れて水も汚れているが、昔はトレイユの町で水源として使われていた泉だ。その泉の水面に女性の姿が映っており、テイラーはその女性に話しかけている。

彼女こそがライの母、“古き妖精メリアージュ”だ。メリアージュはこの泉に生えていたラウスの樹の力で出入りできる空間に住んでいたのだが、その樹のある貴族が別荘を建てる材料にしようと切ってしまったために、メリアージュは異空間に閉じ込められてしまったの



だ。だが、ライの能力が覚醒したのをきっかけに彼女は泉を通して外と通信が出来るようになり、ライとは定期的に話をしているのである。

「しかし、君の息子も大きくなったものだな。異世界侵略を企む悪魔を倒してしまうとは」

『ええ。その辺りは本当に、あの人にそっくりよね』

「ああ。口では毛嫌いしているが、血は争えなさそうだな」

そう言って二人はケンタロウの姿を思い描く。問題に自ら首を突っ込む性分は、無自覚ながらライも継いでいたということになる。本人が効いたら真向から否定しそうだが。

翌日…

　　朝　騎士団の訓練場

ここで、エクレールやエミリオといった若手騎士たちがセイロンと手合わせをしていた。これだけなら、騎士たちが一人ずつセイロンと手合わせしていると思えるだろうが、実際は違った。

「はああー！」

「甘い!!」

エクレールがセイロンに飛び掛かって切りつけるが、セイロンはそれを紙一重で避けてしまう。

「そこだああー！」

その隙を伺ってエミリオが斬りつけてくるが、セイロンはこれも紙一重で避けてしまう。そして、そのまま反撃と言わんばかりにとびきり重たい一撃を放った。

「うおおああああー！」

「がああ!?!」

セイロンの回し蹴りがエミリオにクリーンヒット、吹っ飛ばされて壁に激突し、そのままけものだまに変化してしまう。しかも、その周りには既にけものだまと化した騎士が数人、残りはエクレールとアン

ジユという女性騎士のみだった。そう、セイロンは彼女らを含めた複数人の騎士と纏めて戦っていたのだ。

「エミリオ!!」

「他の者に気を取られるとは、戦場では命取りだぞ!」

アンジユがエミリオの敗退に気を取られた隙に、セイロンの接近を許してしまった。そのまま接近したセイロンは、アンジユの手元に蹴りを叩き込み、剣を弾き飛ばしてしまう。

「続けるか?」

「ま、まいった…」

複数人の瞬く間にノックアウトした戦闘力と、未だに消耗を感じさせないスタミナを見せるセイロンに、勝てるビジョンが浮かんでこないアンジユ。もはや降参以外の選択肢は無かった。

しかし、そんな中でもエクレールはまだ諦めようとはしていなかった。

「もう結果は見えているぞ。そなたも負けを認めたらどうだ?」

「誰が認めるか! ここで逃げたら、それこそ騎士の名折れだ!!」

セイロンに降参を促されるエクレールだったが、彼女は獲物を構えながら勇んで、そのまま立ち向かって行く。

「やれやれ。勇氣と無謀を履き違えるのは、戦いにおける賢い選択とは言えんのかな」

そのまま向かって来たエクレールの、二刀流による十字切りが放たれるが、セイロンはそれを左右それぞれの手で彼女の腕ごと受け止めてしまう。

「ほわたああああ!!」

「!?!」

そのまま腕を抑えた状態で、セイロンは膝蹴りを放つ。エクレールとの身長差を考えると、膝蹴りは彼女の顔面に命中することになる。それを考えたエクレールは、反射的に目を瞑る。

「?」

だが、いつまでたつても蹴りの衝撃が来なかった。不審に思ったエクレールは恐る恐る目を開ける。

「ようやく目を開けたか。我もこの体勢は疲れるから、もう少し早くして欲しかったな」

エクレールの目の前にはセイロンの蹴りが眼前に迫ったまま止まっているのが見えた。つまり、彼の蹴りは寸止めされていたということだ。

「な、何故だ。何故蹴りをあそこで止めた？」

「なに。傷つかぬからと言って、年若い生娘の顔面を蹴り潰すのは気が引けた。それだけだぞ」

セイロンとしては紳士的な対応のつもりだったが、エクレールは騎士として見られていないと解釈して、少し忌々しそうに彼を見ている。そんな彼女に、リビエルとアロエリがフォローを入れる。

「まあ、仕方ありませんわ。龍人族はいうなれば人間そっくりの姿をした竜といってもいいから、基本的な身体能力はこちらの世界の片より高いでしょうし」

「それにあいつは、お前より年上な分長く鍛錬を積んでいる。技量も上だろう」

「それでも…」

「こんちわー!」

「お、勇者様オーツス!」

エクレールが反論しようとしたら、丁度そのタイミングにシンクが訓練場にやって来た。

「ほれ、愛しの勇者殿が来たぞ。存分に甘えて来るがいい」

「だ、誰があんなやつ!」

セイロンの一言で顔を赤くしながら激昂するエクレールだった。周囲から見てもバレバレだろうに(シンクを除く)、何故素直になれないのだろうか？

「うわあ…これはまた見事に」

シンクはセイロンの戦闘跡を見て、思わず顔を引きつらせる。無惨にもだま化した騎士たちを見て、シンクは彼の強さを実感することになった。

「勇者殿、これを見てもやる気はあるか？」

「彼女より戦闘経験の浅いお前だと、明らかに分が悪いと思うが…」  
アロエリも指摘する通り、シンクはエクレールより実戦経験が低い。加えて今度は一対一の戦いなので、余計に不利となっている。だが、シンクの目には明らかにやる気が充ちていた。

「モチのロンです！ 次回の戦のためにも、剣の腕を鍛えておきたいんで」

「わかった。では行くぞ!!」

そういうわけで、セイロンVSシンクの対決が始まった。どちらが勝ったかは、想像に任せよう。

く昼 風月庵く

「こんにちわー!!」

玄関先でシンクが大声で挨拶をする。そんな彼と一緒にライとミルリーフがいたが、彼らだけでなくリシエルやエニシア、ギアンと御使い達も同行している。

「ほう。話には聞いていたが、本当にシルターン様式なのだな」

「はい。僕の世界の日本風でもあります」

風月庵の建築様式を聞いて、是非とも見てみたいと思っていたのだ。そこで、この機会に訪ねて来たという。

「いらつしやいでござる」

「やつほー、ユツキーー!」

ミルリーフとユキカゼが相変わらず仲良さげにあいさつを交わす。こっちに来てからほぼ毎日やっているにもかかわらず、先日の魔物騒動もあつてずいぶん久しぶりに感じられた。

早速ミルリーフは、ここに引き取られたあるものの様子を見る。

「その子、元気そうだね」

「うむ。同族として嬉しいでござるよ」

それは、禍太刀に取り込まれていた土地神の子狐だった。あのあと、ユキカゼが同族として安否を心配し、回復するまで面倒を見ることになったのだ。

その一方、ライやシンクはユキカゼと子狐を見比べる。先日明らかになった、ユキカゼが土地神だという事実を思い出したのだろう。そ

んな中、ライはある疑問を尋ねる。

「そういえば、ユキは土地神だけどなんで人里で、ていうか人と暮らしてるんだ？」

「私も、差し支えなければお伺いしたいですわ」

これはライだけでなく、リンバウムや四界の出身である者の全てにとって気になる者だった。人間は自身とは異なる存在を恐れたり妬んだりする生物だ。それは種が異なる存在に限らず、同じ人間に対しても例外でないのが、人間の醜いところだろう。そんな一面もある世界で暮らす者として、今のユキカゼの暮らしの理由は気になって当然だろう。

「拙者は昔に魔物に親を殺されて、行き場を無くして放浪していたところを親方様に拾われたのでござるよ」

「拙者も、国を魔物に滅ぼされて放浪していた身ゆえな。ほっとけなかつたでござるよ」

予想以上に重い過去だったため、辺りの空気が重くなる。そんな中、ライとギアンが最初に口を開いた。

「やっぱ、あんな化け物が出てくるんなら国の一つや二つ滅んでもおかしくないよな」

「このあたりは平穩そのものだけど、まさかそんなことが……」

二人はフロニヤルドの裏事情を聞いて、思わず神妙な表情となる。ブリオツシユは見たところ20代か、若作りしてたとしても3、40歳ほどになる。だから彼女の国が滅んだのも割と最近……

「まあ、かれこれ150年以上も前の話でござるがな」

『ひゃ、百!?!』

「ここ百年辺りは魔物も出てこなくて太平の世でござるよ」

かと思っていたらまさかのカミングアウトにその考えも揉み消される。彼女は百歳オーバーという、それこそ人間や亜人の寿命を超える年齢だったのだ。

「貴殿も土地神か、また何か別の高位生命体なのか？」

「いや。拙者は諸々の事情で少々長生きなだけで、人でござるよ」  
セイロンもまさかと思つて尋ねるが、曖昧な理由をつけてばかりしてしまう。そんな中、彼女は自身が以前口にしたお役目の詳細を語る。「拙者とユキカゼは魔物封じの技を受け継いでいるので、ここ数十年ほどはビスコツティを拠点に魔物封じの旅をしているのでござるよ」  
「とすると、その技というのが長生きしている理由ですか？」  
「そこは、想像に任せるとござるよ」  
リビエルも自身の推測について尋ねてみるが、見事に誤魔化されてしまった。  
そんな中、ブリオツシュが少し残念そうにあることを呟いた。

「しかし、勇者殿達が残ってくれるなら、拙者の剣技や封魔の技“神狼滅牙”を継いでくれただろうに」

「？ 確か、その技ってあの…」

神狼滅牙 禍太刀の封印やデイガルドとの決戦で使ったブリオツシュの最大奥義的な技だ。

「神狼滅牙は御館様にしか扱えた者がいない技でござる」

「わあ、そう言われると覚えてみたくなる！」

ユキカゼの一言で、シンクが幼い子供のように目を輝かせる。

「では、一度やつて見せようか」

「シンク、やめと…」

「お願いします！」

「駄目だ、聞こえちゃいねえ」

というわけで、ブリオツシュによる神狼滅牙の伝授（仮）が行われることとなった。

夕方 帰り道

「……流石に1日じゃ無理だったか。いてて…」

「だからやめとけつつあったんだよ」

結局、神狼滅牙は1日でマスター出来ず、無駄に疲労を溜める結果となったのだった。ちなみに移動手段だが、ライはミルリーフと、リシエルはリビエルと、そしてエニシアはギアンとセルクルに二人乗り

している。だが、セイロンとアロエリは自身の足や翼のみで移動していた。セイロンは鍛錬の一環として、アロエリは翼で行けるところには翼でしか移動しないという意地によるものだった。

「おーい、お前らー!」

すると、背後から聞き覚えのある声が聞こえたので振り返る。

「ガウル、それにみんな!!」

やって来たのは案の定、ガウルとジェノワーズだった。昨晚彼から連絡があり、シンクと決着をつけていなかったため、そのついでに泊めてもらうことになったとか。

「揃いも揃って、どっかに出かけてたのか?」

「ちよつと風月庵にな。セイロンの出身世界と建物が似てるって話したら、行きたがってたな」

「うむ。我の生まれたシルターンと、何か繋がりがあるのかと興味を持ってな」

「へえ……ああ、みんな。これお土産」

「ガレットの名産品詰め合わせ」

「おお、サンキュー」

ジェノワーズからライとシンクはそれぞれの土産を受け取る。ライの分は大所帯ということが多めになっている。

土産を受け取った後、そのままフィリアンノ城に向かうことになった一向。

〜夜 フィリアンノ城〜

シンクの部屋に呼ばれたライは、まだ直接戦ったことがないのでシンクと決着つけたあとで戦わせると勝負を叩きつけられたのだった。

室内でどう対決するのか疑問だったが……

「うおお! ガウ様も強いけど、ライもめっちゃ強い!!」

「がんばれ、パパー!!」

「いけー、ライさーん!!」

至極単純、腕相撲勝負だった。先に勝負を終えたシンクは、ミルリーフと二人でライの応援をしている。ちなみに、僅差でガウルの勝ちだった。すると、ベールがジューズを乗せたお盆を運びながら部屋

に入ってくる。

「飲み物持ってきましたよ〜」

「わ、わりいなベール……お客を働かせてえー!!」

「いいえ〜」

力みながら飲み物を運んできたベールに礼を言うライ。当のベール本人は間延びした返事をしながら、ジュースを配ろうとした。だが、その時……

「あ!?!」

「へ?」

いきなりベールが何かに躓き、そのままジュースをぶちまけてしまい、シンクとミルリーフが頭からそれを被ることとなってしまった。

「ミ、ミルリーフ!?!」

「てめえ、またか!?! またやったのか!?!」

その光景を目の当たりにしたライとガウルは、腕相撲を中断してベールの方に向かっていく。

「てめえ、ミルリーフに何しやがる!!」

「よりによって普段のドジをガキにやるって、どういう了見だ!!」

「ああああああ!?! ごめんなさい、ごめんなさい!! あああああああああ!!」

そのままライはガウルと二人でベールに攻撃を仕掛ける。ライがベールの右手と右足を、ガウルは逆に左手と左足を固定し、所謂ロメロスペシャルを二人で左右一方ずつにかけるような技をかけたのだ。この技を放った際のライとガウルの息の合い様は、ノワール曰く、この場での即興コンビだというのが疑わしく感じられるほどだったという。

その後、シンクとミルリーフはガウルの勧めで風呂に入ることにし、大浴場に向かうこととなった。ライもミルリーフを連れて大浴場に向かうが、途中でライが用を足しに行ったのでシンクが先に大浴場につく形となった。

「さて。遅くなつて悪かったな」



「パパとおふろだもん。これくらいガマンガマン」

そんな感じで二人が青い男湯の掛け布が掛かった出入り口を通ろうとすると、脱衣所に入って来たメイドが二人に声をかける。

「あ、すみません！ これ、掛け布を間違えてしまってます」

「え、じゃあアツチが男湯ですか？」

「はい、そうなります」

ライは冷や汗を流しながら胸を撫で下ろす。危うく、初日でシンクとやらかした失態を再び晒すことになったのだから、これは当然だろう。

「助かりました、ありがとうございます」

「いえ、こちらの間違いですので。あのー、掛け布を掛け間違えていたんですけど、こちらに入っているのは男性でよろしいでしょうか？」

そのままメイドは男湯の方に声をかけるが、返事が来なかった。だが、ライはここである違和感を感じた。

（ん？ 先に行ったシンクが男湯にいない……で、今になるまで掛け布が逆だった……て、ことは）

「あのー、出入り口の掛け布を間違えてしまったんですけど、そちらは女性だけでしょうかー？」

ライが思案する横でメイドが女湯の方にも声をかける。

「大丈夫です、女子が一人だけですー」

女湯の方からミルヒの声で返事が届いた。つまり、シンクが間違えて向こうに入ってしまったのをミルヒが庇ったことになる。

（姫様、シンクと近づくと絶好のチャンスだ。無駄にすんなよ）

心の中でミルヒにエールを送って、そのままミルリーフを連れて男湯に入るライであった。そして、男湯の扉を開くと……

「あれ、シャワーの音？」

何故か無人の筈の大浴場でシャワーの音が聞こえたのだ。湯気でよく見えないが、確かに人の影が見える。そして、近づいてよく見てみると……

「え？ ライ？」

「リ、リシエル？」

そこには、リシエルが一糸纏わぬ姿でシャワーを浴びていたのだ。しばらく茫然としていたが、やがて状況に気づいて二人は慌てて背を向ける。

「……!? あ、あんた何してるのよ!!」

「わ、わりい……っていうか、ここが男湯だぞ!!」

背を向けながらも、どうにか反論するライだった。

「え!? このメイドから赤い掛け布が女湯だって聞いたわよ!」

「掛け間違えたってさつき聞いたぞ。ていうか、さつきそのことで誰かいないか聞かれただろ! 何で返事しなかったんだ!」

「シャワーの音でよく聞き取れなかったのよ!!」

「だったら止めてもう一回聞き返せよ!!」

「パパ、ちよつと落ち着いて。リシエルも……」

そのまま二人の口論はヒートアップし、ミルリーフが二人を落ち着かせようとすることも効果はなかった。どうしようかと思っていたら、思わぬ救いの手が差し伸べられた。

「あの一、ライさーん!!」

「丸聞こえですけど、ちよつと落ち着いて下さーい!!」

隣の女湯にいる、シンクとミルヒだった。すぐ隣に二人の怒鳴り声が届いていたという事実から、下手をしたら脱衣所に人が入られた時点でバレてしまうということに気づいた。

「……とりあえず、騒いで悪かったわ」

「ああ、オレこそ悪い。で、ミルリーフはともかくお前がいると騒ぎになるから、早いところ出た方がいいぞ」

そう言っってリシエルに脱出を促すライ。だったが……

「…ねえ。少しでいいから、一緒に入らない？」

「え？」

唐突なりシエルの一言に、呆けた声を出すライ。

「この間はエニシアに先を越されたから、そのリベンジよ。背中合わせにだったら、一緒に入っても問題ないでしょ?」

「イヤ、そうだけど……もし人が来たら」

「大丈夫よ。ほんの2、3分、長くても5分で出ていくから」

結局、リシエルのゴリ押しの頼みによってライは折れることとなった。

(うーん、エニシアとリシエルのどっちが私のママになるか、またわかんなくなっちゃった…)

一方、忘れられそうだったミルリーフは、空気を読んで静観することにし、先に体を洗いに行くことにしたのだった。ここに来て変な大人っぽさが出てきたような…

「ねえ、ライ」

「どうした?」

背中合わせになって湯に浸かる二人だったが、いきなりリシエルが声をかけてくる。

「……あんたが無事で正直、ホツとしてるわ」

「ああ。エニシアから聞いたけど、リシエルも心配してくれたんだっけな。ありがとう」

「!? ど、どうってことないわよ、別に!!」

ライの口から出た素直なお礼に、リシエルは対慌てふためく。

「そーういや、オレが響界種だって初めて分かったあの時、リシエルはそれを理由にオレが町を出ていかなかったって心配してくれたんだっけな」

「だ、誰から聞いたのよ!!」

「ルシアンが、前にこっそりと」

「あ、あいつ……」

それを聞いたリシエルは、向こうで留守番している実の弟に軽く怒りを感じていた。一方、ライはそんな彼女に再び声をかける。

「まあ、エニシアにも言ったことだけど、オレはお前らを残して死んだりしねえから安心しろ。少なくとも、お前とエニシアのどっちかを選

ぶまではな」

「……まあ、期待しないで待ってるわ」

そう言って、二人は背中合わせのまま、互いの手を絡め合う。

「姫様えらくいい、姫様かわいい」

「なんででしょう？ こんな単純なことなのにすごく楽しいのは！」

その時、いきなり隣から聞こえたシンクとミルヒの声を聞いて、二人は頭が一瞬フリーズした。

「…ねえ、これって…」

「言うな。オレも多分同じこと考えてる」

「やっぱり？」

二人の感想はやっぱり一致していた。「なんか背德的だ…」と。

翌日

「ライ、あんたこういうのってあんまり似合わないわね」

「言うな、自覚してるっての…」

「そ、そんなことないよライ！ よく似合ってるって!!」

この日の昼に、「ありがとう勇者様お食事会」と称されたシンクの送別パーティーが城のホールで行われた。ライは自ら厨房に立とうと思ったのだが、彼もパーティーの主役だということで断られてしまい、リシエル達も含めて正装姿でホールに集まっているのだ。

ちなみに、恰好は以下の通りだ。

ライ：城から貸し出された騎士団の制服（マント付）

ミルリーフ：普段着の上にケープ（サモコレのカード参照）

リシエル：ライと同じく城から貸し出されたドレス

エニシア：軍団の姫だった時に着ていたドレス

ギアン：何故か持参していたタキシード

セイロンとリビエル：普段の格好（本人たち曰くこれが正装）

アロエリ・そもそもこの場にいない（気が付いたら逃げ出していた）  
「ていうかアロエリの奴、逃げやがって…」

「確かに、こういう格好とか死んでもやりたがらないだろうけど、こっちだって我慢してゐるんだから…」

ライトリシエルがアロエリの件で文句を言っていると、エクレールとユキカゼに連れられてシンクが会場にやって来た。

「あ、ライさん……えっと、その恰好は」

「オレだって好きで着てるんじゃないやねえっての」

こちらに気づいたシンクだったが、予想だにしなかったライの格好にどうリアクションしていいのか困惑していた。

「みなさーん！ 勇者シンク、ご来場でござるよ!!」

ユキカゼがホールの中央で叫ぶと皆がそこに注目し、すぐそばにいたシンクに向けて拍手を送る。そのすぐ後で、ミルヒがスピーチを始めた。

「フィリアンノ城のみなさん。緊急連絡で回した通り、我が国の危機を救ってくれた勇者シンクが、明日の朝に元の世界にお戻りになります。また、委託騎士ライとその仲間達も同じく元の世界にお戻りになってしまいました。ビスコッティとガレットの戦を華やかに彩ってくれた勇者シンクたちの活躍、皆様もご存知かと思えます。今回は里帰りということで帰還なされますが、また来てくれると約束してくれました」

そこで再び、拍手が鳴り響く。とりあえず、ライ達もその場に合わせて拍手を送ることにした。その際、シンクが若干恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「それでは、今回の、“ありがとう勇者様お食事会”の主賓、勇者シンクに一言お願いしたいと思います！」

そのまま指名を受けたシンクは、慌てふためく中でユキカゼに突き飛ばされて、壇上に上がらざるを得なくなってしまう。

そのままシンクはアメリカタからマイクを受け取り、とりあえず何か言うことにした。

「えっと、僕は元の世界では普通の学生をやってたんですが、姫様に勇者として呼ばれて色んなことを経験しました。レオ閣下やガウル殿下と戦ったり、姫様と魔物退治や、ライさん達と悪魔退治をしたりしました。戦以外でも、騎士団長やダルキアン卿、親衛隊帳やパネトーネ筆頭、エルマール主席、リゼルさん達メイド隊やエミリオさん達騎士団のみなさんと仲良くさせてもらいました」

その後、シンクは何かを思い出してホールにいたある人物に声をかけた。

「食堂のおばちゃん。いつもリコと一緒につまみ食いさせてくれて、ありがとうございます！」

「いゝえ〜」

まさかの食堂のおばちゃん指名に、会場内で笑い声が響く。そして笑いが収まったところで、シンクが再び口を開く。

「とても凄い経験をさせてもらいました。元の世界に帰っても、この世界での経験を決して忘れず、きつとまたすぐにお邪魔したいと思います。ビスコッティとフロニヤルドにピンチがあるとき…」

勇者シンクは駆けつけます!!」

最後の間を置いてシンクが宣言すると、クラッカーが鳴らされて、再び拍手が送られる。そしてシンクが壇上から降りると、ミルヒからまたも一言。

「では、次は勇者シンクと共にビスコッティの危機を救ってくれた、委託騎士ライにも一言お願いしたいと思います」

「ええ!?!」

いきなりの事態に驚くライ。だが、今回の事件を利用しようとしたデイガルドにとどめを刺したのはライであるので、彼も英雄扱いされ当然だった。

「パパ、一緒に行くからがんばって」

「ミルリーフ、わりい」

結果、ミルリーフ自身はスピーチをしないものの、ライに連れられて壇上に登ることとなった。そして、シンクからマイクを受け取って壇上に登り、深呼吸してから口を開く。

「オレもリインバウムじゃ、わけあって宿屋の店長兼料理番の仕事をしているただの一般人です。まあ、生まれというか種族というかが一般的じゃないですが、そこは長くなるので省略します」

「何言ってるのよ。あたしらの世界でも結構な修羅場潜ってるくせに……」

「だね。あの時の僕の野望を打ち砕いたのも彼だったし」

「リシエル、ギアン……」

ライのスピーチを聞いて、リシエルたちがそんなことを呟く。まあ、15歳で仕事持ちの彼が獣人だの機械兵器だの、堕ちた竜だの（かつてギアンが変身した）と死闘を潜り抜けているので、とても一般人とは呼べないだろう。

「そんなオレが、わけもわからずに召喚されて、戦とかをこの目で見て体験して、当初こそ変な世界だと思っていたけど、フロニヤルドはとにかく平和でのどかな世界でした。リインバウムやそれを取り巻く四世界のお偉いさんに、爪の垢を煎じて飲ませてやりたいぐらいに」  
何気に、自身の世界やそれに関わりのある世界の重鎮たちに毒を吐く発言をしているが、周りの者は冗談だと思っただけで笑っている。まあ裏を返せば、傀儡戦争のような凄惨な戦争を知らない、本当に平和な世界に生まれ育ったことを表しているのだが。

「そんな世界をオレだけでなく娘のミルリーフ、短いけどオレの仲間たちも楽しませてもらいました。今回はビスコッティだけでしたが、今度はガレットや他の国にも来させて欲しいと思っています」

「まあ、結果としてはこういうことになるんですが……」

オレたち、宿屋“忘れじの面影停”一同も、ビスコッティとフロニヤルドのピンチに駆けつけるから、待っててくれ!!」

最後、ライが叫ぶと再びクラッカーが鳴らされる。そして、シンク

の時のと負けないくらい盛大な拍手が送られる。ホール内で待機していたリシエル達にも同様だった。



第29話 さよなら、また会うその日まで Good  
bye from yald

スピーチを一通り終えて、立食パーティーを楽しむ面々。そんな中、ライはシンクに話しかける。

「そういや、シンクが記憶持ったまま帰る条件に物を渡すつてのあったよな」

確かに、ライはエルゴからシンクの送還には一定の条件がないと記憶が物が持ち帰れないと聞かされていた。そしてその条件は3つで、「送還から再召喚まで91日以上空ける」「召喚主以外の3名以上に『また来る』という誓約とともに勇者が身につけていた物（内容は問わないが勇者が自身の居た世界から持ち込んだ物の方が良い）を預けておく」「召喚主に対しては勇者と召喚主の名前が書かれた約束の書と誓約の品を渡しておく」となっている。最初の一つはしよっちゅうフロニヤルドに行くわけにもいかないのが特に問題ないが、残り二つは渡すための物が必要になる。後になって調べてみてもそう書かれた資料が発見されたため、確証もあった。

「何か、渡す物とか相手は決まってるのか？」

「はい。ダルキアン卿とユツキーには既に渡ししてありますし、騎士団長にエクレ、リコにも渡す物は決めてあつて…」

「結構な人数だな。3名以上つてことは、3名ギリギリでもいけるだろう？」

「そうなんですけど、条件以前に僕とこの世界で親しくなった人たちの繋がりが欲しいっていうのもあるんです。たぶん、条件を知らなくてもやってたと思いますよ」

それほどにまで、シンクがフロニヤルドで得た絆は大きく強いものだったようだ。その様子に、ライも納得している。

「ただ、姫様に渡す分を考えると残りがケータイとか必需品になってしまうんで、ライさん達の分が無いのが申し訳なくて…」

「気にすんなよ。オレたち期間以外は無条件で行き来できるように

なっちまったから、そういうのはフェアに思えねえんだわ。あ、これはオレが勝手に思ってるだけだからあんま気にすんなよ」

それを話している途中、今度はエニシアとリシエルがやって来る。

「あ、二人ともどうも。リシエルさんもエニシアさんも、ドレス似合ってますね」

と、シンクは二人の格好を素直に褒める。だが：

「褒めてくれるのはうれしいんだけど…」

「あんまり複数の女の子にそう言う褒め言葉を無闇に言うのも、どうかと思うわよ」

二人が呆れながら言うのを聞くシンクだったが、頭に疑問符を浮かべている。あまりの鈍さに、ライ達は思わずため息をつくのだった。

「そういえばシンク、姫様にはなにをあげるの？」

「あ、それあたしも気になる」

そんな中、今まで黙っていたミルリーフが尋ねてくる。エクレールに並んでいい雰囲気になっていたミルヒなのだから、なんとなくいいものを渡しそうな感じがしたため気になるのは当然だろう。

「ちよつと、これにしようかなって」

そう言っただけでシンクは、ズボンのポケットからあるものを取り出す。

「懐中時計？ それって、買うと結構するんじゃないのか？」

「シンク君って、向こうじゃ一般庶民だつて聞いたけど…」

「これ、貰い物なんですよ。ライさんは、僕が姫様に呼ばれた理由の大会のこと聞いてますよね」

そう言われて、ライはあることを思い出した。アイアンアスレチックという大会で2位になったのをミルヒが星詠みで覗いたことが、シンクを勇者として呼んだきっかけだということをだ。

「そういや、そんな話もしたな。最近、いろいろありすぎて忘れてたよ」

「で、その大会で2位になった景品がこれなんですよ。だから、結構思い入れがあった…」

話している内に、声がどんどん小さくなっていく。おそらく、大会の時の悔しさがぶり返してきたんだろう。

「シンク、その……」

「いいんです。もうあらかた吹っ切れたんで」

微妙な空気になってしまったので、この話はここで打ち切りとなった。

翌日、朝になってついにシンクの送還の時が来た。

まずは、謁見の間にてシンクの帰還式典が行われた。その式にはライ達も参加することとなり、彼らも機能のパーティーでの恰好で出席する。

そして……

「ぐぬぬ……」

この日はアロエリも事前に取り押さえられて、しつかり正装をさせられて式典に参加していた。ちゃんと、彼女の体に合わせて背中部分が開いているドレスなので問題なしだ。

「あんたも、こういう場にはちゃんと出なさいよね」

「こんなしおらしい恰好を、人前でする羽目になるとは……」

アロエリは兄のクラウレから、女を捨てた戦士として育てられたのだが、弱気になったりするとしおらしい女口調になったりする。彼女としてはかなり恥ずかしいようで、今回はそれに匹敵しうるようだ。

一方、玉座に座るミルヒの前にはシンクとライが並んで佇んでいる。

「ビスコツティの勇者シンクと委託騎士ライは、それぞれの役目を終えて故郷へと帰還することとなった。では、勇者シンクは勇者の剣“神剣パラディオン”を、召喚主ミルヒオーレ姫へ」

元老院の一人が言うと、シンクはミルヒの前に足を進める。そして、指に嵌めていた指輪形態のパラディオンを取り外し、ミルヒに手渡す。

そんなこんなで、元老院による進行のもとで式典は終わりを告げた。

その後、シンクはフロニャルドに召喚された際に着ていた服に着替

える。ライ達にとっては変わった意匠の服だったが、シンク曰く学校での制服なのだという。

そして、全員でセルクルに乗って、エクレールに先導される形で召喚台に向かっていた。リシエル達がこちらに来る際に乗って来たマシンが、召喚台に停めているので目的地は一緒ということだ。

「まったく、最後まで貴様らのお守をさせられるのか」

「そう言わないでよ。僕はエクレが見送りで嬉しいよ」

「なんだかんだ言って、オレらもここでの付き合いはエクレールが一番長いからな。オレも正直ほつとしてるぜ」

「ありがとう、エクレ」

「そうそう。最後になっちゃったけど、エクレにも」

すると、シンクは左腕に嵌めていたリストバンドを外して、エクレールに差し出す。

「なんだ？ もう3人以上に渡した筈だろ」

「ライさんにも言ったんだけど、みんなと僕の繋がりみたいなのが欲しくってさ。エクレにも同じだよ」

「そういや、他のみんなには何を渡したんだ？」

「騎士団長とダルキアン卿に、財布に入っていた記念コインを一個ずつ、ユツキーには携帯ストラップ、リコにはボールペンとテープレコーダーをね」

「聞いたことのねえ物も混じってるけど、結構な数だな」

「リコにいたってはふたつだよ」

そんなこんなで先頭でライ達は色々話をしている。その一方、後方のリシエル達は…

「入り込む隙がないわね」

「やっぱり、ついこの間にいきなり来た私達とは、付き合い方が違うしね」

「なに。次来た時にでも親睦を深めれば埋め合わせは効こう」

それから少しして召喚台に到着、エクレールとはここで別れることになった。そこには既にミルヒと、シンクをフロニヤルドに連れて来た隠密部隊の犬、タツマキがいた。

「タツマキ！ お前も来てたのか」

「この子もお見送りがしたいそうです」

それからしばらくタツマキを撫でていたシンクだったが、やがてはタツマキも召喚台から去っていった。

「では、送還の際は召喚主と勇者しか、召喚台にはいられないので…」  
「わかったわ。あたし達が先に出発すればいいのね」

「すみません。出来れば、一緒にお見送りしたかったです…」

そう言つてリシエルがマシンの発進準備に、エニシアとギアンがゲートを開く準備に取り掛かる。三人が準備に入った後、ミルヒがライ達に申し訳なきように告げる。

「いや。姫殿は別に悪くないのだから、気に病む必要などない」

「また会えるんですから、埋め合わせもその時にしますので」

そんなミルヒを、セイロンとリビエルでフォローする。

「じゃあな、シンク。またな」

「はい。ライさんも、お仕事がんばってください」

「ミルリーフも元気でいてくださいね」

「姫様こそ、げんきでね」

ライ達も最後の挨拶を済ませて、マシンに乗り込む。中に入ると、乗車スペースの中央に設置されたある物に、エニシアが魔力を照射している。

「これは、ラウスの枝か？」

「ああ。これとエルゴが教えてくれた勇者召喚の知識を合わせることで、リインバウムとフロニヤルドを行き来できるんだ。やろうと思えば、ラウスブルグごと移動できるらしいよ」

「そ、それはまた…」

ギアンが教えた移動手段に、思わずライは顔を引きつらせる。まあ、ラウスブルグをこっちに持つて行ったら、いろいろと面倒な事態

にはなりそうだから当然だろう。

「ギアン、魔力充填完了したよ」

「ああ。こつちも術式が組めたところだ」

二人の準備が完了すると、上空に魔法陣が出現する。それは、ライ達が最初にフロニヤルドに呼ばれた際に現れた、桜色の魔法陣だった。

「じゃあ、このまま飛ばすわよ」

リシエルがマシンの発進レバーを思いっきり倒すと、そのまま大地から飛び立つ。そして、そのまま一気に上昇して魔法陣目掛けて飛んでいく。魔法陣は大体高度一万メートルほどの高さに現れたが、マシンは勢いよく飛んでいき、3分もしないうちに半分以上を登り切った。

「みんな、窓の方を見てくれ！」

そんな中、ライはあるものに気づき、仲間たちの視界を窓の方にやる。そこには、天に昇っていく桃色の光があった。

「あれは……」

「たぶん、シンクだな」

「シンクも、これで帰れるんだね」

天に昇っていくシンクはどんどんライ達のマシンと距離を縮めていき、最終的にマシンを追い抜いて、そのままフロニヤルドから消えていった。

「は、早いですわね……」

「まさか、これの飛行速度を追い抜くなんてね……」

唾然とした様子でいると、いつの間にかもうゲートが目の前に迫っていた。

「みんな！ 揺れるけどシートベルトは大丈夫!？」

「え？ シート、なんだって?」

ライとミリリーフがリシエルの言ったことを理解できなかったが、周りを見回すと座席についている黒い帯のようなもの、シートベルトを腰に巻いていた。

そして、そのままゲートにマシンが突入する。

「ぎゃああああああああああ!!」

「ふええええええええええええ!!」

ゲートをくぐった瞬間、マシンを強烈な振動が襲う。乗っていたメンバーはシートベルトを締めていたので特に問題無さそうだが、ライとミルリーフはそもそもシートベルトが何かを分かっていたいなかったため、強烈な振動をその身をもって味わうこととなってしまった。

「あ、ゴメン言い忘れてた! 座席にある黒い帯、シートベルトついてうんだけど、それで体を固定しないと痛い目に合うから!!」

「もう遅えよ!!」

ライはミルリーフと二人で、どうにか空いている座席の背もたれにしがみついて耐え抜いている。とっさの判断のおかげで重傷は避けられたのだった。

「でも、もうそろそろ着くわよ!!」

リシエルに言われたその数秒後、ライ達はゲートを抜けていた。そして、その先には懐かしいような色の空が目映る。そして、窓から地上を見下ろすと、本当に懐かしいものが見えていた。

「……トレイユの町」

「帰って来たんだね、パパ」

16日ぶりだったが、このところの濃厚な出来事を体験したこともあって、非常に懐かしくも感じていた。そんな中、リシエルはマシンを自身の家、すなわちブロンクス邸に飛ばす。

そして、ブロンクス邸が見えてくると、庭の方に人だかりが出来ているのに気付く。

「あれは……」

「ライさんが帰って来た!!」

「ようやくか……」

「帰って来たか、あいつ」

「ライ君、お帰りー!!」

「ライさん、お嬢様、お帰りなさいましー!!」

「ご主人、お帰りなさいー!!」

「ライ、アロエリ、ギアン様…」

集まっていたのは、トレイユの住人や宿屋の居候といった、ライのかけがえのない仲間達だった。喋っていた順に、ルシアン、テイラー、グラッド、ミント、ポムニツト、シンゲン、そして最後の御使いでアロエリの兄クラウレだ。

「みんな…」

「みんな、なんだかんだ言つてアンタが好きなのよ。感謝してあげなさいよね」

そのままリシエルは、マシンを庭の真上に持つていき、着陸態勢に入る。そして、地面までまだいくらか距離のある中でライとミルリーフは、窓から身を乗り出して、待っている面々に向かって声をかけた。

「みんな…」

「ただいま!」

サモンナイト 勇者と姫と越響者

第1部・完



## 第2部

### 第30話 再びフロニヤルドへ I” 11 be

back

『俺は、このフロニヤルドが嫌いだ』

一人の男が、ある集団にハッキリとそう告げていた。その男は背中の右側に白い翼を、左側には蝙蝠に似たを生やした奇怪な外見をしている。

『おい、考え直すんだ○○○○!!』

『そうです！ もっと時間を置いて暮せば、きっとあなたもこの世界を好きなる筈なのです!!』

男に必死に問いかけるのは、銀髪と黒装束の男と、瞳に星のマークが入った、白い服を着た金髪の女性。そのそばにはリスのような耳と尻尾を生やした女性がいる。

『残念だが、そういう訳にもいかねえ。これは俺が考え抜いた結果見つけた、この世界での俺の役目だ』

『そんなことをしても、死んだ君の両親は喜ばないと思うぞ。むしろ、悲しませてしまう』

『ああ。世界の垣根を越えて、俺を生んでくれた両親への不義だっつのは重々承知だ。だが、それでも俺はやる気だ』

『本気、なのでござるか?』

先程の二人とは別の男女二人が男に声をかけた。二人とも茶髪で狼のような耳を生やしており、雰囲気も似ているので兄妹と思われる。

『本気の本気だ。俺はこのフロニヤルドの在り方を変える。それがダメだったら……』

そこまで行った後、男は間を置いて再び口を開いた。

『フロニヤルドを滅ぼす』

「はっ!？」

ある日の朝、風月庵の一室。ビスコッティ隠密隊頭領ブリオツシュ・ダルキアンは目を覚ますと同時に勢いよく起き上った。

「まさか、あのころの夢を見るとは、何かの前兆でござろうか?」

冷や汗を書きながら神妙な表情を浮かべる彼女には、いつもの余裕が見当たらない。本人も言ったように、あの過去の夢に何かあるようだ。

「今日は勇者殿が再びこちらに来る日。何も起こらなければよいでござるが……」

ある日のこと。ライはいきなりテイラーに呼び出され、ブロンクス邸を訪れていた。

「さて、今回お前さんを呼び出した理由だが、当然今回の売り上げについてだ」

そう言つて、テイラーは帳簿を開いてライに見せてくる。

「ミュランズの星で頂点に輝いたお前のことだから、不在だったあの16日の穴埋めは確実に出来るとは思っていた。だが、結果は想像以上だった」

フロニヤルドで不在だった16日分の遅れを取り戻すべく仕事に勤しんで、店の新メニューにビスコッティで覚えた料理をいくつか出してもみた(材料などは似たような味のもので代用)。その結果、過去最高の売り上げに達したのだ。

「お前さんが向こうで覚えた料理が、まさかあそこまで好評だったとはな」

「ええ。オレも、まさかここまで人気が出るとは思ってませんでした」

「そこで私は、このリンバウムについての未知なる美味、言い換えれば金のなる樹がフロニヤルドにはまだ眠っていると見た。そこで、お前にある仕事を申し付ける」

そして、テイラーからある仕事の内容を突き付けられ、それを宿屋に戻って一同に話してみることにした。

く忘れじの面影停く

「フロニヤルド美食調査？」

「なんとというか、シエアナイトの突撃並みに直球な名前ですわね」

真っ先に反応したのは、エニシアとリビエルだった。リビエルに至っては、最近ご無沙汰していた例え話も飛び出している。

「しかし、パパもとんでもないこと思いついたものね。異世界に直接乗り込んで売れそうなもの見つけて来いって」

「その商魂の逞しさがあるから、オレもこうやって仕事に専念できたんだろうな」

リシエルの身も蓋もない物言いに飽きれつつも、テイラーのフォーをするライ。やはり、実父の代わり育ててくれた恩は大きかったようだ。

「しかし、妙なタイミングで向こうから手紙がきたよな」

ライの手には、一通の手紙があつた。その手紙はフロニヤルドの文字（通称フロニヤ文字）で書かれており、差出人はリコッタだった。

実はライたちがリンバウムに帰る前に、リコッタからある物を持たされていた。それは紋章術を応用した発信機のような物で、これを基にタツマキをはじめとした隠密用の犬達を送り込めるようになったのだとか。

それから数日、ついに目的の日が訪れた。見送りにはグラッドやテイラーが来ている。

ちなみに、今回フロニヤルド行きが決まったのは、以下のメンバーだ。

- ・ミルリーフ（ライが行くなら彼女も当然）
- ・リシエル（マシンの操縦が彼女しかできない）
- ・ルシアン（前は留守番だったため）
- ・ポムニット（リシエル達の世話役として）
- ・ミント（フロニヤルドの珍しい植物が研究できると思った）
- ・シンゲン（ライがいないと白いご飯が食えないとか言い出す）
- ・クラウレを含めた御使い全員（ミルリーフが行くから当然）
- ・エニシア（向こうのメンバーと改めて親交を深めたい）
- ・ギアン（エニシアの保護者）

ちなみに、クラウレの翼は以前に敵として戦った傷が原因で飛べなくなってしまったが、エニシアを妖精郷（古き妖精の住む異空間の集落）に連れて行った際に、彼女の母が高度な奇跡の行使で治療、また飛べるようになったという。ただし、まだ感覚などが戻っていないため現在はリハビリ中だとか。

向こうの戦興行で、実戦の勘を取り戻すというのがクラウレの目標に組み込まれてもいるという。

「ライ、すまん。俺も休みが取れば付いて行ってやれたんだが」「気にすんなくて。兄貴はリシエルのいない平和な日常でも送って…」

「人を危険物扱いするな!!」

「いて!?!」

つい出してしまった失言で、リシエルに一発殴られるライ。平常運転でとりあえず安心だ。

「じゃあ、私やポムニットさんでみんなの引率をやっておくので、グラッドさんはお仕事がんばってください」

「ミントさん……」

ミントからのエールを受けて、思わず顔を赤らめるグラッド。

「はい！ 精一杯、職務に勤<sup>いそ</sup>しませてもらおうであります!!」

よっぽど嬉しかったのか、まだ顔が赤く、敬礼しながら大声で返事をするグラッド。

「みんな、移動の準備が終わったよ」

「おお、すぐ行く」

エニシアが呼ぶ声が聞こえたので、ライも返事を返す。彼女とギアンは先にマシンに乗り込み、フロニヤルドへの転移の準備を行っていたようだ。

「じゃあ兄貴、そろそろ行ってくる」

「おお、行ってこいー!」

ライ達はグラッドに挨拶をして、そのままマシンに乗り込む。リシエルが操縦席に座り、残りのメンバーが一般座席に座る。

「じゃあ、フロニヤルドにレッツゴー!!」

リシエルが声高々に叫んでマシンの操縦桿を握る。そして、一気に上空に上がると同時に、空間の歪みが生じて、そこにマシンが飛び込ん

フロニヤルドへと続く回廊に突入したら、以前帰ってくる時と同じように凄まじい衝撃が襲ってきた。しかし、前はシートベルトをしなかったために痛い目を見たライとミルリーフだったが、今回はしっかりとシートベルトを締めているので特に問題無さそうだった。

そして、回廊を抜けたその瞬間

「うわあ……」

「いやはや、これはまた……」

「すごい景色ですね……」

「これは、ラインバウムじゃたぶん見れない光景だね……」

「少なくとも、メイトルパでも見れないだろうな」

いくつもの島が空の上に浮いている、幻想的な光景だった。そう、これこそが異世界フロニヤルドである。前回来れなかったルシアン、シンゲン、ポムニット、ミント、クラウレはその光景に見入っている。

「じゃあ、早速……」

ギアンがいきなり席を立ったかと思うと、マシンの出入り口を開けだした。そして、召喚術を発動させる。

「召喚、ワイヴァーン!!」

ギアンが召喚したのはワイヴァーンだった。呼び出されると同時に、猛々しく咆哮を上げるその姿は見る者を圧倒する。

そして、ギアンはエニシアを抱きかかえて、マシンからワイヴァーンに飛び移って、ライに呼びかける。そしてそこに、アロエリとクラウレ、そしてミントが続く。

「僕達はこのままガレットに直接行く！　ライ達は向こうの彼らによるしく言っといてくれ!!」

「わかった!!」

そのまま、マシンとギアンたちを乗せたワイヴァーンは別々の方向へと飛んでいく。その進行先にはそれぞれピンクと青の光の柱が立っている。ライ達にはこの光の柱の正体に見当がついていた。

「シンクもちょうど来たみたいだな。ナイスタイミングだぜ」

あの光は勇者召喚によるものらしく、同じタイミングでシンク達も呼ばれたようだ。青い光の柱はガレットによるモノで、手紙にはガレットも勇者召喚を行うと書かれていたのだが、その通りになっていた。ギアン達も勇者召喚の光を頼りに、ガレットの方角へワイヴァーンを飛ばす。

しばらく飛んでいると、見覚えのある台座とそこを降りた先に複数の人影を見る。人影はビスコッティに勇者として呼ばれたシンク、そのそばにビスコッティ共和国現当主ミルヒ、そしてその友人のリコッタ、エクレール、ユキカゼといったといった面々だったが、一人だけ見覚えのないツインテールの少女がいた。

「シンク達と一緒にいるのは……たぶん、話に聞いてた幼馴染だな」  
「レベッカ、あだ名はベッキーだっけ？」

シンクからは話だけを聞いていた、幼馴染だろうと推測するが、会ってみたいことには何とも言えなかった。

「よっし。とりあえず、着陸させるわよ！」

「ああ、頼む」

リシエルはそのままマシンをシンク達のいる傍まで着陸させる。その際、窓の外を除くとレベツカ（仮）がポカンと口を開けたまま固まっていた。

「オッス、シンク」

「ライさん、お久しぶりです!!」

「姫様、やつほー！」

「わあ、ミルリーフ！ お久しぶりです！」

真っ先に下りたライとミルリーフは、シンクたちに挨拶をする。久しぶりの再会に、シンク達も嬉しそうだった。

「ライ殿〜！ 久しぶりでござるー!!」

「って、おわ!？」

すると、ユキカゼがライに向かって飛び掛かり、そのままハグを始めた。

「ああ!? ユツキー、ズルいであります!!」

「さつきリコはシンクに真っ先に抱き付いたでござるから、これでおあいこでござるよ〜」

「ちよ、ユキ！ やめっ……」

抱きしめられているライはユキカゼの豊満なバストを顔に押し付けられ、凄まじくドギマギしている。

一方、その様子が面白くない人物が一人いた。

「姉さん、お願いだから落ち着いて」

「わ、わかっているわよ。あの子はライに対してその気はないんだから……」

リシエルは顔を赤くしながら、どうにか怒りを抑えようとしていた。頭では分かっているけど、恋する乙女としては意中の相手がこんなことになっているのは面白くないだろう。

ユキカゼがようやく落ち着いたところで、ライはレベツカに向き合

う。

「間違つてたら悪いけど、お前がシンクの幼馴染のレベッカか？」

「は、はい。ところで、あなたは？」

ライの推測は当たっており、やはり彼女がレベッカだった。一方、当のレベッカ本人はいきなり現れたライ達に対して困惑していたので、自己紹介に入ることにした。」

「オレはライ。前にこっちでシンクと親しくさせてもらったんだ、よろしくな」

「その娘のミルリーフです。よろしく、ベッキー」

そして、今度はミルリーフがレベッカに挨拶をする。その時、レベッカの耳に娘という単語が引つ掛かった。

「えっと、私と同年代で、その年の子供が？」

「あ、血は繋がってないからな。この年で産ませてねえから、安心しろ」

「あ、そうなんだ。ビックリしたあ……」

困惑するレベッカを見て、ライは誤解を生まぬようにさつさと説明する。

「それにしても……」

そして、レベッカは再びミルリーフの方を見る。

「ねえ、シンク。あのミルリーフって子、可愛すぎない？」

「ベッキーもそう思う？ 実は、僕や姫様もすっかり骨抜きに……」

以前フロニヤルドに来た際、ミルリーフはその愛らしさからビスコッティ各地で絶大な人気を博し、勝手にミルヒと人気を二分するアイドルとして扱われていた。レベッカはその愛らしさに魅了された、新たな犠牲者と化していたのだった。

「ねえシンク、今度はSFチックな乗り物からいろんな人が出て来たんだけど……ていうか、人？」

降りて来た面子を見て、レベッカは反応に困った。まあ、いきなりハイテクマシンからメイドやら天使やらが下りてきたのだ。地球出



身の彼女からしたらありえない存在が目の前に何人もいて、しかもその面々に統一性が全くないのだ。当然の反応だろう。

「あんたがレベツカね？ あたしはリシエル・ブロンクス、ライの幼馴染よ」

「弟のルシアン・ブロンクスです。よろしくね、レベツカちゃん」

「お二人の世話係をさせてもらっている、メイドのポムニットと申します」

「自分はシンゲン。旅の三味線弾き件、用心棒でござんす」

「御子様、先程自己紹介を成されたミルリーフ様の教育係、リビエルと申します」

「我は龍人族のセイロンだ。よろしくな、娘よ」

「は、はあ……」

挨拶をされる中、どう反応していいかわからないでいるレベツカだった。

そんな中、今度はミルヒが一同の前に出てきた。

「お久しぶりのライさんやリシエルさん達、そして初めましての方々……」

ようこそフロニヤルドへ。私達は、あなた方を歓迎いたします」

「ああ、これはどうも」

「いやはや。歓迎、感謝いたします」

ミルヒの歓迎の挨拶に、年長者であるポムニットとシンゲンが対応する。すると、その直後に食う方が上がる音が聞こえた。

「お。早速やつてるみたいだな」

「はい。みなさん、私達に付いて来てください」

そのままミルヒ達が近くに留めていたセルクルの方に駆けていく。流石に人数分は用意できていなかったようで、ライ達は乗って来たマシんで後を追いかけることにする。

「ねえシンク、聞きたいことが山ほどあるんだけど……」

「大丈夫。全部説明するから」

一刻も早く事情の説明を求めるレベツカだったが、シンクはかまわずに彼女の手を引きながら走る。そして、そのままセルクルに跨っ

た。

「では、目的地は本日の戦場“ファルネット”！」

「出発!!」

ユキカゼが目的地を宣言すると、シンクは元気よく声を出す。

そして、走り出したセルクルを追いかけてハイテクなマシンが空を  
行くのだった。

第31話 勇者見参 advent the heroes

『さあさあ、空は晴天！ 本日は絶好の戦日和です!! 主役の到着がまだですが、ビスコッティとガレットの両軍の戦いは、すでに始まっています!!』

ファルネット湖ではビスコッティとガレットの戦興行が絶賛進行中。ガレット国営放送のアナウンサー、フランボワーズがハイテンションで実況を行っている。

『というわけで、今回の実況はガレット国営放送のフランボワーズ・シャルレイと……』

『ビスコッティ国営放送の、パーシー・ガウデイがお送りします!!』  
アナウンサーの自己紹介が終わると同時に、次の紹介が始まる。

『そして、両国からお招きした素敵なゲストのみなさん!』

『ガレットからは、バナード將軍とレオ様のお傍役ビオレさん!』

紹介された二人は順番に観客へとあいさつをすると、観客たちも大声で挨拶を返す。

『そして、ビスコッティからはロラン騎士団長と隠密隊頭領のダルキアン卿!』

『はい』

『……』

ロランは返事を返したものの、ブリオツシユは無反応となつてい

る。  
『あの、ダルキアン卿?』

『はっ!?!』

パーシーに再度呼びかけられて、ようやく気が付いたブリオツシユは、観客たちに謝罪の言葉を向ける。

『ああ、これは失礼したでござる。少し考え事をしていて(あの夢のことを気にしても仕方ないでござるな。今はこちらに専念して)……』

『それは珍しいですね。……では気を取り直して、このメンバーで今

回の戦を熱く楽しく実況していきたいと思います!!」

ブリオツシユのフォローに場を盛り上げる言葉を叫ぶと、見事に再び熱狂の渦が巻き起こった。

『さて、今回の戦は”お帰り勇者様・歓迎記念戦興行”ということですが?』

「はい。今日はビスコツティの勇者シンク殿と、委託騎士ライ殿が友人たちを率いて戻ってこられます」

「姫様達も、ちようど彼らのお迎えに向かっていたのでござるよ」

「それと、ライさんのご友人たちは何人かがガレットについてくれるそうなので、レオ様もそちらのお迎えに向かいました」

『おおー。それはまたすごいですね。ではみなさん、そんな勇者様達が到着したら、戦場は大変なことになります!!』

『それまでの間に、皆さんポイントをじゃんじゃん稼いじやってくださいね!!』

その一言に戦場は先程よりも熱気を増して、両軍の士気がぐっと上がった。その後、ガウルがプロレスのヒールのような、ジェノワーズが昔ながらのヒーローのような口上で登場して、ガレットの士気を上げつつ現場に乗り出すのであった。

〜ビスコツティ陣営〜

「これが、戦……」

「はい。地球風に言いますと、国主催の国民参加型の大運動会、というところですね」

「話には聞いてたけど、本当に死人どころか怪我人もでないんですね」「これでしたら、お嬢様達がどれだけ派手にご活躍しても、何ら問題も無いですね」

ミルヒがお茶を淹れながら(ポムニットがお手伝い)、レベツカヤルシアン達に戦興行についての簡単なレクチャーをしている。

「シンクが春に召喚された時は、とても盛り上がったんです」

「へえ。で、姫様はホント、シンクに夢中みたいね」

「ええ。なんたって、我がビスコツティの勇者様ですから」

リシエルに言われたと同時に、ミルヒは満面の笑顔で返す。

(けど、それだけじゃないんでしょうねえ)

(お嬢様、やっぱりなんですか?)

その様子を見たリシエルは、こつそりとにやにや笑いを浮かべる。その様子に、ポムニツトは諫めるわけでもなく妙にノリノリだった。ポムニツトも他人の色恋沙汰に首を突っ込むのが好きなので、こんなことになってしまったのだった。

〜同時刻・ガレット陣営〜

本陣で待機しているレオのそばにいるのはエニシアにギアン、クラウレとアロエリ、そしてミントと黒髪の少女だった。この少女はシンクのいとこで師匠兼ライバルの高槻七海である。

「勇者って、シンクが?」

「ああ」

「でも、こういういった競技だったらシンクは活躍できそうですよね」

七海はシンクが勇者と聞いて最初はキョトンとするが、冷静に戦の内容を見て彼の得意分野だという琴に気づいて、すぐに納得した。

そんな中、今度は今まで黙っていたアロエリが口を開く。

「で、オレはイクサクウギョウとやらで活躍しているあいつを見たことはないが、どれほどのものだったんだ?」

「あやつは中々に良い勇者じゃったぞ。実力はまだ発展途上だがセンスが高くての、以前に呼ばれた時も両軍を盛り上げてくれたんじゃないよ」

「なるほど。敵側でありながらそこまで言わせる辺り、相当の物らしいな」

レオのあまりにも自慢げな様子から、聞き手に回っていたクラウレも感想を漏らす。

「でもこの戦、いいなあ……」

「あれ? 七海ちゃん、目が……」

すると、七海がいつの間にか目を輝かせながら中継を見ている。この師匠にしてこの弟子ありとでもいうのか、七海も根本的な部分はシ

ンクとそっくりだった。その様子に、エニシアも苦笑している。

そんな中、レオが七海にある提案を持ち込んできた。

「もしよければ、出てみるか?」

「いいんですか!?!」

「まあ、実を言うとそのためにおぬしをここに呼んだんじやが」

するとレオは備えられていた椅子から立ち上がると同時に、右手でマントの裾を掴んでその場で一回転し、思いつきり広げる。妙に恰好をつけている気もするが、これもガレット戦士としての性であろう。

「高槻七海よ。ガレットの勇者、やってみるか?」

七海はそのままレオの姿をじっと見つめ、やがてレオの方から握手を求めてくる。そして、七海は笑みを浮かべてその手を取るのだった。

その後、ガウルとジェノワーズの猛攻によって、防衛線の守備をしていた兵達が次々に倒され、ビスコッティが劣勢に立たされてしま

う。

「よっしゃあ! 防衛線突破!!」

「後は本陣まで一直線や!!」

「戦士団、突撃く!!」

そのまま、ジョーヌやベールに促されてガレット軍は一気に進軍していく。防衛線が全て突破されてしまった以上、ここで彼らを倒さなければビスコッティは敗北してしまう。

しかしその時……

「え!?!」

「あ!」

「へへっ」

いきなり一人の人物がジェノワーズたちを掻い潜って、奥にいるガウルに飛び掛かる。その人物は青い鉢巻に白い服とマントを纏った金髪の少年で、武器として長い棒を手にしている。そして、その姿を見てジェノワーズは驚き、ガウルは不敵な笑みを浮かべた。

「やつと来やがったか!!」

「ああ。お待ちせ!!」

その人物は武器の棒を落下しながらガウルに振り下ろすが、咄嗟に輝力で作った爪でそれを防ぐ。その時の衝撃で棒は吹っ飛び、その少年自身も後方へと吹っ飛ぶ。しかし、見事に着地して飛んできた棒をキャッチして見せた。

『き、き…』

「お待ちせしました。姫様からのお呼びに預かり…」

勇者シンク、ただいま見参!!」

『来たあああああ!! 勇者シンク、降臨!!!』

そう。シンクが地球の少年としてでなく、ビスコッティ共和国の勇者としてこの場に現れたのだ。

「シンク!」

「シンク君!!」

「シンク、おかえ…」

ジェノワーズもライバルの復帰を祝福し、言葉を送ろうとするが……

「あれ?」

なんと、いきなりジェノワーズたちの持っていた武器にひびが入り、そのまま木端微塵になってしまったのだった。

「「ええええええええええええ!!」」

「ジョー、ノワ、ベール。約束通り、鍛えて来たよ」

どうやら先程のすれ違い際に、武器に何かしらの攻撃を仕掛けたよう、それによって破壊されてしまったという。

「そやけど、この程度のダメージならまだまだ!」

しかし、ジョーヌの言う通りジェノワーズは武器を無くした程度では特に問題無さそう。ベールは紋章術も使えるし、ジョーヌも元の怪力を活かせば素手で戦えるはず。そしてノワールも問題なし。戦興行には、タッチボーンナスという相手の背中などにタッチしたら一撃でダウンさせられ、しかも危険度が高い分ポイントも多く加算され

るといふ仕組みだ。ノワールはこのタッチボーナス狙いが得意なので、彼女も武器なしで問題なく戦えるというわけだ。

そういうわけで、ジェノワーズは揃って戦える状況だったのだが……

「「ん？」」

いきなり何かの音がしたかと思うと、輝力の弾丸が無数に飛んで来て、それが彼女たちに向けて雨のように降り注ぐ。

そして、それが晴れると……

「え、ええ……」

「うわああああああああああ!!」

一糸纏わぬ姿をさらしたジェノワーズの姿があった。そして、そんな攻撃を仕掛けた張本人は……

「はくい、ジェノワーズの出番は一旦終了」

「勇者様の活躍を邪魔したら、メツであります」

リコッタとユキカゼの姿があった。二人とも戦闘準備万端で、それぞれハンドカノンと輝力手裏剣で武装している。さらに、奥にはセルクルに跨ったエクレールがスタンバっている。

『あーつと！　ここで学院主席と隠密部隊筆頭が登場!!』

『そして我らが親衛隊帳、騎士エクレールも到着しています!!』

ビスコツティの主力達が到着して、実況組も熱が入る。しかし、そこであることに気づいた。

『あれ？　そういえば、委託騎士ライとみんなのアイドル・ミルリーフちゃんがいまね?』

『ああ。呼んだか?』

すると、ビスコツティ陣営のモニターの映像が切り替わり、そこにライとミルリーフの姿が現れた。

『おっす、みんな。久しぶり』

『みんな、やつほー!!』





の昼食は期待しておいて、そのまま戦に精を出してくださいね!』

フランボワーズもナイスな実況で場を上手く盛り上げていく。何気にライもこの手のパフォーマンズが得意になっている気もした……

すると今度は花火が上がるような音がしたかと思うと、ガレット側のモニターにレオの姿が現れる。

『久しいな、勇者よ。そしてライ、勇者に任せて食事の準備とは余裕じゃな』

「閣下!」

『強くなつて帰ってきたこと、嬉しく思うぞ。じゃが、我らも負けてはおれん。そこで、儂は助っ人を用意しておいた』

そう言つてレオが下がると、代わりにギアンとエニシアが前に出てきた。

『みなさん、どうも。知ってる肩もいると思いますが、ライの知人のギアン・クラストフといいます』

『エニシアです。ビスコッティとガレットのみなさん、お久しぶりです』

「二」お久しぶりでええええええす!!!「二」

二人の挨拶に対して、先程のには遠く及ぶものの熱烈な挨拶を返す人々。フロニヤルドの住民は、基本的にノリで生きているような印象を与えるのだった。

『今回は戦力バランスを考えて、ライの仲間は僕を含めた何人かはガレット側に付かせてもらいます』

『後ろにいる3人が今回、ガレットに協力してくれます。ただし、ライと同じで午後からになりますけど』

説明を終えると後ろに控えていたクラウレたちを紹介していく。すると、ミントのそばにはいつの間にか護衛獣のオヤカタの姿があった。

『はじめまして。召喚師のミント・ジュデップといいます。で、こっちが護衛獣のオヤカタです』

『ムイムイ!』

『以前もあつたことある者もいるが、オレはアロエリ。セルフアン族の誇り高い戦士だ。弓の腕に自信はあるぞ』

『アロエリの兄のクラウレだ。妹共々、よろしく頼む』

『そういうわけですから、ガレットのみなさんは大船に乗った気でいてくださいね』

ガレット側の協力者を見て、会場が湧き上がる。そして、再びレオが前に出てきてあることを告げた。

『そして、今回はそれだけではないぞ。ビスコッティが勇者召喚を使うのなら、我らもやってやろうではないか』

その一言で、会場全体がさらに湧いた。特に、ガレット陣営は自国もシンクに対抗した勇者の出現という

『括目してみよ。我がガレット獅子団の、勇者の姿を!!!』

その直後、砦から何かが動く音がした。それは勇者が乗っているであろう昇降機だったが、それが到着したところで会場に動揺が走る。なんと、いるはずの勇者がいなかったのだ。

何事かと思つたその時

——バン、バン——

またも花火の上がる音がしたかと思うと、それに合わせて一人の少女が飛びあがってきた。その少女は砦の塀の上でバク転を繰り返しながら先程の昇降機に着地、右手でシンクと同じく武器として棒を持ち、残った左手でピースをしながらポーズを決める。

「レオ様からのお呼びに預かり……ガレットの勇者・高槻七海、華麗に見参!!」

七海の勇者服はシンクの物と色違いのようなデザインで、シンクは白と黒、赤を基調としているが七海は赤ではなく青になっている。

「へえ、アレがシンクの従妹ねえ」

「なんていうか、シンク君と雰囲気似すぎますね」

「血が争えぬのは店主殿と父君だけではないということか。あつはつは」

リシエル達は七海の姿を見て正直な感想を漏らし、相変わらずセイロンは笑っている。

「やっぱり、七海さんも参加されましたね」

「あ、あはは…」

そんな七海の様子を見て、ただただ苦笑するしかないレベツカ。すると、ミルヒがそんな彼女にある提案を持ちかける。

「よければ、レベツカさんも参加してみますか？」

「えええ!?!」

「砲術師とか、弓兵とかで」

「いえいえ！ 私はこういうのは全然…」

大慌てで断るレベツカに対して、ミルヒはある提案を思いついた。  
「せっかくですから、レベツカさんを皆さんに紹介しますね」

そう言ってミルヒは、カメラを自分達に向け、その様子を戦場のスクリーンに持っていく。

「みなさん。こちらが両国勇者の幼馴染、レベツカ・アンダーソンさんになります」

「こ、こんにちわ」

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

「ベツキーー!!」

フロニヤルドのノリノリな人々や、シンク達の様子に、レベツカは恥ずかしそうにしていた。

### その頃

くビスコツティ近隣諸国の一つパステイヤージュ公国く

その宮殿で、勇者歓迎戦の中継を見ているひとりの少女と、その付き人らしき青年の姿があった。このパステイヤージュの住民は、ビスコツティの犬とガレットの猫に対して、リスの耳と尻尾が身体的特徴に表れている。

「盛り上がつとるのお」

「そうですね」

「ミルヒ姉もレオ姉も、楽しそうじゃのう」

少女はミルヒとレオの両者と親しい間柄らしいことから、この国の王族（公国なので厳密には違う）と思われる。そんな彼女はつまらなさそうにお茶菓子を摘まむ。

「ウチのパスティヤージュもパーツと派手にやりたいが、戦興行は全然……お？」

ぼやきながら再び中継に眼を通すと、そこに移っていたレベルカの姿に氣を取られる。

「この子は？」

「ああ、両国勇者のご友人だそうです」

「そうか。この子は何処の勇者でもないのか……」

すると、何かを思いついた少女は立ち上がって青年にあることを告げる。

「この子、なんかいいぞ！ ウチの直感にピコーンと来た!!」

「は、はあ……」

「ウチはこの子に会いに行く！ ついでにミルヒ姉たちの戦いに乱入じゃ!!」

「はあ……つて、ええええええええ!!」

少女の突然の提案に、青年は物凄くびっくりしている。まあ、いくら王族だからといって、他国の興行に乱入するなんて言い出したらこんなことになるのは当然だろう。しかし、少女は青年の様子も顧みずに、再びレベルカに視線を移す。

「待っておれよ、ウチの勇者よ」

く同時刻 ガレットの友好国の一つ・ドラジェ領国く

「この方たちが、勇者ですか……」

ドラジェの勇者召喚の台座にて、召喚を行ったと思われる一人の少年の姿があった。ちなみに、ドラジェの住民の身体特徴は、イタチの耳と尻尾という珍しいタイプだった。そして勇者召喚で呼ばれたのは……

「えっと、ここは？」

「確か、変なイタチが魔方陣を作って……」

複数人の人間だった。いや、何人か人間でないものも混じってお

り、狐の耳が生えた少女に悪魔の翼を持った少年と少女がいた。

### 第32話 おてんばリス姫、襲来    A t t a c k e d

T i n y    D e v i l

その後シンクと七海は、ビスコッティとガレットのそれぞれの勇者として戦場を駆け巡る。鍛えられたというだけあって、シンクの戦闘技術や身体能力は以前に呼ばれた時とは比べ物にならないほどに跳ね上がっていた。対して七海も、シンクの師匠というだけあって棒術の腕は彼に勝るとも劣らないもので、尚且つ初見で放った紋章砲がシンクと互角の威力と、そちらのセンスも高いという文句なしの実力を見せたのだった。

しかしその後、それぞれの陣営からの援護射撃によって装備破壊（服が剥がれてインナー姿を晒す）してしまい、装備交換のために一時退却をする羽目になった。ちなみに、七海曰くその時のインナーは下着じゃないらしく、恥ずかしくないとのことだった。

そして、午前の部が終了して昼食の時間になった。

「本当にびつくりしたんだからね。せめて事前に話してくれたら…」

「だから、ゴメンって」

「まあまあ、ベッキー」

「まったく…いきなり知らない世界に連れ込むなんて、帰る手段があるからいいものあまり感心しませんわよ」

　　どうやらレベツカの様子から、シンクはフロニヤルドの詳細を何も教えずに連れて来たらしい。その様子に、無理やり召喚されるリインバウムの召喚獣と同じ感覚を感じ取ったりリエルが不機嫌そうな顔でシンクに詰め寄る。

「リエルさんの言うことも尤もですけど、それじゃサプライズになりませんか」

「そうだって。私だってベッキーと同じ境遇だけど、こうして適応してるんだし」

「お二人がお気楽すぎるんですよ」

シンクが七海と二人でリビエルを宥めるも、リビエルの方は取り合っていない。

「リビエル、そう目くじらを立てるな。楽しむ目的で連れ込んだのだから、これくらい気楽なものでもちようどいいだろう」

「そう言うセイロンもお気楽すぎますわ」

そんな会話をしている一方、ライの方はというと。

「それにしても、本当にお主が作ったのか？ 城の料理長にも負けん腕前じゃぞ」

「閣下、それは流石に疑いすぎだろ。オレだって傷つくぜ」

「まあ、ご主人が剣を握るところしか見たことないなら仕方がないですよ。剣士も料理人も、揃って刃物を使う仕事ですが、本質がまるで違いますから」

こんな感じの会話だった。レオは前回、ライの料理を食したことが無かったので、その腕前に驚いている。

そんな感じで昼時の会話を楽しんでいたところ、七海がある話題をレベツカに振る。

「せっかくだし、ベツキーも参加したら？」

「そうだよ。ベツキーにも参加して欲しいかったんだよ」

「私はいいよ。遠慮しておく」

「ええ、そんなー!?!」

「はいはい。二人で同じ顔しない」

「二人とも。あんまり無理強いすると本当に怒らせちゃうぜ」

レベツカが困っているように見えたので、ライがとりあえず助け舟を出すことにする。

「ライさん、ありがとう。で、私としては戦より…」

そう言っつて、レベツカは傍に座っていたミルヒとミルリーフの方に向き合う。

「私は姫様ともっとお話ししていたいし。あと、ミルリーフちゃんも」

「あ、私もです！」

「ふたりとおはなし？ 別にいいよ」

「そういえば、あたしも姫様とはいろいろ話してみたいことがあった



のよね〜」

「リシエルも？ 実は私もなんだ」

レベツカとミルヒとミルリーフに、そのままリシエルとエニシアが近づいて、会話に参加する。年若い少女がこれだけ集まれば、色々とにぎやかになりそうな雰囲気だ。その様子に、レオやライも満足げな顔をしている。

すると、シンクが午後からの戦いに対してある疑問が浮かび、それについて尋ねていく。

「ところでライさん。そっちの配分はどうするんですか？」

「ああ。まずはオレとミルリーフ、セイロンとシンゲンがビスコツティに付こうと思っているんだ」

「で、あたしとルシアン、ポムニットとリビエルは途中結果を見て不利な方に……つて、あれ？」

言いかけたところでいきなり何か羽ばたくような音が聞こえて、話が打ち止めになった。

「な、なにアレ……？」

「でっかい鳥？」

空を見上げて音の正体を探ろうとしたところ、それは巨大な鳥が羽ばたいている音だと判明した。見たところセルクルとは別種のように、はじめから空を飛ぶ為の体のつくりをしているようだ。

「何者だ!？」

「まさか、話に聞いていた魔物か!？」

「待て、二人とも」

クラウレとアロエリの二人が武器を手にとって飛び立とうとするが、すぐさまレオが止めに入る。

「あれは魔物ではなくブランシールといってな、パステイヤージュという国で乗用に飼育している生物だ」

フロニヤルド経験のあるライやシンクも初めて聞く生物と国の名前が出てきて、一同は首を傾げる。すると、乗っていた人物がこちらに対して話しかけてきた。

「おーい！ ミルヒ姉にレオ姉え!!」

「クーベル！ それにキャラウエイも！」

乗っていたのはリスの耳と尻尾を生やした、見た目年齢がミルリーフと同じくらいの少女と、その付き人と思われる同種族の青年だった。ミルヒ達の名前を呼び、レオも向こうを知っている様子から友人か何かだと思われる。

「お二人とも、どうなされたんですかー！」

「この戦にウチも、パステイヤージュも参加するのじゃー!!」

ブランシールの背に跨ったまま飛行するクーベルは、この場にいた全員に目的を告げる。

「でもって、ウチはその子をいただくのじゃ!!」

そう言ってクーベルは、ある一人の人物を指さす。そこにいたのはセイロンやクラウレ、シンゲンといった屈強そうな面子ではなく、

「え……まさか?」

「そうじゃ！ お主じゃ、レベツカ！」

「ええええええええええええええええええええええ!!」

その後、クーベルのことは領主及び勇者&ライー一行以外には伏せられた状態で、戦の午後の部が開始されようとしていた。

ここからはライー一行だけでなく、バナードやブリオツシュといった解説に回っていたメンバーも戦に参加することになっていた。本気の戦闘をする気満々で、まさに盛り上がりどころというわけだ。

『『それでは、準備も整ったようですので、午後の部これより開始…』』  
『その戦、ちよつと待ったー!!』』

パーシーとフランボワーズが声を合わせて戦開始の合図を出そうとしたところ、幼い少女の声で待ったコールが掛かる。すると、スクリーンにクーベルの姿が映っていた。

『ウチじゃ。パステイヤージュ公国代表領主、クーベル・エツンエンバツハ e . パステイヤージュじゃ!』』

幼いながらにノリノリな様子のクーベル。その唐突な登場に、観客も参加者の大半も若干困惑気味だった。

「クー様ー！ー！」

ただし、リコツタはクーベルと仲がいいようで、手を振りながら笑顔で名前を呼んでいる。

『えつと、どうかしましたか？ クー様』

『どうしたもこうしたもないぞ、ミルヒ姉。それから、レオ姉もじゃー！』

『なんじゃ、儂もか？』

『確かに我がパステイヤージュは戦興行がそれほど盛んではない。じゃがそっちで勇者とか呼んで内輪だけで盛り上がるのはズルいのじゃー！』

『えつと、混ぜてもらおうのはうれしいですけど、ルールとかはどうしましよう？』

それを聞いた途端、クーベルは何か企んでそんな悪い顔をし出す。『ふふふ……それはこの子、異世界からの客人レベツカを預からせてもらう!!』

そう言っつてレベツカを指さすクーベル。すると同じタイミングでブランシール複数羽にぶら下げられた、巨大な台座のような乗り物が下りてきた。そしてクーベルは従者二人にレベツカを運ばせ、その乗り物と一緒に乗ってそのまま空へ飛び立ってしまった。

『ウチはこの子に一目ぼれ、これから口説いてみせるのじゃー！』

なあーはっはっはっは!!』

クーベルはレオやガウルを真似ているのか、悪者っぽい口調でそんなことを言う。しかし、容姿の幼さからかあまり似合っていないのだが、本人は気づいていない。

『返して欲しくば、我がパステイヤージュが誇る飛空術騎士団四十騎と、エツシエンバツハ高速陸士隊を打ち倒してみろ!! さらにそれだけではないぞ。なんと、ミルヒ姉の陣営にお客として呼ばれたリインバウムという世界の者達、その何人がウチに協力してくれることになつたのじゃー!!』

そう言つてクーベルが戦力と一緒に紹介したのは、先程不利になつたほうに付くと言つていたりシエル達だった。

『はい！ ライの幼馴染のリシエル・ブロンクスよ。今回あたし達は、不利な方に付かせてもらおうと思つただけで、急遽パステイヤージュに付かせてもらうことにしたわ』

『途中参加ということでハンデを背負わされていますから、当然の結果ですわね』

『ライさん、すみません。今回はお嬢様達を守るのがわたくしの役目ですので…』

『ポムニットさん。ライさんもわかっているから、落ち着いて』

パステイヤージュ側の協力者だったが、ポムニットの所為であまり緊張感が感じられなかったが、そこもご愛嬌だ。

『ガレット的には、レベッカが何処に滞在しようと構わんから、パステイヤージュもビスコッティ諸共撃破するのがの。しかし、ウチの勇者がなんと言うか…』

『私はレベッカさんを助けたいですけど、シンクはどうするつもりです？』

レオもミルヒも自国の勇者に問いかけるようなことを言う。クーベルからの挑戦状は、友人をかけてということなので受けるかどうかはシンク達次第、という形式のようだ。

しかし、勇者二人の返事は最初から決まっていた。

「受けて立つ!!」

その一言に、両勢力が湧きたつ。

『これは、大変なことになってまいりました!!』

『それでは、三国の代表方に開戦のコールをお願いします!!』

「今回の戦は、三国混戦のバトルロイヤル!!」

「撃破ポイント勝負の総当たり戦。勇者二人は、レベッカさんの奪還!」

「ファルネット湖水上戦・午後の部スペシャルマッチ、開戦!!」

順にクーベル、ミルヒ、レオが簡単なルールの説明と開戦の合図を告げ、一気に戦闘が始まった。

まず、湖面エリアの一角でビスコツティとガレットの両軍の1部隊が、戦闘を始めようと接触を開始する。それぞれの部隊は、ロランとバナードの両軍騎士団長が率いており、ビスコツティ側にはシンゲンが、ガレット側にはギアンとエニシアが同行している。

「まずはバナードの部隊を撃破をしようと思う。シンゲン殿、行けるか？」

「ええ。自分は特に問題ないですよ」

「ギアン殿、協力感謝いたします」

「なに。勝つためならこれぐらい当然ですよ」

「頑張りましょう、バナードさん」

それぞれの騎士団長が、同行者と会話を挟みながら部隊を率いて、接触を図る。

そしていざ戦闘を始めようとしたその時、何処からともなく輝力による攻撃が飛んできて、後に続いていた両部隊の兵達を次々と撃破していく。そして、攻撃の飛んできた方角を見ると、そこには先程クーベルが紹介していた飛空術騎士団の姿があった。

「なるほど、空から地上へ目掛けて遠距離攻撃というわけですか。厄介ですね」

「ああ。先にあちらを片付けた方がいいかもね」

シンゲンとギアンが飛空術騎士団への対応について話し合っていると、似たような会話をロランとバナードも行っていることが分かった。

そして、その直後に敵が再び輝力を照射してきた。

「ロラン！」

「わかった。皆、後ろに下がれ!!」

咄嗟にロランが一同の前に躍り出たかと思うと、紋章を展開して術を行使する。

「障壁陣!!」

技名を叫ぶと同時に、ロランの目の前に輝力で出来た壁のような物

が出現。それがそのまま攻撃を全て防いでしまう。

『流石は鉄壁のロランの代名詞、防御の紋章陣！ あれを全て防ぎきってしまいました!!』

パーシーによれば、ロランは防御特化型の戦士らしい。おかげで、こちらの主力は無傷で済んだ。

「レミエス、あいつらを撃ち落せ!!」

直後、ギアンがいつのまにかレミエスを召喚しており、攻撃の指示を送っていた。どうやら、先程の防御の際に召喚術を行使していたようだ。いきなり奇怪な姿の巨獣が現れたのだから、おそらく向こうの飛行術騎士団も驚いているであろう。

そして、レミエスは咆哮を上げると同時に飛行術騎士団を目掛けて黒い稲妻を次々と落としていく。確実に効いているようで、稲妻が命中した相手は次々と小さな球状の影になって落下していく。おそらく、ブランチール諸共けものだまになったのだろう。

「これ、自分いらなかったんじゃないですか？」

「まだ始まったばかりだから、気にやまなくても大丈夫だ」

そんな中、特に活躍しなかったシンゲンとバナードがポツリとそんなことを呟く。

「さて、邪魔者もいなくなったことだし……」

「バナード、今度こそ決着と行こうか」

そして、そのまま残った軍勢と共に一騎打ちに乗り出したのだ。た。

一方こちらは、平原エリア。こちらに行くのはビスコッティからはセイロン、エクレール、リコッタの三人。ガレットからはジェノワーズとミント（+オヤカタ）の四人と一匹がそれぞれ部隊を率いている。こっちの方は、始めから両軍で手を組んでパステイヤージュの撃破に乗り出している。

「まずは前線の術騎士達を切り開いて、兵達を導く。そのために、我々が突撃を仕掛ける！」

「ああ。任せてもらおうか」

エクレールと並んで走るセイロンが、彼女から作戦の説明を聞いている。ちなみに、周りの面々はセルクルに乗っているが、セイロンは一人だけ自分の足で走っていた。

『龍人族のセイロン、セルクルと並んで走っています！ ものすごい脚力に、私も驚きを隠せません!!』

パーシーも驚愕に満ちた声音で実況をしている。まあ、シンクもこれぐらい速く走っていたが、それは勇者超特急という輝力技を使っていたためである。そのため、純粋な脚力のみで走っているセイロンに驚くのは無理なかった。

しかしその直後、向こうに見えていたパステイヤージュ陸士隊の前線メンバーが、紋章も展開せずに輝力を照射してきた。それを見たエクレールは、ジョーヌと二人で前に躍り出て楯で攻撃を防ぐ。

「あやつら、なぜ紋章術を紋章なしで使ったのだ？」

「いや。あれは晶術といって全くの別物だ」

セイロンの疑問にエクレールが応える。彼女の言う通り、パステイヤージュが使うのは紋章術ではなく晶術という別物で、紋章が展開されずにそのまま攻撃が行われる。そのため、予測不能な攻撃が可能となっているのだ。

非常に厄介な攻撃を仕掛けてくる中、セイロンが一つの提案をしてきた。

「ここは我に任せてもらおうか。切り込みをかけるから、お前達はそれに続いてくれ」

「待て！ 何でお前が私達に命令を…」

「わかりました。なら、私やリコツタちゃんて援護をします。セイロさんも気を付けてください」

エクレールが命令してきたセイロンに反発しようとしたところ、ミントの言葉に遮られてしまう。その一方で、セイロンは走力を上げて陸士隊に向かって突っ込んでいく。

直後、陸士隊は持っていた銃から輝力を二人に向けて一斉照射していく。晶術は先程説明したような特性から軌道が読みにくいという

特徴もあるが、セイロンはお構いなしといった感じでそれを次々と避けていく。そして、ある程度接近したところでジャンプする。

「ウォアアアアアアアアアアア!!!」

そして叫びながら陸士隊の一人に蹴りかかる。相手側が楯でその蹴りを防いできたが、セイロンはその状態で足に力を入れて、一気に飛び退く。

「私の攻撃は、これだけではないぞ!!」

そして、そのまま袖から苦無を複数個取り出して投げつける。投げつけられたそれらは、陸士隊の乗るセルクルたちの足に命中して、そのままバランスを崩した。

「セイロンさん、離れて!!」

直後にミントの叫び声が聞こえたので、その通りにセイロンは後ろに飛びのいた。直後、上空にいきなりペンタ君の大群が召喚され、さらにリコッタの放ったものと思われる、無数の輝力弾が陸士隊目掛けて飛んできた。

ペンタ君が陸士隊と接触したと同時に輝力弾が命中、そのまま一気に誘爆して前線部隊を蹴散らしていく。

「ミント様、やったであります!!」

「リコッタちゃんの協力のおかげだよ」

そのままミントは、リコッタに求められるがままにハイタッチをする。何気にノリノリだった。

このような具合で、VSパステイヤージユは滑り出しは問題なしのビスコツティ、ガレット両国であった。



第33話 爆誕、飛翔系勇者！ Birth Mag  
ical Braver

各地で激戦が繰り広げられている中、ライとミルリーフは、シンクと七海と行動を共にしていた。湖に複数本の丸太が足場として植え込まれており進み辛そうだったが、身体能力抜群のライに、アスレチック経験者のシンクと七海は特に問題無さそうに移動している。ちなみに、ミルリーフは竜形態でないとこれを渡れなかったりする。

「シンクにライさん、今回は一時休戦というー！」

「オーケー！ ベツキーと一緒に助けに行こう!!」

「なあ、それってオレとも戦う気だったのか？」

「ピギィ〜」

何やら不穏な言葉が七海の口から洩れたが、ライが尋ねてもそれに関する返事は返ってこなかった。その一方で、竜の姿のミルリーフが気にしたい方がいいと言わんばかりの様子で鳴いている。

「失礼します。勇者様方」

その時、上空から一人の青年の声が聞こえる。その時に空から降りてきたのは、ブランシールに跨った、クーベルの付き人キャラウエイだった。

「お二人のご友人レベツカ様は、我が主クーベル様と大事なお話し中です。よって、この場はお通しできません!!」

キャラウエイはそのまま剣を抜き、こちらに向かって突撃してくる。しかし、牽制目的だったようで、こちらに大したダメージは無かった。

『空を自在に駆ける大型鳥ブランシールを駆る、パステイヤージュ独自の空騎士!』

『空騎士相手に、勇者二人と委託騎士ライはどう戦うのか!!』

パーシーとフランボワーズがノリノリで解説をする。その直後、キャラウエイは剣に輝力を纏わせていく。

「晶術剣・スピネルファイヤー!!」

技名を叫ぶと同時に、剣から輝力を複数の球状に変化させて射出していく。その攻撃は、紋章術で同じ技を使うよりも弾速が圧倒的に速かった。

「うえ!? 速!!」

「みんな、回避!!」

とつきの判断で、ライ達は一斉に足場から離れる。

「ふう。危なかった〜」

そのまま移動を続けながら、七海は漏らす。しかし、直後に彼女の前にキャラウェイが回り込んでくる。

「隙あります!!」

空中で身動きが取れない状況の中、七海に危機が迫る。絶体絶命の時、

ーヒュンツー

「な!」

何処からともなく矢が飛んできて、そのままキャラウェイへと向かって行く。しかし、ブランシールを咄嗟に旋回してそれを回避するのだった。

「キャラウェイといったか。少し待ってもらおう」

「ライと勇者二人の前に、オレ達の相手をしてもらおうか」

矢の飛んできた方向から二人分の声が聞こえ、キャラウェイだけでなくライ達もその方を向く。そして、そこにいた声の主を見てシンクと七海は驚き、ライも「よし!」といった感じの顔をしている。

『おーっと! 空騎士対勇者に割って入ってきたのは、ガレット側の協力者であるクラウレ&アロエリだー!』

『どうやら二人揃って空騎士キャラウェイに用があるみたいですね。一体、なんなんでしょうか?』

パシーとフランボーズが声高々にクラウレたちの紹介をする。その一方、二人がキャラウェイに武器を向けながら話しかけてきた。「空を自在に掛けるといったが、お前はその鳥に乗っているにすぎないのだろうか?」なのでその言葉、生まれながらに翼を持つ、オレ達セ

ルファンへの挑発とみた!!」

「空での戦いを語る前に、我ら兄妹を倒して貰わねば困るな」

『おーっと! 助っ人二人から空騎士への挑戦という、まさかの事態が発生!! これは見事な空中戦が期待されます!!』

セルファン兄妹の挑戦に、パーシイが実況を加えて盛り上げる。突然の事態にも対応するあたり、さすがプロといったところか。

「そういうことで、この男は我々に任せてもらおうか。空での戦いという物を、この男に教えてやらねばな」

「クラウレ、すまねえ」

「礼はいい。それよりも勇者二人、自分たちの友ならをさっさと助けてこい」

「はい、ありがとうございます!」

そのままシンクと七海も二人に礼を言い、ライ達と共にその場を後にする。

「仕方ありません……だったら、私も全力でお二人のお相手をさせてもらいます!」

「望むところだ! 掛かってこい!!」

ライ達が走り去るのを確認したキラウエイは、そのままクラウレたちの挑戦を受けて、果敢に向かって行った。

「さて、このままレベルカのところまで急いだほうがよさそうだな……シンク!」

「わかってます。七海、輝力武装のやり方ってわかる!？」

「輝力武装……ごめん、わかんない!!」

「じゃあ、見て覚えて!!」

シンクはそのまま輝力武装の実践を行う。まずは紋章を発動し、そのまま輝力を練って発動形態をイメージ。これでイメージに沿ったものが輝力で形成されたら輝力武装の完成だ。

そして、シンクが輝力を纏った状態で飛びあがり、ライもミルリーフを抱いた状態で両足を輝力で強化して飛びあがる。そして、シンクを覆っていた輝力がはじけ飛ぶと、炎を噴射して飛ぶサーフボードの

ような乗り物に乗った彼の姿が現れ、ライものその上に乗っかる。

『出たー!! 勇者シンの輝力武装、滑空ボード・トルネイダー!! 前回召喚された時、その斬新なデザインと機能で瞬く間に人気を集めた代物だー!!』

『ライさんは前回と同じくトルネイダーに便乗しております! なぜ輝力武装を使わないのか以前聞いたんですが、直接戦闘のために輝力を温存しているからだそうです!』「オツケー、大体わかった」

実況の終了後、七海も今を見て感じを掴んだらしく、早速実践し始める。七海の周囲を輝力に反応したのか、湖の水がひとりでに巻き上がって彼女の体を包んでいく。

『あーっとー! これはまさかー!?!』

フランも興奮した様子で実況し、直後に七海が飛び出してきた。輝力武装が完成したらしく、彼女の足にはインラインスケートのような物が装着されている。そして、その影響か七海は水の上を沈むことなく高速で滑走していく。

「ガレットは海と川に恵まれた水の都なので、波乗り勇者で行っちゃいまーす!!」

そのまま滑走していく七海は、輝力で水を隆起させ、それをジャンプ台にして一気に飛びあがっていく。

「それじゃ、このままベツキーを助けに行こう!!」

「いつあの子がやる気になるかわかんねえ。だから急ぐぞ!!」

そのままシンクとライを乗せたトルネイダーは高速で移動し、七海もそれを追う形で移動を始めた。

その頃、中央バトルフィールドにて

「本来なら、お前さんと決着をつけたいところじゃったんだがのう」

「たまには共闘も悪くないでござるよ」

レオとブリオツシュがセルクルでかけていく中、悠長に会話をしており、後ろの方でもビオレとユキカゼが同じような感じだった。天下無双と言わしめるレオに、大陸最強であるブリオツシュがタッグを組んでいるのだからこそ、兵達にも余裕があるという訳だろう。

すると、目の前にパステイヤージュの兵達が立ちふさがってきた。

「ほう、お前は確か……」

そんな中、レオとブリオツシユは兵達の先頭に立つメンバー達を見る。

「さきほどはどうも、レオ姫」

「レオ様とブリオツシユさんでしたっけ。僕はリシエルの弟、ルシアンといえます」

「どうも、レオンミシエリ陛下にブリオツシユ様。わたくし、ルシアンお坊ちゃまとリシエルお嬢様の世話役、メイドのポムニットと申します」

リシエル以外の協力者が全員この場に揃っていた。顔合わせ程度しかしていなかったルシアンとポムニットは、レオとブリオツシユに対して改めて自己紹介する。

「そのルシアンとやらはともかく、リビエルと、それからポムニットとか言ったか。儂は姫でも陛下でもなく閣下じゃ。そこところは間違えなくてもらおうか」

「まあ、そう言わないでござるよ」

若干機嫌が悪くなった雰囲気のリオを、ブリオツシユがなだめる。

そんな中で、ポムニットが一回の先頭に立って口を開く。

「しばらく前にライさんがお世話になった方々ですが、お嬢様の為にもここはお通しできません。よってわたくし達がお相手させていただきます」

そう言つてポムニットは背負っていた二つの武器を手取る。右手には大斧、左手には大剣をそれぞれ握っていた。

「ほう……ダルキアン、こいつ儂とお主の得物をそれぞれ持つておるぞ。これは相手をしてやらねば失礼という物じやのう」

「そうでござるね。ではポムニット殿、その挑戦お受けするでござるよ」

ポムニットの様子を見てレオもブリオツシユもやる気満々のようで、二人とも得物を手に取って戦闘態勢に入る。レオに至っては宝剣

であるグランヴェールまで使用する始末だった。

「では、拙者達は……」

「残る二人のお相手をすればいいわけですね」

そう言っつて、ユキカゼとビオレは残っていたルシアン&リビエルに視線を向けた。そして、二人揃って構えを取って臨戦態勢に入る。

「ユキカゼ、そう言うことだから遠慮は無縁ですことよ」

「ビオレさん、よろしくお願いします」

そう言っつてリビエルは杖を、ルシアンは剣を構えて、それぞれユキカゼとビオレに対峙する。

「では、行きます!!」

第一声をポムニットが発し、それを合図に対決が始まった。

一方その頃、クーベルとレベツカのいる空中テラス。リシエルもそこにいた。

「案の定、わが軍の大ピンチじゃ」

「ねえ。ポムニット達も強いけどあの二人、特にダルキアン卿は別格だろうし」

リシエルとクーベルが戦況を見て少々不安気になっていたが、そこでクーベルはレベツカの方に視線を移す。

「やはり、ここはレベツカに勇者として頑張ってもらわねば……」

「けど、私は本当にシンク達みたいに戦えなくて……」

「うんにゃ。何も、連中と同じようには言うたらん」

レベツカが反論しようとした瞬間、それを遮ってクーベルは口を開く。そして、今度はリシエルが口を開く。

「そうよ。この世界には紋章術なんてものがあるし、さつき聞いたんだけどパステイヤージュの独自技術があれば、運動音痴でもうまくやれるらしいわよ。実際、あたし達のいたリインバウムでも召喚術は誰でも使えるんだけど、直接戦ったりするのが苦手な方が召喚術が得意だったりするわけだし」

「うむ。リシエルのいう召喚術とは別ものじゃが、ウチ等のパステイ

ヤージユは所謂術師タイプの戦い方でちょうどそれに該当する。で、宝剣もそれに特化した物なんじゃ」

そう言つてクーベルは懐から二つの指輪を取り出す。どうやら、これが待機状態の宝剣のようだ。

「これがその宝剣、”天槍クルマルス”と”神剣メルクリウス”じゃ」

宝剣の実物を目にしたレベツカは目をパチクリさせ、視線を勇者用の宝剣である神剣の方に寄せた。そして、再びクーベルが口を開く。

「実を言つとな、ウチも代表領主の見習い期間中での。ミルヒ姉やレオ姉のような愛され領主に憧れておるんじゃ。そしてレベツカ、お主もシンク達に憧れておるとウチの直感に響いたのじゃ。そういう訳で、お互い頼りないかもしれんがその分同じ目線で頑張れると思つた。それがお主を勇者として見初めた理由じゃ」

「そうなんですか……けど、本当に私でいいんですか？」

クーベルから自分を選んだ理由についてハッキリと説明されるが、今だに実感がわかずにそう尋ねてしまう。

そして、クーベルはレベツカに詰め寄つて陽だまりのような明るい笑顔で告げた。

「じゃから、ウチはそう言うお前に惚れたんじゃ！ だから、自信を持って!!」

「そういう訳だから、さっさと認めちゃえば？ あたしだってサポートしたげるから、頑張んなさい」

リシエルにまで言われ、レベツカは決心したような表情となり、メルクリウスを手を取った。

『おや？ 空中テラスで……』

『何やら動きが……』

フランボワーズとパーシィが交互に実況をする。どうやらクーベルたちの動きがこちら側でも察知できたようだ。

その直後、クーベルが動き出す。

「諸君、待たせたのう！ たった今、秘密兵器が誕生したのじゃ!!」

クーベルのその発表に、全員が戦闘行為を中断する。皆が何事かと思う中、詳細に気付いたミルヒは笑顔を浮かべている。

そして、レベツカがカメラに映る位置まで出てきて、メルクリウスをはめた右手を掲げる。

「装着!!」

そして掛け声をあげた。のだが……

「あれ?」

全く反応なし。

「きやあ!?!」

かと思われた直後、レベツカの体がメルクリウスから発せられた光で覆われた。そして少し時間が立って光が晴れると、そこにはいわゆる魔法少女のようなフリフリ衣装になったレベツカがおり、魔女の箒のような形状の乗り物に跨っていた。

何故かはるか上空で

「きやああああああああああああああああああああ!?!」

それに気づいたその時、レベツカは重力に従って落下してしまう。しかし、クーベルがクルマルスをはめた手を目の前につき出すと同時に輝力が蝶のようになって無数に舞う。どうやらこれをクツション代わりにするようだ。

そしてレベツカも咄嗟に箒に取り付けられていたトリガーのような物を握ると、後方から輝力をジェット噴射して落下速度を緩める。そしてどうにかクツション部分に落ちて、無事着地に成功した。

「で、出来た……」

レベツカは一連の出来事に茫然していると、クーベルにそのまま前につき出される。

「にゃーっはっはっはっはっは、見さらせい!! これがパステイヤージュの新兵器、勇者レベツカじゃ!!」



高笑いしながらクーベルがレベツカの自慢をする。すると、その横でリシエルがサモナイト石を取り出し、そのまま召喚術を行使する。

そして、召喚された物にそのまま飛び乗った。

「ついでに、これが私の乗り物。その名もグラビイティボード！ これで私も飛ぶわよ！」

そのままリシエルもレベツカの隣に並ぶ。そして、レベツカがクーベルに促されて口を開いた。

「レベツカ、リシエルと共に行くのじゃ」

「はい。パステイヤージュの勇者レベツカ、頑張ります!!」

第34話 乱戦！ VS パステイヤー・ジュー the  
ramble battle

『なんと3人目！ パステイヤー・ジューの勇者レベッカ誕生!!』

「おいおい、遅かったよ…」

「しかも、リシエルさんもなんか出してきたし」

レベッカの勇者承認を目の当たりにし、それを知らせる実況が流れた後で茫然とスクリーンを眺めているライ達。

「行け、レベッカ！ パステイヤー・ジューの勇者の力、見せびらかしてやるのじゃ!!」

「それじゃ、あたしも一緒に暴れさせてもらおうよ!!」

「うん。クー様、リシエルさん」

クーベルとリシエルに同時に言われたレベッカは、早速メルクリウスの力を試してみるとする。レベッカは本体に取り付けられているトリガーのような物を握り、輝力を箒状のメルクリウスの後方部分に充填しているような様子でいる。

そして、それから手を離すと同時に輝力を噴射して高速飛行を始めた。

「へえ、結構速いじゃない。こりゃ、あたしも負けてられないわね」

その様子を目の当たりにしたりリシエルは、先程召喚したグラビイティボードの上にサーフィンのようなポーズで立つ。そして、一緒に召喚された小型のリモコンらしき物を腰につけ、そのスイッチを押した。

「それじゃ改めて……」

機界の新星リシエル・ブロンクス、派手に行かせてもらおう!!」

叫ぶと同時にリシエルもグラビイティボードを高速で飛行させ、レベッカの後を追う。空を行く二人は、時に天高く、時に地上すれすれに飛んで戦に参加している者達の度肝を抜いて行った。その様子に、フランボワーズも思わず興奮気味に実況をする。



「レベツカにリシエル、見事な飛翔じゃ！」

「あたしも人のこと言えないけど、初めてにしてはやるじゃない！」

「うん。操作がなんかゲームっぽくてわかりやすいです！」

上空ではクーベル達3人が飛びながら会話を交わしている。

「それじゃ、今度は攻撃に回ってみるのじゃ。さつき教えた通りにやればうまくいくぞ」

「じゃあ、別れて別々に攻めるけど、それでいい？」

「はい。問題ないです！」

何やらレベツカもやる気満々なようなので、戦闘に関してはもう完全に問題なしとなっているようだった。

そして、レベツカは加速して敵兵の群がる一帯へと近づいていき、腰のホルダーからカードを取り出す。

「バレットカード、セット……」

レベツカが輝力を込めると、カードに絵柄が浮かび上がる。絵柄は星の周りに炎が描かれているという物だった。

「発射！」

そしてレベツカはそのカードを敵の密集地に目掛けて投げつける。それに気づいた兵達も危険を感じて逃げ出すが、逃げ切る前にそれが被弾してしまう。

ドオン、という爆発音を出してそのまま何人もの兵士たちを撃破してしまう。

レベツカは旋回して再度新しいカードを取り出すと、今度は稲妻のような絵が浮かび上がる。投げると今度はカードから雷撃が放たれて広範囲にわたって敵を撃破していく。

「うっひゃあ……すっごい攻撃ね。ロレイラルの機械兵器も真っ青だわ」

「あれがパステイヤージュの晶術弾じゃよ、リシエル。レベツカは術師系勇者じゃからな」

「なるほど。こりゃ、あたしもなおさら負けてられないわ！」

レベツカの様子を見てリシエルもやる気が出たらしく、彼女もクーベルから離れて別の一団に向けて攻撃を開始し始めた。

「こういう場合は、これを召喚したら……」

リシエルはポーチからサモナイト石を取り出して、早速召喚術を使用する。現れたのは、頭と両手そして尻尾に電気プラグを備えた水色のロボットだった。

この召喚獣は旧型で個体数も多くないが、強力な電撃を使える召喚獣で、名をエレキメデスという。

「で、さつきクー様から教わった晶術でエレキメデスにチャージして……」

リシエルがエレキメデスに輝力を流し込んだ途端、それは起こった。

「グ、グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

エレキメデスがうなり声のような物を上げ、体中から凄まじい量の電気を放っている。心なしか気持ちよさそうに見えるのだが、敵側からしたら嫌な予感しかしないであろう。

「行くわよー！ ボルツテンペスト!!!」

ドツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

エレキメデスが尻尾と両腕のプラグを地上に向けて、そこから一斉に凄まじい雷撃を放出する。それは地上にいる敵兵を一人残らず飲み込み、あっという間に全滅させてしまった。

『なんと新星リシエル、呼び出した不思議生物を輝力で強化したかと思ったら、あっという間にビスコッティ、ガレットの両軍から兵力をゴっそり削り取ってしまった!! これが彼女の言うロレイラルの機械兵器の力、凄まじいです!!』

「いや、あたしもこの威力は想定外なんだけど……」

フランボワーズの実況を聞いて、攻撃を放ったリシエル本人も茫然とした様子で呟く。召喚術は下手に輝力と組み合わせない方がいいかもしれない、彼女は思わずそう思ってしまった。

しかし直後、ブランシール部隊が次々と撃墜されていく様子が見えた。見てみると、地上でリコッタが率いてきた砲撃部隊が対空射撃を行っている様子が見えた。

「あ、コレ拙いわね」

「リシエル、味方がピンチじゃ!」

直後、クーベルがこちらに近づいて声をかけてくる。

「これからウチとレベッカでリコの部隊を狙うが、リシエルも一緒に行くか?」

「当然よ。ここで活躍しないで何時するっていうのよ」

「よし、それならば行くぞ」

リコッタ率いる対空部隊にて

リコッタが砲撃の後で新しい弾薬を入れていると、上空から何かが近づいてくる様子が見えた。

目を凝らしてよく見ると、メルクリウスにクーベルと二人乗りしたレベッカの姿があった。しかし、先程クーベルと話していたはずのリシエルの姿が何処にもなかった。

「みんな、迎撃であります!!」

『はい!!』

「リコッタちゃん、私も援護するよ」

リコッタは主力の出現に驚き、そのまま一斉射撃の指示を出し、ガレット側から協力者として同行していたミントも攻撃に参加する。しかし、レベッカは複雑な起動で飛行し、その全てを避けてしまう  
「うおお、すごいぞレベッカ!!」

「3Dシミュレーティングの要領でなんとかなりました!」

クーベルはレベッカの飛行技術に感心するが、彼女によればこれもゲームの感覚によるモノらしい。

「その油断、命取りにならないといいね」

直後、リコッタの隣にいたミントが不敵な笑みを浮かべながら呟く。その瞬間、二人の真上に巨大な影が出現する。

「え?」

「うそ……」

それは、ミントがいつの間にか召喚していたワイヴァーンだった。しかも、ブレスの発射準備も完了している。

「これでチェックだね。フレアキャノン、発射！」

ミントの宣言と同時に、ワイヴァーンは火炎弾とブレスの連射をレベッカたちに向けて放つ。

「だめ、避けきれない!!」

レベッカが諦めかけたその時

ドウウウンツ——

「え?」

『なんと、勇者レベッカと公女クーベルに炎が迫ろうとした瞬間、鎧のような物が出現してそれを防いでもった!!』

パーシイが実況するように、現れた鎧がワイヴァーンの攻撃を防いでしまっていた。しかし、これの正体をクーベルだけは気づいていた。

「むふふ……リシエル、ナイス演出じゃった!!」

「まったく、クー様も憎いことするわね。そりゃ、絶体絶命のピンチから助っ人が来るのはアタシもカッコいいと思うけど」

どうやら、リシエルがいなかったのはクーベルがこの演出の為に指示を出していたかららしい。ちなみに、リシエルが召喚したのはアーチャーチャンプという防御用の召喚獣だ。

「それじゃあ、リコを撃破させてもらおうぞ！」

そのままレベッカがメルクリウスを加速させて対空部隊へと接近し、クーベルもクルマルスを構えて攻撃準備を完了していた。

「喰らえ、ガーネット・スパーク!!」

クーベルが技名を叫ぶと、クルマルスの銃口から高出力のビームが放たれ、対空部隊の中央に着弾すると同時に大爆発が生じた。爆発が晴れると、リコッタ以外のビスコッテイ兵がけものだまと化している。

「や、やられたであります……」

「うん。ちよつと油断しちゃったね」

爆炎でせき込みながらミントとリコッタは言葉を交わす。しかし  
直後……

「とどめじゃあー！」

「へっ?」

クーベルからの追撃が二人を目掛けて飛んで、そのまま命中した。

ビリリッ——

「え、ええええええええええええええええ!!」

『ぶふうおおっ!!』

『ええ!? フランさん、大丈夫ですか!』

ミントとリコツタの着ていた服が破れて、まとめて生まれたままの姿と化してしまう。その光景を目の当たりにした際、実況席のフランボワーズが鼻血を吹きだしてぶっ倒れ、パーシイもつい驚いてしまう。

「にやーっはっはっは!! リコ、無様じゃのうー！」

「ミントお姉ちゃん、ごめんね! これ、一応勝負だし!!」

レベツカとリシエルの表情は引きつっていたが、クーベルは嬉しそうな様子で勝利を宣言していた。

---

一方その頃、中央バトルフィールドにて

「はああー！」

「でやああー！」

「くっ!」

レオとブリオツシュの攻撃を両手の武器で防ぐポムニット。見たところ防戦一方のようだが、流石に彼女でも2対1で、しかもこの世界で最強クラスの二人を相手にするのは分が悪いようだった。

しかし、先程のクーベルによる兵達への呼びかけを目の当たりにして、レオの動きが止まった。

「ダルキアン、俺はクーベルをどうにかするからお主に彼女の相手をしてもらいたい。いいか？」



「構わぬでござる。領主同士の対決の方が盛り上がる筈ゆえ、ここは拙者に任せるでござるよ」

そのままレオは愛騎ドーマに駆け寄り、飛び乗ってそのまま先に進んでしまった。しかし、ポムニットはそれを止めには入ってこない。

「妨害してくると思ったが、もうバテたでござるか?」

「いえ、わたくしもつい礼の方を優先して無茶をしてしまったと反省していたところです」

そう言うと同時に、ポムニットはなんと持っていた斧と大剣をブリオツシユ目掛けてブン投げてきた。

「!?」

予想だにしない事態に驚いたブリオツシユは飛び退いてそれを躲す、しかし、それがバックにいた一般兵達に命中し、一気に数十人がけものだまへと変じた。

「ついわたくしも使える武器がお二人の得物と同じだったもので、ガラになく盛り上がる物と思ってそれを使って相手をしてしまいました」

そう言うってポムニットは、エプロンのポケット部分から何かを取り出し、それを両手に嵌めていく。

「それは、籠手でござるか?」

「はい。わたくし、殴ったり蹴ったりする方が得意なもので」

穏やかな笑みを浮かべるポムニットだったが、纏っているオーラは戦い慣れた戦士のそれだった。やはり、慣れた戦闘スタイルはその人物の戦闘能力をフルに引き出せるようだ。

「では、行かせてもらいます!」

「な?」

直後、ポムニットは凄まじい速さでブリオツシユの懐に飛び込み、殴り掛かる。しかし、百年以上を生きた歴戦の勇士であるブリオツシユは、多少驚きつつも後ろに飛びのいて容易くそれをよける。

ポムニットはすかさず追撃しようとサマーソルトキックを放つが、仰け反ってそれも楽に避けてしまった。

「流石に、一筋縄ではいきませんか」

「いやいや。ポムニット殿もなかなかの腕前にござるよ」

「最強の騎士様に褒めていただいて、光栄です」

互いが互いの実力に驚きつつ、中々の名勝負が繰り広げられようとする予感があった。

こちらは、セルファン兄妹VSキャラウェイの水上バトルフィールド

「喰らえ！」

「くっ!？」

クラウレがキャラウェイの背後に回って槍を振るうが、ブランシールを旋回させてその攻撃を避ける。

しかし、そこにアロエリが先回りしており、そのまま矢を射ってきた。

「そこだ!!」

「なんの！」

しかし、晶術による球状のエネルギーを剣先から撃ち出してその矢を撃ち落してしまった。

「ぜえ…ぜえ……」

「貴様、思ったよりやるな」

「伊達に騎士は名乗っていませんからね」

キャラウェイは二対一でありながら、クラウレ達と互角の勝負をしていたようだった。確かにクラウレの言う通り、飛ぶことに秀でていたセルファンの二人に空中戦での分があったが、キャラウェイはパステイヤージュの晶術という、この世界ならではの戦闘法を駆使し、加えてクラウレがまだリハビリ中で全快じゃなかったため二人を翻弄することに成功したのだった。

しかし、クラウレもアロエリも実戦経験は豊富であるので段々と晶術に対応することに成功し、どうにかここまで凌いできたというわけだ。

「……兄者、あの二人とリシエルが、想像以上に暴れているみたいですね」

「そのようだな……」

中継映像でリシエル達の活躍を見て、クラウレは少し思案する。そして、あることをアロエリに伝えた。

「アロエリ、この場は預かろう。お前はあの小娘をどうにかしてくれ」

「兄者……わかりました」

そのままアロエリはクラウレの指示に従い、ライ達のいる方へ飛び去っていく。

「では、次の一撃で決着をつけさせてもらおうか」

「ですね。お互い、体力の限界みたいですし」

ここでクラウレは、ガレット側から与えられた紋章を初めて使用する。セルフアンの戦士としての意地なのか、いままでアロエリ共々紋章術を全く使っていなかったのだ。

同じくキャラウェイも晶術の使用準備が完了していた。

「行くぞ!!」

「はいー!」

そして、クラウレとキャラウェイは同時に飛び立ち、そのまま激突しようとしていた。

「晶術剣・ソニツクセイバー!」

しかしキャラウェイはクラウレといくらか距離がある状態で剣を振るうと、同時に剣先から超高速で晶術のエネルギーが打ち出された。ソニツクと名の通り、音速と見紛うスピードだった。

しかし、クラウレは間一髪でそれを察知し、急に高度を上げてその回避に成功した。

「な!?!」

「喰らえー! 天破槍!!」

クラウレは、そのままはるか上空から輝力を纏った状態で槍を投げつけた。クラウレは元からの持ち技を紋章術で強化して使用したのだ。

そして、投げられた槍はそのままキャラウェイを乗っていたブラン

シール諸共貫き、そのまま爆発した。

「あくれ〜……」

爆発が晴れると、パンツ一丁になったキャラウエイとけものだまと化したブランシールが、目を回しながら湖に落ちていった。

「私の勝ち……と言いたいところだったが、引き分けらしい」

クラウレが呟いた直後、先程撃ち出されたキャラウエイの攻撃がいつの間にか迫ってきていた。どうやら追尾式だったらしく、加えてクラウレは体力消費から避ける余裕がなかったため、そのまま直撃してしまった。

そのままクラウレもパンツ一丁に剥がれて湖へと落ちていった。

『おっと！　ここで空騎士キャラウエイとセルファンのクラウレ、同時にダウン！　パステイヤージュとガレットの双方に撃破ボーナスが入りました！』

そして、その実況を聞いていたライ達はどうと。

「アロエリが来てくれるみたいだけど、クラウレがやられたみたいだな」

「ですね……あの、ライさん」

「私たち、ベツキーと先に勝負させてもらってもいいですか？」

シンクと七海はライにそんな頼みをしてきた。まあ、せっかく幼馴染が乗り気になってくれたのだから、ここで勝負したいというのも当然だろう。

「まあ、別に良いぜ。オレはリシエルの方を抑えておくから、頑張れよ」

「はい！　ありがとうございます!!」

勇者対決と幼馴染対決が、もうすぐ迫っていた。

第35話 決着、勇者歓迎戦 war of fine  
ale

「ライー！」

「待つてたぜ、アロエリ！」

リシエルとレベツカがクーベルと別れて、ビスコッティの本陣への攻撃に乗り出した直後のこと。クラウレと別れたアロエリがようやく到着した。

「ライさん、アロエリさんと何するつもりなんですか？」

「オレは輝力武装使わねえから、別の方法で飛ぶつもりだ。あと、ミルリーフデカくしたら反則っぽいしさ」

そう言ったライは、左脇に子竜状態のミルリーフを抱えながら右手を挙げる。そしてアロエリが近づいてきたかと思うと

「はー！」

「しっかり掴まっぺいろー！」

ライが掛け声をあげてその場から跳び上がると、そのままアロエリはライの右手を掴んで一気に飛翔する。そして、いきなり紋章を発動したかと思うと、それで胸に障壁を張り出す。

「よし、あとはこのまま…」

そしてミルリーフがライの脇から抜け出してアロエリの背中に回り、アロエリはライを羽交い締めにしてそのまま上昇した。

『おおー！ ライ選手はセルフアンのアロエリと共に空を飛ぶようですよ！！』

『確かに、これなら輝力を温存しつつ空を飛べるぞ！』

その様子をパーシィとようやく復活したフランボワーズが実況する。ちなみに、まだ鼻血が止まらないのか鼻にティッシュを詰めていた。

「それじゃ、僕達も行くか！」

「オツケー、シンク！！」

そして、シンク達もその様子を見た後で輝力武装を発動、こちらへ

と向かってくるレベッカとリシエルに突撃していった。

『さーて、ついに勇者シンクと勇者七海、そして委託騎士ライが勇者レベッカとリシエルに戦いを挑むようだ!!』

『三人の勇者、そしてライとリシエルはそれぞれ幼馴染同士との情報ですが、戦中はそのなお構いなしのようです!』

そして再び二人の実況が場を盛り上げる。そしてついに両者が対面した。

「来たわね。行くわよ、レベッカ!」

「はい、リシエルさん!」

そして、レベッカとリシエルも飛行速度を上げて、近づいてくるライ達を迎え撃たんとする。

まず最初に動いたのは、シンクと七海であった。

「豪熱!」

「海王!」

「双神掌!!」

シンクと七海は互いの紋章砲を同時に放ち、真正面から向ってきたレベッカを撃墜しに行く。

しかし……

「え!」

「避けた!」

レベッカは二人の合体攻撃を真正面から避けてしまったのだ。

「炸裂弾!」

しかも、そのまま晶術弾をすれ違い際に放ち、そのままシンク達を一気に爆破してしまった。

それによつて、シンクも七海も装備破壊され、湖へと落下していった。レベッカもシンク達と同じ場で二人に勝てたのがよっぽど嬉しかったのか、声を上げて喜んでいいる。

「シンク達がやられたか。アロエリ、リシエルには悪いが早いところ倒しちまってあの子を抑えに行くぞ!」

「言わずもがー！」

「ピギイ！」

アロエリだけでなく、背中に乗るミルリーフもやる気満々らしい。そして、剣を抜いて紋章も発動し、リシエルを迎え撃とうとする。

「ライ、やる気満々のところ悪いけど、一気に勝たせてもらおうわ！」

しかし、リシエルは腰に差していた二丁拳銃を抜いたかと思うと、そこから晶術のレーザーを撃って来た。

「なに!?!」

アロエリもライも一瞬驚くが、咄嗟に方向転換してその攻撃を避ける。

『おおー。リシエル選手も晶術を使って、ライ選手達を迎撃しに向かっています!』

『パステイヤージュに付いた以上、技の使い方も伝授していて当然のこと。これはライ選手たちの読みが甘かったようだ!』

「まあ、そういうことよ。流石に、こんな場でさつきみたいに召喚獣を使っても面白くないと思ってね」

実況に同意するかのようリシエルは告げ、そのまま攻撃を続ける。しかも規模が激しいため、ライ達は防戦一方の状態だった。

このままではレベルッカによつて本陣を落とされる、そう危機を感じたライはアロエリにある提案をした。

「アロエリ、ミルリーフを連れてレベルッカを追え。後はオレが何とかする」

「なに!? 貴様、本気で言ってるのか! 第一、お前ひとりでどうやって飛ぶつもりだ!」

「一応、ディガルドとやりあった時に一回やった方法がある」

「……あれか。だが上手くやれるのか?」

「どつちにしても、このままじゃレベルッカに本陣を潰される。姫様もやれるらしいけど、まだ実戦慣れしてないから心配だしな。大丈夫、上手くやるさ」

ライの言葉を聞いて、アロエリは少し考える。

「わかった。ここはお前に任せる」

「ピ、ピギイー！」

アロエリは了承し、ミルリーフも頑張れといった感じで鳴き声を上げる。そして、アロエリは羽交い絞めを解いてライを開放した。

「何のつもりか知らないけど、先に片付けさせてもらおうわ！」

リシエルが再度晶術を発動しようとするが、ライはそれよりも早く紋章を発動する。そして剣を斜め下に向けたかと思うと、そこで紋章砲を放つ。

「うそおお!？」

ライはなんと、紋章砲を放った際の推進力でリシエルに向かって飛んでいったのだ。一応、前回のフロニヤルド行きでデイガルドとの決戦でも用いられたが、この場で出してくるのは想定外だったようだ。

『おおー。ライ選手、なんと紋章砲の推進力で飛ぶという離れ技を使用したあ!!』

『これには、リシエル選手も度肝を抜かれたようです。思わず攻撃の手が止んでしまってます!!』

今の実況を聞いたライはまさにチャンスだと思い、すかさず攻撃態勢に入った。

「リシエル、悪いな！」

「そうはいくか!!」

ライが剣に輝力を纏わせてリシエルに斬りかかろうとすると、リシエルも咄嗟に晶術のエネルギーを充填し始める。そして、二人の攻撃が同時に放たれた。

「オレが貰ったああああ!!」

「それはアタシのセリフよお!!」

そして、ライの紋章剣とリシエルの晶術が同時に激突。巨大な爆発が生じた。

「……相打ちか」



「みたいね。ああ、服が……」

爆風が晴れると、ライはリシエルと二人揃って湖へと落下していくところだった。その最中、二人の服がはじけ飛んで揃って下着姿となる。

『おおお！ ライVSリシエルの対決は引き分けとなったようだ!!』

『そして同じタイミングで、ミルヒーレ姫VS勇者レベツカの対決も終わったようです！ 結果は両者とも装備破壊に終わった模様!!』

その時流れた実況がライ達の耳にも届く。どうやら、心配は無用だったようだ。

『姫様、私は一旦陣地に戻ります!!』

『はくい！ 避ければ、また後で』

『わかりましたー!!』

その際、同時にレベツカとミルヒの会話も聞こえた。まだ出会って数時間な上に戦中にもかかわらず、揃って仲がよさそうな様子だった。

しかし、その頃

「……御子様、我々の出番はありませんでしたね」

「ピギィ……」

レベツカを止めに向かったミルリーフとアロエリが、その様子を眺めながら黄昏ていた。

---

一方、ポムニット対ブリオツシュはというと……

「……ポムニット殿、中々の腕前にござるね」

「そちらこそ、わたくしの技量に合わせていただいで感謝いたします」

見たところ互角の勝負をしている様子だが、実際のところはポムニットの言う通り、実戦経験やポテンシャルはブリオツシュの方がは

るかに上なので、互角の勝負は戦興行の為に合わせられているからであつた。

「ですが、そろそろ体力の限界ですので次で決めさせていただきます」  
「なら、拙者もそうさせてもらうでござるよ」

するとポムニットは拳を構えた状態で魔力を充填し始め、ブリオツシュも紋章を発動したまま居合切りの体勢に入った。

「ぶっ飛んでくださいまし……」

「それは遠慮させてもらうでござるよ」

そして、互いの技の発動準備が完了した。

「メイドクライシス!!」

「裂空一文字!!」

ブリオツシュが居合で輝力の斬撃を飛ばそうとした瞬間、ポムニットは地面を殴りつける。直後、ブリオツシュの足元で魔力の爆発が生じた。しかし、攻撃の阻止には間に合わずにポムニットもブリオツシュの技を受けてしまう。

『おーっと！ 戦うメイドさんポムニットがダルキアン卿に挑んだ勝負もちょうど終わったところだ!!』

『お互いに攻撃を喰らってしまったようだが、果たして立っているのはどっちだ!? はたまた引き分けか!』

「ポムニットさん!」

「お館様!」

実況を聞いて、ルシアンとユキカゼが攻撃の手を止めて二人の方を見る。リビエルとビオレもこの結果が気になったのか不意打ちはしなくなかったのか、それとも両方が、同じく動きを止める。

「ふう、中々効いたでござるな。けど、勝負は貰ったでござるよ」

「へ、へうう〜……」

ブリオツシュは上着がボロボロになっていながらもブリオツシュ

が立っており、ポムニットはメイド服を若干ぼろぼろにしながら、目を回して伸びていた。

『決まったぁー……！ この勝負、ダルキアン卿が勝ちました!! 流石は大陸最強、異世界の使い相手でもやはり強い!!』

『さらに同じタイミングでクーベル様がレオ閣下に挑んだようですが、こちら閣下の勝ちだったようです！ 閣下もグランヴェールを持ち出して宝剣対決が勃発。クーベル様も奮戦なされましたが、やはり閣下の方が一枚上手だったようです!!』

ブリオツシュが勝利を収めたのと同じタイミングで、レオ対クーベルの対決も決着がついたというアナウンスが入った。

その後の結果発表にて、今回の戦はガレットの勝ちという判定が出た。そして、ビスコッティとパステイヤージュは同点という結果に収まった。結果としては、助っ人参戦のライ一行を含めてガレットやビスコッティの陣営から主力を削ったため、パステイヤージュにも撃破ボーナスが加算されたためだという。

---

そしてその日の夜。

「で、戦には結局勝てんかったがレベツカをウチにくれんか？」

「だ、そうなんです……」

一同が休んでいる中、クーベルがレベツカに抱き付きながら告げる。

「儂に言われてもな。保護者に聞け」

「そっちの勇者達、シンクに七海！」

レオに促されて、シンク達に話を振るクーベル。

「パステイヤージュはビスコッティのお隣じゃし、みんなで遊べる時間も用意するから、レベツカをウチにくれんか？ ライ達も、同じ条件を出すからリシエル達を連れて行かせてほしいんじゃが……」

「私もクー様の勇者でいたいから、お願いしていいかな？」

クーベルが懇願する中、レベツカからも頼み込まれる。シンク達も

そんな彼女の意志を汲んであげることにした。

「そういうことなら、いいよ」

「クー様、ベツキーのことよろしくお願いします」

「お願いされたのじゃ」

シンク達の答えを聞いたクーベルは、とてもうれしそうな表情を浮かべる。一方、ライ達の方はというと

「アタシは昼の戦でついた側に最初から行くつもりだったから、別に問題ないわよ」

「オレも特に依存はねえな。ていうか、オレらは仕事で来てるのもあるから、リシエル達がパステイヤージュに行ってくれる方が都合がいいかもな」

「仕事？ 何の仕事じゃ？」

それを聞いたクーベルが首を傾げた。ミルヒやレオには事前に手紙で伝えていたがクーベルはいきなりの乱入だったためそのことを知らず、ライ達は自分たちのもう一つの目的である“フロニヤルド美食調査”について話をすることにした。

「なるほど。料理の勉強のためにいろんな国に滞在したいと……よし、ウチも出来る限り協力してやろうかの」

「クー様、ありがとうございます」

「ほんと、ありがとうございます」

「いや、それほどでもなあ」

ライとミルリーフに礼を言われて、嬉しそうな様子のクーベル。このあたりに年相応の様子が見えていた。

「とは言っても、到着当日から別れることも無かろう。クーベル」

「あい」

「少し打ち合わせなどもしたいから、二日ばかりこちらに残れ。その間、勇者たちとリインバウム御一行は自由行動としよう」

それを聞いたシンク達は嬉しそうな表情を浮かべた。初めて会った者や前回合ったけど殆ど話せてない者と、親交を深めるいいチャンスだと感じ取ったからだろう。

そんな中、ミルヒがシンクに近づいてある話題を振ってきた。

「ねえ、シンク。朝のお散歩、避ければご一緒いただけるでしょうか？」

「あ、いいですね。よければ、ベッキー達やライさん達もどう？」

それを聞いたライは、前回のフロニヤルド行を思い出し、つい顔を引きつらせてしまうのだった。

### 第36話 戦後の休息 Vacation in Biscotti returnnes

翌日、シンクとミルヒ恒例の朝のお散歩に、ライ達も参加することになった。ちなみに、保護者としてギアンが同行している。

その目的地の花畑にて。

「パラディオン、フォルム・フライングディスク！」

そこでライは、以前見たシンクとミルヒのあのやり取りを再度目の当たりすることとなった。

「姫様えらくい、姫様可愛い〜」

シンクの投げたディスクをミルヒがキャッチし、それを見たシンクが頭をなでる。あの、犬と飼い主のようなやり取りその者の行いだつた。

「シンク、一国の姫様を愛犬扱い……」

「な、なんか……背徳的に見えるね……」

「うん、これは流石に……」

「メイトルパの巫人の境遇を考えると、笑えない話だよね」

「よかった。あたしだけじゃないみたい」

レベツカが驚く中、エニシア達は表情を引きつらせて茫然としていた。その様子に、リシエルは以前にライとの混浴中に聞いたあのやり取りを思い出す。

「でも、わかる！ 私もレオ様とかジェノワーズのみんな、つい撫でたくなるし」

『え?!』

そんな中でナナミが突然そんなことを言い出したため、ライ達一行は驚きのあまり声を上げてしまう。

「七海、昨日はジェノワーズのみんなを超撫でてたし」

「ああ、そう言えばそうだったね」

レベツカからのカミングアウトを聞いて、それらしいものを見ていたエニシアが反応する。それによると七海の撫でテクは相当の物で、

ジエノワーズの面々がすっかり骨抜きにされていたという。特にノワールは喉を撫でて欲しいという、まんま猫発言をしていたとか。

「ベツキーもクー様のこと、撫でたくならない？」

「うん、あのふわふわの尻尾とか特に」

「まあ、確かに触り心地よさそうだけど……じゃなくって！」

どうやらレベッカもクーベルを撫でてみたい願望があるようだ。リシエルもノリツツコミしていたが、実はちよつと触ってみたいらしい。

「パパ、ミルリーフもなでなでして」

「はいはい、しょうがねえな」

七海たちの話を聞いて触発されたのか、ミルリーフがライに撫でて欲しいと言い出す。仕方ないといった感じで、そんなミルリーフをなでるライであった。

「やっぱり、パパになでなでしてもらうのが一番気持ちいい」

「はは、そうか。ありがとな、ミルリーフ」

ライに頭をなでもらうミルリーフは、糸目になってポワポワした雰囲気醸し出している。その様子に、つついライも撫で続けてしまっていた。

そして、その様子に刺激された人物が2名。

（ちよ、何アレ!? ただでさえ可愛いミルリーフちゃんが、さらに可愛くなってる!!）

（わ、私もすっごい撫でたい! けど、クー様に申し訳が……）

七海とレベッカが、ミルリーフから謎の撫でたいオーラを感じ取り、うずうずし始める。しかしレベッカの方は、クーベルへの浮気(?)を気にしてジレンマに陥っているようだった。

「みなさーん! よければ一緒にやりませんかー!」

そんな中、ミルヒが呼んでいたので一旦この話題は終わりにしておいた。

その後、エクレーールとリコツタに案内される形で城内を見学するこ  
とになった一向。

「ここが厨房であります。よく勇者様と一緒に、ここでおやつや感触  
をいただいたでありますよ」

「勇者様にライ君、いらっしやい。お友達もたくさん連れてきて」  
『こんにちわー!』

厨房のおばちゃん達が集まって来たので、挨拶を返しておく。する  
と、リシエルがある人物がいることに気が付いた。

「あれ？ ポムニットじゃない」

「あ。お嬢様、おはようございます」

そう。ポムニットが厨房でおばちゃん達に紛れて、食事の下準備を  
していたのだ。

「お嬢様方、今朝は休ませていただいてすみませんでした」

「いいのよ。あんたがいざって時に動けないのは、何か嫌だし」

ポムニットはある事情でついさっきまで寝ていたのだが、それは昨  
日の戦終了直後にさかのぼる。

く回想く

「ポムニット、どうしたの？」

「それが、ダルキアン卿との一騎打ちの後で何故か体の各部が痛みま  
して」

ブリオツシユとの一騎打ちの後、ポムニットは何故かそのような体  
調不良を訴えていた。フロニヤ力の影響でそのようなことは起きな  
いはずなのに、だ。

「拙者は普通に戦っていただけにごさるが、一体どうして？」

「まあ、ダルキアン卿が卑怯な真似をするはずないしな」

ライもブリオツシユも、皆目見当がつかなかったがミルリーフがあ  
ることに気づく。

「ねえパパ、ひよつとしたらポムニットさんの生まれが……」

「え？ ああ、そういうことか」

「ライ殿、何か心当たりでも？」



「ダルキアン卿、デイガルドにフロニヤ力の加護が聞かなかったって、前に言ってたよな」

「ああ。悪魔とやらが魔物と近かったのかして、その恩恵を受けられなかったようなのでござるよ。ユキカゼ、確かにそうでござったよな」

「はい。けど、それが何か……」

ブリオツシユもユキカゼも、それを間近で見たため鮮明に覚えていゑる。しかし、それとポムニツトに何の関係があるかは見当もつかなかった。

「ポムニツト、話しちゃってもいい？」

「いえ、折角ですからわたくしの口から話させていただきます」

リシエルが話そうとすると、ポムニツト自らの口から語られ始める。しかしそれは、シンク達にとつては衝撃的な内容だった。

「実はわたくし、悪魔と人間のハーフなんです」

『な!?!』

ポムニツトの衝撃の告白に、その場にいた皆が驚いた。春先に起こったデイガルドによるフロニヤルド滅亡未遂、その脅威を知るシンク達は当然で、逆に知らないレベルツカや七海でも悪魔という単語だけでもインパクトがあるのに、そのハーフというポムニツトの出自には驚かずにはいられなかった。

「わたくしの母が昔、故郷の村を悪魔に滅ぼされてしまって、その時に悪魔の子供を身ごもってしまったのが、わたくしだったりします」

「けど、ちゃんと人間の母親に育ててもらってるから、ポムニツトさんはデイガルドみたいなこと考えてないから安心してくれ」

いくらフォローしていても、この事実はそうそう受け入れられるものではないとライ達は思う。しかし、その心配は気鬱だった。

「まあ、一騎打ちした身として彼女の潔白は直接感じ取った。なので心配いらぬでござるよ」

「いくらデイガルドと同じ種族でも、それがポムニツト殿も邪悪な存在という証明ではござらぬからな」

そんなこんなで、ポムニツトの出自についてはあつさりを受け入れ

られたのだった。それはライ達が、ラインバウムとフロニヤルドの認識の違いを改めて実感し、同時にこの世界の良さでもあると瞬間でもあった。

〜回想了〜

「まあ、今は全快ですのでこうして厨房のお手伝いをさせていただいております」

「な、なるほど」

その後、おばちゃん達が以前シンクヤリコがさせてくれたというつまみ食いを勧めてきたので、ありがたくいただくことにした。

「そして、ここが騎士団の練習場になります」

「あれ、なんか賑やかじゃない？」

食後の休憩を済ませた後、次にエクレールに案内されて練習場を訪れるが、妙に騒がしいことに七海が感づく。しかし、その原因もすぐに分かった。

「ホワタアアアアアアア!!」

「ぬぐああ!?!」

「どうした? この程度でやられるほど貴様らも落ちぶれてはいないだろう!!」

「く、まだまだああ!」

なんとセイロンとクラウレが騎士達と乱闘していた。しかも数の差をモノとしない無双振りだ。

「お前ら、何やってんの?」

「おお、店主殿達に勇者一行。おはよう」

「なに、こいつらの練度が気になったのでな。少し手合わせと、訓練をまとめてやっていただけだ」

クラウレ達の話の話を聞いていると、七海はあることが気になって、セイロンに話しかけてきた。

「セイロンさんって、カンフーやってるんですか?」

「かんふー……とはなんだ?」

首を傾げるセイロンに対し、七海がカンフーについて簡単に説明する。

「いや、地球の中国って国にそんな名前の武術があつて、ちょうど今のセイロンさんみたいな掛け声をあげて戦ってるんですよ」

「ほう、そうなのか。しかし残念ながら、違うな。あれはストラという技の為の息吹だ」

「ストラ??」

「呼吸法によって身体能力や自然治癒力を強化する、リインバウムの武術家の必須技だ。応用すれば他者の傷や肩こりなども治療できるぞ」

「へえ〜」

セイロンからストラの概要を聞いて、感心した様子の七海。すると、その様子にセイロンがある提案を出す。

「興味があるなら、基礎を教えてやってもいいぞ?」

「え、いいんですか!」

「うむ。実はストラは女性の方が強力な力を出せるらしくてな、七海殿はセンスもよきそうだから威力にも期待が持てそうだ」

「おおお! そう言われるとなおさら使いたくなってきた!!」

七海の眼がライ達にはキラキラして見える。以前シンクがブリオツシユに神狼滅牙を継いでほしかったという話を聞いて覚えてみたいと興奮していたが、やはり血は争えない&この師匠にしてこの弟子あり、を体現している状態だった。

「えつと、盛り上がっているとそろすまないが……」

「お? ああ、すまんすまん。そろそろ交代か」

「ごめんね、エクレちゃん。で、セイロンさんはあとで忘れずに教えてくださいよ」

「ああ。楽しみにしておいてくれ」

エクレールに促されて、一同は練習所を空ける。そして、シンクとエクレールが対峙し始めた。

「勇者、お前が留守の間も鍛え続けたんだ。レベルアップした私の剣術を見せてやる」

エクレールはシンクに告げた後、背中の鞘から愛用の双剣を抜き取り、天高く投げた。そして大ジャンプした後でその剣をキャッチし、そのまま無事に着地した。

「エクレーちゃんも、エクストリームキャッチするんだ」

「勇者様の影響であります」

「あれも地球のスポーツなんだ。すごいなあ」

七海とリコッタ、エニシアがエクレールの様子について話している。何故か三人とも声が似てる気がしたライ達であったが、言及したらややこしくなりそうなので気のせいということにしておくことにした。

「シンク、これ使いな」

「ライさん、どうも」

そんな中、ライがシンクに自身の剣を貸してやる。そしてそのまま二人の模擬戦が始まる。

「ほう、この二人は互角の実力のようだな」

「で、シンクはエクレーちゃんは仲いいの？」

「いいコンビでありますよ。見ていて飽きないであります」

「確かに、二人ともすごく生き生きしてるね」

クラウレが二人の実力に感心している横で、レベッカやルシアンがリコッタとシンク達について話している。ライは前回もこの様子を見ていたので知っていたが、

その後、一行が案内されたのはブリオツシュ達の住居である風月庵だ。ちなみに今回はギアンが離脱し、代わりにリビエルとシンゲンが同行している。

「みんな、お待ちしてたでござる」

「ユツキー、来たよ」

早速ユキカゼが隠密隊を伴って出迎えてきたので、ミルリーフが挨拶する。夏場だけあってか、白地にアサガオの模様が目立つ半袖の浴衣を着ている。

「和風建築？」

「おお！ 話に聞きましたすが、本当に鬼妖界の建築様式なんですね!!」  
七海が風月庵の建築様式に気づく横で、シンゲンが興奮気味になっている。本人曰く故郷のシルターンに未練はないらしいが、それでも見慣れた様式の建物になつかしさが掻き立てられたようだ。

「ユキカゼ、先日の戦は中途半端にしてすみませんでしたわ」  
「構わないでござるよ」

その後、庭で隠密隊の犬達を可愛がっている最中、リビエルはユキカゼと話しをしていた。あの後、ブリオツシュがポムニツトを倒した直後、同時にレオもクーベルを下したりで他の一騎打ちがそのまま勢いでうやむやになってしまったとか。リビエルはその謝罪のためにわざわざ同行していたという。

一方、ライとシンクはブリオツシュと話しをしていた。

「二人とも、久しぶりでござるな」

「ダルキアン卿も、元氣そうで何よりです」

「うむ。拙者もユキカゼも、隠密たちも元氣でござるよ」

ライ達と挨拶を済ませたところで、ブリオツシュはライにあることを尋ねてきた。

「ところで、ライ殿やリビエル殿に聞きたいことがあるのでござるが」  
「オレとリビエルにですか？ リビエル、ダルキアン卿がお前に聞きたいことがあるってよ」

それを聞いたライは、早速リビエルを呼んでその話について聞いてみることにした。

「一体、何があったんですの？」

「うむ。少し気になることがあってな」

そしてブリオツシュから質問が来るのだが、それは変わった内容だった。

「悪魔と天使の間に、子を成すことは可能でござるか？」

「えーっと……すみません、専門外！ リビエル、頼むー！」

「まったく……一応出来なくもないかもしれませんが、そもそも敵対する種族同士ですから、いても数えるほどしかないと思いますわ

よ」

「そうでござるか」

「あの、何でいきなりそんな話を…」

唐突すぎる質問だったので、ライ達は当然その真意が気になる。そして、その真意が明かされた。

「先日、昔の知り合いを夢で見たのでござるが、天使と悪魔の両方の翼を持った不思議な姿だったのでござるよ」

「な!?!」

「そ、そんな人がいたんですか?」

話を聞いた一同はその人物の容貌に驚き、シンクも思わず問い尋ねてしまう。

「あまり多くを語ろうとはしなかったでござるが、どこかの国に勇者として呼ばれたのを拒んで逃げ出したらしくてな。その道中にしりあつたでござる」

「何か元の世界に未練があつたと見るのが妥当だけど……」

「ですが、そんな方がいるなら間違いない異端視されてしまうはず。そんな方からしたら、フロニヤルドは願ったり叶ったりな世界だと思うのですが……」

その人物についてはよくわからないことがあるが、とりあえず今はブリオツシュの話聞くことにする。

「ただ、その人物はフロニヤルドの戦の在り方が気に入らぬらしく、それを正そうとしていたそうでござる。そして、それが叶わなかったら……」

「「叶わなかったら?」」

「フロニヤルドを滅ぼす。そう言っていたでござる」

少し間を置いてブリオツシュが発したその答えは、ライ達になかなか衝撃を与えた。

「また、デイガルドみたいなやつとやり合わねえといけないかも知れないのか」

「しかも、最近見た夢に出てきたってことは、近い内に会うかもしれない  
せんね」

「いずれにしても、警戒しておくに越したことはないでござるな」

とりあえず、重苦しい雰囲気でせつかくの休日がぶち壊しになりそ  
うだったので、この話は一旦打ち切りにおいておいた。

---

そしてその日の夜

「いいお湯だったね」

「大浴場、広かったですね」

「でしょ。あたしも前に入ったけど、何処の貴族のお屋敷でもこの広  
さは無いわね。流石王宮」

リシエルとエニシア、そしてレベツカが風呂上がりに廊下でおしや  
べりをしている。七海は家族に連絡を入れに、別行動を取っていたた  
めこの場にはいない。

そんな中、レベツカがある話題を口にする。

「フロニヤルドってなんというか、凄にお隣感覚の異世界ですよね」

「そうね。異世界同士で連絡が取れたり、星詠みなんて物で様子を覗  
き見出来たり、なんてあたし達からしたら画期的すぎるわよ」

「うん。ラインバウムじゃ行き来する手段だけでも貴重なのに、これ  
は凄いよ」

以前もライが気づいて、リコツタ達から聞いて驚愕したあの話題で  
ある。

「聞いたんだけど、全部リコツタちゃんの発明のおかげらしいよ」

「みたいね。けど……」

「けど、なんです？」

エニシアからその話を聞いたリシエルは、何か言いつらそうにして  
いる。

「あの子、見知らぬ機械を見たら物凄い興奮するってライから聞いた  
のよ。分解してみたいって、やたら興奮してたらしいわ」

「えっと、それが何か？」

「ロレイラルの機械とか、無闇に見せられないわよ」

「な、なるほど……」

リシエルのその答えを聞いて、ものすごく納得する二人。

その話をいったん区切った後、レベッカからある話題が振られた。

「そういえば、リシエルさんもエニシアさんも、ライさんのことが好きなんですか?」

「え!? いや、そうだけどいきなりなんで……」

「まあ、見てたらずぎづきそうだからそこら辺は聞かないけど、本当に唐突だね?」

「いや、それで現状とかどうなのかなくって気になってしまっ……」

「ああ、そういうことね。あたし等の現状としては、ライがどっちなに振り向くまで対等の勝負って感じね」

「ちなみにライ公認だよ。けど、まだ決めかねてる感じみたい」

「ふむふむ」

(たぶん、シンクのこと気にしてるんだろうけど、今は黙っておこうかしらね)

レベッカの真意が気になったが、取りあえず親切心で黙っておいてやることにした。

「ところで、明日からエニシアはガレットに行くのよね」

「うん。七海ちゃんやギアン達も一緒だから、何とかかなると思う」

「なるほど。じゃあ、後でゆっくり語り合いましうか」

そのままリシエル達は一旦部屋に戻った後、別室に集まって女子会を楽しんだのだった。



第37話 若様と勇者の夏合宿     s u m m e r  
a t t l e   i n   r i v e r   b

三国首脳会議が終わり、各勇者たちもそれぞれの国に移動することになった。

「ライ、すまん。時間が無くて一国しか紹介出来なかった」

「そんな、これの用意してくれただけでもありがたいですって」

別れる間際、ライはレオからある物を受け取っていた。それはドラジェ領国というガレットの友好国への、パスポートのような物だ。レオはライのフロニヤルド美食調査に協力するために、このようなものを用意したのだ。前回の魔物騒動での功労者なので、レオとしてはこれだけでは足りないと感じたようである。

「ライさん、もう行っちゃうんですね」

「仕事もあるしな。けど、戦はビスコッティ側につくから、またすぐ会えるさ」

「はい。ライさん、頑張ってください」

「パステイヤージュやガレットは、あたしやエニシアに任せときなきかい」

「ああ。行ってくる」

そのままライは、至童形態のミルリーフに飛び乗ってドラジェへと向かい、リシエル達もそれぞれの国へと向かうのであった。

「いやあ、平和ですね」

「ごきげんな」

風月庵の縁側で、シンゲンがまつたりとしている。シンゲンは懐かしきシルターンの面影のあるこの庵がすっかり気に入っているように、入り浸り状態だった。そんな彼に対してブリオツシユは、刀の手入れをしながら返事を返していた。

「お館様、お昼の時間ですよ。よければ、シンゲンさんも」

「おお、もうそんな時間でござるか」

「では、お言葉に甘えて」

使用人のカナタが運んできた昼食を、折角なのでシンゲンもいただくことにした。

「おそうめんですか。これは風流ですね」

「では、いただくでござる」

そのまま二人でそうめんをすすり始める。暑い中で冷たいものを一気に喉に通す、まさに至高のひと時であった。

「そう言えば、シンク君たちは河原で強化合宿、なるものをしてるそうですね」

「ああ。ガレットからノワールも参加して、監督役にセイロン殿が行っているでござるよ」

「ほお……まあ、彼がついていけば一安心ですかね」

一度はミルリーフをめぐる戦いで、敵の非情な作戦をきっかけに衝突したこともあったセイロンとシンゲン。しかし、今では同郷の頼れる仲間として接している。

そのまま食事を続けていると、ある物について尋ねてきた。

「ところで、先程から聞こえるこの鈴の音は？」

「ああ、風鈴ですね。鬼妖界の夏の風物詩でして、この音を聞いて夏場に涼しい気分になるんですよ」

「ほう、そうでござるか。で、なぜそのようなものが？」

「ああ。それ、勇者様の地球からのおみやげですよ」

シンゲンが風鈴について説明した後、カナタがその詳細を語った。

「シンク君の世界やこのフロニヤルド、我々からしたら本当に不思議ですね。文化や種族が入り混じっている感じなど」

「拙者達からしたら、逆にそちら側の方が不思議にござるよ。特定の文化や種族が一つの世界に集まった感じなどが、特に」

そのまま食事中に小難しい話になってしまったが、何故か会話が弾んでいるという、奇妙な風景が出来上がってしまった。

一方、合宿先の河原にて

「はああああああああああ!!」

シンクとユキカゼが、得物を構えてセイロンに飛び掛かる。

「まだ隙だらけだぞー!」

セイロンは咄嗟に飛び上り、そのままシンクに向かって行く。そして、そのままシンクの懐に飛び込んで鳩尾辺りに蹴りを叩き込む。

「がああ!?!」

シンクはセイロンの蹴りを喰らって体内の空気を吐き出し、そのまま落下していく。そして更に、セイロンはユキカゼに向けて苦無を投げつける。

「なんの!」

しかし戦うユキカゼはそのまま自慢のスピードで回避、一気に斬りかかる。

「ふっ」

しかし、セイロンは上半身を逸らしてそれを容易くよける。そして

……

「ホアタアアア!!」

「うぐ!?!」

そのまま正論はサマーソルトキックをかまし、ユキカゼの顎に命中する。しかし、ユキカゼは咄嗟に受け身を取ったため、すぐに体制の立て直しが出来た。

「流星はセイロン殿、強いでござるね」

「そなたこそ、あの速さはかなりの物だったぞ」

セイロンとユキカゼが互いの実力を称賛するが、明らかにセイロンの方が優勢だった。

直後、近くに置いてあったタイマーが鳴り、訓練の終了時間が来たことに気づく。

「うむ、どうやら終了のようだな」

「ですね。それにしても、セイロンさん強すぎです」

「拙者も、体術使いでこの強さの者は初めて会ったでござるよ」

「まあ、我はこちらの住人や人間と比べても、体が強靱なので当然だな。加えて、昔からの鍛錬の賜物というところだ」

「へく……ところで、どんな鍛錬を積んだんですか？」

シンクが興味本位で聞いてみると、セイロンの口から驚愕の答えが返ってきた。

「うむ。まず自らの肉体を、骨が砕けるまで酷使用する。そしてストラの力で治癒して無理やり鍛錬に臨める状態にして……」

「あ、すみません。それだけでお腹いっぱいです」

「拙者も、そこまでして強くはなりたくないでござる」

「そうか。まあさつきも言ったが、そなた達とは体のつくりが違うから、真似しろというのも酷な話だな」

ユキカゼですら顔を引きつらせる中、そのまま「あっはっは」といつもの調子で笑い始めるセイロン。

そんな中、別の場所で戦っているエクレーとノワールが気になったので様子を見に行ってみる。

「うわあ……」

「派手に討ちあつたでござるね」

辺りには訓練用の木刀が何本も折れて辺りに散らばっており、そんな中でエクレーとノワール達は揃って息切れしていた。

するとシンクはあることが気になって、エクレーに尋ねてみた。

「エクレー、まさか負け後してる？」

「イヤ、私の方が勝ち越してるんだが……」

「私が勝ち越すまで、負けない！」

どうやら、こんな感じでノワールが勝負を挑み続けていたのが原因だったようだ。しかし、流石にうっとおしく感じたのか、次のエクレーの一言で強制終了となった。

「ああ、もう……私の負けでいい！ だから、終わりだ終わり!!」

「やったあ……勝利い」

そんな中、ユキカゼとセイロンがノワールに近づいて声をかける。

「ノワの負けず嫌いとか根性も、相変わらずでござるな」

「うむ。その様子なら、戦士として申し分なからう」

「ガレット魂！」

褒められたのが嬉しかったのか、左手でガッツポーズを決めるノワール。いつもの無表情ながら、どこかドヤ顔にも見える不思議な様子であった。

「さて。では汗もかいたことだし、これから水練に移るでござるよ」

その後、ユキカゼの指示が入ったため、水に入るための服装に着替える一同。

その結果、シンクは黒地に炎の模様が描かれた海パン姿だったが

……

「セイロンさん、まさかふんどしで来るとは……」

「シルターンでは水練といえばこの格好だからな。郷に入っては郷に従えとも言うが、今回は敢えてこちらにしたわけだ」

セイロンの水着チョイスに、シンクも度肝を抜かれました。まだ女性陣が着替えているようだったので、先程流した汗を洗い落とそうと水浴びをしていたところの一幕だった。

しかし直後、その女性陣が着替えている小屋から、屋根を突き破って何かが飛び出してきた。

「うわああああ!?!」

驚きつつも、どうにかシンクが受け止めたところ、それがノワールだと判明する。

「シンク、大丈夫?」

「うん、なんとか。ノワこそ大丈夫って……うわああああああああああ!!」

シンクはノワールをよく見てみると、驚愕の事実が判明して思わず絶叫してしまった。

なんと彼女は全裸だったのだ!!

「ごめんシンク。ちゃんと着替えてくるから!」

しかしノワールは大して照れた様子も無く、そのまま小屋まで戻って行ってしまった。

「あれは流石に、我もどうかと思うぞ」

「よかった、セイロンさんもだった……」

流石にセイロンも、ノワールのあの様子には動揺を隠せずにいた。いつも余裕な彼にしては珍しい。

その後、女性陣と合流して水遊びをしていると、シンクはあることが気になってノワールに尋ねかける。

「ノワ、今回は何で一人でこつちななの？」

「実は、お館様達から魔物や禍太刀について聞きたかったんだ」

「実はガレットには、隠密部隊のような魔物対策部署が無いのでござるよ。それで、ノワに立ち上げをやってみないかと持ち掛けたでござる」

それを聞いたシンクとセイロンは、デイガルドの襲来と魔物騒動の二つの事件が頭をよぎる。

「なるほど。店主殿から聞いたが、一介の悪魔でしかなかったデイガルドがその禍太刀とやらで魔王クラスの悪魔へと変異した。そのような危険極まりない物、放っておく者の気が知れるな」

下手をすれば国一つ、最悪世界一つ滅ぼすような存在への対策は、やっておいて当然だろう。

しかし、その一方でシンクはあることが気になった。

「あれ？ そっちはそれでいいとして、ジェノワーズはどうするの？」

「当然続けるよ。なんたって、私がセンターのチームだからね」

「そっか。ノワ達ジェノワーズとも、また遊びたいし戦いたいからね」  
そう言つて、シンクはノワールの頭を撫でる。その際、彼女も気持ちよさそうにしていた。

「シンク、ジュース飲む？ よければ取ってくるよ」

「いいの？ ありがとう」

そのままノワールは、

すると、近くでユキカゼとバレーボールをしていたエクレールが、シンクに近寄ってきた。

「勇者、あまり他所の国の女と馴れ馴れしくするな」

「え？　なんで？」

「なんというか、お前は年の近い女に対して馴れ馴れしいというか……」  
『他所の国の女の子を撫でてくるくらいならもっと私を撫でろ、この鈍感勇者ああ』ってことじゃない？」

ハッキリしないエクレールの言葉を代弁するかののように、戻って来たノワールが割って入ってきて、そんなことを言いだす。しかし、それを聞いたエクレールは……

「ノワール……このアホ猫がああ!!」

ブチギレして、そのまま紋章を発動する。その時、彼女の左腕に輝力が纏われていったかと思うと、青い光を放つ鎧の腕とそれに握られた巨大な剣へと変じた。

「うおお!!　新技出た!」

「輝力の刃、光臨剣でござる」

シンクが驚き、ユキカゼが技の解説をする。直後、エクレールは早速披露した光臨剣の切っ先をノワールに向け出す。

「この後の救命訓練、助けられる側は本当に気絶してる方が良くないか?」

「それは同感」

直後、ノワールも紋章を発動して新技を披露する。彼女の尻尾が七又に別れ、その一本一本の先端に刃が映えた、やたらと攻撃的なデザインをしていた。

「エクレ自ら気絶してくれるなんてね」

ノワールもやる気満々らしく、そのまま二人は戦闘を始めてしまった。

「輝力武装・セブンテール!」

ノワールはそのまま輝力武装の名を叫んでエクレールへと突撃していく。七本の尻尾による連続攻撃を凌ぎ、エクレールも反撃する。

「止めた方がよさそうだが……どれ、我も折角だから試してみるか」

かと思つたらセイロンも場の空気に乗って、自前で用意したという紋章を発動する。紋章は東洋龍が描かれ、輝力はシルターンの属性と

同じ赤色をしていた。そしてセイロンの両足に輝力が纏わりついて行き、そのまま東洋龍の上下それぞれの顎を模したアングレットに変異した。各所に牙のような突起まで生えて、かなり凶悪そうになっている。

「セイロンさん、紋章使うの初めてでしたよね!?!」

「うむ。しかし、コツさえわかれば簡単に出来るぞ」

エクレールとノワールの新技を、一回見ただけで同じ要領の技を完成させてしまったセイロン。その様子にシンクは驚愕するが、セイロンは気にせずこの技に名前を付け始める。

「龍の顎門あぎとを模した鎧で蹴り砕く、ということりゅうがくしゅうで龍顎蹴と名付けさせてもらおうか」

「割とシンプルでござるね」

セイロンがつけた輝力武装の名前に、ユキカゼがつい直球な感想を告げてしまう。しかし、セイロンはそんな様子も気にせず、走る準備をしていた。

「では、少し行ってくる」

そのままセイロンはエクレールとノワールに向かって、駆け出す。そしてそのまま二人の間に割って入り、龍顎蹴で光臨剣とセブンテールによる攻撃を同時に防いでしまった。

「な!?!」

「セイロンさん、それって……」

「すまんが、新技を試すついでに決闘の仲裁をさせてもらおうぞ」

そのまま二人に詫びを入れ、セイロンはまずノワールに飛び蹴りを放って吹っ飛ばす。そして、そのままエクレールと向き合おうと、エクレールの方から声をかけてきた。

「そういえば、前は貴様に恥をかかされていたな。せつかくだから、今ここでその借りを返させてもらおう!?!」

「おいおい。そんな事をまだ覚えているとは、お主も器が小さいな」

そして、セイロンはそのままエクレールに戦いを挑まれる。エクレールが光臨剣で斬りかかるも、セイロンの龍顎蹴で防がれてしまう。そしてセイロンはストラで己の筋力を跳ね上げて、エクレールを



そのまま弾き飛ばしてしまう。

「では、遊びは終いだ!!」

そしてセイロンはエクレールがひるんだすきに、一気に彼女の懐に飛び込んで蹴りを入れる。そして複数回蹴りを入れてはサイドステップで回り込んで、また連続蹴りを入れ、またもサイドステップで回り込んで連続蹴り、という一切の隙も無い攻撃を叩き込む。

「ホワタアアアアアアア!!」

そしてとどめに飛び蹴りを決めて、エクレールを沈めた。これがセイロンの必殺技、奥義・吼龍連舞撃である。

「隙だらけだよ!!」

直後、先程まで動きのなかったノワールが頭上から迫ってきて、そのままブンテールで攻撃してきた。しかし、セイロンは咄嗟に飛びのいてノワールの攻撃をかわす。

「おっと、危ない。そう言えば、忘れていたな」

そしてセイロンはノワールへと反撃を取ろうと、ある行動を始める。手頃な岩を足場に、空高く跳びあがったのだ。ノワールは何をするつもりなのかとキョトンとしていたが、それがいけなかった。

「龍顎蹴のこの意匠は、単なる洒落ではないぞ!!」

直後、セイロンが空中から地上のノワールに向けて左右の足で交互に蹴りを入れるモーションを取った。直後、それは起こった。

「ええ、飛んできた!?!」

なんと、セイロンが蹴りを放つとは彼の足を離れて、ノワールへと目掛けて飛んでいった。しかも、途中で連結して東洋龍の頭そのものへと変化したのだ。そしてそれは巨大な口を開けて、今だノワールへと向かって行く。

「だったら、迎え撃つ!!」

しかし、ノワールは諦めずにブンテールを使い、迎え撃とうとする。龍顎蹴が巨大な口を開けてノワールに食らいつこうとすると、ブンテールが連続突きを放って破壊しようとする。手数で一気に押そうとしているようで、攻撃のスピードと回数は共に激しい物だった。

「よし、後はこのまま……!?!」

「ホワタアアアアアアア!!」

安心したのも束の間、今度はセイロンがノワール目掛けて飛び蹴りのポーズのまま落下してきたのだ。龍顎蹴に気を取られていたノワールはその蹴りを防ぐことが出来ず、諸に喰らってしまった。

さらに、そのまま龍顎蹴の顎門に飲み込まれ、爆発する。

爆発が晴れた直後、シンクが倒れているエクレールを回収しに向かい、セイロンは爆発跡地にノワールを回収しに向かう。

「きゆうくくく……」

「え、エクレがだま化してる……」

「少しやりすぎたか。すまん、二人とも」

エクレールとノワールは揃ってけものだまへと化しており、セイロンの完全勝利という結果に終わった。

「せ、セイロンさん強すぎじゃないですか?」

「初めて紋章を使つて、エクレとノワに同時に勝つとは……」

「うむ。年期の差とでも言っておこうか?」

その後、近くの小屋へと運ばせてストラによる治癒を施したら、何故か元の姿に戻るのが早かったという。

その頃、ライはどうしてるかというと

「パパ、あそこがドラジエみたいだね」

「みたいだな」

丁度、ドラジエ領国に到着したようだ。レオから予備知識として聞いていたが、ドラジエは山岳部の国らしく、首都は山岳部に位置していた。

どうやって国内に入ろうかと思っていると、城の方から何かが飛んできた。見てみると、それは人が乗ったセルクルだった。どうやら、ミルヒのハーランと同じ飛翔種のものである。すると、乗っていた人物がライに話しかけてきた。

「すみません！ ガレットのレオンミシエリ閣下から紹介いただいた、ライさんでしようか？」

「ああー、そっちは？」

「僕は、このドラジエの現代表領主で王子のレザンです！ 通信で話は伺ってます！」

王子自らが出迎えをしてくるという、破格の待遇が待ち構えていた。

「王子、わざわざ出迎えすみません！」

「いえいえ、ガレットは我が国と貿易でお世話になってますからこれくらい当然です。それに、数か月前の魔物騒動を解決した英雄の一人とあらば、お出迎えしないわけにいきませんから！」

クーベルはあまり触れていなかったが、レザンの様子からしてディガルドの一件は各地に広まっているようだった。そして、そのままライはレザンに先導されてドラジエの城のテラスに向かう。そして、そのテラスから城へと入っていった。

「レオンミシエリ閣下から聞いたんですが、ライさん達はリインバウムという世界からいらしたそうですね」

「ああ、そうです。けど、いきなりその話をしてどうしたんですか？」

廊下を歩いているとレザンがライにいきなりその話題を持ち掛ける。唐突なことに戸惑うライだったが、直後にレザンの口から驚きの事実が告げられた。

「実は先日、我が国も勇者召喚を行ったのですが、ライさん達と同じリインバウムの方々をお呼びしたんです」

「ええ!？」

「王子様、呼んじゃったの!？」

レザンの話を聞いて、驚きを隠せないライとミルリーフ。まあ、リインバウムとフロニヤルドが自分たちの知らないところでもつながつっていたのだから、当然だろう。

「で、その方達なんですが……」

「おーい、王子いい！」

「……あ、噂をすれば」

どうやら呼ばれた勇者が出てきたらしく、その人物が近寄ってきた。

やって来たのは青い髪、ライより年上の青年と長い茶髪の女性、そして狐の耳と尻尾を生やした和服の少女だった。

「あれ？ ネステイさん達は？」

「ネスは図書館で召喚関係の本探しに行くつてさ。で、バルレルはまた戦士長さん達と酒盛りしてる」

「ま、またですか……ネステイさんはともかく、バルレルさんは自重してください」

どうやら別行動している仲間がこの青年にいるらしい。酒盛りをしている方についてはしよっちゅうのようで、レザンも気疲れした様子で項垂れている。

「レザン君、その子が例のお客様ですか？」

「はい。リインバウムのとある宿屋で店長をしている、ライさんというそうです。料理の勉強のために各地を見たいと、レオ閣下から紹介をされたそうです」

「宿屋……」

青年の方は宿屋という単語を聞いて、少し考えるしぐさを取る。直後、何かに気づいた様子でライに声をかけてきた。

「もしかして君、忘れじの面影停の店長かな？」

「な、何でオレの店の名前を？」

「やっぱり！ ユエルが世話になったつて聞いたよ!!」

「ユエルの知り合い……まさか！」

ユエル

以前にトレイユで知り合ったオルフルという巫人の少女の名で、リインバウムで一番古い国の聖王国からおつかいでやって来たところを知り合った。ギアンとの最終決戦の際に墮竜化した彼の攻撃が街に向けられたが、ユエルの知り合いだというある召喚師が結界で防いでくれたことで、街は無事だった。つまり、彼はその召喚師本人ということになる。

「直接会うのは初めてだったな。俺はマグナ・クレスメント、こっちの

子は護衛獣のハサハだ。よろしくな」

「アメルです。初めまして、ライ君」

これが運命を超えし者、超<sup>ロウラー</sup>律者とのファーストコンタクトであった。

そして夜になった頃、シンク達合宿組は夕食の後片付けをしていた。

「まさか、セイロンさんも料理できるとは驚きましたよ」

「しかも、凄まじく美味かった……貴様、隙無すぎではないか？」

「いや、これはシルターン料理の調理法が確立されている故の結果だ。我自身は手習い程度の腕前だよ」

「その割には、干物の下準備とかテキパキこなしてたね」

ノワールの視線の先には、開きになった川魚を即席の物干し竿に釣るしているのが見えた。昼間の模擬戦の後で、取った魚を捌いて作ったという。ちなみに、ノワールの今の格好は何故かピンクの着ぐるみパジャマ（何故か猫）だ。

「さて、明日は朝に今日の特訓のおさらいをして、昼からお館様と剣の特訓」

「そちらは我の専門外だから、ここで交代というわけだな」

「早く休んで、涼しい内から始めたいな」

そんなわけで、片付けの終了と同時に就寝となった。

しかしまたもノワールが口を開く。

「寝る前に好きな人告白大会とかしないの？」

「しない！ 寝ろ!!」

「えっと、拙者はお館様と姫様と」

「するな！」

「ていうか、それ主旨違うし！」

「あっはっは、これも若さだな。愉快愉快！」

「えつと、これはどういう状況にござろうっ？」

そう言うユキカゼが見たのは、何故かシンクとエクレールが小屋の外で寄り添って寝ていた。しかも、エクレールがシンクに膝枕しているという状況だった。

「たぶん、二人で話してて、仲良く撫でっこしてる内に、シンクがエクレーの膝の上。で、昼間の疲れでその内に爆睡、と」

「ほう、それで決まりだな」

ノワールが状況を推理してみると、セイロンが納得する。直後、二人が目を覚ました。

「うわああああああああああああ!!」

「おぶろうー!」

二人揃って絶叫し、直後にエクレールはシンクに腹パンを喰らわした。かなりの慌て様だった。

「エクレ…」

「イヤ、違う! これはそう言うことではなくて……」

「まあ、別に間違いを犯したわけではないのだ。これくらい減る物でもなからう」

「イヤ、そう言うことではなくて……」

「二人とも仲良しコンビなのは、みんなよく知ってるから」

「だから違うと言ってるだろー!」

その後、風月庵に行つて修行の成果を見せることとなった。

「貴様、私が苦勞して覚えた技をもう……」

「違うよ。エクレと同じで神狼滅牙がベースなんだから、似るのは当然だよ」

何とシンクが覚えた技は、光臨剣の色違いと言ってもいい、よく似た技だった。こちらは炎を思わせるオレンジが勝った赤色をしている。

「ノワールも含めて、皆よくやったでござるな。しかし、セイロン殿もまさかこれほどとは……」

「ああ。この技、中々に楽しいな。我もすっかり気に入ったぞ」  
「そうでござるか。これなら勇者殿達に拙者の魔物退治の技を、伝え  
ていけそうでござる」

全員分の成果を見て、ブリオツシユも満足そうにしている。こうし  
て、ビスコツテイの夏のひと時が過ぎていった。

第38話 ガレット獅子団捕物帳 braver  
with okappiki

ガレット獅子団領・アヤセ

大陸の東方諸国からの移民が集まって作られたこの国は、シルターンや江戸時代の日本に酷似した文化となっている。襖や障子が建物に用いられ、住民の衣服も所謂着物に分類されている物だった。

そして、そんなアヤセの町にある一行がやって来た。

「へえ、ここも風月庵みたいに和風なんだね」

「確かに、よく似ているな。一体、この世界はどんな文化構造をしているんだ？」

「クラウレさん、あんまり難しく考えない方がいですよ」

それは七海にジョーヌとベール、アロエリ&クラウレ、そして一行をビオレが先導していた。

何故七海達がこの町に来たかというところ……

く回想く

数刻前、ガレットの首都ヴァンネットにて。

「そうか、追いはぎ事件は街でも噂になっておったか」

「はい。海龍亭じゃ、みんなその話題で持ちきりで……」

「先程、アヤセの町長から確認も取れた。守護力が働いてる街中だったから、死者や重い怪我人は出てないそうじゃが……」

追いはぎという、不穏な単語がレオの口から飛び出した。七海たちは先程、昼食を取りに街へ向かったのだが、その際にこの追いはぎ事件のうわさを店のウェイトレスから聞いたという。

レオがある程度言葉を紡いだ直後、いきなりガンツと何かを叩く音が聞こえる。音のする方を見ると、ガウルが右手を机に突き立てている姿があった。

「それでも、立派な強盗傷害だ！ 放っておけねえだろ!!」

やはり王族としての責任感が、それとも愛国心が強いのか、その両



方が、いずれにしてもガウルは自国での犯罪が心底許せないようである。

「ノワがまだ帰ってきてないが、お前達を連れて今夜あたり行ってみるか」

「はいー!」

「行くー!」

「ならば、俺達兄妹も力を貸そう。いいか、アロエリ?」

「はい、兄者。盗みなどという姑息な悪事、許してはけません」

意外にもアロエリとクラウレも乗り気のように、そのまま追いはぎ討伐に向かうことが決まった。

「よし。ならば儂も……」

「レオ様! それにガウ様も、ダメですよ!!」

レオも参加を名乗ろうとしたら、いきなりビオレに止めるめられてしまう。

「領主や王族が出て来たら、かえって事を大きくしてしまいます。それに今夜は、ミルヒ姫様と会食の予定があるじゃないですか!」

ビオレの言うことも尤もで、しかもすでに予定もあるので行きたくても行けない状況となっていたわけだ。その後、ビオレが一行の引率を名乗り、そのまま付いて行くことになったというわけだ。

「それじゃあ、僕とエニシアとミントは閣下たちと留守番をしておくよ。あんまり大人数だと目立つし、閣下の公務も手伝わないとね」  
「ギアン、すまん。お主がいると書類仕事が楽でな……」

ギアンはチャツカリ、レオの仕事の補佐という役職についていた。エニシア第一の彼なら、そんな彼女の世話になる国でのあれこれは知っておきたいので、こういう形に収まったというわけだ。

く回想了く

「では、私は町長に話を付けに行きますから、皆さんは先に町で調査をお願いします」

引率というわけで、ビオレが皆に指示を出す。そして、いざ移動しようとした直後

「あ、姉さん待って」

「これ、レオ様からの預かり物なんですけど……」

ジョーヌとベールがそう言つて、大きな布袋を見せてきた。そして中身を確認……

〜十数分後〜

「流石レオ様！ 現地捜査と言つたら、やっぱり現地の人の服!!」

「これでどう見ても、地元の人ですね」

レオからの預かり物とは、人数分の着物だった。七海が青、ジョーヌが黄色、といった具合に各自のイメージカラーに合わせた着物が用意されていたのだ。

「なんで私まで……」

「そつちはまだマシだろ。オレなんか落ち着かないにも程が……」

「アロエリ、郷に入りては郷に従え、というシルターンのことわざがあるらしい。ここにいる間、我慢するぞ」

ちやつかりビオレとアロエリたちの分まで用意されたいた。そして、アロエリとクラウレの分は翼を露出するために背中部分が大きく開いた特注品だったのだ。そのため、アロエリはうなじが露出されて色気を醸し出し、凶らずも周囲の視線を釘づけにしてしまったのだ。

そして、そのまま一同は情報収集に向かうのだった。

そして夕方

「で、集めた情報を纏めると……」

「追い剥ぎは、『その着物、綺麗ねえ』つて声をかけて、その相手に斬りかかってくるらしいで」

「しかも、子供や娘ばかりを狙う悪質な輩らしいな」

「とんだ変態さん、というわけですか」

お茶屋に集まって、一同は集めた情報を纏める。女子供ばかり狙う、ベールの言うこともあながち間違つてはいなかった。

「で、あたしいいアイデアを思いついたんだけど……」

七海が何かアイデアを提案しようとしたが、何故か途中でやめてしまふ。向かいの席に座っていた一人の客に対して、警戒していたよう

だ。その男は一端の剣士のようで、すぐ傍には刀を置いている。

すると、アロエリとクラウレもその男のことを感じ取ったようだ。

(なるほど、あの男が怪しいのか?)

(アロエリ、流石。何かただならぬ物、みたいな感じない?)

(かなり腕が立つようだな。少なくとも、ただの町民などではなさそうだ)

「お三方、どないしたん?」

「七海ちゃんのいいアイデアって?」

小声で話していると、ジョーヌとベールがそんなことを尋ねてきた。確かにジェノワーズは実力が伴っている猛者と言ってもいいが、そのような洞察力とは無縁のようだ(ただし、この場にはないノウハウを除く)。

「ああ、ごめん。ビオレさんと合流してからね」

その後、一同は注文した団子に舌鼓を打って、茶屋を後にするのだった。

その後、ビオレと合流して作戦について話す。が……

「囹捜査なんて、国の勇者にさせられません! ダメです!!」

七海の提案とは囹捜査だったのだ。確かに、勇者は召喚した国では賓客として扱われる。そのため、そんな危険の伴う仕事をさせるわけにいかないのは、当然だった。

そんな中、ジョーヌたちがどうか許可を貰おうと粘る。

「けど、ウチ等そこそこ有名人やし、アロエリたちも翼なんて目立つもん持ってるし」

「その点、七海ちゃんなら適任ですって!」

「ダメです!」

しかし、それでもビオレは折れない。するとそんな中、七海本人が動いた。

「ビオレさん、お願い! みんなが怖い思いしてて、子供も外で遊べないなんて、そんなの嫌だよ!」

頭を下げた後、七海はそのように懇願した。実は彼女が聞き込みをした際、小さな子供から友達が被害に遭ったという話を聞いたのだ。曰く、作ってもらったばかりの新しい着物を取られたらしく、それによって子供の外出は難しくなり、外で遊べる時間も限られてしまったというのだ。

七海は純粹に、その子たちの早く安心させたいという想いで、この囮調査を思いついた次第だったのだ。

「あたしなら大丈夫。エクスマキナだつて持つて来てるから、充分戦えるよ」

「それに、オレ達が空から確実に犯人を抑える。これなら問題ないだろう」

アロエリの言う通りだ。フロニヤルドには動物の耳や尻尾、このアヤセには牛や羊を思わせる角の生えた住人がいる。しかし、今のところ翼を生やした種族は見たことが無い（まだ知らない国にいるかもしれないが）ので、セルクルやブランシール無しで空から奇襲をかけられる、という発想には至らない可能性が高い。

「……言つても聞いてくれないみたいですね。今回は勇者様の意見を尊重しましょう」

「ビオレさん、ありがとー!!」

ビオレが折れたのを聞き取った瞬間、七海はそのままビオレを押し倒す。しかも、そのまま嬉しさのあまりほっぺにチューまでする始末だった。

そして日が沈み切つて夜が訪れた。七海は長髪のウィッグと付け耳で変装し、ベールのような物を被つて顔をわかり辛くし、顔を知られていてもすぐにはばれそうになかった。

「お疲れ様どすう〜」

「夜道はお気をつけて」

しかもかなり板についており、京都弁のような口調で見回りの兵士

達に挨拶していた。

「七海ちゃん、ナイス変装」

「意外な特技もあった物だな。普段のアイツからは、想像がつかない」

「アロエリ、言い過ぎとちやう？」

「お前達、静かにしろ。このまま七海の周囲を警戒しろ」

クラウレはそう告げるとアロエリと共に飛び立ち、ジョーヌとベールもこっそりと七海の尾行を開始した。

しばらく七海が歩いていると、橋に到着。そして、その橋を渡っている途中……

「ちよつと、そこの御嬢さん」

「うちどすかあ？」

いきなり聞き覚えのない男の声が聞こえたので、そのまま振り返る。そこにいたのは、着流し姿に刀を携えた一人の男だった。着物の柄から察して、おそらくは先程茶屋で見かけたあの男だ。それなりに男前だが、耳が猫系でないため少なくともガレット人ではなさそうだ。加えてただならぬ雰囲気纏っているため、警戒に値するのは確実だった。

「綺麗な着物だね」

(この人、やつぱり……)

男の第一声が追い剥ぎ犯と同じく着物を褒める言葉、七海はその男が追い剥ぎ犯だと思い、警戒を強めた。

「そんな恰好で夜道を歩いてちや、襲ってくださいと言ってるような物だろ？」

しかし、直後に発した言葉はむしろこちらを心配しているような物だった。だが、ひよつとしたら安心させてから事を起こすのかもしれない。そう思い、隠れていたジョーヌたちは早速飛び出す。

「犯人確定、ベール！」

「はいな！」

そのままベールは弓で攻撃を放つ。輝力を纏った弓は男に直撃した瞬間、爆発を起こす。

しかし、男は無傷で飛び出してきたのだ。

「！」

直後、今度は上空で待機していたアロエリの矢が飛んでくる。セルファンの彼女は動体視力も優れているのか、気配を悟られないほどの長距離から、下方の男に向けて矢を放ったのだ。

「はああ！」

しかし、男は咄嗟に抜刀、そのまま飛んできた矢を切り裂いてしまったのだ。

「はああああ!!」

しかし今度は七海が手に持っていた和傘で男に攻撃を仕掛ける。だが、男は沙耶でその攻撃を防いでしまい、そのまま和傘も折れてしまった。

「いや、ちよつと待ってくれ」

男は刀を収めた後、そのまま落ち着いた様子で七海達に静止をかけるようにする。

「はああああああああ!!」

しかし直後、上空から男を目掛けて何かが怒号を上げて飛んできた。男は再度抜刀して、それを弾こうとする。

「く!?!」

「ぬうん!?!」

飛んできたのはクラウレで、はるか上空から勢いをつけての刺突を放っていたのだ。しかし、そのまま男は刀でそれを受け止め、そのままクラウレを弾き飛ばす。

(この男の太刀筋、かなりの物だ。出来る!)

着地して、再度構えを取るクラウレは男の剣技が相当の物だと判断して、警戒を強めた。

しかし、今度は七海がエクスマキナを発動して戦闘態勢に入る。

「アヤセを騒がす、連続傷害強盗犯! アタシの変装にまんまと騙されたのが、運の尽き」

「そのとーり!!」

七海の言葉に続いて、ジョーヌとベールが駆けつけて武器を構え

る。ジョーヌは何故か、普段の獲物ではなく刀を携えていた。

「我ら獅子団捜査網が、その顔しかと見届けました！」

「さあ、神妙にお縄につくんや！」

「えーつと………こいつらのノリはともかく、貴様も抵抗するだけ無駄だ」

上空から舞い降りたアロエリが、七海達のノリに茫然としてしまふ。しかしそれでも武器を構えて男に向けるのを忘れないのは、流石一流戦士といったところか。

「ごめんよ、この遊びはまた今度。君達も保護者なら、さっさと彼女たちを連れて帰りなよ」

しかし、男は子供の遊びに付き合うような余裕のありすぎる様子で、話ながら懐から何かを取り出す。出てきたのは見たところ札のようだが、取り出した直後にその札がいきなり紫色に光出した。

「わああ!？」

いきなり札が爆発したかと思うと、辺りを煙で覆いつくしてしまつた。

「くそ、煙幕か！」

「しまった、逃げられてもうた！」

爆発そのものに威力が無く、煙が晴れると同時に男の姿は何処にも見えなかったのだ。

「みんな、手分けして探そう！」

「だな。俺と兄者は上空から探すから、七海達も地上を頼む！」

「了解、アロエリ！ ベール、行くで！」

そのまま七海達はチームを分散し、男の捜索に向かう。しかし、その際にクラウレは先程の男の様子について考えていた。

（あの男の様子、何かおかしい。確かに只者ではないが、あれでは盗みよりも普通に戦興行に出て稼いだ方が得なはず……）

違和感を感じつつも、クラウレはそのまま捜索を続けた。

一方、その頃

「アカン、こつちやない」

ジョーヌは搜索途中、行き止まりに引つかかってしまう。そしてそのまま引き返そうとした途端……

「おねえちやあん」

振り返った先には小さな子供がいた。赤い着物を着たウサギ耳の、おかつぱ頭の少女だった。しかし、幼い少女には似合わない、大きな鉈が右手に握られている。そして、

「その着物綺麗ねえ……ウチにちよーだあい」

そう言つて鉈を振りかざし、ジョーヌに飛び掛かって来たのだ。

（この子がホンマの追い剥ぎ……しまった！）

そう悟つたものの、時すでに遅し。恐怖してそのまま目を瞑つてしまったジョーヌに、刃が迫ろうとした。

「君、大丈夫？」

しかし、一向に切られる様子が無いと思つたとたん、聞き覚えのない女性の声が聞こえる。

ジョーヌが目を開けると、そこには槍を携えた一人の女性がいた。彼女はピンクを基調とした色の服を着て、髪もピンクでそれを後頭部で纏めていたが、ポニーテールではなく広がった特有の髪型をしていた。

「姉ちゃんが助けてくれたんか。ありがとうな」

「いいってことよ。それじゃあ、アタシはぐれた仲間を探してるからこれで」

そのまま女性は、ジョーヌに別れを告げて去つて行つてしまう。

「って、さっきのあの子は!?!」

女性が去つていった後、ジョーヌは慌てた様子で犯人の姿を捜す。しかし、先程の少女はおらず、代わりに一匹のうさぎが気絶していた。「このウサギが変身してたんか……まさか、魔物?」



第39話 魔の刃操りし英雄 monosift  
on

ジョーヌが謎の女性に助けられたのと同時刻、七海は一人で町を疾走していた。

そしてようやくあの男を見つけたのだが……

「え?」

なんと、あの男は七海の方に向かって走っているのだ。訳が分からずついキョトンとしてしまう。

「止まるな、後ろだ!」

直後に男がそう叫んだため、七海はつい気になって後ろを振り向く。そこには、ジョーヌを襲ったのと同じおかつぱ頭のウサ耳少女が鉈を手に迫ってくるどころだった。

そのまま少女が鉈を振りかざして飛び掛かってくるが、七海は間一髪回避に成功する。

「君、下がっているんだ」

謎の男はそのまま七海を下がらせ、自らは例の少女と対峙する。そして、少女が飛び掛かってきたのと同時に紋章を展開した。

「天元伐碎」

呟いた直後に男は居合の要領で抜刀、すぐさま納刀する。直後、少女に輝力の斬撃が浴びせられた。

「飛天・襲狼牙」

最後に技名を完成させ、そのまま襲ってきた少女は地面に激突して爆発する。七海はその光景を呆然として見ていたのだが、直後にアロエリが下りてきた。

「七海、無事か?」

「アロエリ、私は大丈夫。それより、さっきの犯人だと思った人が助けられて……」

直後に二人は襲ってきた少女の方に視線を向ける。しかし煙が晴れた先にいたのは、けものだまではなく人間の子供ほどある巨大なウ

サギだった。

「わかったかい、君達？ 追い剥ぎ事件の犯人は、この魔物だよ。小型だが、人に化ける力を持っているんだ」

「え、この可愛いのが？」

「というか、魔物が着物なんかを盗んでいたのか？」

男は真相を教えた後、気絶していた魔物に札を張る。どうやら、何かしらの封印で力を抑えているらしい。

「こいつらの仲間は何にもいるから、さっきのお友達と一緒に宿に帰るんだよ」

そのまま男は七海達に忠告して去ろうとする。だが……

「な!?!」

「待て。流石に一人で全滅させるには、荷が重いのではないか？」

直後にクラウレが舞い降りてきて、男の進行方向を遮ってしまう。しかも、今の魔物と同種の物を数匹ほど捕まえた状態だった。

「兄者！」

「クラウレさん！」

「二人とも、どうやら無事らしいな」

「はい。けど、それよりも流石です兄者。もう真犯人たちを撃破して捕えるなんて……」

アロエリはクラウレの戦果を見て、ついそんなことを口走る。クラウレのリハビリは順調なようで、アヤセの町一帯の魔物達を倒せるだけの腕っぷしと飛行持続時間を取り戻しつつあるようだった。

「七海ちゃん、アロエリ！」

「二人とも、無事か!?!」

直後に、ジョーヌとベールが駆けつけてきた。ジョーヌは謎の女性 が倒した魔物をそのまま捕まえ、一緒に担いできたようだ。

「私達は大丈夫。それより、二人も無事みたいだね」

「はい。私はさつきクラウレさんに助けられて……」

そう言っ、少し顔を赤らめながらクラウレの方を見る。特に意識

しているわけではなく、どうやら不意打ちを受けたのが恥ずかしいらしい。

「なに、その男が犯人というのが腑に落ちなくてな。それで飛び回っていたら案の定、真犯人が現れたというわけだ。彼女もそのついでに助けてな」

クラウレは男を指さしながら告げる。そんな中、ジョーヌがあることを思い出して、七海に尋ねかけた。

「なあ、七海。さつき鶏冠みたいな髪型の女の人に助けられたんやけど、見てへん？」

「え、何それ？ この人に会うまで、誰にも会わなかったけど……」

「そうか……まあ、強かったから心配いらんと思うんやけど」

男は突然の事態に困惑し、つい尋ねかける。

「えつと……君達は？」

「ああ、すまん。俺達はヴァンネットから追剥ぎ事件の調査に送り込まれた者で、そちらの七海は調査に参加したガレットの勇者だ」  
「……お城の人と勇者、だったのか？」

詳細を聞かされた男は、少し驚いている様子だった。どうやら年若い七海達を城の関係者だとは思わなかったらしい。

「そういう訳だから、オレ達も犯人の捕縛に協力させてもらう」

「見たところあなた、魔物に詳しいみたいなのでこちらからも協力をお願いします」

アロエリとベールの弓使い二人が男に協力を要請、その後にはビオレと町の役人に報告して包囲網を張ることになった。

そして捜査チームは普段の戦闘装束に着替えなおした後、男と共に魔物の討伐に乗り出し始めた。

「この魔物、追剥ぎウサギは群れで行動し、群れのボスが好む物を集める習性を持っている」

「なるほど。少女の着物ばかりが盗まれたのは、そのボスが偶々好んでいたという訳か」

男とクラウレは真面目に話をしているが、魔物のボスの好みを聞い

ているとただの変態にしか聞こえず、つい七海達も顔を引きつる。男同士でそんな会話が成されたからだろうか？

「それで、仲間意識が強いから捕まった仲間がここに居れば……」  
「取り戻しに来るっちゅうわけか！」

その為、男は懐に捕まえた魔物のうち一匹を忍ばせている。

そして、早速魔物が襲ってきたのだが……

「え!?!」

「こ、こんなにな!?!」

「不利と判断して、物量戦で来たか……」

魔物達はなんと、20匹はいると思われる大所帯で襲ってきたのだ。こちらの数が多く、且つ練度も高いためそう判断したのだろうか。

「さっきのお返し、させてもらいます!」

「オレも今回は暴れさせてもらおうぞ!」

直後、ボールとアロエリが弓を構え、ともに紋章を発動する。そしてそのまま弓にエネルギーが充填され、発射準備が完了、同時にアロエリが飛びあがった。

「フラック・アローズ!」

「天陣弓!」

ボールが飛び掛かって来た魔物達に、アロエリが地上を走ってきた魔物達に弓を放つ。ボールの放った矢は魔物をかすめてそのまま飛んでいったかと思うと、上空でUターンしてそのまま魔物に命中したのだ。

対してアロエリの放った矢は魔物達を囲むように地面に刺さっていき、円陣を描いた後でその中央に最後に放った矢が刺さると、巨大な爆発が生じて円陣内の魔物達を纏めて撃破した。

しかし、それでも仕留めきれずに半分ほどの魔物達が襲ってきた。

「ならば、後はオレ達でやるぞ!」

「オツケー! ジョー、行くよ!!」

「合点!」

クラウレの合図と同時に、七海は棒形態のエクスマキナを地面に突

き立て、それをジャンプ台として宙を舞う。そしてジョーヌは、拳に輝力を溜めて地上に待機する。

そして七海は跳び上がってきた魔物達を迎え撃つため、エクスマキナを再度発動して迎撃態勢に入った。

「せーの…」

「虎王拳!!」

七海は襲ってきた魔物をエクスマキナを叩き付けて地上に落とし、待機していたジョーヌがアツパーでとどめを刺す。しかし、それでもまださらに半数の魔物しか倒せず、残りは七海達を最初から無視してクラウレと男の方に向かっていった。

だが、心配する必要はなかった。

「はああー」

「せいー」

男は先程と同じく居合風の紋章剣で薙ぎ払い、クラウレは高速の連続突きで纏めて撃破してしまった。クラウレは当然だが、男の方も相当の腕前だったようだ。

「……ふう。気配がかなり薄くなったみたいだ」

「つまり、ほとんどの魔物を撃破したということか」

ひとまず安心する一同だったが……

「! 気配が急に濃くなったぞ。油断するな!!」

場の空気が急に変化し、男が警戒を呼び掛ける。直後、地響きのような音が聞こえた。しかしどこか規則的なテンポで音が聞こえ、足音の様にも取れた。しかもこちらに近づいているのか、次第に音が大きくなってくる。つまり……

「デカいのが近づいてくるか」

「つまり、ボスが来たってことね」

クラウレと七海の言葉と同時に、一体の巨大な魔物が出現した。群れのボスというのは本当らしく、先程と同じ剥ぎウサギのようだが大きさは2、3メートルはある巨体で、他の個体と違い魔物の姿のまま衣服を纏っている。しかしそれ以上に目を引いたのは、頭に被つ



キナはその衝撃で真つ二つに折れ、そこを見計らって手の甲を払うように叩き付けてきた。

「二七海（ちゃん）!!」

クラウレ達が心配するも、ボスウサギはその隙をついて今度はベールに飛び掛かる。

しかし、あの男が間に入ってそのままボスウサギの爪を刀で防ぐ。

「早く離れろ！」

「は、はい！」

ベールはそのまま男に言われるがままに、その場を離れる。アロエリもチャンスと判断し、七海の救出に向かう。

「さて、これは流石に厳しいかな……」

「だな。大人しく援軍を待って、物量戦で攻めるか……」

男とクラウレが警戒し、揃って得物を構える。直後、ボスウサギはそのまま飛び掛かって二人に迫る。

「スプラッシュュー！」

するといきなり聞き覚えのない少女の声が響いたかと思うと、ボスを目掛けて雷が降ってきた。ボスはそれを諸に喰らって隙が出来たため、七海は咄嗟にその場を離れる。

「大丈夫ですか？」

直後、七海達の前に現れたのは二つの人影だった。それぞれ、胸に割れたハートの意匠が施された服を着た悪魔の少女と長いマフラーを身に着けた、中性的な容姿をした亜人の子供がいた。今声をかけてきたのは亜人の方だ。

「ああ、アーンにディナ！ ようやく見つけた!!」

直後に現れたのは、ピンクの髪の女性だった。それは先程、ジョーヌを助けた人物で、今一行を助けた二人組が、探していた仲間のようだ。ちなみに、先程の槍とは別に剣も持っていた。

「ああ、さつき助けてくれたお姉さん！」

「ん？ ああ、さっきの。で、またピンチの渦中みたいね」

ジョーヌの反応を見て、軽そうな感じで答える女性。直後、アロエリに助けられた七海が女性の存在に気づいて声をかける。

「まさか、あなたがジョーヌを助けてくれた……ありがとうございませう」

「アタシも仲間を探してるついでだったから、いいってことよ。さあて、諸悪の根源っぽいのがつづけますか……貴方達、ここはアタシに任せて」

女性は七海達の前に出てくるなり、そう言う。

「無茶だよ！ いくら何でも一人じゃ……」

七海は女性からだならぬ気配を感じ取り、途中で言葉を遮ってしまう。

「はああああ……」

直後、女性の衣服が徐々に消えて言ったかと思うと、体の各所から赤い線のような模様が浮き出てきたのだ。

そして、そのまま赤い光に包まれていった。

そして

「え……その姿って……」

「へ、変身した……」

なんと、女性は白い鎧を纏ったような姿へと変じていたのだ。そしてその背中には、赤い光の翼のような物まで生えている。しかもその手には、身の丈ほどある片刃の大剣が握られていた。

「それじゃあ、パッと片づけてくるね」

女性はそれだけ言って、ボスに向かって突撃していった。

「ディナ、スペルガードをお願い」

「わかったわー！」

直後にディナが魔力を練り始め、女性に対して体を膜のように覆う



結界のような物を張った。

「アーノ、牽制して」

「はい、クルクルでいくです!」

そのままアーノは、高速回転しながらボスウサギに突撃していく。そしてボスウサギはそれを迎え撃とうと、右腕を叩き付けてきた。

「とおお!」

「グギャアアアアアアアアアア!」

しかし、腕が命中するよりも早く、アーノはボスウサギの懐に潜り込み、そのまま回転タツクルを叩き込んだ。

「アーノ、ありがとう! 後はアタシに任せて!!」

そのまま女性は剣を振りかぶりながら、ボスウサギに向かって行く。直後にアーノが離れ、それを見計らって斬りかかる。

しかしボスウサギは持ち直し、左手の爪でそれを防ぐ。

「結構強いね。けど、アタシだってこんな物じゃないよ!」

しかし女性の剣の腕は確かなようで、すぐさま剣を引いて再度斬りかかる。ボスウサギも咄嗟に防御するが、女性の猛攻とアーノの攻撃によるダメージにより、防戦一方に追い込まれてしまった。

そして……

「ぐがああ!?!」

「爪が折れた!」

「よし、今がチャンス!」

そのまま爪が折れたボスウサギに、女性は一気に斬りかかる。そのまま一気に連続切りに入り、ボスウサギの体力を削っていく女性。やがて消耗が激しくなったようで、ボスウサギが息切れし始める。

「よし、これでとどめよ!!」

そのまま女性は剣に魔力を込め始めたかと思うと、それが一気に増大し、そのまま赤いエネルギー波として剣先から放出され、ボスウサギを飲み込んだ。

「ぎ、ぎゆううう……」

攻撃が終わると、ボスウサギはその場で伸びている姿があった。女性の勝ちが明白だった。

直後、女性の変身が解けて元の姿に戻ると、持っていた剣をくると回転させ始める。

「やったねー」

そのまま剣を持った手でガッツポーズを決める。デйнаやアーノが何も言わないところ、お決まりの勝利ポーズのようだ。

「す、すごかったね……」

「ああ。魔力も剣の腕も、相当の物だったな……」

七海が驚愕し、クラウレもその実力を絶賛する。

「うくむ……どうやらわしらの出番は来なかったようじゃな、犬姫侍」  
「ですね、獅子王侍様。でも、私達でも勝てなかったかもしれないので、これでよかったです」

すると聞き覚えのある声で背後から話し声が聞こえたので、振り返ってみる。

「姫様にレオ様？　なんでここに……」

「というか、その恰好は何だ？」

そこにいたのはミルヒとレオだったのだが、そろって普段と違う格好をしている。ミルヒは桃色がかかった巫女っぽい服を、レオは髪をツインテールに纏めて着流し姿になっていた。

「……それが、会食の時に追い剥ぎの話したらね姫様も一緒に行くってなって」

「それでわざわざ用意までしたってわけだよ」

「折角準備したのに……」

「……であります」

直後にエニシアとギアンもやってきて、事情を説明する。その際に同行していたノワールとリコツタが、しよぼくれていた。仕事を取られたようだ。

「それじゃ、俺はこれで……」

すると男が人の集まってきたところで、何食わぬ顔で別れを告げたのだ。

「おい、流石にそれは水臭いんじゃないか？」

「そうですよ。それにまだお名前も聞いてないんですし……」

アロエリと七海に止められた男は、少し気まずそうな様子だった。

「イスカ様ー！ やっぱりイスカ様でござる!!」

直後に、ユキカゼがやって来て男の名前らしきものを呼んでいた。

「ユキ坊！」

「イスカ様、御無沙汰にござるー！」

イスカと呼ばれた男の方も、どうやらユキカゼと面識があるらしい。再会がよっぽど嬉しいのか、ユキカゼは満面の笑みを浮かべていた。

「魔物騒ぎを感じて駆け付けたでござるが、七海達も無事なようござるね」

「ああ、うん。主にクラウレさんとあの女の人のおかげで……」

突然の事態に茫然とする七海達だったが、どうにか声を振り絞ってイスカの詳細を尋ねることにした。

「ユキカゼ、コイツと知り合いなのか？」

「……騒ぎになっていいると思えば、また兄者の仕業か」

「ほお、これが話に聞いていた兄君ですか。確かに似てますね」

しかし、返事が返ってくるのを待つまでも無くブリオツシユがやって来て、イスカを兄者と呼んだ。隣にいるシンゲンも聞き捨てならぬ言葉を発している。

「あ、兄者って……」

「つまり、ダルキアンの……」

ブリオツシユの兄者発言を聞いて、ジエノワーズとアロエリが呆然とする。

「ヒナ、お前も来てたのか！」

「そ、その名で呼ぶなど……」

イスカの口からブリオツシユとは別の名前が飛び出し、それに反応したブリオツシユはかなり恥ずかしそうにしていた。すぐく珍しい。「あ、紹介が遅れたでござる。こちらはお館様の実の兄君、イスカ様でござる」

「不詳の兄でござるよ」

ブリオツシユが恥ずかしそうに、イスカのことをそう紹介する。すると、そんな中であの女性が声をかけてきた。

「ねえ、そろそろアタシも自己紹介していいかな？」

「ああ、ごめんごめん！ それで、あなたは一体？」

「アタシは……」

「え、エア!? 何でここに……」

「おう、久しぶりじゃねえか」

直後に聞き覚えのない声で、女性の名前らしいものが呼ばれる。そこにいたのは、ドラジェのレザン王子とマグナ達だった。今回はアメルとハサハではなく、ゴーグルを額に嵌めた悪魔の少年がいる。

「マグナじゃない！ 久しぶり、元気してた？」

「そっちこそ。で、エアも勇者として呼ばれたのか？」

「勇者って何？ アタシは武器の材料探しに言った遺跡で、転移装置みたいなウツカリ触っちゃって、気がついたら……」

女性はマグナと面識があるらしく、そのまま話し込んでしまう。その際に、自身がフロニヤルドに来てしまった理由も語られていたが、勇者召喚によるものではないことが分かった。同時に、ドジなところもばれたが。

その一方で、レオとレザンが挨拶を交わしていた。

「レザン王子、久しぶりじゃの。そちらが、貴殿が勇者として呼んだ者達か」

「レオ閣下、お久しぶりですね。そうです、こちらがリンバウムのマ

グナさんとお仲間のバルレルさんです。他にもいるんですが、今は本国で留守番しています」

「そうか。ところで、ライはおらんのか？」

「ライさんもまだ本国にいます。ドラジエの特産品を物色するのに夢中みたいで……」

そのままレオとレザンは話し込んでしまったので、エアは自己紹介を再開する。

「じゃあ、改めて自己紹介ね。アタシはエア・コルトハーツ、こう見えて鍛冶師よ。よろしく」

「コイツの護衛獣やってる、悪魔のディナよ」

「同じく、アーノです。よろしくです」

「コルトハーツ……まさか、魔刃使いの一族か!？」

そんな中、エアの苗字に反応したのはギアンだった。

「ギアン、知ってるの?」

「ああ。彼女はかなり特殊な家計でね……」

「まあ、取りあえず腰を落ち着けられるところで改めては無さそうではないか」

その後、レオに促されて一行は町の集会場に移動する。ちなみに、別エリアでシンクとガウルが他の魔物を掃討しており、彼らも合流するのであった。

「それで、こちらの方はブリオツシユの兄でイスカ・マキシマさん。ブリオツシユと同じ退魔剣士で、旅の一流鍛冶師でもあるんです」

「今までにも、国宝級の名刀をいくつも打って来た天下に名を馳せる男じゃぞ」

「へえ、あなたも鍛冶師なんだね。同業者同士、よろしく」

「いやいや、俺は単なる流しの鍛冶師ですよ。あと、こちらこそよろしく」

ミルヒやレオがイスカの経歴やら功績やらを口にするが、当の本人は謙遜している。ちなみに、マグナ一行やレザン王子は自己紹介済み

だ。

「流しはいいが、頼りも残さないのはどうかと思うぞ？ 何処かで野垂れ死んでいるかと思っただぞ」

「俺がそう簡単に死ぬかよ。それより、お前こそ飲みすぎて体壊したりしてないだろうな？」

「それはこつちのセリフだ。兄者は私より深酒をするからな……」

イスカと話すブリオツシユは、なんとござる口調が消えて一人称も私になっている。かなり珍しい光景だ。

「兄妹同士だから出来る会話もあるということか。アロエリ、お前も彼女に肖って男言葉を外してみてはどうだ？」

「あ、兄者!? いきなり何を……」

アロエリがクラウレの言葉を聞いて、つい驚愕する。そんな中で、エアの力や素性について語られ始めようとしていた。

「で、エアさんのさっきの力は一体なんなんですか？」

「ギアンも何か知っているみたいだけど……」

「ああ、文献とかで見えてね。けど、詳しい本人がいるから直接聞いた方が早いかな」

そして、改めてエアの素性が語られ始める。

「今よりもずっと昔に、シルターンからゴウラっていう召喚獣が呼ばれたんだ。かなり強大な召喚獣だったらしくて、何人もの召喚士を集めてやっと呼べたらしいんだけど、事故で召喚師の内一人に魂の一部が宿ってしまったそうさ。で、それが最初の魔刃使いだそうだよ」

「アタシも人から聞いたんだけど、大体あってるね。で、そのゴウラは魂が欠けた所為で暴走しちゃって、力の源の魔刃って剣を奪って倒して、どうにか封印したの。けどゴウラは数年前にちよつとした事件の後で正気になって、シルターンに帰ったから安心して」

ゴウラの一件はすでに解決済み、そこに一行は胸を撫で下ろす。

「それで、コルトハーツ一族は代々、肉体にゴウラと誓約したサモナイト石を埋め込むことで、その力を行使する異形の姿になる“モノシフト”という力を使えるんだ」

「なるほど。さっきの変身が、そのモノシフトってわけね」

「うん。ゴウラの魂は返したんだけど、力は染みついていてるみたいで今も使えるみたい」

「まあ、魂の力はそこが知れないってことね」

エアがいまだモノシフトが使えることについての推測を離し、デインもそれを肯定する。

その後、事件解決の食事会を取ることとなった。ブリオツシユの姉弟再会ということもあり、酒も振舞われる宴会となった。

「そういえば、あの魔物達ってどうするんだ？」

「やっぱ、消滅か封印でもするのか？」

マグナがふと魔物達の処遇について気になったので、シンク達に尋ねる。その際、バルレルが物騒なことを言っていた。

「まさか、人里から離れたところに逃がすよ。棲み分けが出来るなら、それに越したこともないしさ」

「魔物つつつても、あれくらいなら野生動物と一緒だしな。それに、盗られた着物も無事取り返せたから問題ねえよ」

「なんだ、つまんねえの」

「バルレル、やめろ」

バルレルが空気を読まない発言をしたため、マグナがそれを諫める。

「なんか、今回はいまいち活躍できなかったなあ」

「贅沢言うな。そもそも、お前は町と子供たちの平和を守ることが第一目標だったろ？」

「それもそっか」

七海が不満そうにする中、アロエリに言われて納得する七海。そんなわけで、これにて追い剥ぎ事件は一件落着となった。

「読心の奇跡も源罪も初めて使ったが、思いのほか上手くいっただな」  
同時刻、アヤセの町の上空で一人の男が背に生えた翼で空を飛んでいた。驚くことに、その男の背から生えた翼は『悪魔の翼』と『天使の翼』の両方を備えた、不可思議な姿をしていた。  
「しかし、マキシマ兄弟がいるとはな。早いところ戦力強化を図るか」  
その男は、そのまま上空で誰にも悟られずに飛び去って行った。



第40話 パステイヤージュ英雄王伝説 Rebi  
r t h t h e a r c h e n e m y

ビスコツテイ、ガレット、パステイヤージュの三国共同興行開催が決定。ビスコツテイとガレットから勇者と領主たちが、パステイヤージュ公国にて集結することとなった。また、その際にライ達リインバウムからのゲスト一行も付き添いでパステイヤージュへと向かうこととなった。同時にドラジェ領国との貿易関連の会議のため、レザン王子とマグナ一行もパステイヤージュへと向かう。

ドラジェは立地上の関係から遠征費の問題があり、残念ながら今回の共同興行には参加できない。しかし、特別ゲストとして解説などのため、マグナ達と共に参加するということが決定するのだった。

パステイヤージュのエスナート宮にて。

「では、最後の議題に入ろうかの」

「はい。保留になっていた件ですね」

宮殿に集まった各国の領主たちが会議を行っていた。そんな中で、クーベルがミルヒとレオに話しかける。

「しかし、今日のお姉たちは随分と……つやつつやじやのう！」

そう言つてクーベルはレオとミルヒを見てみると、肌の張りや髪の毛がいつもより良くなっているようだった。

ミルヒも普段とは違う髪の毛のまとめ方をしており、印象がかなり変わった。わっていた。

「クー様こそ、尻尾のしつとり感が……」

「いつにも増してよくなっておるではないか」

ミルヒ達に指摘されたとおり、クーベルも尻尾の毛並が普段以上によくなっていた。そのことについて、クーベルが嬉しそうに話します。

「実は、レベツカが優しくブラッシングしてくれてな。加えてポムニツトが髪もすいてくれて、全身の毛並がスンバラしいことになったんじゃ」

そう嬉しそうに話すクーベルの様子から、勇者及びリインバウム組との関係が良好であることは見て取れた。

「そうであったか。実は儂もなあ……」

話を聞いたレオも、今度は自分と勇者たちとの間にあったことを話し出す。

「七海が地球式のオイルマツサージをしてくれて、加えてミントが肌にいいリインバウムの果実を食事用に提供してくれてのお……おかげで肌もすべすべなんじゃ。おまけにギアンが公務を手伝ってくれて、空いた時間でクラウレが手合わせをしてくれて、おかげで体調もすこぶるいいんじゃよ」

「私も今朝はシンクと湖でいっぱい遊んで、その後で髪も結ってくれたんです。ちなみに、リボンもお気に入りにしちゃいました。あとセイロンさんがストラって技で書類仕事の肩こりも治療してくれたから、同じく体調もいいんです」

レオに続いてミルヒまで何があったか語り出す。こちらも勇者とリインバウム組との関係は良好なようだ。

「結論は、三国いずれも勇者は世話好きの良い者達ということじゃな。そしてリインバウム一行も、同じくらい良き者達じゃな」

「ですね」

「……みなさん、勇者様達が世話好きでいいですね」

三国の勇者たちの話を終えた直後、聞き役に回っていたレザンが口を開く。その様子は、何故か少し疲れているようにも見えた。

その様子が気になり、レオたちはつい話しかける。

「えつと……レザン王子、どうしたんじゃ?」

「何やら、お疲れみたいですけど……」

「ちよつと、マグナさん達に問題がありました。この間の聖ハルヴァーとの戦いで召喚した時は、みなさんとても強くて頼りになる勇者様達だと思っただんですが……」

一度間を置いてから、レザンは再度語り始める。

「マグナさんは誰かが起こしに行かないと昼まで寝るし、それを普段起こしてくれるバルレルさんが昼間から酒盛りするし、アメルさんは

厨房でのお手伝いでどの料理にも必ず芋を入れるし……」

「い、芋ですか？」

アメルの話で芋という単語が出てきて、ついミルヒは聞き返してしまふ。

「はい。本人曰く、『お芋さんはやせた土地でも育って栄養満点なんですから』って嬉しそうに言いながら、どの料理にも分量の差こそあれど芋を必ず入れるんです。おかげで城内の大半の者が食事に飽きが生じてしまつて……」

「えつと、それは……」

「相当好きみたいじゃな。やはり解決するには、よく話し合うしかないさそうじゃのう」

「ですよね……けど、悪いことばかりじゃないですよ」

しかし、表情を切り替えてレザンは再び語り始める。その表情は安心した様子だった。

「戦意外でも時折マグナさんがすごく頼もしかったり、ネスティさんもギアンさんみたく公務を手伝ってくれたり、ハサハちゃんも幼く見えて実はしっかりしてたり……まあつまり、みなさんのところの勇者様みたいにとても頼りになるいい方達ではあるんですよ」

「そうじゃな。アヤセの追い剥ぎウサギたちもかなりの数を退治していたようじゃし、実力や度胸はかなりのものじゃろうな」

「結局、みなさんすごくいい勇者様に恵まれたってことですね」

最後にミルヒのその一言で、この話題は締めくくられたのだった。

その頃、勇者達とリンバウム組はテラスに集まつて談笑していた。ちなみに、ドラジエからマグナ達やレザン王子を送るために、ライとミルリーフも同行していたため、久しぶりの顔合わせとなっていた。

「で、レオ様がとつてもかわいくてねえ！」

「クー様も超かわいいの！ 元気で明るくて、甘えん坊でね」

こちららも勇者達で領主の魅力について話していた。どちらかと言えばカッコいい、凛々しいという評価が出そうなレオにまで可愛いと

いう評価がなされているあたり、かなり親密なようだった。

「はっはっは。領主様達を可愛がるのは勇者の基本だよ、君達」

そんな中で、シンクが妙に上から目線で語りながらアイスティーを口に運ぶ。

「シンク、何で上から目線なの？」

「その喋り方、正直気持ち悪いからやめなさい」

「ソレにシンクだって、姫様のこと可愛がっているじゃない」

「そりゃ、勇者だからね。当然だよ」

「……シンク、流石にオレも腹立ってきた。ぶん殴っていいか？」

「ライ、落ち着けて。七海たちも抑えて抑えて」

「シンク君も、あんまりみんなを煽ったらダメですよ」

七海達幼馴染組だけでなく、ライ達もシンクの様子に苛立ちを覚える。そしてそれをマグナが宥め、アメルが諫めていた。

どうにか落ち着いたところで、七海はあることが気になってシンクに再び話しかける。

「そういえば、イスカさんやエアさんはどうなったの？」

「みなさん元気だよ。イスカさんは風月庵の近くに工房を作るらしくて、そのままダルキアン卿達としばらく一緒に住むんだって。で、エアさんも同じ鍛冶師として、勉強させてもらうために向こうに泊まるってさ」

つまりはエアもビスコッティに滞在するということだ。その言葉を聞いた七海は、彼らに助けられたということだけあって安心した様子である。

「あれ？ そういえば、僕らって今日は仕事ないのかな？」

「そういえば、そうだね。じゃあ、みんなでどこか行ってみる？」

ふとシンクが気づいた時、エニシアが提案をする。しかし、レベツカはそれを聞いて思い出すようにシンク達に告げた。

「それなんだけど、シンクとライさんは後でクー様が合いに来てほしいって。あと、出来ればエニシアとマグナさんもだって」

「俺達もか。ハサハ、行くか」

「うん、お兄ちゃん」

「じゃあ、私はみんなとお風呂行ってますね」

そのまま、アメルやリシエルと別れてライ達はテラスを離れた。

「なんか、ハサハちゃんの尻尾も触り心地よさそうだね」

「ユキちゃんとおんなじで狐だし、きつとフワフワだよ」

去っていくハサハの後ろ姿を見て、七海とレベツカがそんな話をしていた。

「どうぞ〜」

ノックをするとクーベルの声が聞こえたので、そのまま中に入る。

「おお、よく来てくれたのお」

「やあみんな、待ってたよ」

「まったく、待ちくたびれたぞ」

「まあいいじゃないですか、ネスティさん」

クーベルの傍には何故かギアンとレザン、そして黒髪とメガネの青年の姿があった。

この青年こそがマグナ一行の最後の一人、マグナの兄弟子であるネスティ・バスクだ。ちなみに、マグナからの愛称はネスである。

「あれ、ネス達もなんでいるんだ?」

「これから行く場所が、パステイヤージュの言い伝えに由来する遺跡らしくてね。それで、興味があつて僕やギアンも同行することにしたんだ」

「僕は会議が予定より早く終わって、暇だったもので。レオ様やミルヒ姫も、記者会見にいつてしまいましたね」

「なるほどね。で、クー様は何をするつもりで?」

「それは行ってからのお楽しみじゃよ」

その後、人数が思ったより多かったため、至竜形態のミルリーフに

乗って移動となった。

「おお、流石は竜じやな！ ミルリーフ、すごいのお!!」

「クー様、ありがとう。けど、やろうと思えばもっと早く飛べるよ！」  
「ミルリーフ、それ以上早く飛んだらオレらが振り落されるから」

そしてやって来たのは、巨大な石柱が立った不思議な丘だった。

「な、なんだここ？」

「ここは英雄王の丘といってな」

「英雄王？ なんかすごい仰々しい名前だな」

クーベルから聞いたこの場所の名前を聞いて、マグナは正直な感想を述べる。

すると、クーベルがこの場所のいわれを説明し始める。

「英雄王とは、パステイヤージュ公国建国の祖で、ウチのご先祖様に当たるお方じや。かつてこの地に魔物が現れ、人々が危機に陥った時に当時の領主様は勇者召喚を行った。召喚に応え現われた勇者様は魔物を打ち倒し、ついには魔物たちの王をも撃破して世界に平和をもたらしたのじや」

「あ、その話なら聞いたことがあります。結構有名な伝説ですよね」

パステイヤージュ異国にも伝わっているあたり、どうやら結構有名な伝説らしい。そして、それを聞いてギアンやネスティは、リンバウムにも伝わるある伝説を思い出した。

「なるほど。エルゴの王みたいな伝説の英雄ってわけだね」

「エルゴの王？ 何じやそれ?？」

「大昔にリンバウムと四世界の戦争を止めた伝説の英雄ですよ。詳しく話すと長くなるから、また今度ということだ」

「わかった。すぐく気になるが、今はこっちの話じやな。で、召喚を行った領主様は戦いの中で亡くなってしまったのじやが、遺言で勇者が新たな王となり、白き英雄王として人々の希望を担ったそうなんじやよ」

「え？ つまりそれって……」

今の話を要約すると、クーベルはフロニヤルドの住人と地球人がつ

がいになって生まれた子、その子孫ということになる。ライやエニシアが該当するある存在が思い当った。

「クー様は響界種の末裔なんだね」

「あろ、ざいど？ また聞いたことのない言葉じゃのう」

「またリインバウム特有の単語ですか？」

クーベルもレザンも首を傾げる。それもそうかと思いつつ、ギアンが自ら説明を始めた。

「響界種は平たく言えば、異なる世界の種族同士のハーフという意味なんだよ。悪魔とのハーフであるポムニットや、妖精とのハーフであるライとエニシア、僕も幽角獣という幻獣を父に持った響界種なんだよ」

「異世界同士のハーフ、ですか。なんとというか、ワールドワイドですね」

「世界の垣根を越えて生まれたせいかな、響界種は種族単体よりも魔力等の力が強大なんだ。けど、人間ベースの響界種が多いためか、成長し切る前に力に耐えきれないで死んでしまうケースもあるんだよ」

「うむ、それはとんでもない……けど、ウチは早逝したご先祖様達の話は一切聞いたことが無いのじゃが……」

再び首を傾げるクーベルだったが、すぐにギアンがある仮説を述べた。

「たぶん、フロニヤルドの住民は魔力や特異な力を持たない場合が多いのが要因だと僕は思うね。ユキカゼのような土地神ならともかく、普通の住民たちはメイトルパの亜人のような突出した身体能力も、不可思議な力も無いしね」

「なるほどのう……戦自慢のガレットならともかく、運動が苦手ですう言った特異な力ともパステイヤージュ国民ならそう言うこともなさそうじゃの」

そしてクーベルは納得したところで、先程の話を続き始めた。

「そして、ここは英雄王が眠る土地であると同時に魔王が封印された場所でもある。英雄王様は、眠りの中で今も魔王の封印を守り続けておられるそうじゃ」

「え……それって、結界か何かで封鎖したほうがいいんじゃない？」

クーベルの口から聞き捨てならない言葉が出てきたため、マグナが咄嗟に反応する。かつてマグナ達が倒した、虚言と奸計を司る悪魔王メルギトス。彼も大昔に、マグナの先祖たちによってアルミネスの森という場所に封印されていたため、邪悪な存在は出てこれないようにするのは当然の措置の筈だ。

「ええ。珍しくマグナが正論を吐いたんですから、今からでも誰も立ち入れないようにした方がいいのでは……」

「まあ待て。ここにはそれとは別に、英雄王の継承者が石碑に触れると素敵な奇跡が起きる、という言い伝えもあるのじゃよ」

「えっと……それもあるから封鎖はあえてしていない、と？」

「まあ、そうじゃな」

ネスティはつい頭を抱える。その封印された魔王というのがどれほど危険な存在かはわからないが、封印されているからにはフロニャルドに害意を持っている可能性は大きい。その封印を「素敵な奇跡」などという、眉唾物のような伝承の為に人が立ち入れる可能性のある状況で放置するのは、何時封印が説かれるかという危険が高かった。

そんな中、クーベルが石碑に近づいて行く。

「で、それでウチも石碑に何度か触れてみたんじゃないが……」

そう言つてクーベルは、早速石碑を触ってみる。すると、クーベルが振れた箇所を中心に不思議な光を発する、幾何学的な線状の模様が浮かび上がってきた。ライ達もつい見とれてしまうが、すぐにその模様は消えてしまう。

「こんな反応をして、それで俺らを呼んだわけですか。レベツカや七海にも触らせたんじゃないが、無反応でのお」

「なるほど。それで俺らを呼んだわけですか」

「今のところ触つたのが女の子だけだから、男の勇者であるシンクか、オレらリインバウムの住人なら違う反応も考えられるってわけか」

「あ、じゃあ僕が先に触らせてもらいますね」

「あ、コラー！」

ネスティが静止をかけるも、シンクはそのまま石碑に近づいて触つ



てしまう。しかし、無反応であった。

「そうじゃ。一緒にはまだ触っておらんかったな」

するとクーベルが何かに気づいたように、シンクの手の上に自身の手を重ねてみる。すると、先程よりも強い光を発し始めたのだ。しかも、例の幾何学的な模様が石碑全体に浮かび上がるという、大きな変化まで起こった。

「な、なんか共鳴してる!?!」

「本当に、奇跡が起きるのか!?!」

『継承者承認。封印を解除します』

「え? 今、聞き捨てならない言葉が……」

石碑から電子音声のような物で「封印を解除」という言葉が確かに発せられた。ライ達は嫌な予感を感じ、警戒して石碑の方を凝視する。すると、石碑を中心に巨大な光の柱が出現したため、ライはミルリーフを、マグナはハサハを、シンクはクーベルをそれぞれ守ろうと、咄嗟に覆いかぶさる。

「……何も起こらねえな。ミルリーフ、無事か?」

「だいじょうぶだよ、パパ」

「……お兄ちゃん、ハサハも大丈夫」

「そっか、よかった。でも一体、何が」

「気を付けてください、何かがあります!」

お子様たちの無事を確認して、安心するライとマグナであった。しかし直後に、レザンが石碑の傍に人影が出現したことに気づいて警戒を呼び掛ける。

「なんだよ……人がせっかくいいい気分でしたのに」

忌々しそうに呟いていた人影は、声音からして男のようだ。そして先程の余波で舞い上がった土煙が晴れると、その容貌が明らかになった。

「……え?」

「ミルリーフ（ハサハ）、見るな!!」

「クー様も見ないで！」

「何じゃ!? 何も見えん!!」

現れたのは銀髪で体に不気味な文様を刻み込んだ、“全裸”の男であった。子供の教育上悪い要素しかなかったため、クーベルを含めたお子様たちは咄嗟に目隠しをされる。お子様を除いて唯一の女子だったエニシアも、顔を赤くしながら自身の眼を隠す。

「アデルは？」

男は周りを見ながら、人の名前のような物を呟く。そんな中、ギアンはナイフを抜いて構えながら男に問いかける。

「君は何者だ？ 何が目的で、全裸でエニシアたちの前に出てきたんだい？」

「アデル抜きで俺だけ目覚めたってことは……こいつは繊細一隅の好機!!」

「貴様、僕の話を……」

「ギアン、落ち着いて。貴方、よければ話を聞かせても……」

エニシアがどうにか指の隙間からわずかに覗き、男の下半身を見ないようにして問いかける。

しかし男はエニシアの言葉も無視して右手を天へと掲げたかと思うと、そこから黒いエネルギーが発せられた。そしてそれが男の体に纏わりついたかと思うと、そのまま衣服へと変化する。黒を基調とした、マント付の悪者臭いデザインの服だった。

「そのガキども、ちよつとこい」

「話無視して命令って、何様のつもりだてめえ」

「ライさん、落ち着いて。で、あなたは一体？」

男の傍若無人っぷりに苛立っていたライをシンクが宥め、再度男に問いかける。すると、男はマントを翻しながら名乗りを上げた。

「俺の名は、ヴァレリア・カルバドス。人は俺を、魔王と呼ぶがな!!」

「ま、魔王……だと!」

「やっぱりここは封鎖しとくべきだったじゃないか!!」

まさかとは思っていたが、魔王が復活してしまい、ネスティも憤慨

する。あまりの事態に、ライ達は武器やサモナイト石を構えて臨戦態勢に入る。しかし、いきなり魔王が右手に黒い紋章を発現し始める。

「ガキども、この魔王の束の間の自由のために……」

直後、ライ達の足元に同様の紋章が発生した。

「な、速い!?!」

「しまった!」

「貴様らの命、捧げてよこせええええええ!!」

そのまま魔方阵から強い光が発せられ、ライ達はそれに飲み込まれてしまった。

「うつぶ……近頃のガキは輝力のポリウムがあるな」

何やら満足そうな様子で、魔王は腹をさすっている。その後ろでは、シンクとクーベル、レザンとネスティ、そしてエニシアとハサハが目を回して倒れていた。

「さて、腹も膨れたことだし早速……」

「待ちたまえ、君」

「……え?」

魔王はどこかへ行くこうとした時に背後から声が聞こえ、つい振り返ってしまう。そこには、ライとミルリーフ、ギアンとマグナが立っていた。特に、ギアンは禍々しいオーラをバツクに怒りの形相で立っていた。

「オレらの仲間に出して、このままで済むと思うなよ」

「な!?! お前ら、俺の魔王紋を喰らって何で……」

「人より頑丈な体質でね、呪いとかそう言うのが効きにくいんだよ。それより、さつき君は命をよこせて言ったよね」

「え? ああ、そう言ったが……」

「へえ……遠慮はいらないな。ライ、マグナ、ここは僕に譲ってくれないかな?」

「ああ。エニシアたちの安否も確かめたいし、任せる」

「ありがとう。それじゃ、まずは君にならって自己紹介しようか……」

ライと話しを付けたギアンは、さらに禍々しいオーラを立ち昇らせ、そのままナイフから長剣に持ち替える。

「僕の名はギアン……」

魔獣調教師ギアン・クラフトスだ!!」

直後、ギアンの眼が赤く染まり、額に歪んだ形状の角が生えてきた。この角こそが幽角獣との響界種である証で、ギアンに自己再生能力を与える力の源であった。

「な、なんだその姿……」

「貴様が知る必要などない!!」

直後にギアンの両目から不気味な光が発せられる。そして、それを浴びた魔王の体に異変が生じた。

「な!? 体が、動かない……」

「他者の動きを封じる邪眼だ。諸に喰らって動けなくなるのは当然だろ」

直後、ギアンは魔王の目前にまで迫っており、そのまま剣で斬りかかるうとしていた。

「ちっ、舐めるな貴様!!」

直後、魔王の体から輝力のような黒いエネルギーが生じて、ギアンを弾き飛ばす。やはり魔王を名乗るだけあってか、一筋縄ではいかないようだ。

「ふっ、ならばこれを喰らうがいい!!」

ギアンも今のは予想はしていたようで、吹き飛びながらコートの下から大量の暗器を出して投げつける。

しかし、直後に魔王は防御結界のような物を出してそれらを防ぎきってしまった。

「この程度の奇襲、口ほどにも……って、なあああ!?!」

直後、顔から左右に伸びた刃状の牙を持った猪だった。猪は牙で切り付けてきたが、魔王は咄嗟にそれを両手で押さえってしまう。

「奇襲に呼んだブレイドボアの攻撃も防ぐか。ならレミエスで一気に入……」

今の猪もメイトルパの幻獣で、ギアンが召喚したようだ。そして、今度は切り札のレミエスを召喚しようと思いのサモナイト石を取り出す。しかし……

「せっかくの自由、こんなところで無駄にしてたまるか!!」

「あ、待てー!」

魔王は戦闘を放棄してそのまま逃げ去ってしまう。

「逃がしたか……まあいいか。ライ、エニシアたちの容態は？」

しかしギアンも気持ちを切り替えて、エニシアやシンクの安否を確かめに行く。

「ギアン、みんな無事みたいだ」

「はい……なんとか立てそうです」

シンクも疲労は見えているが、危篤状態には到底見えなかった。直後、同じく起きていたレザンが何故かという推測を告げた。

「たぶん、あの魔王は輝力を吸収したんだと思います。あれはフロニヤ力と生命力を混ぜて作るエネルギーですから、盗られて疲労するのは当然かと」

「なるほど……で、あの魔王は何で逃げたんだ？」

「魔物の王なら、いくらギアンでも一人くらいなら余裕で倒せそうな気もするんだけどな……」

魔王の謎は深まるばかりだが、今はメンバーの回復を優先し、魔王を倒すために万全の状態にしておくことにした。



見て、魔王は愉快そうに笑っていた。

「はーっはっはっは！ 眼福眼福！… さて、次は…」

ひとしきり裸体を満喫した魔王は、そのまま飛び去って別の場所へと向かって行く。

その頃

「いやあく、バルレルと言ったか小僧？ 見た目の割に、いける口ではないか」

「あたぼうよ。俺は今じゃこんななりだが、百年以上は生きてるんだぜ。そこらのニンゲンよりはっええ自身はあんだよ」

宮殿の廊下でバルレルとゴドウインが酒瓶片手に談笑している。二人とも顔がほんのりと赤いため、それなりに飲んでいるようだ。

「ん？ 何の騒ぎだ？」

「あそこで喚いているのは、城のメイド達か？」

そして近寄ってみると、そこはちようど魔王がメイド達を相手にスカート捲りをしている最中であつた。

「絶景かな、絶景かな！ さて、他にもメイドはいるから楽しませてもらおうか!!」

そのまま魔王は、右腕を払うような仕草と同時に強風を起こす。どうやらこれでスカートをめくっていたようで、反対側やバルレルたちの後ろから来たメイド達のスカートが次々とめくられる。

「な!? あの男、破廉恥な……」

「ああ、そーいやあんた嫁がいるとか話してたな。じゃあ、独り身の俺はこの状況を楽しませて……」

ゴドウインの驚愕の事実が判明する中、各々が異なる反応を見せる現状。だが、その時にそれは起こつた。

「あ、酒が!?!」

その時、バルレルたちの持っていた酒瓶が風で吹き飛び、壁にぶつかって割れてしまった。中身がまだ半分以上残つたまま。しかもゴドウインは、もう一本持っていた未開封の物まで吹き飛んでしまふという事態だつた。

「さーて、絶景を楽しませてもらったことだし、今度は風呂場でも……」

「……おい、待てや」

そのまま魔王が去ろうとするが、バルレルが呼び止める。

しかし、バルレルはゴドウイン共々凄まじい怒気を放っており、その姿は禍々しく見えていた。

「てめえ、俺の酒を……。パステイヤージュ原産の最高級果実酒をよくもおじゃんにしてくれたな」

「エリーナへの、妻への土産まで台無しにしおつて……」

「へ?」

バルレルとゴドウインのあまりの怒気に、魔王はつい呆けてしまう。バルレルの怒りは完全に自分勝手なものだが、ゴドウインはいかに愛妻家なのが伺えた。

「俺達の怒り、思い知りやがれええええええええええええええ!!」  
バルレルは何処からともなく呼び出した槍を、ゴドウインは愛用の鉄球斧が無かったので己の拳を振るい、魔王に飛び掛かる。

「うおお! 今度は何だ!」

「よそ見している場合じゃねえぜ、スケベ野郎!!」

ゴドウインの拳を避けた魔王に、バルレルはすかさず刺突を放つ。しかし、魔王はバルレルの槍を掴んで攻撃を阻止してしまった。

「ちっ……人の楽しみを邪魔するんじゃないぞ!!」

「ぬわああ!」

魔王はそのまますさまじい怪力を発揮し、バルレルを槍ごとゴドウインに向けてブン投げてしまう。

「せっかく一人で目覚めたと思ったら、妙な邪魔ものどもに何度も会うとはな。まあ、ここでおさらばさせてもらうか」

そのまま魔王は、二人が起き上がる前に窓から飛び出してどこかへと去ってしまう。

「あの野郎……ぜってえに見つけて八つ裂きにしてやる」

「物騒なこと言うガキだな……メイド達、早いところ騎士団や閣下たちに侵入者のことを伝えろ。俺達はいっつを追う」



バルレルの様子に一瞬引いたゴドウインだったが、すぐさまメイド達に指示を出して二人で魔王の捜索に向かつて行った。

く大浴場く

「はあく……やっぱりでつかいお風呂はいいわね」

「本当ですね……」

リシエル達残っていた女子一同は、宮殿の大浴場にいた。肩まで浸かって、御満悦状態だった。

しかし……

「きやあ?! 誰かいる!!」

入浴中の少女の内一人が、天窓に人影あることに気づいて叫ぶ。案の定また魔王で、天窓を突き破って堂々と入り込んできたため、大浴場にいた全員が悲鳴を上げた。

「はっはっはっは。騒ぐな娘達、俺に素肌を見せてよい」

そのまま魔王は意味不明なことを言いだし、入浴中の女性達に近づいて行った。

「何ふざけたこと言ってるのよ、あいつ」

「リシエル、まずはアタシに任せて下がって」

リシエルが憤慨しながらサモナイト石に手を伸ばすが、直後に七海が静止をかけてエクスマキナを発動、ブーメランの形状に変形させた。

「エクスマキナ・ブーメランスラッシュ!!」

「ふっ、この程度……がああ!」

魔王はブーメランを避けようついていたが、不規則な動きで飛んできたために対応できず、そのまま顔面に喰らってしまう。

「バレットカード、セット!」

そして追撃と言わんばかりに、レベツカもバレットカードを魔王に目掛けて投げつける。カードから発せられたエネルギーが光線状になり、それが魔王に命中した。

「とどめは貰うわよー!」

そして待つてましたと言わんばかりに、リシエルがサモナイト石を使って召喚術を発動する。

「召喚、ウインゲイル！」

召喚されたのは、両腕が大型の扇風機になっているマシンだった。そして、その召喚獣ウインゲイルは魔王に向かって強風を起す。

「な、なんだコイツ……って、うおおおおおおおおおおおおお!!」

そのまま魔王は吹き飛び、最初に侵入した点までに押し戻されて一気に吹っ飛んでいった。

「たぶん、あいつはまだ無事ね。追いかけてとっちめるわよ!!」

「リシエルに賛成！ 行こう、ベッキー」

そのままリシエルに先導される形で、七海達も後を追う。

そんな中、先程から会話に全く参加していなかったアメルはあることが気になっていた。

（あの人、邪悪な感じは全くしなかった……スケベだけど、悪い人じゃない？）

---

その頃、宮殿内の庭園でレオとミルヒがお茶をしていた。

そんな中……

「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

リシエル達に吹き飛ばされた魔王が、その近くに落下してきた。

「痛て……妙な連中からの妨害が続きやがるな。今の時代、何が起こってやがる？」

起き上がって呟く魔王だが、流石に総攻撃が聞いたようで若干ボロボロであった。

「なんじゃ、あいつ？」

「怪我をされてるようですが……」

レオたちは突然降ってきた魔王の様子に、ついキョトンとしてしまふ。

しかし直後

「ええ!？」

「何じゃ、一体!？」

「こ、今度は何が……ぎゃああああああああああ!!」

空から無数の光線が飛んできて、それが魔王に降り注いだのだ。

「姫様、無事かああああ!!？」

「僕達が戻ってきたから安心してくださああああい!」

「ら、ライさんにシンク?」

空からライ達の声が聞こえたので見上げると、至竜形態のミルリーフが飛んできていた。どうやら光線を放ったのは、ミルリーフだったようだ。そしてミルリーフは着地と同時に人間態になり、ライ達もそのまま地面に降り立ってミルヒ達に駆け寄る。

さらに今度は、ルシアンと晶術騎士団たちが駆けつけてくる。そして先頭には、バルレルとゴドウインの姿があった。

「姫様、閣下、無事ですか!？」

「こちらに不審者が向かったという報告を受けましたが、お二人とも無事でしょうか!？」

ルシアン達がミルヒやレオに声をかけた直後、光線が降り注いだ影響で出来たクレーターの中心から、魔王が起き上がってくる。相当タフなようで、目立つ外傷どころか装備破壊すらしていないのが伺えた。

しかし、それでもひるむことなく騎士団はクレーターの縁に立ち、中心にいる魔王を包囲した。

「見つけたぜ、うさんくせえ恰好の亜人野郎。今度こそ八つ裂きにしてやるぜ」

「流石に八つ裂きはやりすぎだが、貴様をひねりつぶさんと怒りは収まらん」

バルレルとゴドウインは怒り心頭のように、得物を構えながらかなり物騒な発言をしている。その様子に騎士団一同もドン引きしていた。

「えっと、気を取り直して……その人、痴漢及び盗撮の容疑で逮捕します!」

「へ、痴漢?」

「ま、魔王なんて名乗ってるのにみみっちいことしてるな……」

「なんか、さつき激怒したのが恥ずかしくなってきたんだが……」

ライ達も流石に予想外だったため、魔王のやったことを聞いて思わず固まってしまふ。ギアンまで頭を抱える始末だった。

すると魔王は立ち上がり、何やら苛立った表情となっている。

「誰が痴漢だ! ……よく聞け、人間ども!!」

直後に魔王が指を鳴らすと、なんと空が曇り始めた。得体のしれない相手に動揺が走る中、魔王は赤黒いオーラを纏い始める。

「我が名は、魔王カルバドス!!」

『うわああああああああああああああああ!!』

再度名乗ると同時に右手を払う仕草をすると、魔王は周囲へと衝撃波を放つ。あまりの威力に、その場にいた全員が吹き飛ばされてしまふ。

「恐れよ、そして崇めよ」

全員が倒れ伏す中、魔王は告げた。そしてそんな中、どうかにか一同は立ち上がる。

「だいじょうぶか? ミルヒ、エニシア」

「はい……ああ!」

「た、確かあれって……」

するとミルヒ達は視線の先にあるものが映る。先程の衝撃でミルヒの神からリボンが外れ、呑み掛けのアイスティーもかかって汚れてしまっていたのだ。このリボンはミルヒ自身がお気に入りとして語っていたが、昨年リコッタからプレゼントされた物だったのだ。そんなものを台無しにされてしまい、ミルヒはショックを隠せず、再開してすぐにそれを聞かされたエニシアも心情を察して辛そうな顔をしていった。

「感じるか、本能に訴える恐怖を! 平伏して許しを請う気になったか!」

そんな中でも魔王は演説の様に周りにいる全員に告げる。先程で小物のように感じられていたが、前言撤回で魔王を名乗るに相応しい

悪人だと場にいた全員が確信した。

そんな中、シンクがライに声をかける。

「ライさん」

「ああ、気に入らねえな」

「はい。女の子を脅して泣かして……」

「嬉しそうに笑ってやがる……」

「その腐った根性が気に入らねえ!!」

そしてライとシンクは怒りの表情を浮かべ、同時に駆けだして魔王に殴りかかろうとする。

「はーっはっはっはっはー! 我は魔……ぐおお!」

「え?」

しかし、それよりも早く誰かが魔王に殴りかかり、魔王は城の壁に激突した。そしてその人物は、マグナだった。

「ま、マグナさ……!」

ライ達は横からマグナの顔を覗き込むが、その表情を見て驚愕する。

「若造が、舐めるな……!」

復活した魔王もマグナに詰め寄ろうとするが、同じく表情を見て固まった。

「お前……アイツと同じか」

マグナの表情は、ライ達のそれとは比較にならない、憤怒の表情を浮かべていた。

そのわけは、マグナの脳裏によみがえったある光景にあった。

『アメルさん、貴女という人は……つくづく愚かですねえ!!』

人の恐怖を煽り、その様を楽しむ様子は

『貴方の持つ魔力を血識としてねえ!!』

『愚かな召喚師たちは自分達の所為だと思っていたようですが、それ

もまた私が偽りの記憶を与えてそう思わせていただけですよ」

『いーひやはははははー!』

先祖との因縁を持つ、怨敵の姿と重なった。

「お前も、人の心を弄んで楽しむ最低最悪なやつなのか!!」

マグナの怒号と同時に、凄まじい魔力がマグナの体から湧きたつ。大気が震えるほど強大なそれは、かつて運命を律するとまで言われた伝説の召喚師の血筋の証でもあった。

「みんな、無事!?!」

「つて、これは一体……」

直後に七海達が駆けつけるが、事態が事態だったため動きを止めよう。

「みんな、手を出さないで欲しい。たぶん、俺はこいつに手加減できねえと思う」

マグナの驚くほど静かで、それでいて煮えたぎったマグマのような熱い何かを感じる声に、ライ達を含めて全員がそれに従った。

そんな中、クーベルは下がる前にマグナに声をかける。

「マグナ、本当は英雄王の子孫としてウチが立ち上がりたかったが、なにかあるんじゃない。それに免じるが、代わりにウチの分もがんばってくれ」

「ありがとう、クー様」

クーベルは強い意志を感じる瞳をしており、本当は自分も戦いたかったというのが伺えた。しかし、それでいてマグナを信じ、彼に全てを託すことを決意したのである。

そんな中、バルレルにまず声をかけてきた。

「バルレル、力を開放する。暴れるぞ」

「へへへ、待ってたぜえ」

「お兄ちゃん、ハサハもいく」

「おい! お前はともかく、そっちは……」

直後にゴドウィンが静止をかけるが、バルレルもハサハも効く耳を持たずにマグナに近寄る。直後に、マグナは右手を天に掲げた。

「行くぞ、神剣エルシード!!」

マグナが叫ぶと同時に、右手の中指にハマっていた指輪状態の宝剣が煌めき、刃渡り2メートルはある巨大な剣に変化した。ドラジエの宝剣を使いやすい形で発現した結果、マグナは普段から振るっている大剣の形で発現したというわけだ。

「バルレル、誓約解除！　ハサハ、輝力充填！」

直後にバルレルの体からサプレスの属性を秘めた紫の魔力があふれ出し、ハサハは背中に展開された紋章からマグナの発する輝力を吸収する。

そしてそのまま二人はサプレスの紫、シルターンの赤の魔力光に覆われる。そしてそれがはじけ飛んで中から現れたのは……

「ふふふ……ひゃっはははははははははは！　狂嵐の魔公子、復活!!」

青年の姿で高笑いを浮かべるバルレルと、大人の女性の姿になったハサハの姿だった。ハサハは面影が残っているが、バルレルは細身でありながらしまった肉付に、側頭部に生えた角と元よりも立派な翼、そして額に開いた第3の眼といった面影が感じられない姿であった。あまりの変貌ぶりにライ達全員が驚愕する。

魔王も動揺しつつ、マグナ達に啖呵を切る。

「て、てめえはいったい何者だ！　魔王の俺が言うのもなんだが、そんな禍々しい奴従えてるって……」

そんな魔王に対し、マグナはエルシードを構えなおして名乗りを上げた。

「俺はマグナ・クレスメント。蒼の派閥の召喚師兼ドラジエ領国の勇者で、またの名は……」

運命を超えし物、超律者だ!!」  
ロウラー

## 第42話 決着、VS魔王カルバドス Lower

i s Winner

「行くぞ、バルレル!!」

「よっしゃ、暴れるぜ!!」

マグナは青年化したバルレルと共に、強大な魔力を纏いながら魔王へと突撃していく。そして手にした得物で斬りかかった。

「くそ、舐めるな!」

対する魔王も、黒い輝力を両腕に纏わせてマグナ達の攻撃を防ぐ。しかし、マグナは再度剣を振るい、バルレルは一步引いて刺突を放ち、絶え間なく攻撃を加えていく。

「流石に二対一は攻撃が激しいな。だが、このままでは決定打に欠け……うおお!!」

直後に魔王の頭上目掛けて雷が落ちてきたため、そのまま飛び退いてしまう。しかもその雷は、落ちた個所が

「お兄ちゃん達を、傷つけさせない!」

雷を落としたのは、どうやらハサハのようだ。ハサハは元々このような技に長けた妖怪なのだが、大人の姿になったことで威力が向上したという。

そしてハサハの追撃が終わったのを確認すると同時に、今度は魔王が攻撃に入った。

「なめんじゃねえ、ガキどもが!!」

魔王は近くにあった木を引っこ抜いてしまったのだ。素の身体能力も高いようで、まだまだそこが知れなかった。

魔王がその木を投げつけたと同時に、マグナは懐から二つのサモナイト石を取り出す。しかし驚くことに、そのサモナイト石は赤と紫の属性が異なる石だったのだ。

「来い! ブラックラック&金剛鬼!」

それによって召喚されたのは、黒い布の中に頭蓋骨のような頭がいくつも浮かんだ不気味な姿の悪魔と、巨大な金棒を携えた鬼だった。



それぞれ沈黙と恐怖を司る中級悪魔の化身と、原初の鬼族に分類される、決して弱くない召喚獣だ。

そして、金剛鬼が飛んできた木を金棒で粉碎し、ブラックラックが魔王の懐に魔力の爆発を起こして攻撃していく。

「ぬおおお!?! 今のは召喚……けど勇者じゃない何か……」

「よそ見してる場合か、おい!」

魔王が驚いている間に、バルレルは近づいて追撃をかけ、ハサハがそれに合わせて雷撃を叩き込んでいく。

「このまま追撃行くぞ。行け、テテ&ゴレム!」

更にマグナは黒と緑のサモナイト石を取り出し、それでも召喚術を行使した。これでマグナは、全ての属性の召喚術を使ったことになる。

「ま、マグナさん凄い……」

マグナの凄まじい力に、ライもシンクも驚愕する。そんな中、上空から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ライに御子様、大丈夫ですか!?!」

「助太刀に来てやったが、何やらそれどころではなさそうだな」

駆けつけてきたのは、リビエルとクラウレだった。クラウレはリハビリのついでにレオ達と同行してきたのだが、その際にリビエルに国の案内を頼んでいたため合流が遅れたのであった。

「あの男は、たしかドラジエという国に勇者として呼ばれた召喚師の……」

「魔力も強大ですが、全ての属性の召喚術を使えるのが凄いですわ」

「本当だ。まるでライさんみたい」

「あれが調律者ロウラーの、クレスメントの血を引くマグナの力だ」

マグナの凄まじい力を目の当たりにして茫然とする一同に、先程から黙っていたネスティが声をかけてくる。

「調律者……マグナさんも言ってたけど、なんなんですか?」

「かつて、ラインバウムに侵略行為を行った一体の悪魔がいた。クレ

スメントはその悪魔をリインバウムに招き入れる代りに、強大な魔力を与えられた一族の名なんだ」

シンクがふと、先程から何度も耳にしたその言葉についてネスティに尋ねる。するとネスティはいきなり語り始めた。

「しかしその悪魔、虚言と奸計の悪魔王メルギトス」の侵略を知った当時のクレスメント家の召喚師たちは、その助力をしたことへの罪の意識と恐怖から門を閉鎖した。けど魔力はその後も残って、あまりにも強大だったために周囲はそんな尊称を付けた。『運命を律する者』という、尊大すぎる異名をね」

「メルギトス……本人も強大な魔力を秘めています、それ以上に狡猾さで恐れられる上級魔王ですね」

リビエルの言葉に「ああ」と短く返事を返すネスティ。流石にサプレス出身であるリビエルは、メルギトスがいかに恐ろしい悪魔かを知っているようだ。

「その後も色々とおあって、クレスメントと僕の一族は共にある罪を犯してしまった」

「罪？ それに一族って……」

首を傾げるシンクを見て、ネスティはいきなり服を、ハイネツクの際のような部分をめくり出す。

「え!？」

「ネ、ネスティさん……」

「その体……何なんですか?」

「その魂の輝き方……あなた、人間ではありませんね」

シンク達は思わずギョツとした。ネスティの肌には、なんと金属光沢を放つ幾何学的な模様が浮かんでいたのだ。しかもあとから植えたものではなく、完全に肌と一体化しており、ライ達ですら驚愕してしまう。リビエルも魂を見れる天使の特性から、彼の正体にいくらかの察しがついたようだ。

「僕は元々融機人<sup>ベイガ</sup>という、細胞レベルで機械と融合したロレイラルの種族なんだ。僕の祖先が戦争で荒廃したロレイラルから脱出した際、当時のクレスメント家の召喚師に匿われたんだ。しかし、その際に僕

の先祖のライル一族とクレスメントは、メルギトスを倒すためにある恐ろしいことをしてしまった」

少し間を置いて言い放った言葉は、更に衝撃的なモノであったのだ。

「召喚獣を機械改造したゲイル、誓約とプログラムの二重拘束で自我を完全に抹消した兵器にしてしまったんだ」

「兵器……まさか傀儡戦争で悪魔が狙ってたっていう、改造召喚獣の兵器」

「ああ。自我の末梢により体が完全に壊れるまで戦いをやめない、まさに生命を冒涇した兵器さ。これじゃあ、どっちが悪魔かわかんない物だな」

そのゲイルが数年前の戦争の原因の一つであるトリシエルが気づき、ネスティも自嘲気味に肯定する。

そしてそのまま話の続きを始めた。

「その所為でラインバウムの間人全てに、それまで協力していた天使や龍神といった異界の友たちは信頼を捨てて去ってしまい、あるゲイルの暴走した力でメルギトスを封印することに成功した」

「そしてそのゲイル、豊穡の天使アルミネ……私の前世で当時の調律者アルスの恋人でもありました」

「あ、貴女が伝説に聞いたアルミネの……普通の人間じゃないとは思っていましたが、まさか」

アメルの子体を知り、リビエルも驚く。天使はエルゴの意志に背くとサプレスを追われ墮天使の烙印を押されてしまう。しかしアルミネは、当代の調律者アルス・クレスメントへの愛を貫くためにエルゴの意思に背いてしまった。その上、アルミネに親友であるアルスを取られると思った、ネスティの祖先イクシアに唆されてゲイルに改造されてしまう。

しかし、アルミネは読心の奇跡——文字通り人の心を読む力でイクシアの真意を知り、自身が拒めばイクシアはアルスを守るため自らをゲ

イル化してしまうともわかったため、自ら進んでゲイル化したのであった。

「しかしその後、クレスメント家はメルギトスの策謀で魔力を失ったが、何の因果かマグナがその魔力に目覚めた上に先祖たちの罪を知ってしまった。けど、それを受け入れて立ち直ったマグナと僕を始めとした仲間と共に復活したメルギトスに挑み、ようやく完全に奴を葬り去ったんだ」

「それが、傀儡戦争の裏で起こった事件、なのね」

ライ達は傀儡戦争の裏側と、そこにまつわる事実を知り、ただひたすら驚愕する。当事者でないシンク達も、あまりにも業の深い過去に、ただ驚きを隠せずにいた。

「マグナはその決戦時に、“運命を律する”のでなく“運命を超える”と宣言し、改めて“超律者”と名乗った。ドラジエに勇者として呼ばれたのは、そんな強い精神を持った、僕の自慢の弟子ってわけだよ」

「運命を律するんじゃないやなく超える、か……」

マグナが新たに名乗ったそれは、前に進む覚悟と希望に満ち溢れた物だと、ライは察知する。

そんな中、アメルが話題を切り替えるのだが、そこでも驚愕の事実が判明した。

「それとバルレル君もハサハちゃんも、とっても強いんですよ。特にバルレル君は狂嵐の魔公子、メルギトスに匹敵する悪魔王なんです」

「」「ええええええええええ!!」「」

「あ、あの木端悪魔が、狂嵐の魔公子、でしたの?」

「しかも例の悪魔と同格……」

アメルの中から語られたバルレルの正体に何人かが絶叫し、他は開いた口が塞がらない状態になっている。リビエルに至っては腰を抜かして情けない姿を見せていた。

「じゃあ、ハサハちゃんも高位の土地神か何かなんですか?」

「いや、彼女は手に持つてる宝珠の魔力で人に変化しただけの、ありふれた妖怪だ。ただ、無理に力を引き出すと宝珠の魔力が尽きて人への

変化が出来ないから、マグナが輝力をその代用にしてあの姿になっているだけだよ」

「……それ、紋章術を相当使いこなせんと出来ないはずなんじゃが、マグナは規格外すぎじゃないかのう？」

ハサハの人化&大人化の詳細を聞いたレベツカとクーベルも、驚きを隠せないでいる。そんな中、レオが彼らを召喚したレザンにあることを聞いていた。

「レザン王子……お主、とんでもない当たりくじを引いたのではないか？」

「みたいですね。僕も以前に話を聞いて、同じリアクションを取ってしまいましたよ」

「つ、強い……」

「もうあんたは終わりだ。許しを請いてもう悪事を働かないと約束するなら、見逃してやってもいいぜ」

マグナはエルシードの切っ先を魔王に向けながら告げる。前回の追い剥ぎウサギの一件から、マグナは魔物は悪魔と違い更生の余地があると考え、せめてもの慈悲の言葉を投げかけたのだ。

しかし、魔王の口から返ってきた答えは望んでいた物とは違った。

「ふざけんな……この魔王カルバドスがお前のようなガキに手も足も出ねえなんて、プライドが許さねえ!!」

「聞く耳なしか……バルレル、一気にとどめを刺すぞ。ハサハも援護を頼む」

「おう、あれで行くか」

「わかった、お兄ちゃん」

そして、ハサハが宝珠に魔力を充填し、マグナとバルレルも紋章砲を撃つ準備に入り、揃って駆け出す。しかし魔王も同時に黒い紋章を背後に展開し、そこに黒い輝力を充填していく。しかもマグナ達よりも早く充填が完了してしまった。

「行くぜ……魔王紋・暗黒波動撃!!」

直後に魔王の背後の紋章から、無数の黒い光弾がマグナ達を目掛けて撃ちだされる。そして最後に、黒い光線が照射されて爆発を起こした。

「……流石にあれを喰らったら、ただじゃすまないだろうな」

「誰がただじゃすまないって?」

魔王が勝利を確証した直後、マグナの声が聞こえた。そして爆風が晴れると、ハサハが結界を張って攻撃を防ぎきっていたことが判明する。

「な!」

「喰らえ、紋章砲!」

直後にマグナとバルレルが魔王の懐に潜り込み、紋章砲を放つ。そして紋章砲を喰らった魔王は、そのまま上空へと打ち上げられていく。

「とどめは、任せる。力を貸してくれ」

マグナは懐から新たなサモナイト石を取り出し、眩きながら召喚術を行使する。そしてその際のエネルギーは、今までの召喚術と比較にならないほどのエネルギーがほとばしっていた。

「来い、レヴァティーン!!」

「ギユワアアアアアアアアアアアアアアア!!」

マグナが召喚獣の名を叫ぶと、虚空からその召喚獣が姿を現したが、それは一体の竜だった。紫を基調とした体に頭部と胸部に金色の装甲を付け、天使のような翼と光の輪を備えていた。そのため、至竜形態のミルリーフに匹敵する威圧感と神秘的なオーラを兼ね備えている。

「まさか、あれは……」

「ギアン、知ってるの？」

「ああ。あれは至竜の一体だ」

サプレスのサモナイト石で竜が召喚されたため、ギアンが真つ先に反応し、その正体は驚くべきものだった。

「レヴァティーンは元はサプレスの天使だったんだが、怠惰の悪魔王という大悪魔を倒すために魂を昇華させて竜に至った存在なんだ。『戒の霊竜』の異名を持つ、サプレスの最強召喚獣の一角でもあるんだよ」

至竜とは魂の昇華で後天的に竜となった存在で、それ以外の幻獣の竜や、セイロンの種族である竜人は途中段階の亜竜と分類されている。メイトルパの召喚獣が専売特許のギアンだが、至竜について知識を集めていたこともあるためサプレスの召喚獣であるレヴァティーンについても詳しくあったようだ。

「レヴァティーン、今俺達が空に撃ちあげたやつが敵だ。とどめを頼む」

「任された。超律者よ、邪悪の芽は我が滅して進ぜよう」

マグナとわずかな会話を終えたレヴァティーンは、そのまま高速で空に飛び上っていく。その際、口元に膨大な魔力を収束していた。

そして、上空に打ち上げられた魔王の付近までレヴァティーンが到達した。

「な!?! これは神龍の類……」

「消し飛べ、ギルティブリッツ!!」

魔王がレヴァティーンの姿を見た直後に気になることを呟くが、レヴァティーンはそれが耳に入らずに必殺のブレスを放つ。そして、それによって巨大な爆発がエッシェンバッツハ城の上空で起こった。

「で、魔王は倒したけどこの後どうするんですか？」

「英雄王様は封印に成功したそうじゃが、どうすれば？」

「封印していたということとは、滅する方法が無かったということですよ。だったら衛星兵器の攻撃も効くかどうか……」

いつの間にか空が晴れており、決着がついていたのは明白だった。しかし、マグナに倒された魔王は全身黒焦げで意識も失ってはいるがまだ死んでおらず、ネスティの考えた仮説もあり得なくはなかった。もしもに備え、レヴァティーンにも戻らずに待機してもらっている。そんな中、英雄王の丘がある方角から光が立っているのが見えた。『くじけない心、及び召喚の呼び声承認』

直後、魔王の封印が解除された時と同じ音声が何処からともなく聞こえてきたかと思うと、上空に巨大な魔方陣が出現した。

『召喚条件、オールクリア。英雄王アデライトを召喚します』  
すると、魔方陣の中心から金髪的女性が出現した。

「魔王と同じく“全裸”でだ。」

「ライ、見ちゃダメ!!」

「おわ!? わかってるって!」

「え、なに、何も見えない!!」

咄嗟に男性陣は目隠しをされてしまうが、まあ当然だろう。

「勇気の心、フル充填!」

現れた女性が口上を述べると同時に、その体に衣装が纏わっている。魔王と対をなすような、純白の衣装であった。

「みんなの思いが私の力、聖なる希望を呼ぶ声に、私はいつでも応えませす!」

最後にティアラのような物が頭部にかぶさると、同時に女性が目を開ける。するとその瞳には、星のような文様が浮かんでいた。

そして銃を抜き、腰に剣を携え、ポーズを決めながら名乗りを上げる。

「英雄王アデライト・グランマニエ! ここに見参! ……なのです♪」

現れた女性は、確かに英雄王と名乗った。もし本当なら、彼女がクーベルの先祖ということになる。

「えっと、この人が英雄王?」



「ていうか、女の人だったのか」

女性な上に、すごく軽そうな性格に見えたため、ライ達はつい茫然としてしまう。

「あら？　特に危機という様子でもなさそうなのですが……」

目覚めた英雄王、彼女は辺りを見回した後で首を傾げる。そんな中で、ライとマグナが彼女に近づいて声をかける。

「あの、折角出てきてくれたところ、申し上げにくいんですが」

「……魔王はもう俺達の方で倒しちゃって」

ライとマグナの視線の先には、まだ黒焦げで気絶している魔王の姿があった。

「この石碑は、英雄王様の召喚台だったんですね」

「はい。世界に危機が訪れて英雄王の力が必要になった時に備え、奇跡の力を蓄えていたのです」

その後、英雄王アデライド（通称アデル）から話を聞いたところ、この魔王（以下ヴァレリー）は魔物の王ではないということが判明した。というか、ヴァレリーはアデルにパステイヤージュの領主となる遺言を残した当時の領主の弟、つまりパステイヤージュの王族なのだという。

「えっと、その……知らないとはいえ叩きのめしてすみませんでした」

「我も迂闊であった。よくよく見れば邪悪な気配は微塵も感じられぬのに、言われるがまま全快の一撃を叩き込んですまなかった」

「けっ。わかりやいいんだよ、わかりや」

直接手を下したマグナとレヴァティーンが、代表してヴァレリーに謝罪をする。その様子に、ヴァレリー本人は不機嫌そうな様子だった。

「で、世界を救った英雄の仲間につきみたいな仕打ちは、当然不敬なんだろうな」

「けど、アメル達にまたあんなことしたら、どうなるかわかってるんだろうな？」

「ま、マジですんません。許して下さい!」

直後にライとマグナは笑顔を浮かべてはいたものの、その凄みは心臓の弱い人間ならそれだけでショック死するのではないかというほど、凄まじい物だった。流石にヴァレリーも応えているようだ。

そんな中、アメルが近づいてヴァレリーの手を握る。

「へ?」

「ちよ、アメル?」

ヴァレリーも突然のことで驚く中、アメルが話し始める。

「マグナやお姫様達に酷いことしたみたいなのでつい言いそびれてしまいました。あなたが本心から邪悪な存在じゃないというのは、初めて見た時から気づいていました。それに、さつきあなたの傷を治した時に記憶も少し流れ込んできました……」

天使の生まれ変わりであるアメルは、人の身でありながら治癒の奇跡を使える。そしてこの力は、相手の心に直接接触してその苦しみを和らげ、そのまま肉体ごと癒してしまうという物だった。そして、それによって相手の記憶や感情を読むこともでき、ヴァレリーの記憶や本心を知ったわけだ。

「あなたはアデルさんやお姉さんのこと、いつも気遣って行動していたみたいですし、魔王の名も人々のために必要悪になろうと名乗っていたところもあるみたいで……すごく優しい人だっていうのはわかりました」

そしてアメルは聖母のような慈悲深い笑顔を浮かべながら、告げる。

「だから、私はあなたを許します。マグナ達にも言って聞かせるので、安心してください」

アメルはその言葉を聞いた瞬間、ヴァレリーは滝のように涙を流しだす。

「あ、あなたは俺の女神です。ありがとお”ござい”ま”ずうううう!」

アメルはその言葉がよほど嬉しかったのか、ヴァレリーはダミ声になりながらもアメルに礼と称賛の言葉を送った。

「女神っていうのが何かは知りませんが、私は天使です。厳密に言えば、生まれ変わりですけど」

変わらず笑みを浮かべるアメルは、そんなことを言っている。事実だが、何かおかしく見えたが周りの大半が気づいていなかった。土地神という存在が身近だったり、神の概念がリインバウムに存在しなかったり、というのが主な原因だろう。

「では、私たちは再び眠りにつかせていただきます」

「もうちよつと自由にしたかったが、仕方ねえか」

そう言つてアデルは石碑に近づき、そのまま眠りにつくための準備に入ってしまった。

「クーベル、英雄王様とあの魔王殿を引き留められるかの？」

「ウチも折角じゃし、英雄王様たちには今の時代を見て欲しいからの」

「魔王さんも悪い方ではないと確証も持てましたからね」

「それもそうだけど……」

「私達としては……」

「ですよね」

「え、姫様達も？ みんな考えることは一緒ね」

「うんうん」

領主一同がアデル達の引き留めについて相談する中、ミルヒヤリシエル達一部の女子はあることが気になっていた。

「まあ、なんだかんだ言つてお前が一番かわいいけどな」

「どの口が言うんですか、どの口が」

「（（あの二人の關係が、ものすごく知りたいく〜！））（（））」

ヴァレリーがアデルに近づくなり、どこからどう見ても恋人同士にしか見えない雰囲気と会話になってしまう。始めたのはヴァレリーの方だが、アデルもまんざらではなさそうだ。

「あの、お二人ともそんなに急いで戻られなくても」

「そうだよ。フロニヤルドと地球だけじゃなくって、リインバウムのこともはなしたいのに」

アデル達を引き留めるため、クーベルとミルリーフは声をかけて食いつきそうな話題を上げる。

「若い人たちの世界に、年寄りが長居する者でもありませんよ」

「ジジイとババアはさっさと退散するわ」

「それにしても、一日くらいはいてもいいと思うぜ。今のフロニヤルドの様子とか、故郷の地球とか、気にならないっていうはずもないだろ」

ライもアデルを止めようと声をかける。実際、自分が救った世界の顛末くらいは知っても罰は当たらないだろうし、アデルも人の子なので故郷もいくらかは恋しい筈だった。しかし、アデルは優しい笑みを浮かべてライ達に語り掛けてくる。

「可愛い子孫や姫様達、彼らと交流するいろんな世界の勇者たちの姿が見れただけで満足です。きつと、あなた方ならフロニヤルドをもつといい世界に出来るよ、私は信じているので野暮という物なのですよ」

アデルが告げると同時に、石碑の光が強まった。封印の準備が完了したようだ。

「それでは、なのですー!」

最後にアデルが別れの挨拶を告げる。しかし……

「あらっ…」

いつまでたっても封印が行われず、それどころか段々と石碑の光がくすみ始めたのだ。

『英雄の眠り機構、術式回路に問題が発生。修復を、しゅうふく……しゅ、しゅうふ、く……』

段々と音声が悪化していき、最後にはそのまま機能を停止してしまっ

た。「ま、まさか壊れてしまったのか?」

「そ、そのようなのです」

---

### その日の夜

「やっぱり経年劣化、長い時間の所為で機能がいかれてしまったらしい」

「やっぱり、年月には勝てないか……」

七海とレオ、それからクラウレに付き添う形で、宮殿内を散策するネスティとレザンの姿があった。融機人であるネスティも修理に協力できないかと石碑を調べてみたが、パステイヤージュ独自の晶術技術は流石に解析できなかったらしい。そのため、復旧にはもうしばらくかかるようだ。

「しかし、タダの小娘にしか見えないようで、彼女も相当の修羅場をくぐってきたようだな」

「クラウレもそう思うか。流石に英雄王の名も伊達ではないか」

結局、「魔王Ⅱ魔物の王」と勘違いしたままマグナがヴァレリーを倒してしまったために、アデルの勇志は見られずじまいだった。しかし、クラウレもレオも戦術眼は磨かれているので、その二人が評するアデルの実力が相当のものというのは確実であった。

「ところでレオ様、英雄王様たちはどうしてるんですか?」

「ああ。当面はパステイヤージュに滞在するそうじゃ」

「今は宛がわれたお部屋に、マグナさん達がお邪魔してるはずですよ」

一方その頃

「そんなわけで、お芋さんは甘くて栄養満点、しかもやせた土地でも育つ凄いい食べ物なんですよ」

「そうなのですか! どうやら私は、芋を侮っていたようですね」

アメルはアデルにまで芋の素晴らしさを広めようとしており、アデルも興味津々になっている。しかし、アメルの知る芋は地球風で言うサツマイモなのに対し、アデルは地球のフランス出身なので知っている芋がジャガイモという擦れ違いがあったわけだが、今はまだ知る由もなかった。

「お前の恋人、いい子なんだが変なところあるな」

「けど、そこも含めて俺はアメルが大好きなんだけどな」

一方でマグナは、ヴァレリーがまたセクハラをしないかと警戒して、気を引くために世間話に興じていた。その内にアメルとののろけ話に発展し、ヴァレリーも負けじと話を合わせてすっかり仲良くなってしまうようだ。

「で、あのバルレルとか言うガキが見当たらねえがどうしたんだ？」  
「また酒盛りに行ってるよ。ガレット戦士団のみなさんとえらく仲良くなつたみたいで……」

同時刻、パステイヤージュの上空で空中散歩を楽しむ一行の姿があった。レベツカにクーベル、リシエルとルシアン、そしてリビエルであった。リシエルは以前の戦で乗っていたグラビイテイボードに乗っているが、ルシアンはクーベルのスカイヤーに乗せてもらっている。

「しかし、マグナがそんなとんでもない力の持ち主じゃったとはもう……」

「はい。私達もビックリですよ」

「あんなのほほんとした人が、まさか傀儡戦争終結の英雄なんてね」

「しかもメルギトスを倒して、魔公子を護衛獣にするなんてすごすぎますわね。しかも戒の靈竜様にまで信頼を置かれているとは……」

「そんな英雄の姿が見れた上に、ご先祖様達に会えた。今日は凄い一日じゃったな」

「はい。僕なんかほとんど何もしてないのに、すごく疲れましたよ」

同時刻、今度はシンクとライの寝室にて。

「ダルキアン卿の不穏な夢に、マグナみたいな規格外な召喚師が勇者として呼ばれた。加えて、英雄王なんて人まで封印から覚める。こりや、本気で何か起きそうだな」

「はい。けど、春先に起こったあの一件を考えれば、何とかなるんじゃないかと思えてしまいます」

「……それもそうだな。けど、油断はしないに越したことないだろ」  
そんなこんなで、とんでもない騒動の起きた一日も終わろうとしていた。